568
7
568-357
1200501515927

工ト5M-8

博文館叢書第3

文學博士 笹川種郎
文學博士 藤村作
文學博士 尾上八郎 校註

源氏物語 下卷

東京 博文館版

昭和期 帝国図書館蔵書

源氏物語繪卷

568-357

源氏物語下卷

目次

まぼろし……三
雲隱……一七
匂宮……一八
紅梅……二七
竹河……三七
橋姫……六五
椎本……八九
あげまき……一二三
早蕨……一六九

やどりぎ……一八一
東屋……二四一
浮舟……二八三
蜻蛉……三一九
手習……三六五
夢浮橋……四〇九

―終―

源氏物語下卷

文學博士　笹川種郎

解題

まぼろし　紫の上が亡くなつてからの源氏は、懺悔と追慕とのみで、其の華やかであつた一生も、今では淋しい、やるせない、然し清い、聖心（ひじりごころ）の晩年となつたのである。何につけても紫の上を思ひ出し、雪降りし朝には、女三の宮を訪うて歸つて來た雪の夜に於ける紫の上のさまを憐れと思ひ出し、つれ〴〵のあまりに女三の宮を持佛堂に訪うて、「谷には春も」の返事を聞いては、紫の上とけぢめあることを、うら悲しく戀しく思つた。八月十四日には、其の一周忌に當つてゐたから、曼荼羅供養をする。須磨の別れに、紫の上より寄せた文を取り出して、悲しく燒き棄てる。

源氏五十二三のこと。

雲隱　卷の名はあつて、文章はない。古來これに就いては、いろ〳〵の說がある。此卷にて源氏は亡せたのである。朱雀院、致仕の大臣、髭黑の太政大臣、螢の兵部卿、式部卿なども、寄る年波に、みな〳〵亡せ果てゝ、世は新しい薫の世界となつたのである。

匂宮　源氏の孫三の宮を兵部卿の宮と云ふ。女三の宮の生んだ源氏の子、まことは柏木の子薫とともに美しい人達であつた。然しいづれも源氏には及ばない。唯薫は身に異常の香がした。兵部卿は

之を羨しがりて、いろ〳〵の香を身にたきしめたから、世間で、薫中將、にほふ兵部卿の宮と稱した。

紅梅　髭黑の娘眞木柱は源氏の弟螢兵部卿の宮の北の方となり、娘一人まうけたが、宮みまかつて後、柏木の弟按察大納言に再緣した。連子の女兒を匂宮の妃としようと、大納言は心がけてゐた。或時、此姫君の庭前の紅梅いと美しう咲き出たから、其の一枝を匂宮へと獻じた。匂宮は折々文を寄せたが、深い情とてはなかつた。

竹河　髭黑と玉鬘との間に男子三人女子二人あつたが、二人の姫はいづれも美しい。夕霧の三男藏人少將は其の姉君に心を寄せる。正月に姫君の弟侍從の部屋に藏人少將、薫中將等遊びに往つて琴を彈じ、催馬樂の竹河を歌つた。夕霧は我が子藏人少將の爲に姫を嫁に申受けんと、玉鬘へいろいろと申入れたが、玉鬘は、姉君を冷泉院に納れてしまつた。然し秋好中宮や弘徽殿に妬まれて、苦しいことが多かつたので、玉鬘はいたく後悔してゐた。

橋姫　桐壺の帝の八の宮で、源氏の弟に當られる方は、世に忘れられて、衰へてゐた。その北の方との間に二人の姫があつたが、北の方は第二の姫を生むと、產後の煩ひで歿せられた。宮は宇治に住んでゐたが、川のほとりで、水音がかしましく、網代近くであつた。宇治山の尊き阿闍梨に就いて、經文を讀むことを習はれた。其の緣で薫も八の宮と親しくなる。秋の末つ方、薫は宇治の閑居を訪うたが、八の宮が留守であつたので、薫は姫君達が月に對して琵琶を彈くのを覗いてゐた。歸る時、薫より姫君へ、

橋姫の心をくみて高瀨さす
　　棹の雫に袖ぞぬれぬる

と、一首の歌を寄せた。又の日に訪うた折に辨と云ふ老女から、まことの父なる柏木權大納言の物語を聞き、柏木よりの預り物を渡された。此辨は女三の宮に附き添うてゐた侍從の娘である。其の預り物とは、柏木と女三の宮との間に取り交はせた艶書であつた。

椎本　薫から宇治の姫達のことを聞いた匂宮は好色の人であつたから、宇治に中宿りせんとて、薫もろともに伯父夕霧の大臣の知行地が宇治にあつたので、そこへ宿つた。然し輕からぬ身であるから、姫を訪ふこともならなかつた。大君(姉の姫君)は二十五、中の君(妹)は二十三である。其の夜、中納言になつた薫は、宇治を音づれる。姫君とはいつも簾越しの對面をする。八の宮は薨ぜられて、二人の姫は賴る所がなかつた。薫の心中では、中の君を匂宮に、大君を我がものにせんと思つてゐた。八の宮の持佛堂を明けると、塵が積つてゐて、宮のゐ給ひし床は其儘になつてゐる。薫、

立ちよらば蔭とたのみし椎がもと
　　空しき床になりにけるかな

と詠じて歸る。

總角　八の宮の一周忌は、山の阿闍梨と薫とで肝入りする。其の弔ひのかざりにする總角を、姫君達が作るとて、糸を引いてゐるのを、薫が垣間見て、

あけまきに長き契りを結びこめ
　　同じ所によりもあはなむ

と、書いて見せる。大君、

ぬきもあへずもろき涙の玉のをに
　　長き契りをいかゞむすばむ

薫は辨に「中の君を匂の宮へあげてはどうだ」と、云ふと、辨は「あなたに中の君を參らせ、大君は妹君の親となりて、後見したいお志です」と申す。薫は大君に心のほどを明かしたが、大君は中の君をと云つて辭退する。或夜、薫を姫君達の臥處（ふしど）へ入れたが、姉君は逃げてしまふ。薫はくやしく、早く中の君を匂の宮へ片づけたらば、大君は靡くであらうと思案して、中の君の方へ匂の宮を入れて、大君をかき口説いたが、從はない。大君はいろ〳〵の心勞にて病となり、薫に「あなたに妹をと思ひましたが、それに違つて匂の宮に逢はせられたのが口惜しい」と云つて遂に身まかつた。

早蕨　中の君は姉君のかくれられたのを悲んで泣く〳〵暮らされる。阿闍梨のもとから蕨土筆（つくし）などを籠に入れて奉る。中の君は二條院へ迎へ取られる。薫は中の君の聲が大君に善く似てゐるのを聞いて、今は他人のものとなつたのを悔しく思ふ。辨は尼となりて、宇治に永住する。中の君が二條院に移つて、薫は嬉しいと思つたが、我が物となさなかつたを、月日の經つに從つて、一層悔やしく思つてゐる。

宿木　當今の帝が藤壺の女御（故左大臣の娘）に生ませ給ふ女二の宮の聟に薫をと思し召す。薫は身に取りて面目ではあつたが、心は中の君にあるので、さまで嬉しいとも思はない。中の君は既に懷妊してゐる。薫は朝顏の花を手折りて二條院に中の君を尋ねた。夕霧は匂宮を聟にせうとする。中の君は思ひ煩つて宇治へ歸らうとて、薫に對面した。薫は心中の煩悶を語り、曉近く歸つた。中の君は薫を頼みとしてゐたが、斯る心のあつたのを知つて、宇治へも歸れず、心憂くはあつたが、今は匂宮を唯頼みにしようと思つた。薫は一日しめやかな夕暮に中の君を訪づれた。此折に中の君より、大君に善く肖た浮舟の話をほのかに語り聞かされた。九月の十日過ぎに薫は宇治に辨の尼を尋ねて、故八の宮の妾腹なる浮舟の素生を聞いた。歸る折ふし、山木にからんだ蔦の紅葉したのを、少し折り取りて、中の君へ土產にと持つて歸つた。

やどり木と思ひ出でずばこのもとの
　　旅寢もいかにさびしからまし

二月になりて中の君は若君を產んだ。薫は權大納言兼右大將に昇進した。薫の三條の宮へ女二の宮が渡らせられた。

東屋　浮舟の繼父を常陸守と云ふ。母は八の宮の娘浮舟を連子にして、此人に嫁したのである。常陸守との間に娘一人をまうけたが、先づ浮舟より嫁づけんと其の婿を探してゐた。左近の少將と云ふ殿上人を約束したが、此男は浮舟が常陸の繼子であると聞いて氣が進まずに、其の妹を懇望した。

母は口惜しく腹立たしく、浮舟を中の君の方へ預けた。一夜匂宮が中の宮の許に渡りて、浮舟を垣間見て、其の側に立添ひて、中々に放さなかつた。母は此ことを聞いて驚き、三條のほとりの小家に引き移つた。薫は宇治で浮舟の轉居のことを知り、辨の尼と約束して、其の小家を尋ねた。

さしとむる葎やしげき東屋の
あまりほどふる雨そゝぎかな

薫は辨の尼、浮舟、浮舟の女房侍從を引き具して宇治へ赴いた。薫は浮舟を見るにつけ、亡き人のことを思ひ出す。

浮舟　浮舟を垣間見て、其の俤を忘れかねた匂宮は、例の好色心にて、其の行方を尋ね、薫が宇治に隱まふ女が其の人であると知り、大内記と云へる家人を案内として、宇治へ忍び行き、薫の聲を似せて、浮舟に添臥する。浮舟は心苦しくあつたが、さりとて匂宮を憎いとも思はない。二月の雪降れる折には、小さき舟に浮舟と侍從とを載せて、宇治より少し離れたところでゆる〳〵と隱れ遊びをする。薫は浮舟を四月十日に京へ迎へんとしてゐるので、三月三十日に、匂宮は浮舟を盗み出さうとする。匂宮へ浮舟より奉つた文の赤い色紙であつたのをちらと見た薫は、一切のことを知り、番のものどもに嚴しくいひつける。それで匂宮は忍ぶこともかなはず、空しく歸る。浮舟は思ひ亂れて、身を投げんと決心する。

蜻蛉　浮舟は行方も知らずなつたので、死骸はないが、あるやうにして、車に脱ぎ棄ててあつた裝束などを入れて葬式をすませる。薫へは右近から「匂宮より二三度文があつたのを、薫が怪しと見たので、浮舟は思ひ煩つて、身を投げたのであらう」と、いゝ加減なことを云ふ。薫は八の宮の姫君達のことをいろ〳〵と思ひ出し、つく〴〵と眺め入る夕暮に、蜻蛉の物はかなく飛び交ふを見て、

ありと見て手にはとられず見れば又
ゆくへも知らず消えしかけろふ

と、詠じて、獨り物思ひに沈む。

手習　浮舟は人の寢靜まつた其のひまに妻戸を明け放ちて川岸へ出たが、波風の烈しいので心後れ、死にも得ならで、横川何某僧都の一門に助けられ、僧都の妹の尼が住める比叡の麓小野の庵に同棲した。思ふことを語る相手もないから、戀しい折々には手習する。

身を投げし涙の川の早き瀬に
しがらみかけて誰かとがめし

匂宮の姉一品の宮が物の怪の祈りの折、后の宮は横川の僧都から浮舟のことをお聞きなされて、このことを薫に知らせられた。此時、浮舟はもう尼になつてゐた。

夢浮橋　薫は横川に立寄り、僧都に對面して、其の人の浮舟なるを知り、浮舟の弟小君に文もたせて、浮舟の許へやる。浮舟は覺えなしとて、打ち臥して、返言もしないので、小君は其の儘空しく立ち歸る。薫の心緒は亂れて糸の如くあつた。夢浮橋と書いた文章も歌も此卷の中にはない。

橋姫より以下を宇治十帖と云ふ。華やかな好色心の激しい源氏の一生と、柏木の私通の子であつたと云ふ因縁もあつたであらうが、しめやかな、佛いぢりを好む薫の半生とは、大なるけじめがある。一は陽氣で、一は陰氣である。宇治十帖は之を前卷に比べて、幽鬱な氣分が横溢してゐる。唯其の中に源氏とどこか似てゐる匂宮を點綴して、淋しさのうちに幾分なりとも浮華な處を加へてゐるが、匂宮がゐたので、薫の生涯は、いよ〳〵寂寞で、憐れ深い。

源氏物語　下卷

まぼろし

この卷は源氏五十二歳の正月より十二月までの事を記せり。卷名は「大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬたまの行方たづねよ」といへる歌によれり。

○例のやうに人々參り　例の如く人々參りて新年を賀するなり。
○兵部卿宮　源氏の御弟。
○打解けたる方にて云々　源氏表へは出で給はで奥にて對面し給ふなり。
○香をとめて云々　大方の花を見んとてにはあらで君を戀めんとて參れるなり。
○紅梅の下に歩み出で給へる云々　兵部卿のさまなり。
○開けさしつゝ　開きかけて。
○年頃經にけるは　多年仕へし女房は。
○紛れなく見奉るをなぐさめにて　源氏の不斷にこゝにおはするを見奉るを女房のなぐさめにてとなり。

春の光を見給ふにつけても、いとゞ暗れ惑ひたるやうにのみ、御心一つは、悲しさの改まるべくもあらぬに、外には例のやうに人々參り給ひなどすれど、御心地惱ましき樣にもてなし給ひて、御簾の内にのみおはします。兵部卿の宮渡り給へるにぞ、たゞ打解けたる方にて、對面し給はんとて、御消息聞え給ふ。

（源）「我宿は、花もてはやす、人も無し、何にか春の、訪ね來つらん。」

宮、うち涙ぐみ給ひて、

（發）「香を尋めて、來つる甲斐なく、大方の、花の便と、言ひや做すべき。」

紅梅の下に歩み出で給へる御樣の、いとなつかしきにぞ、これより外に見はやすべき人無くやと見え給へる。花はほのかに開けさしつゝ、をかしき程の薫なり。御遊も無く、例に變りたる事多かり。

女房なども年頃經にけるは、黑染の色こまやかにて着つゝ、悲しさも改め難く、思ひ醒すべき世無く戀ひ聞ゆるに、絶えて御方々にも渡り給はず、紛れ無く見奉るを慰めにて、慣れ仕うまつる、年頃まめやかに、御心留めてなどはあらざりしかど、時々は見放たぬやうに思したりつる人々も、なかゝるに淋しき御獨寢になりては、いと大ざうにもてなし

○名殘なき御聖心云々　源氏の思人の方にも渡り給はず道心のみ深くなり行くなり。
○さしもあり果つまじかりける事　末遂ぐべくもあらざりしことなり。
○ひとわたりづゝは　齋院朧月等のことをいふ。
○ほの〴〵聞え出づる　少しづゝ申し上ぐる。
○入道の宮の渡り始め給へりし程　女三宮の源氏に嫁せし初の頃。
○せめて紛らはし　强ひてまぎらし。
○曙にしも云々　終夜歎き明したる體なり。
○唯その折の心地する　女三宮の方より歸り給ひし時の事を思ひ出で給ふなり。
○うき世には云々　我は身を捨てんと思ひしが人聞を憚りて思の外に打過ぎぬる事よ。行き消えなんを雪消えなんに掛けたり。
○行ひ給ふ　讀經などし給ふなり。
○火桶　今の世の火鉢なり。
○中納言の君中將の君　源氏の心驕け給ふ人。

給ひて、夜の御宿直などにも、これかれと數多を、御座のあたり引き避けつゝ、侍らせ給ふ。徒然なる儘に、古の物語などし給ふ折々もあり。名殘なき御聖心の深くなり行くにつけても、さしもあり果つまじかりける事に付けつゝ、中頃物怨めしう思したる氣色の時々見え給ひしなどを思し出づるに、何どて戯にても、又まめやかに心苦しき事に付けても、さやうなる心を見え奉りけん。何事にも勞々しうおはせし御心ばへなりしかば、人の深き心もいと能う見知り給ひながら、怨じ果て給ふ事は無かりしかど、一應づゝは、如何ならんと思したりしに、少しにても心を亂り給ひけん事の、いとほしう悔しう覺え給ふ樣、胸よりも餘る心地し給ふ。其折の事の心をも知り、今も近う仕う奉る人々は、ほの〴〵聞え出づるもあり。入道の宮の渡り始め給へりし程、其折はしも、色には更に出し給はざりしかど、事に觸れつゝ、味氣無の事やと思ひ給へりし氣色の哀なりし中にも、雪降りたりし曉に立ちやすらひて、我身も冷え入るやうに覺えて、空の氣色烈しかりしに、いと懷かしうおいらかなるものから、袖のいたう泣き濡らし給へりけるを、引き隱して、せめて紛らはし給へりし程の用意などを、夜もすがら夢にも、又は如何ならん世にかと思し續けらる。曙にしも、曹司に下るゝ女房なるべし、「いみじうも積りにける雪かな。」と云ふを、聞きつけ給へる、唯その折の心地するに、御傍の淋しきも、言ふ方なく悲し。

（源）「うき世には、雪消えなんと、思ひつゝ、思の外に、猶ぞ程經る。」

例の紛らはしには、御手水召して行ひ給ふ。埋みたる火起し出でゝ、御火桶參らす。中納言の君、中將の君など、御前近く御物語聞ゆ。獨寢常よりも淋しかりつる夜の樣かな。斯

○斯くても　出家して斯く閑住にても。
○人々　侍ふ人々。
○袖の柵云々　拾遺集に、「涙河落つる水上はやければ堰きぞ兼ねつる袖の柵」とあり。
○いみじきことのとぢめ　紫上の亡せしをいふ。
○露のほだしなくなりにたる　少しの心引かるゝ方もなきなり。
○目馴らす人々　侍ふ人人。
○かのおしなべてには思したらざりし人々　紫上が普通とは思はざりし人々。
○其方　好色の方。
○人より殊にらうたきものに云々　紫上が中將を人より殊に愛せしとなり。

くてもいと能く思ひ澄しつべかりける世を、はかなくもかゝづらひけるかな、と打ち眺め給ふ。我さへ打ち捨てゝば、この人々のいとゞ歎き佗びん事の、哀にいとほしかるべきなど見渡し給ふ。忍びやかに打ち行ひつゝ、經など讀み給へる御聲を、宜しう思はん事にてだに、涙とまるまじきを、況て袖の柵堰き敢へぬまで、あはれに明暮に奉る人々の心地盡きせず思ひ聞ゆ。（源）「此世に付けては、飽かず思ふべき事をさ〴〵あるまじう、高き身には生れながら、又人よりも殊に、口惜しき契にもありけるかな、と思ふこと絶えず。世のはかなく憂きを知らすべく、佛などの掟て給へる身なるべし。それを强ひて知らぬ顏にながらふれば、かく今はの夕近き末に、いみじき事のとぢめを見つるに、宿世の程も自の心の際も、殘無く見果てゝ、心安きに、今なん露の絆無くなりにたるを、これかれ斯くて、ありしより殊に目馴らす人々の今はとて行き別れん程こそ、今一際の心亂れぬべけれ。いとはかなしかし。わろかりける心の程かな。」とて、御目押し拭ひ隱し給ふに、紛れずやがてこぼるゝ御涙を、見奉る人々ましてゞ堰き止めん方無し。さて打ち捨てられ奉りなんが憂はしさを、各打ち出でまほしけれど、さもえ聞えず、むせかへり已みぬ。

斯くのみ歎き明し給へる曙、眺め暮らし給へる夕暮などの、しめやかなる折々は、かのおしなべてには思したらざりし人々を、御前近くて、かやうの御物語などし給ふ。中將の君とて侍ふは、まだ小くより見給ひ馴れしを、いと忍びつゝ、見給ひ過さずやありけん。いと傍痛き事に思ひて、馴れも聞えざりけるを、斯く亡せ給ひて後は、其方にはあらず。人より殊にらうたき者に、心留め思したりしものをと、思し出づるに付けて、かの御形見の

○馬蠶松に覺えたる　塚上の松を其人の形見と見る如く中將の君を紫上の形見と見るなり。

○思ほれて　世間の用意ありて。

○心がはり云々　愁傷によりて源氏の心が以前と變りし樣に。

○何方にも覺束なきさまにて云々　明石上花散里などへも無沙汰なるなり。

○后の宮　明石中宮。

○三の宮　匂宮。

○母のの給ひしかばとて　前に「佛にも奉り給へ」など紫上の言ひ置き給ひしかばとて。

筋をぞ哀とおほしたる。心ばせ貌なども目安くて、馬蠶松に覺えたるけはひ、たゞならましよりは、勞々しと思ほす。疎き人には更に見え給はず。上達部なども、睦ましき、又御兄弟の宮達など、常に參り給へれど、對面し給ふ事をさ〳〵なし。人に向はん程ばかりはさかしく思ひ靜め、心治めんと思ふとも、月頃に惚けにたらん身の有樣、頑しき僻事雜りて末の世の人に持て惱まれん後の名さへうたてあるべし。思ほれてなん、人にも見えざゝなる、と謂はれんも同じ事なれど、猶音に聞きて、思ひ遣る事の片端なるよりも、見苦しき事の目に見るは、こよなく際優りて、嗚呼なりと思せば、大將の君などにだに、御簾隔てゝぞ對面し給ひける。斯く心變し給へるやうに、人の言ひ傳ふべき頃ほひをだに、思ひのどめてこそはと、念じ過し給ひつゝ、憂き世をもえ背き遣り給はず。御方々に稀にも打ち仄めき給ふに付けては、先づいと堰き難き涙の雨のみ降りまされば、いとわり無くて、何方にも覺束無き樣にて過し給ふ。

后の宮は內に參らせ給ひて、三の宮をぞ、淋々しき御慰めにはおはしまさせ給ひける。母のの給ひしかばとて、對の御前の紅梅、取り別きて後見ありき給へるを、いと哀と見奉り給ふ。二月になれば、花の木どもの盛になるも、まだしきも、梢をかしう霞渡れるに、かの御形見の紅梅に、鶯の華やかに鳴き出でたれば、立ち出でゝ御覽ず。

（源）「植ゑて見し、花の主人も、無き宿に、知らず顏にて、來居る鶯。」

と嘯き歩かせ給ふ。

春深くなり行く儘に、御前の有樣古に變らぬを、愛で給ふ方にはあらねど、靜心無く何事に付けても、胸痛う思さるれば、大方の世の外のやうに、鳥の音も聞えざらん山の末、ゆかしうのみいとゞなり增さり給ふ。山吹などの、心地好げに咲き亂れたるも、うちつけに露けくのみ見做され給ふ。外の花は一重散りて、八重咲く花櫻さかり過ぎて、樺櫻は開け、藤は後れて色づきなどこそはすめるを、その遲く疾き花の心を能く別きて、色々を盡し植ゑ置き給ひしかば、時を忘れず匂ひ滿ちたるに、若宮「麿が櫻は咲きにけり。如何で久しく散らさじ。木の周に几帳を立てゝ、帷子を上げずば、風もえ吹き寄らじ。」と、賢う思ひたりと思ひての給ふ。顏のいと美しきにも、打ち笑まれ給ひぬ。（源）「覆ふばかりの袖求めけん人よりは、いと賢う思し寄り給へりかし。」など、此宮ばかりをぞ玩に見奉り給ふ。（源）「君に馴れ聞えん事も殘少しや。命と云ふ者、今しばしかゝづらふべくとも、對面はえあらじかし。」とて、例の涙ぐみ給へれば、いと物しとおほして、母のの給ひし事を、まが〳〵しうの給ふとて、伏目になりて、御衣の袖を引きまさぐりなどしつゝ、紛らはしおはす。御簾の間の勾欄に押し凭りて、御前の庭をも、御簾の內をも、見渡して眺め給ふ。女房なども、かの御形見の色更へぬもあり。例の色合なるも、綾など華やかにはあらず。自の御直衣も、色は世の常なれど、殊更にやつして、無紋を奉れり。御しつらひなども、いと疎に事殺ぎて、淋しく物心細げにしめやかなれば、

（源）「今はとて、荒しや果てん、亡き人の、心留めし、春の垣根を。」

人やりならず悲しう思さる。

いと徒然なれば、入道の宮の御方に渡り給ふに、若宮も人に抱かれて御はしまして、こな

○鳥の音も聞えざらん　古今集に「飛ぶ鳥の聲も聞えぬ奥山の深き心は人は知らなん」

○樺櫻　朱櫻。

○覆ふばかりの袖　後撰集に「大空に覆ふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ」

○母のの給ひしこと云々　母も殘少しと云ひて亡せしを今又かくの給ふが忌々しとなり。

○御形見の色かへぬもあり　喪服の儘なるもあり。

○例の色合ひなるも　常の衣服に更へたるなり。

○無紋　平絹の直衣。

○今はとて　今はとて我出家しなば。

○入道の宮　女三宮。

○若宮　匂宮。
○こなたの若君　薫君。
○何ばかり深う云々　何程の深き信仰ありて入道したる人にても非さりしかど。
○閼伽の花　佛前の花。
○春に心寄せたりし人　紫上を指す。
○植ゑし人なき　古今集に「色も香も昔のときに匂へども植ゑけん人の影ぞ継しき」
○谷には春も　古今集に、「光なき谷には春もよそなれば咲きて疾く散る物思もなし」
○覺無き折なれば　思らざる折なれば。
○猶こそ人に優りたれ　明石上は。
○斯うざまにはあらで云々　紫上は。

たの若君と走り遊び、花惜み給ふ心ばへども深からず、いといはけなし。宮は佛の御前にて、經をぞ讀み給ひける。何ばかり深う思し取れる御道心にもあらざりしかど、此世に怨めしく御心亂るゝ事もおはせず、のどやかなる儘に、紛れ無く行ひ給ひて、一つ方に思ひ離れ給へるも、いと羨まし。斯く淺へ給へる女の御志にだに後れぬる事と、口惜しうおぼさる。閼伽の花の夕映して、いと面白く見ゆれば、(源)「春に心寄せたりし人無くて、花の色すさまじくのみ見做さるゝを、佛の御飾にてこそ見るべかりけれ。」との給ひて、(源)「對の前の山吹こそ、猶世に見えぬ花の樣なれ。房の大さなどよ。品高うなどは掟てざりける花にやあらん。華やかに賑はゝしき方は、いと面白き物になんありける。植ゑし人無き春とも知らず顔にて、常よりも匂ひ重ねたるこそ哀に侍れ。」との給ふ。御答に、「谷には春も」と何心も無く聞え給ふを、事しもこそあれ。心憂くも、と思さるゝに付けては、其事の然らでもありなんかしと思ふに、違ふ節無くても已みにしかなと、いわけなかりし程よりの、御有樣を、いで何事ぞやありしと思し出づるには、まづその折かの折、才々しう勞々じう句多かりし心ざま、もてなし、言の葉のみ思ひ續けられ給ふに、例の涙の脆さは、ふとこぼれ出でぬるもいと苦し。

夕暮の霞たど〳〵しう、をかしき程なれば、やがて明石の御方に渡り給へり。久しう然しも覗き給はぬに、覺無き折なれば、打ち驚かるれど、樣善うけはひ心憎く持て附けて、猶こそ人には優りたれと、見給ふに付けては、又斯うざまにはあらでこそ、故由をも持て做し給へりしかと、思し比べらるゝにも、面影に戀しう悲しさのみ增されば、如何にして慰

○こなたにて　明石上の方にては。
○執留まるべき事　執念の留まるべき事。
○身の徒にはふれぬべかりし頃ほひ　須磨へ下り給ひし時をいふ。
○淺へたること　淺々と起す道心は。
○鈍き　遲鈍なる。
○宮達　今上の宮達。
○誠に動無かるべき御有樣に　明石中宮の御腹の宮の御位に卽かせ給ふをいふ。
○故后の宮　藤壺女院。
○心あらば　古今集に「深草の野邊の櫻し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」

むべき心ぞといと比べ苦し。こなたにては、のどやかに昔物語などし給ふ。(源)「人をあはれと心留めんは、いと惡かるべき事と、古より思ひ得て、凡て如何なる方にも、此世に執留まるべき事無くと、心づかひをせしに、大方の世に付けて、身の徒に流離れぬべかりし頃ほひなど、と樣かう樣に思ひ運らしゝに、命をも自ら捨つべく、野山の末にはふらかさんに、異なる障あるまじうなん思ひなりしを、末の世に今は限の程近き身にてしも、あるまじき絆多うかゝづらひて、今まで過してけるが、心弱うもどかしき事。」など、さして一節の悲しさにのみはの給はねど、思したる樣の道理に心苦しきを、いとほしう見奉りて、(明石)「大方の人目に、何ばかり惜しげ無き人だに、心の中の絆、自ら多う侍るなるを、まして如何でかは心安くも思し捨てん。さやうに淺へたる事は、却りて輕々しきもどかしさなども立ち出でて、なか〳〵なる事など侍るなるを、思し立つ程鈍きやうに侍らんや。又遂に住み果てさせ給ふ方、深う侍らんと、思ひやられ侍りてこそ。古のためしなどを聞き侍るに付けても、心に驚かれ思ふより、違ふ節ありて、世を厭ふ序になるとか、それは猶惡き事とこそ。猶暫し思しのどめさせ給ひて、宮達などもおとなびさせ給ひ、誠に動無かるべき御有樣に見奉りなさせ給はんまでは、亂れ無く侍らんこそ、心安くも嬉しくも侍るべけれ。」など、いとおとなびて聞えたる氣色、いと目安し。(源)「さまで思ひのどめん心深さこそ、淺きに劣りぬべけれ。」などの給ひて、昔より物を思ふ事など、語り出で給ふ中に、(源)「故后の宮のかくれ給へりし春なん、花の色を見ても、誠に「心あらば」と覺えし。それは大方の世に付けて、をかしかりし御有樣を、幼くより見奉り染みて、さるとぢめの

○年經ぬる人　紫上を指す。
○斯かる仲　妹脊の仲。
○女　明石上。
○泣く〳〵も云々　鳴くを泣くに掛け、雁を假に掛けたり。
○怨めしげなりしか　源氏のとまらで歸り給ひし故なり。
○生目覺ましきものにおぼしたりしを　初は紫上が明石上を目覺ましき物に思ひ給ひけれども。
○夏の御方　花散里の方。

悲しさも、人より殊に覺えしない。自ら取り別く志にしも、物の哀は依らぬ事なり。年經ぬる人に後れて、心治めん方無く忘れ難きも、唯斯かる仲の悲しさのみにはあらず。幼き程より生ふし立てし有樣、諸共に老いぬる末の世に、打ち捨てられて、我身も人の身も、思ひ續けらるゝ悲しさの堪へ難きになん。凡て物の哀も、故ある事をも、をかしき筋も、廣う思ひ運らす方々添ふ事の淺からずなるになんありける。」など、夜更くるまで、今昔の御物語に、斯くても明しつべき夜をと思しながら、歸り給ふを、女も物哀に思ふべし。我御心にも、怪しくもなりけるかなと、おぼし知らる。さても又例の御行に夜中になりてぞ、晝の御座に、いと假初に寄り臥し給ふ。翌朝御文奉り給ふに、

（源）「泣く〳〵も、歸りにしかな、假の世は、何處も終の、常世ならぬに。」

昨夜の御有樣は怨めしげなりしかど、いと斯くあらぬ樣に思し惚れたる御氣色の心苦しさに、身の上は差し措かれて、涙ぐまれ給ふ。

（明石）「雁が居し、苗代水の、絶えしより、映りし花の、影をだに見ず。」

舊り難う由ある書樣にも、生目覺ましき物におぼしたりしを、末の世には、互に心ばせを見知るどちにて、後安き方には打ち賴むべく、思ひかはし給ひながら、また然りとて一向に、はた打解けず、故ありて持て做し給へりし心掟を、人はさしも見知らざりきかしなど思し出づ。せめて淋々しき時は、かやうに唯大方に、打ち仄めき給ふ折々もあり。昔の御有樣は、名殘無くなりにたるべし。

夏の御方より、御更衣の御裝束奉り給ふとて、

○夏衣云々　夏衣に裁ち更へたる今日ばかりは深き御思を休め給へとなり。
○空蟬の世　空しき世。
○祭の日　賀茂祭の日にて四月なり。
○紅の黃ばみたる　柑子色にて服喪の袴なり。
○萱草色の單衣　是も服喪の服なり。
○葵　二葉葵。加茂祭に此葵と桂とを挿頭花に用ゐるなり。
○この名こそ　逢ふと云ふ意なり。
○さもこそは云々　紫上逝去の後は寄るべ無ければあふひをさへ忘れ給ひたるよ。
○大方は云々　中將の君一人には逢ふと云ふ罪重ぬべしとなり。摘みを罪に掛け、置かすを犯すに掛けて詠めり。
○千世を鳴らせる聲　後撰集に「色かへぬ花橘にほととぎす千世を鳴らせる聲聞ゆなり」

（花散）「夏衣、裁ち更へてける、今日ばかり、深き思も、涼みやはせぬ。」

御返し、

（源）「羽衣の、薄きに更る、今日よりは、空蟬の世ぞ、いとゞ悲しき。」

祭の日いと徒然にて、今日は物見るとて、人々心地好げならんかしとて、御社の有樣など思し遣る、（源）「女房など如何に淋々しからん。里に忍びて出でて見よかし。」などの給ふ。中將の君、東面に轉寢したるを、歩みおはして見給へれば、いと細やかにをかしき樣して起き上りたる面付、華やかに匂ひたる顏持て隱して、少しふくだみたる髮の掛りなどいとをかしげなり。紅の黃ばみたる氣添ひたる袴、萱草色の單衣、いと濃き鈍色に黑きなど、麗しからず重りて、裳唐衣も脫ぎすべしたりけるを、とかく引き掛けなどするに、葵を傍に置きたりけるを、取り給ひて、（源）「如何にとかや。この名こそ忘れにけれ。」との給へば、

（中將）「さもこそは、寄るべの水に、み草ゐめ、今日の挿頭花よ、名さへ忘るゝ。」

と恥らひて聞ゆ。實にといとほしくて、

（源）「大方は、思ひ捨てゝし、世なれども、葵は尙や、摘み置かすべき。」

など一人ばかりは、思し放たぬ氣色なり。

五月雨はいとゞ眺め暮らし給ふより外の事無く淋々しきに、十餘日の月華やかに差し出てたる雲間の珍らしきに、大將の君御前に侍ひ給ふ。花橘の、月影に、いと際やかに見ゆる薫も、追風懷かしければ、千世を鳴らせる聲もせなんと待たるゝ程に、俄に立ち出づる叢

○窓を打つ聲　白氏文集に「耿々殘燈背壁影、蕭々暗雨打窓聲」
○妹が垣根におとなはせまほしき　紫上に聞かせばやと夕霧の心に思ふなり、古歌に「ひとりして聞くはかなしき時鳥妹が垣根におとなはせばや」
○深き山住　出家をいふ。
○心苦しければ　以上夕霧の心中なり。
○仄に見し　野分の朝の事を指す。
○御果　紫上の一週忌。
○かやうの事ども　曼陀羅等の事。
○此世には云々　紫上の短命なりしを云ふ。
○形見と云ふばかり云々　紫上に御子無き事を殘念に思ふとなり。
○自の口惜しさこそ　我が宿世にて、口惜しき事にこそ。
○待たれつる杜鵑の　前に「千世を鳴らせる聲もせなんと待たるゝ程に」とあるに應ず。
○如何に知りてか　古歌「古の事語らへば杜鵑如何に知りてか古聲に鳴く」を取れり。

雲の氣色、いと生憎にて、おどろ〳〵しう降り來る雨に添ひて、颯と吹く風に燈籠も吹き惑はして、空暗き心地するに、「窓を打つ聲」など、珍しからぬ故事を、打ち誦じ給へるも、折からにや、妹が垣根に訪はせまほしき御聲なり。(源)「獨住は殊にかはる事無けれど、怪しう淋々しくこそありけれ。深き山住せんにも、かくて身を習はしたらんは、こよなう心澄みぬべきわざなりけり。」などの給ひて、(源)「女房こゝに菓子など參らせよ。男ども召さんも事々しき程なり。」などの給ふ。心には唯、空を眺め給ふ御氣色の、盡きせず心苦しければ、斯くのみ思し紛れずは、御行にも御心澄し給はん事難くやと見奉り給ふ。仄に見し御面影だに忘れ難し。況てことわりぞかし、と思ひ居給へり。(タ)「昨日今日と思ひ給ふる程に、御果もやう〳〵近うなり侍りにけり。如何樣にか掟て思し召すらん。」と申し給へば、(源)「何ばかり、世の常ならぬ事をかは物せん。かの志置かれたる極樂の曼陀羅など、この度なん供養すべき。經なども數多ありけるを、某僧都、皆その心委しう聞き置きたゝなれば、又加へてすべき事どもゝ、かの僧都の言はんに從ひてなん、物すべき。」などの給ふ。(タ)「かやうの事ども、もとより取り立てゝ思し置きてけるは、後安き事なれど、此世には假初の御契なりけりと見給ふには、形見と云ふばかり留め聞え給へる人だに、物し給はぬこそ、口惜しう侍りけれ。」と申し給へば、(源)「それは假初ならず。命長き人々にも、さやうなる事の大方少かりける、自の口惜しさにこそ。其許にこそは、門は廣け給はめ。」などの給ふ。何事に付けても、忍び難き御心弱さのつゝましくて、過ぎにし事いたうもの給ひ出でぬに、待たれつる杜鵑の仄かに打ち鳴きたるも、如何に知りてかと聞く人たにならず。

○村雨　涙を喩せて、五月雨を云へり。
○君　紫上。
○おはせし世は　紫上在世の時は。
○如何に多かる　法照禪師五會贊に「一々池中華盡滿華々總是往生人」とあり。
○夕殿に螢飛んで　長恨歌に「夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠」とあり。
○夜を知る云々　螢は晝夜を知れど我思は其差別も無し。朗詠集に「蓮殿水暗螢知夜」とあり。
○七夕の云々　今年は星合の空をも見ず、唯星の別れの今朝の庭に我涙の露ぞ置き添ふ。

(源)「亡き人を、忍ぶる宵の、村雨に、濡れてや來つる、山郭公。」
いとゞ空を眺め給ふ。大將、
(タ)「杜鵑、君に傳なん、古里の、花橘は、今ぞ盛と。」
女房など多く言ひ集めたれど、止めつ。大將の君は、やがて御宿直に侍ひ給ふ。淋しき御獨寢の心苦しければ、時々かやうに侍ひ給ふを、おはせし世はいと氣遠かりし御座のあたりの甚うも立ち離れぬなどに付けて思ひ出でらるゝ事ども多かり。
いと暑き頃、涼しき方にて眺め給ふに、池の蓮の盛なるを見給ふに、如何に多かるなど先づ思し出でらるゝに、惚れ〴〵しくて、つく〴〵とおはする程に、日も暮れにけり。ひぐらしの聲華やかなるに、御前の撫子の夕映を、一人のみ見給ふには、實にぞ甲斐なかりける。
(源)「つれ〴〵と、我が泣き暮らす、夏の日を、託言がましき、蟲の聲かな。」
螢のいと多う飛びちがふも、「夕殿に螢飛んで」と、例の故事も、かゝる筋にのみ口馴れ給へり。
(源)「夜を知る、螢を見ても、悲しきは、時ぞとも無き、思なりけり。」
七月七日も、例にかはりたる事多く、御遊などもし給はで、徒然に眺め暮らし給ひて、星合見る人も無し。まだ夜深う、一所起き居給ひて、妻戸押し開け給へるに、前栽の露いと繁く、渡殿の戸より通りて見渡さるれば、出で給ひて、
(源)「七夕の、逢ふ瀨は雲の、よそに見て、別れの庭に、露ぞ置き添ふ。」

○正日　一週忌を云ふ。

○綿被ひたる菊　眞綿を圍く扁くして霜除に菊花の上に被ふなり。
○置き居し　露の緣にて云ふ。玩びし意。

○降りしかど　古歌に「神無月何時も時雨は降りしかど斯く袖ひづる折は無かりき」
○大空を云々　雁の空を渡るを見て楊貴妃の魂の在所を尋ねし幻術士の事を思ひて詠めるなり。
○小忌　小忌衣とて山藍に摺りたる衣なり。
○もてかしづきつゝ　夕霧の君達を。

風の音さへたゞならず成り行く頃しも、御法事の營にて、ついたち頃は紛らはしげなり。今まで經にける月日よと思すにも、あきれて明し暮らし給ふ。御正日には、上下の人々皆齋して、かの曼陀羅など今日ぞ供養せさせ給ふ。例の宵の御行に、御手水參らする中將の君の扇に、

（中將）「君戀ふる、涙は際も、無き物を、今日をば何の、果と云ふらん。」

と書き付けたるを、取りて見給ひて、

（源）「人戀ふる、我身も末に、なり行けど、殘多かる、涙なりけり。」

と書き添へ給ふ。

九月になりて、九日、綿被ひたる菊を御覽じて、

（源）「諸共に、置き居し菊の、朝露も、獨袂に、懸る秋かな。」

神無月は、大方も時雨勝なる頃、いとゞ眺め給ひて、夕暮の空の氣色なども、えも言はぬ心細さに、「降りしかど」と獨言ちおはす。雲居を渡る雁の翼も、羨ましくまもられ給ふ。

（源）「大空を、通ふ幻術士、夢にだに、見え來ぬ魂の、行方尋ねよ。」

何事に付けても、紛れずのみ月日に添へて思さる。

五節など云ひて、世の中そこはかと無く今めかしげなる頃、大將殿の君達、殿上し給ひて、參り給へり。同じ程にて、二人いと美しき樣なり。御叔父の頭中將、藏人少將など小忌にて、青摺の姿ども、清げに目安くて、皆打ち續きもてかしづきつゝ、諸共に參り給ふ。

○古怪しかりし日影の折　筑紫の五節に文やり給ひし事などなり。
○世を去り給ふべき　遁世をいふ。

○かの御手　紫上の手跡。

○千年の形見に　古歌に「甲斐無しと思ひな佗びそ水莖の跡ぞ千年の形見なりける」

○死天の山越えにし人　亡せにし紫上の意。十王經に「死天山門集ニ鬼神一。」とあり。

思ふ事無げなる樣どもを見給ふに、古怪しかりし日影の折、さすがに思し出でらるべし。

（源）「宮人は、豐明に、急ぐ今日、日影も知らで、暮らしつるかな。」

今年をば斯くて忍び過しつれば、今はと世を去り給ふべき程近く思し設くるに、あはれなる事盡きせず。やう〳〵然るべき事ども、御心の中に思し續けて、侍ふ人々にも、程々に付けて、物賜ひなど、おどろ〳〵しく、今なん限としなし給はねど、近う侍ふ人々は、御本意遂げ給ふべき氣色と見奉るまゝに、年の暮れ行くも心細う、悲しきこと限り無し。落ち留りて、片端なるべき人の御文ども、破れば惜しと思されけるにや、少しづゝ殘し給ひけるを、物の序に御覽じ付けて、破らせ給ひなどするに、かの須磨の頃ほひ、所々より奉り給ひけるもある中に、かの御手なるは、殊に結ひ合はせてぞありける。自らし置き給ひける事なれど、久しうなりにける世の事と思すに、只今のやうなる墨つきなど、實に千年の形見にしつべかりけるを、見ずなりぬべきよと思せば、甲斐なくて、疎からぬ人々二三人ばかり、御前にて破らせ給ふ。いと斯からぬ程の事にてだに、過ぎにし人の跡と見るは哀なるを、ましていとゞ搔き暗し、それとも見別れぬまで降り落つる御涙の、水莖に流れ添ふを、人も餘り心弱しと見奉るべきが、傍痛うはしたなければ、押し破り給ひて、

（源）「死天の山、越えにし人を、慕ふとて、跡を見つゝも、尙惑ふかな。」

侍ふ人々も、直面には得ひろげねど、それと仄々見ゆるに、心惑ども疎ならず。此世ながら遠からぬ御別の程を、いみじと思しける儘に書い給へる言の葉、實に其折よりも堰き敢へぬ悲しさ、遣らん方無し。いとうたて、今一際の御心惑も、女々しく人わろくなりぬべ

○同じ雲居の云々　紫上と同じ雲居の煙となれ。

○御佛名　十二月十九日より三日間清涼殿にて佛名經を誦し三世諸佛の名號を唱へしめらるゝ公事。

○行末長き事を　導師が源氏の。

○院　源氏。

○御遊など云々　管絃の御遊もあるべきをとなり。

○色づく　漸く開く。

○其日ぞ出て給へる　この程は籠りておはしけるが今日は人々に面會し給ひしなり。

○難追はんに　鬼やらひをせんに。

○朔日の程の事云々　六條院の拜禮も茲年ばかりなるべしとて殊に厚く用意し給ふなり。

ければ、能くも見給はで、こまやかに書き給へる傍に、

（源）「搔き集めて、見るも甲斐なし、藻鹽草、同じ雲居の、烟とをなれ。」

と書き付けさせ給ひて、皆燒かせ給ひつ。

御佛名も、今年ばかりにこそはと思せばにや、常よりも殊に、錫杖の聲々などあはれにおぼさる。行末長き事を請ひ願ふも、佛の聞き給はんこと傍痛し。雪いたう降りて、まめやかに積りにけり。道師のまかンづるを、御前に召して、杯など常の作法よりも、差し別かせ給ひて、殊に祿など遣はす。年頃久しく參り、おほやけにも仕う奉りて、院にも御覽じ馴れたる御導師の、頭はやう〳〵色變りて侍ふも、哀におぼさる。例の宮達上達部など數多參り給へり。梅の花の僅に氣色ばみ始めて、雪に持て映されたる程をかしきを、御遊などもありぬべけれど、猶今年までは物の音も咽びぬべき心地し給へば、時に因りたる物打ち誦じなどばかりぞせさせ給ふ。まことや、導師の杯の序に、

（源）「春までの、命も知らず、雪の中に、色づく梅を、今日かざしてん。」

御返し、

（導師）「千世の春、見るべき花と、祈り置きて、我身ぞ雪と、共にふりぬる。」

人々多く詠み置きたれど、漏しつ。其日ぞ出で給へる。御貌昔の御光にも又多く添ひて、有り難くめでたく見え給ふを、この舊りぬる齡の僧は、間無う涙も止めざりけり。

年暮れぬとおほすも心細きに、若宮の儺追はんに、音高かるべき事、何わざをせさせんと、走り歩き給ふもをかしき御有樣を、見ざらん事と、萬に忍び難し。

（源）「物思ふと、過ぐる月日も、知らぬ間に、年も我世も、今日や盡きぬる。」

朔日の程の事、常よりことなるべくとおきてさせたまふ。親王たち大臣の御引出物、品々の祿どもなど、二無うおほしまうけてとぞ。

雲隱

此卷は名のみありて詞無し。作者深意の存する所なるべしと云ふ。卷名は主として源氏の君の遁世薨去の事を書くべき卷なれば斯く名づけたるなるべし。

○光隱れ給ひにし後　源氏のかくれ給ひしをいふ。
○おりゐの帝　冷泉院。
○當代の三宮　匂宮。
○宮の若宮　女三宮のお腹の薫君。
○然る御中らひ　父母の貴きをいふ。
○古の御響　源氏の幼時の御覺。
○春宮　今上第一皇子、明石中宮の腹なり。
○心安き故郷　二條院をいふ。
○女一宮　明石中宮の御腹。
○その世の　紫上在世の時の。
○戀ひ忍び聞え給ふ　紫上を。
○二宮　匂宮の兄君。
○右の大殿　夕霧右大臣。
○中姫君　雲井雁の腹なり
○軋ろふ　競爭する。

匂宮

此卷は薫君十四歳の春より二十歳の正月までの事を記せり。卷の名は「例の世の人は匂ふ兵部卿薫中將と聞きにくゝ言ひ續けて云々」とある詞によれり。幻の卷より此卷までの間凡そ八年ばかり、此間源氏薨去の事など省きたり。

光隱れ給ひにし後、かの御影に立ち繼ぎ給ふべき人、そこらの御末々に有り難かりけり。おりゐの帝を掛け奉らんは忝し。當代の三宮、その同じ殿にて生ひ出で給ひし宮の若君とこの二所なん、取りぐに清らなる御名取り給ひて、實にいとなべてならぬ御有樣なゝめれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし。唯世の常の人ざまに、めでたくあてになまめかしくおはするを本として、然る御中らひに、人の思ひ聞えたるもてなし有樣も、古の御響けはひよりも、やゝ立ち優り給へる覺柄なん、片方はこよなういつくしかりける。紫の上の御心寄せ殊にはぐくみ聞え給ひし故、三宮は二條院におはします。春宮をばさるやんごとなき物に置き奉り給ひて、帝、后、いみじく悲しうし奉り、かしづき聞えさせ給ふ宮なれば、內住をせさせ奉り給へど、猶心安き故郷に住みよくし給ふなりけり。御元服し給ひては、兵部卿の宮と聞ゆ。女一宮、六條院の南の町の東の對を、その世のしつらひを改めずおはしまして、朝夕に戀ひ忍び聞え給ふ。二宮も同し殿の寢殿を、時々の心休所にし給ひて、梅壺を御曹司にし給ひて、右の大殿の中姫宮を得奉り給へり。次の坊がねにて、いと覺殊に重々しう、人柄もすくよかになん物し給ひける。

大殿の御女は、いと數多物し給ふ。大姫君は春宮に參り給ひて、また軋ろう人無き樣にて

○大臣　夕霧。
○樣の物　同じ樣の物。
○六の君　藤典侍の腹なり。
○東の院　二條院の東院。
○御所分の所　遺産として花散里に分け給へるなり。
○入道の宮　女三宮。
○今后　明石中宮。
○一條の宮　落葉宮。
○三條殿　雲井雁の方。
○唯一人の御末　明石上一人の御末。
○大殿　夕霧。
○對の上　紫上。

侍ひ給ふ。その次々皆序の儘にこそはと、世の人も思ひ聞え、后の宮もの給はすれど、この兵部卿宮は、さしもおぼしたらず。我御心より起らざらん事などは、すさまじくも思しぬべき御氣色なゝめり。大臣も何かは樣の物と、さのみ麗しうはと靜め給へど、又然る御氣色あらんをば、もて離れてもあるまじう面向けて、いといたうかしづき聞え給ふ。六の君なん、其頃少し吾はと思ひのぼり給へる親王達上達部の御心盡す種はひに物し給ひける。

院薨れ給ひて後、樣々集ひ給へりし御方々、泣くく遂におはすべき住處ども、各移ろひ給ひしに、花散里と聞えしは、東の院をぞ、御所分の所にて渡り給ひける。入道の宮は、三條の宮におはします。今后は內にのみ侍ひ給へば、院の中淋しく人少になりにけるを、右の大臣人の上にて、古のためしを見聞くにも、生ける限の世に、心を留めて造り占めたる人の家居の、名殘無く打ち捨てられて、世の習も常無く見ゆるは、いと哀にはかなさ知らるゝを、我世に在らん限だに、この院荒さず、邊の大路など、人影枯れ果つまじう、と思しの給はせて、艮の町に、かの一條の宮を渡し奉らせ給ひてなん、三條殿と、夜毎に十五日づゝ、うるはしう通ひ住み給ひける。二條院とて造り磨き、六條院の春の殿とて、世にのゝしりし玉の臺も、唯一人の御末の爲なりけりと見えて、明石の御方は、數多の宮達の御後見をしつゝ、扱ひ聞え給へり。大殿は、何方の御事をも、昔の御心掟の儘に改め變る事無く、普き親心に仕うまつり給ふにも、對の上のかやうにて、とまり給へらましかば、如何ばかり心を盡して、仕うまつり見え奉らまし。遂に些も取り別きて、我心寄せと

○院を戀ひ聞えぬなく　源氏を追慕せぬ人はなしとなり。
○殿の内　六條院二條院等。
○二品の宮　女三宮。
○若君　薫君。
○后の宮　秋好中宮。
○女の御氣色よりも　女宮をかしづき給ふよりも。
○上　冷泉院。
○宮　秋好中宮。
○故致仕の大殿の女御　冷泉院の弘徽殿女御。
○母宮　女三宮。

見知り給ふべき節も無くて、過ぎ給ひにし事を、口惜しく飽かず悲しう思ひ出で聞え給ふ。

天の下の人、院を戀ひ聞えぬ無く、とにかくに付けても、世はたゞ火を消ちたるやうに、何事もはえ無き歎をせぬ折無かりけり。まして殿の内の人々、御方々宮達などは更にも聞えず、限なき御事をば然るものにて、又かの紫の上の御有樣を心に染めつゝ、萬の事に付けて、思ひ出で聞え給はぬ時の間なし。春の花の盛は、實に長からぬにしも、覺え優るものになん。

二品の宮の若君は、院の聞え付け給へりし儘に、冷泉院の帝、取り別けておぼしかしづき、后の宮も、皇子達などおはせず、心細う思さるゝに、嬉しき御後見に、まめやかに頼み聞え給へり。御元服なども、院にてせさせ給ふ。十四にて、二月に侍從になり給ふ。秋右近の中將になりて、御たうばりの加階などをさへ、いづこの心もと無きにか、急ぎ加へておとなびさせ給ふ。おはします殿近き對を曹司にしつらひなど、自ら御覽じられて、若き人も、童下仕まで、勝れたるを選り調へ、女の御氣色よりも、まばゆく調へさせ給へり。上にも宮にも、侍ふ女房の中にも、容貌よくあてやかに目安きは、皆移し渡させ給ひつゝ、院の内を心につけて、住みよく在りよく思ふべくとのみ、態とがましき御扱種に思され給へり。故致仕の大殿の女御と聞えし御腹に、女宮たゞ一所おはしけるをなん、限無くかしづき給ふ御有樣に劣らず。后の宮の御覺の、年月に增さり給ふけはひにこそは、何どか然しもと見るまでなん。母宮は今は唯御行を靜にし給ひて、月毎に御念佛、年に二度の御

○仄聞き給ひし事　實父は柏木君と人の密に告げし事ありしなるべし。
○善巧太子　羅睺羅の稱、佛出家後六年に生れ給ひしかば人々疑ひしに、羅自智を以て佛を父と知り給ひしと云ふ。
○五つの何がし　五障なり。法華經に「女人身猶有五障一者不得作梵天二者帝釋三者魔王四者轉輪聖王五者佛身」とあるを云ふ。
○元服は物憂がり　田家せんと思ふ故なり。

八講、折々の尊き御營ばかりをし給ひて、徒然におはしませば、この君の出で入り給ふを、却りては親のやうに、賴もしき蔭に思したれば、いと哀にて、院にも内にも召し纏はし、春宮も次々の宮達も、なつかしき御遊敵にて、伴ひ給へば、暇無く苦しうて、如何で身を分けてしがなと覺え給ひける。幼心地に、仄聞き給ひし事の、折々訝しう、覺束無く思ひ渡れど、訪ふべき人も無し。宮には事の氣色にても、知りけりとおぼされん。傍痛き筋なれば、世と共の心に懸けて、「如何なりける事にかは、何の契にて、斯う安からぬ思添ひたる身にしもなり出でけん。善巧太子の我身に問ひけん悟をも得てしがな。」とぞ獨言たれ給ひける。

（薫）「覺束無、誰に問はまし、如何にして、初も果も、知らぬ我身ぞ。」

いらふべき人も無し。事に觸れて我身に恙ある心地するも、たゞならず物歎かしくのみ、思ひめぐらしつゝ、宮もかく盛の御形を寢し給ひて、何ばかりの御道心にてか、俄に趣き給ひけん。かく思はずなりける事の亂れに、必ず憂しと思しなる節ありけん。人も豈に漏り出で知らじやは。猶包むべき事の聞えにより、我には氣色を知らする人の無きなンめり、と思ふに、明暮勤め給ふやうなンめれど、はかもなく大どき給へる女の御悟の程に、蓮の露も明に玉と磨き給はんこと難し。五つの何がしも、猶うしろめたきを、我この御心地を援けて、同じうは後の世をだにと思ふ。かの過ぎ給ひにけんも、安からぬ思に結ぼゝれてやなど、推し量るに、世を替へても對面せまほしき心附きて、元服は物憂がり給ひけれど、すまひ果てず。自ら世の中にもてなされて、まばゆきまで、華やかなる御身の飾も、目に

○一つ御殿　同じ六條院。
○末に生れ給ひて　源氏の晩年生れ給ひて。
○光君　源氏君の稱。
○後の世の御勤　源氏嵯峨の院に隱遁して勤行ありし事。
○實に然るべくて　然るべき因緣ありて。
○假に宿れるかとも　佛菩薩の化身かとも。
○香の馨しさ云々　身に異香あるをいふ。
○たゞありなるやは　繕はでありのままなるやは。
○取りもつけ給はねど　香を衣に薰ずる等の事は爲給はねどなり。

着かずのみ思ひ沈まり給へり。

内にも、母宮の御方樣の心寄せ深くて、いと哀なるものにおぼされ、后の宮はた、元より一つ御殿にて、宮達諸共に生ひ出で、遊び給ひし御もてなし、をさ〳〵更め給はず。末に生れ給ひて、心苦しうおとなしうも得見置かぬ事と、院の思しの給ひしを、思ひ出で聞え給ひつゝ、竦ならず思ひ聞え給へり。右の大臣も、我御子どもの君達よりも、この君をばこまやかに、やんごとなくもてなしかしづき奉り給ふ。昔光君と聞えしは、然る又無き御覺ながら、猜み給ふ人打ち添ひ、母方の御後見無くなどありしに、御心ざまも物深く、世の中をおぼしなだらめし程に、ならび無き御光をば、まびゆからず持て沈め給ふ。遂にさるいみじき世の亂も、出で來ぬべかりしをも、事無く過し給ひて、後の世の御勤も、後らかし給はず、萬然りげ無くて、久しくのどけき御心掟にこそありしか。この君はまだしきに、世の覺いと過ぎて、思ひあがりたる事、こよなくなどぞ物し給ふ。實に然るべくて、いと此世の人とは造り出でざりける。假に宿れるかとも見ゆる事添ひ給へり。顏容貌もそこはかと、いづこなん勝れたる、あな淸らと見ゆる所も無きが、唯いとなまめかしう恥かしげに、心の奥多かりげなるけはひ、人に似ぬなりけり。香の馨しさぞ此世の勾ならず、怪しきまで打ち振舞ひ給へるあたり、遠く隔てたる程の追風も、誠に百步の外も薰りぬべき心地しける。誰も然ばかりになりぬる御有樣の、いと窶ればみ、たゞありなるやはあるべき。樣々に我人に優らんと、繕ひ用意すべかンめるを、かく片端なるまで打ち忍び立ち寄らんも、物の隈も著き仄めきの、隱れあるまじきに、うるさがりて、をさ〳〵取りもつけ給はねど、數多の御唐櫃に埋もれたる香の香どもゝ、この君のは、言ふ由も無き匂を加へ、御前の花の木も、はかなく袖掛け給ふ梅の香は、春雨の雫にも濡れ、身に染むる人多く、秋の野に主無き藤袴も、もとの薰は隱れて、なつかしき追風異に、折り做しからなん優りける。斯く怪しきまで、人の咎むる香に染み給へるを、兵部卿宮なん、別事よりも挑ましく思して、それは態と萬の勝れたる移しを染め給ひ、朝夕の事業に合せ營み、御前の前栽にも、春は梅の花園を眺め給ひ、秋は世の人の愛づる女郎花、小牡鹿の妻にすめる萩の露にも、をさ〳〵御心移し給はず、老を忘るゝ菊に、衰へ行く藤袴、物氣無き地楡などは、いとすさまじき霜枯の頃ほひまで、思し捨てずなど、態とめきて、香に愛づる思をなん立てゝ、好ましうおはしける。かゝる程に、少しなよびやはらぎ過ぎて、好きたる方に引かれ給へりと、世の人は思ひ聞えたり。昔の源氏は、凡て斯く立てゝ、其事と樣かはり、染み給へる方ぞ無かりしかし。源中將、この宮には常に參りつゝ、遊などにも軋ろふ物の音を吹き立て、實に挑ましくも、若きどち思ひかはし給ひつべき人の樣になん。例の世の人は、「匂ふ兵部卿、薰る中將」と、聞きにくゝ言ひ續けて、其頃佳き女おはするやうごとなき所々は、心時めきに、聞えごちなどし給ふも有れば、宮は樣々にをかしうもありぬべき邊をばの給ひ寄りて、人の御けはひ有樣をも氣色取り給ふ。態と御心に著けて思す方は殊に無かりけり。冷泉院の一宮をぞ、さやうにても見奉らばや。甲斐ありなんかし、と思したるは、母女御もいと重く、心憎く物し給ふあたりにて、姫君の御けはひ、實にと有り難く勝れて、よその聞えもおはしますに、まして少し近くも侍ひなれたる女房

○春雨の雫に云々　香に愛づる故に春雨の雫にも濡れて。
○主無き藤袴　古今集に「主知らぬ香にこそ匂へれ秋の野に誰が脫ぎかけし藤袴ぞも」
○折り做しからなん　薰君の折り給ふからに。
○人の咎むる香　古今集に「梅の花立寄るばかりなりしより人の咎むる香にぞしみぬる」
○勝れたる移しを染め給ひ　勝れたる薰物の香を薰き染め給ひ。
○老を忘るゝ菊　貫之集に「皆人の老を忘ると云ふ菊は百年を經る花にぞありける」
○源中將　薰君。
○聞きにくゝ　あまりに評の高きなり。
○態と御心につけて云々　これこそと心に染みて深く思ふ女はなしとなり。
○冷泉院の一の宮　女一宮なり、弘徽殿女御の御腹なり。
○さやうにても見奉らばや　思ひ人にて見奉らばやとなり。

○帝　冷泉院。
○后　秋好中宮。
○身を思ひ知る云々　仄に柏木の事を聞き給ひしかばなり。
○およずけたる　實法なる。
○三宮　匂宮。
○院の姫宮の御あたりを見るにも　薫君が冷泉院の女一宮の御邊を見るにも。
○人を見ん　妻として見んの意なり。
○無げの言葉　なほざりの言。

などの、委しき御有樣の、事に觸れて聞え傳ふるなども有るに、いとゞ忍び難く思すべかンめり。中將は世の中を、深く味氣無き物に、思ひ澄したる心なれば、なか〳〵心留めて、行き離れ難き思や殘らんなど思ふに、煩はしき思あらんあたりに、かゝづらはんは、愼ましなど思ひ捨て給ふ。差し當りて、心に染むべき事の無き程、賢しだつにやありけん。人の許無からん事などは、まして思ひ寄るべくもあらず。十九になり給ふ年・三位の宰相にて、猶中將も離れ給はず。帝后の御もてなしに、たゞ人にては憚無きめでたき人の覺にて物し給へど、心の中には、身を思ひ知る方ありて、物哀になどもありければ、心に任せて、はやりかなる好事をさ〳〵好まず、萬の事もて沈めつゝ、自らおよずけたる心ざまを、人に知られ給へり。三宮年添へて、心を碎き給ふめる。

院の姫君の御あたりを見るにも、一つ院の內に、明暮立ち馴れ給へば、事に觸れても、人の有樣を聞え見奉るに、實にいとなべてならず、心憎く故々しき御もてなし限なきを、同じくは實にかやうならん人を見んにこそ、生ける限の心行くべき妻なれ、と思ひながら、大方こそ隔つること無く思したれ。姫宮の御方ざまの隔ては、こよなく氣遠く習はさせ給ふも、道理に煩はしければ、あながちにも交らひ寄らず、若し心より外の心もつかば、我も人もいと惡しかるべきにと思ひ知りて、物馴れ寄る事も無かりけり。

我かく人にめでられんとなり給へる有樣なれば、はかなく無げの言葉を散らし給ふあたりも、こよなく持て離るゝ心無く、靡き易なる程に、自らなほざりの通ひ所も數多になるを、人の爲に、事々しくなどもてなさず、いと善く紛らはし、そこはかと無く情無からぬ程

○三條の宮　女三宮の御方
○つれなきを見るも　官仕の人々が薫のつれなきを見るもなり。
○さもあるまじき際　官仕すまじき身分。
○宮　女三宮。
○右大臣　夕霧。
○一人々々はと　一人は薫君へ一人は匂宮へと。
○この君達　匂宮と薫君と。
○貶しめざまなる　母方の家位卑しければ世の人貶し思ふなり。
○一條の宮　落葉の宮。
○迎へ取りて　六君を宮の養女とするなり。
○此人々　匂宮薫君を指す。
○賭弓の還饗　賭弓の儀終りて勝方の大將の第にて還饗とて中將以下射手を饗應するなり。賭弓の事は前に見えたり。

の、なか〳〵心疚しきを、思ひ寄れる人は誘はれつゝ、三條の宮に參り集るは數多あり。つれなきを見るも苦しけなるわざなンめれど、絕えなんよりはと、心細きに思ひわびて、さもあるまじき際の人々の、はかなき契に賴を繫けたる多かり。さすがにいとなつかしう、見所ある人の御有樣なれば、見る人皆心に謀らるゝやうにて見過さる。宮のおはしまさん世の限は、朝夕に御目にかれず御覽ぜられ、見奉らんをだにと思ひの給へば、右大臣もあまた物し給ふ御むすめたちを、一人々々はと志し給ひながら、え言に出で給はず。さすがゆかしけ無き中らひなるをとは思ひ做せど、この君達を措きて、外にはなずらひなるべき人を覓め出づべき世かは、とおぼし煩ふ。やんごとなきよりも、典侍腹の六の君は、いと勝れてをかしけに、心ばへなども足らひて生ひ出で給ふを、世の覺えの貶しめざまなるべきしも、斯く惜しきを、心苦しう思して、一條の宮の然る扱種持給へられで、淋々しきに、迎へ取りて奉り給へり。態とは無くて、此人々に見せ初めてば、必ず心留め給ひてん。人の有樣をも見知る人は殊にこそあるべけれ、など思して、いといつくしうは持て做し給はず、今めかしくをかしきやうに、物好せさせて、人の心付けん便多く作り做し給ふ。

賭弓の還饗の設、六條院にて、いと心殊にし給ひて、皇子をもおはしまさせんの心づかひし給へり。其日皇子達おとなにおはするは、皆侍ひ給ふ。后腹のは、いづれとも無く氣高く淸げにおはします。中にも此兵部卿の宮は、實にいと勝れてこよなう見え給ふ。四の皇子、常陸の宮と聞ゆる更衣腹のは、思ひなしにや、けはひこよなう劣り給へり。例

○后腹の五の宮　明石中宮腹の中務宮。
○宰相中將　薫君。

○垣下　相伴。
○求子　風俗歌の八少女を云ふ。
○かよれる　飜る。

○柳は文無く　古今集に、「春の夜の闇は文無し梅の花色こそ見えぬ香やは隠るる」
○「神のます」など　求子の第二段「神のます此みやしろに」など歌ひ給へりとなり。

の左あながちに勝ちぬ。例よりは、疾く事果てゝ、大將罷んで給ふ。兵部卿の宮、常陸の宮、后腹の五の宮と、一つ車に招ぎ乘せ奉りて、罷出給ふ。宰相中將は負け方にて、音無く罷出給ひにけるを、(タ)「皇子達おはします御送に參り給ふまじや。」と、推し留めさせて、御子の衞門督、權中納言、右大辨など、さらぬ上達部數多、これかれに乘りまじり、誘ひ立てゝ、六條院へおはす。道のやゝ程經るに、雪聊散りて、艶なるたそがれ時なり。物の音をかしき程に吹き立て遊びて入り給ふを、實に此處を措きて、如何ならん佛の御國にかは、かやうの折節の心遣所を覓めん、と見えたり。寢殿の南の廂に、常の如南向に、中少將着き渡り、北向に向へて、垣下の親王達上達部の御座あり。かはらけなど始まりて、物面白くなり行くに、求子舞ひて、かよれる袖どもの打ちかへす羽風に、御前近き梅の、いといたく綻びこぼれたる匂の、さと打ち散り渡れるに、例の中將の御薫の、いとゞしくもてはやされて、言ひ知らずなまめかし。纔に覗く女房なども、闇は文無く心もとなき程なれど、香にこそ實に似たる物無かりけれと、愛で合へり。大臣も愛でたしと見給ふ。容貌用意も常より優りて、亂れぬ樣に治めたるを見て、(タ)「右の次官も聲加へ給へや。いたう容人だたしや。」との給へば、憎からぬ程に「神のます」など。

○元よりのは　元の北の方はなり、誰とも見えず。
○後の太政大臣　髭黑。
○式部卿の宮　紫の父。
○故兵部卿の親王　螢兵部卿宮。
○忍びつゝ通ひ給ひ　按察大納言がなり。
○二人　長は麗景殿女御次は中君。
○今の腹　槇柱の腹。
○故宮　螢兵部卿。
○女君一所　東の姫君、紅梅の柳方、又宮の柳方と云ふ。
○晴々しう　快濶にて。

○大納言殿の大姫君　姉姫君。

紅梅

此卷は薫君二十四歳の春より冬までの事にして、主として柏木の弟按察大納言(紅梅大臣)の傳を書けり。卷名は詞に「此東の端に軒近き紅梅の云々」とあるに取れり。

其頃、按察大納言と聞ゆるは、古致仕の大臣の次郎なり。亡せ給ひにし右衞門督の差次に、童より勞々しう、華やかなる心ばへ物し給ひし人にて、成り昇り給ふ。年月に添へて況いていと世にある甲斐あり。あらまほしうもてなし、御覺いとやんごとなかりけり。北の方二人物し給ひしを、元よりのは亡くなり給ひて、今物し給ふは、後の太政大臣の御むすめ、槇柱離れ難くし給ひし君を、式部卿の宮にて、故兵部卿の親王に配せ立て給へりしを、親王亡せ給ひて後、忍びつゝ通ひ給ひしかど、年月經れば、え然しも憚り給はぬなゝめり。御子は故北の方の御腹にも、二人のみぞおはしければ、淋々しとて神佛に祈りて、今の腹にぞ男君一人儲け給へる。故宮の御形見に、女君一所おはす。隔て別かず、何れをも同じ如、思ひ聞えかはし給へるを、各御方の人などは、美しうもあらぬ心ばへ打ち雜り、生拗く々しき事も出で來る時々あれど、北の方いと晴々しう、今めきたる人にて、罪無く取り做し、我御方ざまに苦しかるべき事をも、なだらかに聞き做し、思ひ直し給へば、聞きにくからで目安かりけり。

君達同じ程に、次々おとなび給ひぬれば、御裳など着せ奉り給ふ。七間の寢殿、廣く大に造りて、南面に大納言殿の大姫君、西に中の君、東に宮の御方と住ませ奉り給へり。大方

○父宮　螢兵部卿。
○御贈物　御遺産を云ふ。

○中宮　明石中宮。
○思ひ劣り云々　自ら卑下して女御などに參らせんは本意なしとせり。
○左の大殿の女御　夕霧の女なり。
○參らせ奉り給ふ　紅梅の嫡女を東宮へなり。

○すがいて　次ぎての意なり。

○此若君　大納言の嫡男、槇柱の腹、後に大夫君と云ふ。
○兄を見てのみは得已まじ　弟をのみ見ては得已まじ　姉君をも見たしとなり。古は弟をもせうとと云へり。

○春日の神の御理　書紀神代卷下に天照大神春日大明神相殿の御契の事あり。斯くて后には必ず藤原氏の人立ち給ふべき理となり。

に打ち思ふ程は、父宮のおはせぬ心苦しきやうなれど、こなたかなたの御寶物多くなどして内々の儀式有樣など、心憎く氣高くなど持て做して、けはひあらまほしうおはす。例のかくかしづき給ふ聞えありて、次々に從ひつゝ聞え給ふ人多く、内春宮より御氣色あれど、内には中宮おはします。如何ばかりの人かは、かの御けはひにならび聞えん。さりとて思ひ劣り卑下せんも、甲斐なかるべし。春宮には、左の大殿の女御、並ぶ人無けにて侍ひ給ふは、軌ろひにくけれど、然のみ言ひてやは、人に優らんと思ふ女子を、宮仕に思ひ絶えては、何の本意かはあらんと思し立ちて、參らせ奉り給ふ。十七八の程にて、美しう匂多かる心地し給へり。

中の君も、打ちすがいてあてになまめかしう、澄み渡る樣は優りて、をかしうおはすれば、たゞ人にては惜しう見せまほしき御樣を、兵部卿の宮の、さも思し寄らばなどぞ思したる。この若君を、内にてなど見付け給ふ時は、召し惑はし、戯敵にし給ふ。心ばへ有りて、奥推し量らるゝ目見額付なり。（匂宮）「兄を見てのみは得已まじと、大納言に申せよ。」などの給ひ掛くるを、然なんと聞ゆれば、打ち笑みて、いと甲斐ありと思したり。（紅梅）「人に劣らん宮仕よりは、此宮にこそは宜しからん女子は、見せ奉らまほしけれ。心の行くに任せて、かしづきて見奉らんに、命延びぬべき宮の御樣なり。」との給ひながら、先づ春宮の御事をいそぎ給ひて、春日の神の御理も、我世にや若し出で來て、故大臣の、院の女御の御事を、胸痛く思して止みにし慰めの事もあらなんと、心の中に祈りて參らせ奉り給ひつ。いと時めき給ふ由人々聞ゆ。かゝる御交らひの馴れ給はぬ程に、はかぐしき御後見無く

○院の女御　冷泉院の弘徽殿女御。
○胸痛く云々　秋好中宮に壓されて立后の事無かりしを云ふ。
○殿　大納言。
○西の御方は云々　中君は姉君と大方一つ所に居慣れ給ひしなり。
○東の姫君　宮の御方。
○物恥を云々　東の姫君は。
○埋れたる樣ならず　物耻はし給ひながらも和らぎて氣近き所ありと譽めていへるなり。
○母君　槇柱。

○後ぞ云々　我が死後は如何ならんかと氣懸りなれど。
○何れも別かず　大納言心中に實子繼子の差別なく。
○上　母上槇柱。

○世の中廣き中は云々　我女に優れる人もありけりと嬉みたるなり。

ては如何がとて、北の方添ひて侍ひ給へば、誠に限も無く思ひかしづき、後見聞え給ふ。殿は徒然なる心地して、西の御方は一つに慣ひ給ひて、いと淋々しう眺め給ふ。東の姫君も、疎々しく互にもてなし給はで、夜々は一所に御殿籠り、萬の御事習ひ、はかなき御遊技をも、こなたを師のやうに思ひ聞えてぞ、誰も習ひ遊び給ひける。物恥を世の常ならずし給ひて、母北の方にだに、さやかにはをさ〳〵さし向ひ奉り給はず。片端なるまでもてなし給ふものから、心ばへけはひの埋れたる樣ならず、愛敬づき給へる事はた、人よりも勝れ給へり。斯く内參や何やと、我が方ざまをのみ思ひ急ぐやうなるも、心苦しきなど思して、（紅梅）「さるべからん樣を思し定めての給へ。同じ事とこそ仕う奉らめ。」と、母君にも聞え給ひけれど、（槇柱）「更にさやうの世づきたる樣、思ひ立つべきにもあらぬ氣色なれば、なか〳〵ならん事は、心苦しかるべし。御宿世に任せて、世にあらん限は見奉らん。後ぞ哀にうしろめたけれど、世に背く方にても、自ら人笑に淡つけき事無くて、過し給はなん。」など、打ち泣きて、御心ばせの思ふやうなる事をぞ聞え給ふ。何れも別かず親が見え給ひぬべしやと、のぞきありき給へど、絶えて片側をだにえ見奉り給はず。（紅梅）「上おはせぬ程は、立ち代りて參り來べきを、疎々しく思し別くる御氣色なれば、心憂くこそ。」など聞えて、御簾の前に居給へば、御答など仄に聞え給ふ。御聲けはひなどあてにをかしう、狀貌思ひ遣られて、哀に覺ゆる人の御有樣なり。我御姫君たちを、人に劣らじと思ひ驕れど、此君に得しも優らずやあらん。かゝればこそ、世の中廣き中は煩はしけれ。類あ

○西の方に侍る人　中の君。
○なまかたほ　物のまだ調はざること。
○昔覺え侍る　昔遊びし尋思ひ出でらるゝ。
○左の大臣　夕霧。
○源中納言　薫君なり。中納言に昇進したりと見ゆ。按察大納言も此時右大臣に進めるなるべし。
○柱さす　柱を押して彈くを云ふ。
○若君　紅梅の嫡男。
○宿直姿　直衣姿なり。
○思しけり　紅梅大臣が。
○讓り聞えて　若君の參内せらるゝに讓りて自分は麗景殿へ參らずとなり。

らじと思ふに、優る方も自ら有りぬべかゝめりなど、いとゞ訝しう思ひ聞え給ふ。(紅梅)「月頃何と無く物騒がしき程に、御琴の音をだに承はらで、久しくなり侍りにけり。西の方に侍る人は、琵琶を心に入れて侍る。さもまねび取りつべくや覺え侍るらん。なまかたほにしたるに、聞き憎き物の音柄なり。同じくは御心留めて教へさせ給へ。翁は取り立てゝ習ふ物侍らざりしかど、そのかみ盛なりし世に、遊び侍りし力にや、聞き知るばかりのわきまへは、何事にもいと便無くは侍らざりしを、打解けても遊ばさねど、時々承はる御琵琶の音なん、昔覺え侍る。故六條院の御傳にて、左の大臣なん、此頃世に殘り給へる。源中納言、兵部卿の宮、何事にも昔の人に劣るまじう、いと契殊に物し給ふ人々にて、遊の方に取り別きて心留め給へるを、手づかひ少しなよびたる撥音なん、大臣には及び給はずと思ひ給ふるを、この御琴の音こそ、いと善く覺え給ふれ。琵琶は押手靜やかなるを善きにする物なるに、柱さす程、撥音の樣かはりて、なまめかしう聞えたるなん、女の御事にてなか〳〵をかしかりける。いで遊ばさんや。御琴參れ。」との給ふ。女房などは、隱れ奉るもをさ〳〵無し。いと若き上臈だつが、見え奉らじと思ふはしも、心に任せて居たれば、

(紅)「侍ふ人さへ斯くもてなすが、安からぬ。」と腹立ち給ふ。若君内へ參らんと、宿直姿にて參り給へる、態と美しき總魚よりも、いとをかしく見えて、いみじく美しと思しけり。麗景殿に御ことつけ聞え給ふ。(紅)「讓り聞えて、今宵もえ參るまじく、惱ましくなん、と聞えよ。」との給ひて、(紅)「笛少し仕うまつれ。ともすれば、御前の御遊に召し出でらるゝ、傍痛しや。まだいと若き笛を。」と打ち笑みて、雙調吹かせ給ふ。いとをかしう吹い給へば、

○皮笛　口笛。
○慣れたる聲して　此下拍子取り給ふなど云ふ脫字あるべし。
○知る人ぞ知る　古今集に「君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」
○此宮達　今上の宮達。
○端が端　片端。
○氣近き人　源氏に馴れ近づきし人。
○如何がはせん　昔を繼ひて云へるなり。
○阿難が光云々　大論に釋迦佛入涅槃之後、阿難登高座結集諸經之時、其形如佛、仍會衆疑佛再出、阿難未證四果之人也、仍阿羅漢等不用之、其時阿難自然現瑞云云」
○心ありて云々　中の君を園の梅に寄せ匂宮を鶯に寄せて詠めり。
○中宮の上の御局より云々　匂宮の出で給ふなり。

(紅)「怪しうはあらず成り行くは、このわたりにて、自ら物に合はする故なり。猶搔き合はせさせ給へ。」と迫め聞え給へば、苦しと思したる氣色ながら、爪彈にいとよく合せて、唯少し搔き鳴らし給ふ。皮笛太つかに慣れたる聲して、この東のつまに、軒近き紅梅のいと面白く匂ひたるを見給ひて、(紅)「御前の花心ばへ有りて見ゆめり。兵部卿の宮、内におはすなり。一枝折りて參れ。知る人ぞ知る。」とて、(紅)「あはれ光源氏の所謂御盛の大將などにおはせし頃、童にてかやうにて交らひ馴れ聞えしこそ、世と共に戀しう侍れ。此宮達を、世の人もいと殊に思ひ聞え、實に人にめでられんと成り給へる御有樣なれども、端が端にも覺え給はねば、猶類あらじと思ひ聞えし心の做しにやありけん。大方にて思ひ出で奉るも、胸開く世なく悲しきを、氣近き人の後れ奉りて生きめぐらふは、おほろけの命長さならじかしとこそ覺え侍れ。」など、聞え出で給ひて、物哀にすごく思ひめぐらし萎れ給ふ。序の忍び難きにや、花折らせて急ぎ參らせ給ふ。「如何がはせん。昔の戀しき御形見には、此宮ばかりこそは、佛のかくれ給ひにけん御名殘には阿難が光放ちけんを、再出で給へるかと疑ふ賢しき聖のありけるを、闇に惑ふ晴け所に聞え置かなんかし。」とて、

(紅)「心ありて、風の匂はす、園の梅に、先づ鶯の、訪はずやあるべき。」

と、紅の紙に若やぎ書きて、此君の懷紙に取り雜ぜ、押し疊みて出し立て給ふを、幼き心にいと馴れ聞えまほしと思へば、急ぎ參り給ひぬ。

中宮の上の御局より、御宿直所に出で給ふ程なり。殿上人數多御送に參る中に、見付け給ひて、(匂)「昨日は何どいと疾くはまかゝでにし。何時參りつるぞ。」などの給ふ。(若君)「疾

○内ならで心安き所　二條院を云ふ。
○此君召し放ちて　匂宮此若君を宿直所に召すなり。
○時取られて　姉君入内後は若君の暇あるを姉君に時取られてと戯れて宣ひしなり。
○御前にはしも　宮の御前には侍ひよし。
○我をば人げ無しと　紅梅大臣を恨み給ふ言なり。
○同じ筋　宮にておはしけるをいふなり。
○東と聞ゆなる　蜜兵部卿の女なり。
○この花　先に折りし花。
○取りならべて　色と香とを。
○思ふ心は殊に云々　東の姫君を思ひ給ふ故に中の君の方へはけ亮にも宣はぬなり。

くまかゝで侍りにし悔しさに、まだ内におはしますと人の申しつれば、急ぎ參りつるや。」と幼げなる物から馴れ聞ゆ。(匂)「内ならで心安き所にも、時々は遊べかし。若き人どもの、そこはかと無く集る所ぞ。」との給ふ。此君召し放ちて語らひ給へば、人々は近うも參らず、罷出散りなどして、しめやかになりぬれば、(匂)「春宮には暇少し許されにたゝめりな。いと繁う思ほし惑はすめりしを、時取られて人わろかゝめり。」との給へば、(若君)「纏はさせ給へりしこそ苦しかりしか。御前にはしも。」と聞えさして居たれば、(匂)「我をば人げ無しと思ひ離たれたるとな、ことわりなり。されど安からずこそ。舊めかしき同じ筋にて、東と聞ゆなるは、相思ひ給ひてんやと、忍びて語らひ聞えよ。」などの給ふ序に、この花を奉れば、打ち笑みて、怨みて後ならましかばとて、打ちも置かず御覽ず。枝の態花房、色も香も世の常ならず。(匂)「園に匂へる紅の色に取られて、香なん白き梅には劣れるといふめるを、いと賢くも取りならべても咲きけるかな。」とて、御心留め給へる花なれば、甲斐ありて持てはやし給ふ。今夜は宿直なゝめり。やがてこなたにをと召し籠めつれば、東宮にもえ參らず、花も耻かしく思ひぬべく馨しくて、氣近く臥せ給へるを、若き心地には、類無く嬉しく、懐かしく思ひ聞ゆ。(匂)「此花の主は、何ど春宮には移ろひ給はざりし。」(若君)「知らず。心知らん人になどこそ聞き侍りしか。」など語り聞ゆ。大納言の御心ばへは、我方ざまに思ふべかゝめれと、聞き合せ給へど、思ふ心は殊に沁みぬれば、この返事あざやかにもの給ひ遣らず。つとめて此君のまかゝづるに、なほざりなる樣にて、(匂)「花の香に、さそはれぬべき、身なりせば、風のたよりを、過さましやは。

○翁ども　翁達をいふ。
○忍びやかに　忍びやかに物せよ。
○異方の姫君　異父の姉君
○甲斐ある樣にて云々　此姫君を匂宮に參らせばやと思ふなり。
○春宮の御方　姫君なる麗景殿女御。
○この宮をだに氣近くて云云　匂宮の御通ひもあれかしと思ふなり。
○見せ奉る　紅梅大臣に。
○參らせ給ふに　若君をなり。
○本つ香の云々　君は天然の匂ある人にていませば梅も其爲に香を增すべし。
○言ひならさんと云々　眞實に思ひ入らるゝにやとなり。
○まかんで給ひ　東宮よりなり。
○若君の一夜宿直して　匂宮の御傍に臥したりしことなり。
○人は尙と思ひしを　人は尙若君の本來の香と思ひしに。

さて猶今は翁どもに、賢しらせさせで、忍びやかに。」と返す〳〵の給ひて、この君も東のをば、やんごとなく睦ましう思ひましたり。なか〳〵異方の姫君は、見え給ひなどして、例の兄弟の樣なれど、童心地にいと重りかに、あらまほしうおはする心ばへを、甲斐ある樣にて見奉らばやと思ひありくに、春宮の御方のいと華やかにもてなし給ふに付けて、同じ事と思ひながら、いと飽かず口惜しければ、この宮をだに、氣近くて見奉らばやと思ひありくに、嬉しき花の序なり。これは昨日の御返りなれば見せ奉る。(紅梅)「妬げにもの給へるかな。餘りすきたる方に進み給へるを、許し聞えずと聞き給ひて、左の大臣、我等が見奉るには、いと物まめやかに、御心治め給ふこそをかしけれ。あだ人にせんに、足らひ給へる御樣を、强ひてまめだち給はんも、見所少くやならまし。」など、後言ちて、今日も參らせ給ふに、又、

(紅)「本つ香の、匂へる君が、袖なれば、花も得ならぬ、名をや散らさん。と、好々しや。あなかしこ。」と、まめやかに聞え給へり。誠に言ひならさんと思ふ所あるにやと、さすがに御心時めきし給ひて、

(匂)「花の香を、匂はす宿に、尋め行かば、色に愛づとや、人の咎めん。」

など、猶心解けずいらへ給へるを、心疚しと思ひ居給へり。

北の方まかゝで給ひて、内わたりの事の給ふ序に、(槇柱)『若君の一夜宿直して、罷り出でたりし匂の、いとをかしかりしを、人は尙と思ひしを、宮のいと思ほし寄りて、「兵部卿の宮に近づき聞えにけり。宣吾をば荒めたり。」と氣色取り、怨じ給ひしこそをかしかりし

○源中納言　薫君。

○梅は云々　梅は天然奇特なる香あるをいふ。

○差し向ひたる御方々　紅梅のむすめをいふ。

○御ふさいの方に　我身に相應したる者と。

○思ひ立ちての給ふことあらば　紅梅は我女に思ひ立ち給はゞと思ふなり。

○さても見奉らまほしう　姫宮に通はせて見たしとなり。

○八の宮の姫君　桐壺帝の第八皇子宇治八宮の中の君

か。こゝに御消息やありし。さも見えざりしを、』との給へば、(紅)「然かし。梅の花愛で給ふ君なれば、あなたのつまの紅梅、いと盛なりしを、たゞならで折りて奉れたりしなり。移香は實にこそ心殊なれ。交らひし給はん女などは、然は得染めぬかな。源中納言は、斯うざまに好ましうは焚き匂はせで、人香こそ世に無けれ。怪しう前の世の契如何なりける報にかと、ゆかしき事にこそあれ。同じ花の名なれど、梅は生ひ出でけんねこそ哀なれ。この宮などの愛で給ふ、然る事ぞかし。」など、花によそへても先づ掛け聞え給ふ。宮の御方は、物思し知る程にねびまさり給へれば、何事も見知り、聞き咎め給はぬにはあらねど、人に見え、世づきたらん有樣は、更にも思し離れたり。世の人も時に寄る心有りてにや、差し向ひたる御方々には、心を盡し聞え佗び、今めかしき事多かれど、こなたは萬に付け、物しめやかに引き入り給へるを、宮は御相應の方に聞き傳へ給うて、深う如何でと思ほしなりにけり。若君を常に纏はし寄せ給ひつゝ、忍びやかに御文あれど、大納言の君深く心がけ聞え給ひて、さも思ひ立ちての給ふ事とあらばと、氣色取り、心設し給ふを見るに、いとほしう引き違へて、かく思ひ寄るべくもあらぬ方にしも、無氣の言の葉を盡し給ふ。甲斐無氣なる事と、北の方も思しの給ふ。はかなき御返りなども無ければ、負けじの御心添ひて、思ほし已むべくもあらず。何かは人の御有樣、何どかは然ても見奉らまほしう、生先遠くなどは見えさせ給ふに、など、北の方思ほし寄る時々あれど、いといたう色めき給ひて、通ひ給ふ忍所多く、八の宮の姫君にも、御志淺からで、いと繁うまかゝでありき給ふ。賴もしげ無き御心の、あだ〳〵しさなども、いとゞ愼ましければ、まめやかに思ほし絶えたるを、添きばかりに、忍びて母君ぞたまさかに賢しらがり聞え給ふ。

○添きばかりに　匂宮の戀に宜ふを添く思ふばかりに。

○さかしらがり聞え給ふ　さかしらがりて御返りを聞え給ふ。

○後の六殿　髭黒。一
○悪御達の云々　口悪き女房達の生き殘りたるが。
○紫のゆかりにも云々　紫上方の女房の語る所と遥へども。
○僻事どもの交りて　冷泉院玉鬘薫大將の血統の事等たいふ。
○尚侍　玉鬘なり。以下この人の事をいふ。
○尚侍の君の御近きゆかり　致仕大臣方を云ふ。
○むら〳〵しさ　人により て愛憎あるを云ふ。
○六條院　源氏の君。
○右の大殿　夕霧。

竹河

此巻は薫君十四五歳より二十三歳の秋までの事を記せり。巻の名は「竹河のはしうち出でし一節に深き心の底は知りきや」此外三首の歌に取れり。

これは源氏の御族にも離れ給へりし後の大殿わたりにありける悪御達の落ち留まり殘れるが問はず語し置きたるは、紫のゆかりにも似ざンめれど、かの女どもの言ひけるは、源氏の御末々に、僻事どもの交りて聞ゆるは、我よりも年の數積り惚けたりける人の僻言にやなど怪しがりける。孰れかは眞ならん。

尚侍の御腹に、故殿の御子は、男三人、女二人なんおはしけるを、樣々にかしづき立てん事を思し置きて、年月の過ぐるも心もとながり給ひし程に、敢無く亡せ給ひにしかば、夢のやうにて、何時しかと急ぎ思し〻御宮仕も怠りぬ。人の心時にのみ寄るわざなかりければ、さばかり勢いかめしくおはせし大臣の御名殘、内々の御寶物、領じ給ふ所々、その方の衰は無けれど、大方の有樣引き變へたるやうに、殿の内しめやかに成り行く。尚侍の君の御近きゆかり、許多こそは世にひろごり給へど、なか〳〵やんごとなき御仲らひの、元よりも親しからざりしに、故殿の情少し後れ、むら〳〵しさ過ぎ給へりける御本性にて、心置かれ給ふ事もありけるゆかりにや、誰にも得懷かしく聞え通ひ給はず。六條院には凡て猶昔に變らず、數まへ聞え給ひて、亡せ給ひなん後の事ども書き置き給へる御處分の文どもにも、中宮の御次に加へ奉り給へれば、右の大殿などは、なか〳〵その心ありて、然

○大臣　髭黑。
○仰言　入内の内勅。
○中宮　明石中宮。
○目を側められんも　明石中宮の嫉視を受けんも。
○昔本意なくて　玉鬘の髭黑に嫁したるをいふ。
○此世の末にや云々　今女を奉りなばせめて前の御恨は思し捨て給はんかとなり
○藏人の少將　夕霧右大臣の五男。
○三條殿　雲井雁。
○何方につけても云々　實父の方につけても養父の方につけても玉鬘の離れぬ緣者なればとなり。
○母北の方の御文　雲井雁が攻を玉鬘へなり。

るべき折々音づれ聞え給ふ。

男君達は御元服などして、各おとなび給ひにしかば、殿おはせで後、心もとなく哀なる事もあれど、自ら成り出で給ひぬべかゝめり。姫君達を如何にもてなし奉らんと思し亂る。内裏にも必ず宮仕の本意深き由を大臣の奏し給ひければ、おとなび給ひぬらんかしと、年月を推し量せら給ひて、仰言絶えずあれど、中宮の愈ならび無くのみ成りまさり給ふ御けはひに壓されて、皆人無德に物し給ふめる末に參りて、遙に目を側められ奉らんも、煩はしく、又人に劣り、數ならぬ樣にて見えんはた、心盡しなるべきを思したゆたふ。冷泉院より、いと懇切に思しの給はせて、尙侍の君の昔本意無くて過し給ひしつらさをさへ取り反し恨み聞え給ひて、（冷泉）「今は況いて定過ぎ、すさまじき有樣に思ひ捨て給ふとも、後安き親になずらひて讓り給へ。」と、いとまめやかに聞え給ひければ、如何がはあるべき事ならん。自のいと口惜しき宿世にて、思の外に心づき無しとおぼされにしかば、耻かしう忝きを、此世の末にや御覽じ直されましなど、定めかね給ふ。容貌いと佳うおはする聞えありて、心懸け申し給ふ人多かり。右の大殿の藏人の少將とか云ひしは、三條殿の御腹にて、兄君達よりも、引き越しいみじうかしづき給ふ。人柄もいとをかしかりし君、いと懇切に申し給ふ。何方につけても、もて離れ給はぬ御仲らひなれば、この君達の睦び參り給ひなどするは、氣遠くもてなし給はず。女房にも氣近う馴れ寄りつゝ、思ふ事を語らふにもたより有りて、晝夜邊去らぬ耳かしがましさを、うるさき物の心苦しきに尙侍の殿も思したり。母北の方の御文も、屢奉り給ふ。（タ）「いと輕びたる程に侍れど、思し許す方もや。」

○いとかろびたる程　淺官なるをいふ。
○輕々しからぬ程に云々　官位昇進あらんにはとなり
○然もやと　少將に與へんかと。
○朱雀院の宮　朱雀院の女三宮。
○四位の侍從　薫君なり。
○此殿　玉鬘の殿。
○三條の宮　女三宮の御方
○見えしらがひ　目に觸るゝ樣に打振舞ふなり。
○六條院の御けはひ近うと云々　薫君は少將よりは源氏の君に親等近しと思へば更に優りて見ゆるならんとなり。
○院　源氏の君。
○右の大臣　夕霧。
○かの君　薫君。

となん、大臣も聞え給ひける。姫君をば更にたゞの樣にも思し掟て給はず、中の君をなん、今少し世の聞え輕々しからぬ程に、なずらひならば、然もやとおぼしける。許し給はずは、盜みも取りつべく、むくつけきまで思へり。こよなき事とは思さねど、女方の心許し給はぬ事の紛れあるは、世の音聞も淡つけきわざなれば、聞え次ぐ人をも「あなかしこ、過引き出づな。」などの給ふにくたされてなん、煩はしかりける。

六條院の御末に、朱雀院の宮の御腹に生れ給へりし君、冷泉院に御子のやうに思しかしづく四位の侍從、其頃十四五ばかりにて、いときびはに幼かるべき程よりは、心掟おとなく〳〵しく、目安く人に優りたる生先しるく見え給ふを、尙侍の君は、婿にても見まほしく思したり。此殿は、かの三條の宮といと近き程なれば、さるべき折々の遊所に、君達に引かれて見え給ふ時々あり。心憎き女のおはする所なれば、若き男の心づかひせぬ無う、見えしらがひさまよふ中に、容貌のよきは、この立ち去らぬ藏人の少將、なつかしく心耻かしげにて、なまめいたる方は、この四位の侍從の御有樣に、似る人ぞ無かりける。六條院の御けはひ近うと思ひ做すが、殊なるにやあらん。世の中に自らもてかしづかれ給へる人なり。若き人々は、心殊に愛で合へり。尙侍の殿も（玉鬘）「實にこそ目安けれ。」などの給ひて、なつかしう物聞え給ひなどす。（玉鬘）「院の御心ばへを思ひ出で聞えて、慰む世無う、いみじうのみ思ほゆるを、その御形見にも、誰をかは見奉らん。右の大臣は事々しき御程にて、序無き對面も難きを。」などの給ひて、兄弟の列に思ひ聞え給へれば、かの君も然るべき所に思ひて參り給ふ。世の常のすきゞしさも見えず、いと甚う靜まりたるをぞ、こ

○大納言　後の紅梅大臣。
○高砂謠ひしよ　是は高砂謠ひし人よと註に書きしが本文に竄入したるならん。
○藤中納言　髭黒の嫡子にて玉鬘の繼子なり。
○故大殿の太郎、槇柱の一つ腹　後人註に書きしが本文に竄入したるならん。
○御几帳隔てゝ云々　夕霧の玉鬘に面會するに昔にかはらぬ體なり。

○過ぎにし御事　源氏の君の御遺德。

○女一宮の女御　冷泉院の女御にて一宮の御母なり。
○許し聞え給ふや　玉鬘の女の宮仕を許し給ふや否や

こかしこの若き人ども、口惜しく淋々しき事に思ひて、言ひ惱ましけり。

正月のついたち頃、尙侍の君の御兄弟の大納言、高砂謠ひしよ。藤中納言、故大殿の太郎、槇柱の一つ腹など參り給へり。右の大臣も、御子ども六人ながら引き連れておはしたり。御容貌より始めて、飽かぬこと無く見ゆる人の御有樣覺なり。君達も樣々いと淸げにて、年の程よりは、官位も過ぎつゝ、何事を思ふらんと見えたるべし。世と共に藏人の君は、かしづかれたる樣殊なれど、打ちしめりて思ふ事有り顏なり。大臣は御几帳隔てゝ、昔に變らず御物語聞え給ふ。(タ)『其事と無くて、屢もえ承はらず、年の數添ふ儘に、內參りより外のありきなど、初々しくなりにて侍れば、古の御物語も、聞えまほしき折々多く過し侍るをなん。若き男どもは然るべき事には召し使はせ給へ。』必ずその志御覽ぜられよ。」と、誡め侍る。』など聞え給ふ。(玉鬘)「今は斯く世に經る數にもあらぬやうに成り行く有樣を、思し數ふるになん、過ぎにし御事もいとゞ忘れ難く、思う給へられける。」と申し給ひける序に院よりの給はする事、仄めかし聞え給ふ。(玉鬘)「はか〴〵しう後見なき人の交らひは、なか〳〵見苦しきをと、かたく〴〵思ひ給へなん煩ふ。」と申し給へば、(タ)「內に仰せらるゝ事のあるやうに承はりしを、何方に思ほし定むべき事にか。院は實に御位を去らせ給へるにこそ、さかり過ぎたる心地すれど、世に有り難き御有樣は、舊り難くのみおはしますめるを、宜しう生ひ出づる女子侍らましかばと、思ひ給へ寄りながら、耻しげなる御中に、交らふべき者の侍らでなん、口惜しう思う給へらるゝ。そも〳〵女一宮の女御は、許し聞え給ふや。前々の人、さやうの憚により滯る事も侍りし。」と申し給へば、(玉鬘)「女御なん、

○これかれ　大納言藤中納言など。
○此處　玉鬘の方。
○三條の宮　女三宮の方。
○入道宮　女三宮。
○左近中將右中辨侍從の君　皆髭黑の子にて玉鬘の腹なり。
○四位の侍從參り給へり　蕈君が玉鬘の方へなり。

○これをこそ差しならべて見め　此君をこそならべて對にして見たしとなり。
○姫君と聞ゆれど　世づかぬ姫君といへども。
○心おはせん人は　ゆかしき心あらん人は。

○口はやしと聞きて　口敏き人なりと思ひて。
○よそにては云々　我身色

徒然に長閑になりにたる有樣も、同じ心に後見て、慰めまほしきをなど、かの勸め給ふに付けて、如何がなどだに、思う給へ寄るになん。」と聞え給ふ。これかれ此處に集り給ひて、三條の宮に參り給ふ。朱雀院の深き心物し給ふ人々、六條院の方ざまのも、方々に付けて、猶かの入道宮をば、得避ぎず參り給ふなゝめり。この殿の左近中將、右中辨、侍從の君なども、やがて大臣の御供に出で給ひぬ。引き連れ給へる勢殊なり。

夕つけて四位の侍從參り給へり。そこらおとなしき若君達も、數多樣々に、何れかはわろびたりつる。皆目安かりつる中に、立ち後れて此君の立ち出で給へる、いとこよなく目とまる心地して、例の物愛する若き人たちは、猶異なりけりなど云ふ。此殿の姫君の御傍には、これをこそ差しならべて見めと、聞き憎く云ふ。實にいと若うなまめかしき樣して、打振舞ひ給へる匂香など尋常ならず。姫君と聞ゆれど、心おはせん人は、實に人よりは優るなゝめりと、見知り給ふらんかしとぞ覺ゆる。尙侍の殿、御念誦堂におはして、「こなたに」との給へば東の階より昇りて、戸口の御簾の前に居給へり。御前近き若木の梅、心もとなくつぼみて、鶯の初聲もいと大どかなるに、いと好かせ奉らまほしき樣のし給へれば、人々はかなき事を言ふに、言少に心憎き程なるを、妬がりて　宰相の君と聞ゆる上臈の詠み掛け給ふ。

(宰相)「折りて見ば、いとゞ匂も、增さるやと、少し色めけ、梅の初花。」

口はやしと聞きて、

(蕈)「よそにては、もぎ木なりとや、定むらん、下に匂へる、梅の初花。」

香も無きやうに見ゆれど下には匂ふ心のありとなり。
もぎ木は枝無き木なり。
○實は色よりも　實に「色よりも香こそあはれと思ゆれ」
○主の侍從　玉鬘の子なり
○大臣　夕霧。
○故院　源氏の君。
○此君　薫君。
○愛で覆る　覆るは愛づることの甚しきをいふ。
○立ちわづらふ　姫君にあくがれて常に立ちさまよふなり。
○少將　夕霧の子四位少將
○梅が枝　催馬樂の曲名。
○女の琴にて呂の歌は云々　呂の曲は陽に屬して女の琴によく合はぬを斯くも善く彈き合はせたるかなと感心してとなり。
○侍從の君　玉鬘の子。
○故致仕の大臣　こゝに故とあるにて薨去のこと知られたり。
○鶯にもさそはれ給へ　春の興にも誘はれ給へ。
○爪くふ　はぢらふを云ふ
○をさ〳〵心に入らず　無雜作に。
○常に見奉り睦びざり　親致仕の大臣を云ふ。
○さき草　催馬樂の曲名。
○打ち過したる人　年老いたる人。
○言吹　男踏歌にある事なり。
○竹河　催馬樂呂の歌。
○同じ聲に出して　少將と同じ呂の調にて歌ふなり。
○承引かず　杯を受けぬなり。
○水驛　何の馳走も無きを云ふ。前に見えたり。
○人は皆云々　姫君の方の人々は皆薫君に心を移して我は中空の國に迷ふとなり

さらば袖觸れて見給へ。」など言ひすさぶに、(人々)「實は色よりも。」と、口々引きも動かしつべくさまよふ。尙侍の君、奥の方よりゐざり出で給ひて、(玉)「うたての御達や。恥かしげなるまめ人をさへ、よくこそ面無けれ。」と忍びての給ふなり。まめ人とこそ付けられけれ、いと屈したる名かなと思ひ給へり。主の侍從、殿上などもまだせねば、所々もありかでおはし合ひたり。淺香の折敷二つばかりして、菓子盃ばかり差出で給へり。(玉)「大臣はねびまさり給ふ儘に、故院にいとようこそ覺え奉り給へれ。此君は似給へる所も見え給はぬを、けはひのいとしめやかに、なまめいたるもてなしぞ、かの御若ざかり思ひ遣らる。斯うざまにぞおはしけんかし。」など、思ひ出で聞え給ひて、打ちしほたれ給ふ名殘さへ留まりたる馨しさを、人々は愛で覆る。

侍從の君、まめ人の名を憂たしと思ひければ、二十餘日の頃、梅の花盛なるに、句少げに取り做されし好者習はさんかしと思して、藤侍從の御許におはしたり。中門入り給ふ程に、同じ直衣姿なる人立てりけり。隱れなんと思ひけるを、引きとゞめたれは、この常に立ち煩ふ少將なりけり。寢殿の西面に、琵琶箏の琴の聲するに、心を惑はして立てるなゝめり。苦しけや、人の許さぬ事思ひ始めんは、罪深かるべきわざかなと思ふ。琴の聲も止みぬれば、(薫)「いざしるべし給へ。麿はいとたど〳〵し。」とて、引きつれて、西の渡殿の前なる、紅梅の木の下に、梅が枝をうそぶきて立ち寄るけはひの、花よりも著く、ざと打ち匂へれば、妻戸推しあけて、人々和琴をいとよく搔き合せたり。女の琴にて、呂の歌は斯うしも合はせぬを、いたしと思ひて、今一回折返し歌ふを、琵琶も二無く今めかしう、故ありてもてない給へるあたりぞかしと、心とまりぬれば、今夜は少し打解けて、はかなし事なども言ふ。内より和琴差出でたり。互に讓りて手觸れぬに、侍從の君して、尙侍の殿、(玉鬘)「故致仕の大臣の御爪音になん通ひ給へると聞き渡るを、まめやかにゆかしくなん。今夜は猶鶯にもさそはれ給へ。」と、の給ひ出したれば、あまえて爪くふべき事にもあらぬをと思ひて、をさ〳〵心に入らず、搔きわたし給へる氣色、いとひびき多く聞ゆ。常に見奉り睦びざりし親なれど、世におはせずと思ふに、いと心細きに、はかなき事の序にも思ひ出で奉るに、いとなんあはれなる。(玉)「大方此君は、怪しう故大納言の御有樣に、いとよう覺え、琴の音など、唯それとこそ覺えつれ。」とて泣い給ふも、古めい給ふしるしの涙脆さにや。少將も聲いと面白うて、さき草謠ふ。さかしら心つきて、打ち過したる人も雜らねば、自ら互に催されて遊び給ふに、あるじの侍從は、故大臣に似奉り給へるにや、かやうの方は後れて、盃をのみ進むれば、言吹をだにせんやと、辱かしめられて、竹河を同じ聲に出して、まだ若けれど、をかしう謠ふ。簾の中よりかはらけ差出づ。(薫)「醉の進みては、忍ぶる事も包まれず、僻事するわざとこそ聞き侍れ。如何にもてない給ふぞ。」と、頓に承引かず。小袿重なりたる細長の、人香懷かしう染みたるを、取り合へたる儘にかづけ給ふ。何ぞもぞなど騷動きて、侍從はあるじの君に打ちかづけて往ぬ。引き留めてかづくれど、「水驛にて夜更けにけり。」とて逃げにけり。少將は、この源侍從の君の斯う仄めき寄るめれば、皆人之にこそ心寄せ給ふらめ。我身はいとゞ、屈じいたく思ひ弱りて、味氣無うぞ恨むる。(少將)「人は皆、花に心を、移すらん、獨ぞ惑ふ、春の夜の闇。」

○折柄や云々　折柄の情をば誰も知るべし。されど斯許の事に心の移ることはあらじとなり。香ばかりを斯ばかりに掛けたり。
○見給へと思しう　玉鬘にも見給へかしと思しくて。
○端　橋を掛けたり。
○母宮　女三宮。
○此君達　玉鬘の御子達。
○竹河に云々　昨夜は夜をふかさじとて急ぎ歸り給ひし物を、深き心の底は知りきやと宣ふは如何なる事と思ひ暗き侍らん。
○近きゆかりにて　薫君を姫の聲にして。
○十八九の程にや云々　姫君達がなり。

打歎きて立てば内の人の返し、

（女房）「折柄や、哀も知らん、梅の花、唯斯ばかりに、移りしもせじ。」

あしたに四位の侍從の許より、あるじの侍從の許に、（薫消息）「よべは、いと亂りがはしかりしを、人々如何に見給ひけん。」と、見給へと思しう假名勝に書きて、端に、

（薫）「竹河の、端打ち出でし、一節に、深き心の、底は知りきや。」

と書きたり。寢殿に持て參りて、これかれ見給ふ。（玉）「手などもいとをかしうもあるかな。如何なる人、今より斯く調ひ給ふらん。幼くて院にも後れ奉り、母宮のしどけ無う生ふし立て給へれど、猶人には優るべきにこそはあンめれ。」とて、尙侍の君は、此君達の手など、惡しきことを辱め給ふ。返事實にいと若く、（騰侍從）「よべは水驛をなん、人々咎め聞ゆめりし。

竹河に、夜をふかさじと、急ぎしも、如何なる節を、思ひ置かまし。」

實に此節を初にて、此君の御曹司におはして、氣色ばみ寄る。少將の推し量りしも著く、皆人心寄せたり。侍從の君も、若き心地に、近きゆかりにて、明暮睦びまほしう思ひけり。三月になりて咲く櫻あれば、散り交ひ曇り、大方の盛なる頃、のどやかにおはする所には、紛るゝ事無く端近なる罪もあるまじかンめり。其頃十八九の程にやおはしけん、御容貌も心ばへも、取り〴〵にぞをかしき。姫君はいと鮮に氣高う、今めかしき樣し給ひて、實にたゞ人にて見奉らば、似氣無うぞ見え給ふ。櫻の細長、山吹などの、折に合ひたる色合の、なつかしき程に重りたる裾まで、愛敬のこぼれ落ちたるやうに見ゆる御もてなしなども、

○今一所　中姫君。
○色にて　美しき色にて。
○見證　見て批評すること
○人に劣りにたる　宮仕に隙なくて疎遠せし程に覺え侍從に劣りたりとなり。
○故殿　髭黑。
○見奉り給ふ　中將がなり
○二十七八の程に物し給へば　中將は二十七八歳なれば。
○古恩しおきてしに云々　髭黑の薫志の如く女御に參らせばやとなり。
○姫君　姉姫。
○上　玉鬘。
○若君　妹姫。
○人の婿になりて　中將の事なり。誰人のむことも無し。

勞々しう心耻かしき氣さへ添ひ給へり。今一所は、薄紅梅に御髮色にて、柳の絲のやうにたを〳〵と見ゆ。いと聳やかになまめかしう、澄みたる樣して、重りかに心深き氣は優り給へれど、匂やかなるけはひは、こよなしとぞ人思へる。碁打ち給ふとて、差し向ひ給へる、簪御髮のかゝりたる樣ども、いと見所あり。侍從の君見證し給ふとて、近う侍ひ給ふに、兄君達さしのぞき給ひて、「侍從の覺こよなくなりにけり。御碁の見證許されにけるを、や。」とて、おとな〳〵しき樣して、突い居給へば、御前なる人々左右居直る。中將「宮仕の忙しうなの侍る程に、人に劣りにたるは、いと本意なきわざかな。」と愛へ給へば、（右中辨）「辨官は況いて、私の宮仕怠りぬべきまゝに、さのみやは思し捨てん。」など申し給ふ。碁打ちさして耻らひておはさうずる、いとをかしげなり。內わたりなど罷りありきても、故殿のおはしまさましかばと、思う給へらるゝこと多くこそなど、涙ぐみて見奉り給ふ。二十七八の程に物し給へば、いとよく調ひて、この御有樣どもを、如何で古恩しおきてしに違へずもがなと、思ひ居給へり。御前の花の木どもの中にも、匂優りてをかしき櫻を折らせて、外のには似ずこそなど玩び給ふを、（中將）「幼くおはしましゝ時、此花は我ぞ〳〵と爭ひ給ひしを故殿は姫君の御花ぞと定め給ふ。上は若君の御木と定め給ひしを、いと然は泣きのゝしらねど、安からず思ひ給へられしはや。」とて、「この櫻の老木になりにけるに付けても、過ぎにける齡を思ひ給へ出づれば、數多の人の後れ侍りにける身の愁も止め難うこそ。」など、泣きみ笑ひみ聞え給ひて、例よりはのどやかにおはす。人の婿になりて、今は心靜にも見え給はぬを、花に心留めて物し給ふ。尙侍の君、斯くおとなしき人の親にな

○この君達　中將などなり

○初よりやんごとなき人夕霧の第一の女を指す。
○傍無きやうにて　傍に人無きが若き樣勢にて。

○君達　姫君達。
○三番に數ひとつ勝ち給はん　三番にて二番かつをいふ。
○例の少將　藏人少將。

○はかなき心　繼故のはかなき心。
○散りなん後の形見に　古歌に「櫻色に衣は深く染めて着ん花の散りなん後の形見に」

り給ふ。御年の程思ふよりはいと若う清げに、猶盛の御貌と見え給へり。冷泉院の帝は、多くは此御有樣の猶ゆかしう、昔戀しう思し出でられければ、何に付けてかはと思し運らして、姫君の御事を、あながち聞え給ふにぞありける。院へ參り給はんことは、この君達ぞ猶物の映なき心地こそすべけれ。(中將等)「萬の事時に付けたるをこそ、世人も許すめれ。實にいと見奉らまほしき御有樣は、この世に類無くおはしますめれど、盛ならぬ心地ぞするや。琴笛の調べ、花鳥の色をも音をも、時に隨ひてこそ、人の耳にもとまる物なれ。春宮は如何が、」など申し給へば、(玉)「いざや初よりやんごとなき人の、傍も無きやうにてのみ物し給ふめればこそ、なかノ〳〵にて交らはんは、胸痛く人笑はれなる事もやあらんと慎ましければ、殿おはせましかば、行末の御宿世々々は知らず、只今は甲斐ある樣にもてなし給ひてましを。」などの給ひ出でゝ、皆ものあはれなり。

中將など立ち給ひて後、君達は打ちさし給へる碁打ち給ふ。昔より爭ひ給ふ櫻を賭物にて、三番に數一つ勝ち給はん方に、花を寄せてんと戯れかはし聞え給ふ。暗うなれば、端近う打ち果て給ふ。御簾卷き上げて、人々皆挑み念じ聞ゆ。折しも例の少將の、侍從の君の御曹司に來たりけるを、打ちつれて出で給ひにければ、大方人少なるに、廊の戸のあきたるにやをら寄りて覗きけり。斯う嬉しき折を見付けたるは、佛などの現はれ給へらんに參りたらん心地するも、はかなき心になん。夕暮の霞の紛れは亮ならねど、つくゞくと見れば、櫻色の文目も、それと見分きつ。實に散りなん後の形見にも見まほしく、匂多く見え給ふを、いとゞ他樣になり給はん事、わびしく思ひまさる。若き人々の打解けたる姿ども

○右　妹君。
○高麗の亂聲　競馬の時右の勝ちたる時には高麗樂を奏すれば斯く云へるなり。
○西の御前　妹君。
○何事と知らねど云々　藏人少將はなり。

○思隈なき　思ふ所無き意此櫻妹君の方に寄りて姉君の方には思遣なきとなり。

○移ろう　我方に移りたる
○たゞにしも見じ　殘念ならん。
○心ありて云々　右方を池の汀に寄せて詠めり。古今集に「枝よりも仇に散りにし花なれば落ちても水の泡とこそなれ」
○馴君　姫君の童女。

も夕映もをかしう見ゆ。右勝たせ給ひぬ。「高麗の亂聲遲しや。」など、はやりかに言ふもあり。右に心寄せ奉りて、(右方人々)「西の御前に寄りて侍る木を左になして、年頃の御爭の、斯かればありつるぞかし。」と、右方は心地よげに勵まし聞ゆ。何事と知らねど、をかしと聞きて、さしいらへもせまほしけれど、打解け給へる折、心地なくやはと思ひて出でゝ往ぬ。又斯かる紛れもやと、影に添ひてぞ覗ひありきける。

君達は花の爭をしつゝ、明し暮し給ふに、風荒らかに吹きたる夕つ方、亂れ落つるがいと口惜しう、惜しければ、負方の姫君、

「櫻故、風に心の、騷ぐかな、思隈無き、花と見るゝ。」

御方の宰相君、

「咲くと見て、且は散りぬる、花なれば、負くるを深き、恨とも見ず。」

と聞え助くれば、右の姫君、

「風に散る、事は世の常、枝ながら、移ろふ花を、たゞにしも見じ。」

この御方の大輔の君、

「心ありて、池の汀に、落つる花、泡となりても、我方に寄れ。」

勝方の童おりて、花の下にありきて、散りたるをいと多く拾ひて、持て參れり。

(童)「大空の、風に散れども、櫻花、己が物とぞ、搔集めて見る。」

左の馴君、

「櫻花、匂數多に、散らさじと、思ふばかりの、袖は有りやは。」

○心せばげに　前の歌のおのがものとの句をいへるなり。
○上は　冷泉院は。
○此許に聞え疎むるなンめり　姫君を參らせぬは我が邪魔するなりとなり。

○思し知る方もあらば　親の心を知り給はば。

○中の君をと　中の姫君を少將へ與へんと。

○源侍從　薫君。

心せばげにこそ見ゆめれ。」など言ひ貶す。

斯く言ふに、月日はかなく過すも、行末うしろめたきを、尙侍の殿は萬におぼす。院よりは御消息日々にあり。女御「疎々しく思ひ隔つるにや。上は此許に聞え疎むるなンめりと、いと憎氣に思しの給へば、戯にも苦しうなん。同じくは此頃の程に思し立ちね。」など、いとまめやかに聞え給ふ。然るべきにこそはおはすらめ。いと斯うあやにくにの給ふも、忝し、などおぼしたり。御調度などは、そこら仕置かせ給へれば、人々の裝束、何くれのはかなき事をぞ急ぎ給ふ。これを聞くに、藏人の少將は死ぬばかり思ひて、母北の方を責め奉れば、聞き煩ひ給ひて、(雲井消息)「いと傍痛き事に付けて、仄めかし聞ゆるも、世に頑しき闇の迷になん。思し知る方もあらば、推し量りて、猶慰めさせ給へ。」など、いとほしげに聞え給ふを、苦しうもあるかなと、打ち歎き給ひて、(玉鬘)「如何なる事と思う給へ定むべき樣も無きを、院よりわりなくの給はするに、思ひ給へ亂れてなん。まめやかなる御心ならば、この程を思し鎭めて、慰め聞えん樣をも見給ひてなん。世の聞えもなだらかならん。」など申し給ふも、この御參過して、中の君をと思すなるべし。差し合はせては、うたてしたり顏ならん。まだ位なども淺へたる程をなど思すに、男は更に然思ひ移るべくもあらず。仄に見奉りて後は、面影に戀しう、如何ならん折にとのみ覺ゆるも、斯う賴掛らずなりぬるを、思ひ歎き給ふこと限無し。甲斐なき事も言はんとて、例の侍從の曹司に來たれば、源侍從の文をぞ見居給へりける。引き隱すを、然なンめりと見て、奪ひ取りつ。事あり顏にやと思ひて、いたうも隱さず。そこはかと無くて、唯世を怨めしげにかすめたり。

○つれなくて云々　表は暮春を恨む心なり。下の意は姫君を御許も無くて終に院へ參らせ給ふぞ怨めしきとなり。

○前申　御前にて取り申すこと。
○あまりたはぶれにくゝ　中將のおもとの心なり。
○つらきも哀といふこと　「うれしくは忘るゝ事もありなましつらきぞ長き形見なりける」と云ふ古歌の意。

○上に　玉鬘の御前に。

○向火附くる　態と腹立ちて相手の腹立を揶くを云ふ。

（薫）「つれなくて、過ぐる月日を、數へつゝ、物怨めしき、暮の春かな。」

人は斯うこそのどやかに、樣好く妬げなンめれ。我がいと人笑はれなる心いられを、片方は目馴れて、侮り初められたると思ふも、胸痛ければ、ことに物も言はれで、例語らふ中將の御許の曹司の方に行くも、例の甲斐あらじかし、と歎き勝なり。侍從の君は、この御返事せんとて、上に參り給ふを見るに、いと腹立たしう安からず。若き心地には、ひとへに物ぞ覺えける。

あさましきまで恨み歎けば、此前申も餘り戯れにくゝ、いとほしと思ひて、いらへもをさ〳〵せず。かの御碁の見證せし夕暮の事も言ひ出でて、(少將)「さばかりの夢をだに又見てしがな。あはれ何を賴みにて生きたらん。かう聞ゆる事も殘り少う覺ゆれば、つらきも哀と云ふ事こそ、誠なりけれ。」とまめだちて言ふ。哀とて言ひ遣るべき方なき事なり。かの慰め給はん御樣、露ばかり嬉しと思ふべき氣色も無ければ、實にかの夕暮の見證なりけんにいとゞ斯うあやにくなる心は添ひたるならんと、道理に思ひて、(中將)「聞し召させたらば、いとゞ如何にけしからぬ御心なりけりと、疎み聞え給はん。心苦しと思ひ聞えつる心も失せぬ。いと後めたき御心なりけり。」と、向火付くれば、「いでやさばれや。今は限りの身なれば、物恐ろしくもあらずなりにたり。さても負け給ひしこそ、いといとほしかりしか。おいらかに召し寄せて、目くはせ奉らましかば、こよなからまし物を。」など言ひて、

（少將）「いでやなぞ、數ならぬ身に、叶はぬは、人に負けじの、心なりけり。」

中將打笑ひて、

○手を許せかし　手を許して活かし給へ。
○又の日　翌日。
○兄弟　少將の兄弟。
○いたう屈し入りて　少將は。
○さて例の　例の戯人少將が。
○花を見て云々　姫君を花に寄せ、歎を木に掛けて詠めり。
○御前　玉鬘の御前。
○此御懸想人　此姫君の懸想人蛍君少將等。
○言にのみはあらず　少將の言のみには非ず實に死ぬべくも見えてとなり。
○人の御怨深くば　少將の御怨深くば慰め解かんと

「わりなしや、強きに寄らん、勝負を、心一つに、如何任する。」と答ふるさへぞつらかりける。

（少將）「あはれとて、手を許せかし、生死を、君に任する、我身とならば。」

泣きみ笑ひみ語らひ明す。

又の日は卯月になりにければ、兄弟の君達の、内裏に參りさまよふに、いたう屈し入りて眺め居給へれば、母北の方の涙ぐみておはす。大臣も、（夕）「院の聞し召す所も有るべし。何かはおふな〳〵聞き入れんと思ひて、悔しう對面の序にも打ち出で聞えずなりにし。自らあながちに申さましかば、さりともえ違へ給はざらまし。」などの給ふ。さて例の、

（少將）「花を見て、春は暮らしつ、今日よりや、繁き歎の、下に惑はん。」

と聞え給へり。

御前にてこれかれ上萬だつ人々、この御懸想人の樣々にいとほしげなるを聞え知らする中に、中將の御許、生死をと言ひし樣の、言にのみはあらず、心苦しげなりしなど聞ゆれば、尙侍の君もいとほしと聞き給ふ。大臣北の方のおぼす所により、せめて人の御怨深くばと、取換ありて思す。この御參を妨げ樣に思ふらんはしも、めざましきこと限無きにても、たゞ人には掛けてあるまじき物に、故殿のおぼしおきてたりし物を、院に參り給はんだに、行末のはえばえしからぬを、思したる折しも、此御文取り入れて、哀がる。御返し、

（玉）「今日ぞ知る、空を眺むる、氣色にて、花に心を、移しけりとも。」

○九日にぞ參り給ふ　四月九日に姉姫冷泉院へ參り給ふ。
○此御事　少將の事。
○怪しう現心も無き樣なる人　少將を指す。
○驚かさせ給はぬも　御知らせ無きも。
○仄めかし給へる　胸中の不滿をなり。
○大納言　後の紅梅大臣。
○藤中納言　玉鬘の繼子。
○例の人　中將の御許。
○持て參りて　中將の御許が。
○屈し給へり　相別るゝを歎きてなり。
○西東をだに　西と東と部屋を別々にせるだに。
○取りて見給ふ　少將の文をなり。

あないとほし。戯にのみも取り做すかなど言へど、うるさがりて書きかへず。

九日にぞ參り給ふ。右の大殿、御車御前の人々數多奉り給へり。北の方も怨めしと思ひ聞え給へど、年頃も然もあらざりしに、此事故繁う聞え通ひ給へるを、又搔き絶えんもうたてあれば、被物ども、好き女の裝束數多奉れ給へり。（雲井消息）「怪しう現心も無きやうなる人の有樣を見給へ扱ふ程に、承り留むる事も無かりけるを、驚かさせ給はぬも、疎々しくなん。」とぞありける。おいらかなる樣にて、仄めかし給へるを、いとほしと見給ふ。大臣も御文あり。（夕霧消息）「自らも參るべきと思う給へつるに、愼む事の侍りてなん。男ども雜役にとて參らす。疎からず召し使はせ給へ。」とて、源少將兵衞佐など奉れ給へり。情はおはすかしと、喜び聞え給ふ。大納言殿よりも、人々の御車奉れ給ふ。北の方は故大臣の御女、槇柱の姫君なれば、何方に付けても、睦しう聞え通ひ給ふべけれど、然しもあらず、藤中納言はしも、自らおはして、中將、辨の君達、諸共に事行ひ給ふ。殿のおはせしかばと、萬に付けて哀なり。藏人の君、例の人にいみじき言を盡くして、（少將消息）「今は限と思ひ侍る命の、さすがに悲しきを、哀と思ふとばかりだに、一言の給はせば、それに掛け留められて、暫しもながらへやせん。」などあるを、持て參りて見れば、姫君二所打ち語らひて、いと甚う屈し給へり。晝夜諸共に馴らひ給ひて、中の戸ばかり隔てる西東をだにいといぶせき物にし給ひて、互に渡り通ひおはするを、よそ〳〵にならん事を思すなりけり。心殊に仕立て、引き繕ひ奉り給へる御樣、いとをかし。殿の思しの給ひし樣などを思ひ出でゝ、物哀なる折柄にて、取りて見給ふ。大臣北の方の、さばかり立ち並びて、賴もしげ

○ゆゝしき方にて　繼の方ならず唯ゆゝしき方にて。
○立ち返り　復も。
○誰が名は立たじ　御身の名こそ立たん。古今集に「繼ひ死なば誰が名は立たじ世の中の常無き物と言ひはなすとも」
○塚の上にも云々　吳の季札が心に許しゝ事を變へずして徐君の塚に劍を懸けし故事。

○后　秋好中宮。
○女御　弘徽殿。
○いと美しげにて云々　玉鬘の姫君の艶なり。

○源侍從　薫君。
○此御方　玉鬘の姫君。

なる御中に、何ど斯う漫事を思ひ言ふらんと、怪しきにも限とあるを、眞にやと思して、やがて此の御文の端に、

（姉君）「あはれてふ、常ならぬ世の、一言も、如何なる人に、掛くる物ぞは。

忌々しき方にてなん、仄に思ひ知りたる。」と書き給ひて、「かう言ひ遣れかし。」との給ふを、やがて奉れたるを、限無うめづらしきにも、折を思し留むるさへ、いとど涙も止らず。立ち返り、（少將消息）「誰が名は立たじなど、かごとがましくて、

生ける世の、死は心に、任せねば、聞かでや止まん、君が一言。

塚の上にも懸け給ふべき、御心の程と思ひ給へましかば、直路にも急がれ侍らましを。」などあるに、うたても答をしてけるかな、書きかへでやりつらんよと、苦しけにおほして、物もの給はずなりぬ。おとな童、目安き限を整へられたり。大方の儀式などは、内に參り給はましに變ることなし。

まづ女御の御方に渡り給ひて、尙侍の君は御物語など聞え給ふ。夜更けてなん上に參う上り給ひける。后、女御など、皆年頃經てねび給へるに、いと美しげにて、盛に見所ある樣を、見奉り給ふは、などてかは疎ならん。華やかに時めき給ふたゞ人だちて、心安くもてなし給へる樣しもぞ、實にあらまほしうめでたかりける。尙侍の君を暫し侍ひ給ひなんと、心留めて思しけるに、いと疾くやをら出で給ひにければ、口惜しう心憂しと思したり。

源侍從の君をば、明暮御前に召し纏はしつゝ、實に唯昔の光源氏の生ひ出で給ひしに劣らぬ人の御覺なり。院の内には、何れの御方にも疎からず馴れ交らひありき給ふ。此御方に

○眺め居給へり　薫君がなり。
○手に掛くる云々　我心の儘になる物ならば斯く餘所には見ぬものをとなり。
○我心にあらぬ云々　姫君の院參は我本意にあらざるを仄めかすなり。
○紫の云々　兄弟にはあれど思ふに任せざりきとなり

○聞え給ひし人々　姉姫に心かよはせし人々。
○かの君達　髭黑の子息たち。
○この參り給ひて後云々　姫君參り給ひて後少將はをさ〳〵參らず。

○中將　姫君の兄。

も心寄せあり顔にもてなして、下には如何に見給ふらんの心さへ添ひ給へり。夕暮のしめやかなるに、藤侍從とつれてありくに、かの御方の御前近く見やらるゝ、五葉に藤のいと面白く咲き懸りたるを、水の邊の石に、苔を席にて眺め居給へり。まほにはあらねど、世の中恨めしげにかすめつゝ語らふ。

（藤）「手に掛くる、物にしあらば、藤の花、松より優る、色を見ましや。」

（藤）「紫の、色は通へど、藤の花、心に得こそ、任せざりけれ。」

とて、花を見上げたる氣色など、怪しく哀に心苦しくも思ほゆれば、我心にあらぬ世の有樣に仄めかす。

まめなる君にて、いとほしと思へり。いと心惑ふばかりは思ひ入れざりしかど、口惜しうは覺えけり。

かの少將の君はしも、まめやかに如何にせましと、過もしつべく、靜めん方無くなん覺えける。聞え給ひし人々、中の君と移ろふも有り。少將の君をば、母北の方の御怨により、さもやと思ほして、仄めかし聞え給ひしを、絶えて訪れずなりにたり。院にはかの君達も、親しくもとより侍ひ給へど、この參り給ひて後をさ〳〵參らず。まれ〳〵殿上の方に差しのぞきても、味氣無う、逃げてなん罷り出でける。

内には故大臣の志し置き給へる樣殊なりしを、かく引き違へたる御宮仕を、如何なるにかと思して、中將を召してなんの給はせける。（中將）「御氣色宜しからず。さればこそ世の人の心の中も傾きぬべき事なりと、かねて申しゝ事を思し取る方異にて、かう思し立ちにしか

○尚侍の君を　尚侍の君に

○今は心安き御有樣　冷泉院は今は下り居給へば心安き御有樣となり。

○然るべきにこそ　かくあるべき因緣ぞとなり。

○院の女御　弘徽殿。

○よし見聞き侍らん　よし〳〵此末如何に成行くか見侍らん。

○二所して　中將と辨と二人して。

○孕み給ひにけり　姫君の懷孕なり。

○侍從　薫君。

ば、ともかくも聞え難くて侍るに、かゝる仰言の侍るは、なにがしらの身の爲には、あぢきなくなん侍る。」と、いと物しと思ひて、尚侍の君を申し給ふ。(玉)「いざや、只今かう俄にしも思ひ立たざりしを、あながちにいとほしうの給はせしかば、後見無き交らひの內邊は、はしたなけなゝめるを、今は心安き御有樣なゝめるに任せ聞えてと思ひ寄りしなり。誰も〳〵便無からん事は、有りの儘にも諫め給はで、今引き返し右の大臣も、僻々しきやうに、おもむけての給ふなれば、苦しうなん。是も然るべきにこそは。」と、なだらかにの給ひて、心も騷がい給はず。(中將)「その昔の御宿世は、目に見えぬ物なれば、斯うおぼしの給はするを、これは契異なるとも、如何がは奏し直すべき事ならん。中宮を憚り聞え給ふとて、院の女御をば如何し奉り給はんとする。後見や何やと、かねて思しかはすとも、さしもえ侍らじ。よし見聞き侍らん。能う思へば、內は中宮おはしますとて、他人は交らひ給はずや。君に仕うまつることは、それが心安きこそ、昔より興ある事にはしけれ。女御は、些なる事の違目ありて、宜しからず思ひ聞え給はんに、僻みたるやうになん世の聞耳も侍らん。」など、二所して申し給へば、尚侍の君、いと苦しとおぼしぬ。

さるは限なき御思のみ、月日に添へて增さる。七月より孕み給ひにけり。打ち惱み給へる樣、實に人の樣々に聞え煩はすも、道理ぞかし。如何でかは斯からん人を、なのめに見聞き過しては、やまんとぞ覺ゆる。明暮御遊をせさせ給ひつゝ、侍從も氣近う召し入るれば、御琴の音などは聞き給ふ。かの梅が枝に合はせたりし中將の御許の和琴も、常に召し出でて彈かせ給へば、聞き合はするにも、ただには覺えざりけり。

○男踏歌　禁中にて正月十四日に行はる。

○右の歌頭　右方の音頭

○此御息所　姫君をこゝに始めて御息所といへり。

○綿花　男踏歌の時かざす綿の造花。

○過ぎにし夜のはかなかりし遊　去年正月二十日の夜の事。

○后の宮　秋好中宮。

○御前の事ども　內裏にての模樣。

○萬春樂　初音の卷に委しく出でたり。踏歌に必ずうたふ歌なり。

その年かへりて、男踏歌せられけり。殿上の若人どもの中に、物の上手多かる頃ほひなり。その中にも、勝れたるを撰らせ給ひて、この四位の侍從、右の歌頭なり。かの藏人の少將、樂人の數の中にありけり。十四日の月の華やかに曇り無きに、御前より出でゝ、冷泉院に參る。女御も此御息所も、上に御局して見給ふ。上達部親王達、引き連れて參り給ふ。右の大殿、致仕の大殿の族を離れて、きら〳〵しう淸げなる人は無き世なりと見ゆ。內の御前よりも、此院をばいと恥かしう殊に思ひ聞えて、皆人用意を加ふる中にも、藏人の少將は、見給ふらんかしと思ひやりて、靜心なし。匂も無く見苦しき綿花も、かざす人がらに見別かれて、樣も聲もいとをかしくぞありける。竹河謠ひて、御階の下に踏み寄る程、過ぎにし夜のはかなかりし遊も思ひ出でられければ、僻事もしつべくて涙ぐみけり。后の宮の御方に參れば、上もそなたに渡らせ給ひて御覽ず。月は夜深うなるまゝに、晝よりもはしたなう澄み昇りて、如何に見給ふらんとのみ覺ゆれば、履む空も無う漂ひありきて、杯もさして、一人をのみ咎めらるゝは、面目無くなん。

夜一夜所々に搔きありきて、いと惱ましう苦しくて臥したるに、源侍從を院より召したれば、あな苦し。しばし休むべきにと、むつかりながら參り給へり。御前の事どもなど問はせ給ふ。(冷泉)「歌頭は打ち過したる人の前々するわざを、撰ばれたる程、心憎かりけり。」とて、愛しと思したゝめり。萬春樂を御口ずさびにし給ひつゝ、御息所の御方に渡らせ給へれば、御供に參り給ふ。物見に參りたる里人多くて、例よりも華やかに、けはひ今めかし。渡殿の戶口に暫し居て、聲聞き知りたる人に、物などの給ふ。(薫)「一夜の月かげは、はし

○雲の上近くては　院中にては。
○閨は文無きを　古今集に「春の夜の閨は文無し梅の花色こそ見えぬ香やは隠るる」
○臙して　薫の心を慰めて
○流れての云々　姫君を竹河に寄せて詠めり。「流れての」は「末の」の意。
○物哀なる氣色　薫のなり
○こなたに　冷泉院の御前に。
○御息所　新女御。
○侍從に賜ふ　彈げとて授け給ふなり。恩賜とは異なり。
○此殿　踏歌の歌。

たなかりしわざかな。藏人の少將の月の光に輝きたりし氣色も、桂の影に恥づるにはあらずやありけん。雲の上近くては、さしも見えざりき。」など語り給へば、人々哀と聞くもあり。「閨は文無きを、月ばえ今少し心異なりと、聞えし。」など嫌して、內より、「竹河の、その夜の事は、思ひ出づや、忍ぶばかりの、節は無けれど。」とはかなき事なれど、涙ぐまるゝも、實にいと淺くは覺えぬ事なりけりと、自ら思ひ知らる。

（薫）「流れての、賴め空しき、竹河に、世は憂き物と、思ひ知りにき。」

物哀なる氣色を、人々をかしがる。さるは下り立ちて、人のやうにも佗び給はざりしかど、人ざきのさすがに心苦しう見ゆるなり。（薫）「打ち出で過す事もこそ侍れ。あなかしこ。」として立つ程に、「こなたに」と召し出づれば、はしたなき心地すれど、參り給ふ。（冷泉）「故六條院の踏歌の翌日に、女方にて遊せられける、いと面白かりきと、右の大臣の語られし、何事も彼の邊の差繼なるべき人、難くなりにける世なりや。いと物の上手なる女さへ多く集りて、如何にはかなき事もをかしかりけん。」など、思し遣りて、御琴ども調べさせ給ひて、箏は御息所、琵琶は侍從に賜ふ。和琴を彈かせ給ひて、此殿など遊び給ふ。御息所の御琴の音、まだ片生なる所ありしを、いと能う敎へ做い奉り給ひてけり。今めかしう爪音よくて、歌曲のものなど、上手にいと能く彈き給ふ。何事も心もとなく、後れたる事は物し給はぬ人なゝめり。容貌いとをかしかるべしと、猶心留まる。かやうなる折多かれば、自ら氣遠からず見馴れ給ふ。うたて、馴れ〳〵しうなどは恨み懸けねど、折々に付けて、思ふ心の違へる歎かしさをかすむるも、如何が思しけん、知らずかし。

卯月に女宮生れ給ひぬ。殊にけざやかなる物のはえも無きやうなれど、院の御氣色に隨ひて、右の大殿より始めて、御產養し給ふ所々多かり。尙侍の君つと抱き持ちて、うつくしみ給ふに、疾う參り給ふべき由のみあれば、五十日の程に參り給ひぬ。女宮一所おはしますに、いと珍しう美しうておはすれば、いといみじう思したり。いとゞ唯此方にのみおはします。女御方の人々、いと斯からでありぬべき世かなと、たゞならず言ひ思へり。

正身の御心どもは、殊に輕々しく、背き給ふにはあらねど、侍ふ人々の中に、癖々しき事も出で來などしつゝ、かの中將の君の、然云へど人の兄にて、の給ひし事合ひて、尙侍の君も、無下に斯く言ひ〳〵ての果如何ならん。人笑に、はしたなうもやもてなされん。上の御心ばへ淺からねど、年經て侍ひ給ふ御方々、宜しからず思ひ放ち給はゞ、苦しくもあるべきかな、と思ほすに、內には誠に物しと思しつゝ、度々御氣色ありと、人の告げ聞ゆれば、煩はしくて、公ざまにて、交らはせ奉らんことを思して、尙侍を讓り聞え給ふ。公いと難うし給ふ事なりければ、年頃斯う思し置きしかど、得辭し給はざりしを、故大臣の御心を思して、久しうなりにける昔の例など引き出でゝ、其事叶ひぬ。此君の御宿世にて、年頃申し給ひしは、難きなりけりと見えたり。かくて心安くて、內住もし給へかしと、思すにもいとほしう、少將の事を、母北の方の態との給ひしものを、賴め聞えし樣に仄めかし聞えしも、如何に思ひ給ふらんと、思し扱ふ。辨の君して、心美しきやうに、大臣に聞え給ふ。（玉）「內より斯かる仰言のあれば、樣々にあながちなる交らひの好みと、

○女宮　冷泉院の女二宮。
○物のはえも無きやうなれど　女宮なればなり。
○女宮一所　女一宮、御母は弘徵殿女御。
○唯此方にのみおはします　冷泉院が御息所の方にのみなり。
○正身　弘徵殿と御息所。
○斯く言ひ〳〵ての果　給遺集に「世の中をかくいひ〳〵て果々は如何にや如何にならんとすらん」
○公ざまにて交らはせ　中の姫をなり。
○難うし給ふ　容易に聽許し給はぬ。
○かくて心安くて　玉鬘の安心するなり。
○辨の君　玉鬘の子息。
○心美しきやうに　機嫌を損はぬやうに。

○引き違へ給へる　姉姫を院へ參らせしことをいふ。
前の尚侍の君　玉鬘。
○古を思ひ出でしが　昔冷泉院の玉鬘に御心がけ給ひし事を思ひ出でて。
○參らせ奉りて　姉姫を。
○さる忌に依りと云々　然る物忌に依りて參らずと言ひて姉姫に事情を明し給はねばとなり。
○古めかしき云々　位を去りたればなり。

世の聞耳も如何と思う給へてなん、煩ひぬる。」と聞え給へば、(タ)「内の御氣色は思し咎むるも道理になん承給はる。公事に付けても、宮仕し給はぬは然るまじきわざになん。はや思し立つべきになん。」と聞え給へり。又この度は、中宮の御氣色取りてぞ參り給ふ。大臣おはせましかば、壓し消ち給はざらましなど、哀なる事どもなん。姉君は容貌など、名高うをかしげなりと、聞し召し置きたりけるを、引き違へ給へるを、なま心行かぬやうなれど、これもいと勞々しく、心憎くもてなして侍ひ給ふ。

前の尚侍の君、貌をかへてんと思し立つを、方々に扱ひ聞え給ふ程に、行も心あわたゞしうこそ思されめ。今少し何方も心のどかに見奉り做し給ひて、もどかしき所無く、直路に勤め給へと、君達の申し給へば、思し滯りて、内裏には時々忍びて參り給ふ折もあり。院には煩はしき御心ばへの尚絶えねば、然るべき折も更に參り給はず。古を思ひ出でしが、さすがに辱う覺えしかしこまりに、人の皆許さぬ事に思へりしをも知らず顔に思ひて參らせ奉りて、自らさへ戯にても、若々しき事の世に聞えたらんこそ、いとまばゆく見苦しかるべけれ、とおぼせど、さる忌に依りと、はた御息所にも顯し聞え給はねば、我を昔より、故大臣は取り別きて思しかしづき、尚侍の君は、若君を櫻の爭はかなき折にも心寄せ給ひし名殘に、思し貶しけるよと、怨めしう思ひ聞え給へり。院の上はた、ましていみじうつらしとぞ思しの給はせける。古めかしきあたりに、差し放ちて思ひ貶さるゝも道理なりと打ち語らひ給ひて、哀にのみ思し增さる。

年頃ありて、又男御子產み給ひつ。そこら侍ひ給ふ御方々に、かゝる事無くて、年頃にな

○女一の宮　弘徽殿の女御の腹なり。
○世の事として　世のならひにて。
○本より道理得たる方　本來の正妻の方。
○御兄の君達　御息所の御兄。
○大上　玉鬘。
○さてもおはせましに云々　當時姫君を許しても宜しかりし人數多ありしとなり。
○ひはづ　纖弱。

りけるを、疎ならざりける御宿世など、世の人驚く。帝まして限無うめづらしと、此今宮をば思ひ聞え給へり。下り居給はぬ世ならましかば、如何に甲斐あらまし。今は何事も映無き世を、いと口惜しとなん思しける。女一の宮を、限無き物に思ひ聞え給ひしを、斯くり斯うまでは物しからんと、御心動きける。事に觸れて安からず、くね〳〵しき事出で來などして、自ら御中も隔たるべかゝめり。世の事として、數ならぬ人の仲らひにも、本より道理得たる方にこそ、間無き大凡の人も、心を寄する事なゝめれば、院の内の上下の人々、いとやんごとなくて久しくなり給へる御方にのみことわりて、はかなき事にも、此御方ざまを、善からず取り做しなどするを、御兄の君達も「さればよ、惡しうやは聞え置きける。」と、いとゞ申し給ふ。心安からず聞き苦しき儘に、斯からでのどやかに目安くて、世を過す人も多かゝめりかし。限無き幸無くて、宮仕の筋は思ひ寄るまじき事なりけりと大上は歎き給ふ。

聞えし人々の、めやすくなりのぼりつゝ、さてもおはせましに、片端ならぬぞ數多あるや。其中に源侍從とて、いと若うひはづなりと見しは、宰相の中將にて、「匂ふや薫るや」と、聞きにくゝ愛で騷がるなる。實にいと人柄重りかに心憎きを、やんごとなき親王達大臣の御女を志ありての給ふなるなども、聞き入れずなどあるに付けて、(玉)「そのかみは若う心許無きやうなりしかど、目安くねびまさりぬべかゝめり。」など、言ひおはさうず。少將なりしも三位の中將とか云ひて、覺あり。貌さへあらまほしかりきやなど、なま心わろき

○うるさげなる御有樣よりは　院中の煩はしげなるよりは此君に參らせたる方よかりし物を。
○左大臣　竹川左大臣。氏族明ならず。
○道のはてなる常陸帶　古今集に「東路の道のはてなる常陸帶かごとばかりも逢はんとぞ思ふ」
○內の君　中の姫の尙侍。
○右は左に　夕霧右大臣は左大臣に。

○昔の御事　源氏の御事。

○疎なる罪に云々　疎遠の御咎を言を換へて仰せらるゝにや。
○院に侍はるゝが　御息所が。

仕うまつり人は、打ち忍びつゝ、「うるさげなる御有樣よりは。」など言ふもありて、いとほしうぞ見えし。この中將は、猶思ひ初めてし心絕えず、憂くも辛くも思ひつゝ、左大臣の御女を得たれど、をさ〳〵心も留めず。「道のはてなる常陸帶の」と、手習にも言種にもするは、如何に思ふやうのあるにかありけん。御息所安げ無き世のむづかしさに、里勝になり給ひにけり。尙侍の君思ひしやうにはあらぬ御有樣を、口惜しとおぼす。內の君は、なか〳〵今めかしう心安げにもてなして、世にも故あり、心憎き覺にて侍ひ給ふ。

左大臣亡せ給ひて、右は左に、藤大納言左大將かけ給へる、右大臣になり給ふ。次々の人なりあがりて、この薰中將は中納言に、三位の君は宰相になりて、よろこびし給へる人々此御族より外に人無き頃ほひになんありける。中納言の御悅に、前の尙侍の君に參り給へり。御前の庭にて拜し奉り給ふ。尙侍の君對面し給ひて、(玉)「かくいと草深く成り行く葎の門を、よき給はぬ御心ばへにも、まづ昔の御事、思ひ出でられてなん。」など聞え給ふ。御聲のあてに愛敬づき、聞かまほしう今めきたり。舊り難くもおはするかな。かゝれば院の上は、恨み給ふ御心絕えぬぞかし。今遂に事引き出で給ひてんと思ふ。(蓼)「悅びなどは、心にはいとしも思ふ給へねども、まづ御覽ぜられにこそ參り侍れ。よきぬなどの給はするは、疎なる罪に、打ち換へさせ給ふにや。」と申し給ふ。(玉)「今日は定過ぎにたる身の上など聞ゆべき序にもあらずつゝみ侍れど、態と立ち寄り給はん事は難きを、對面無くてはた、さすがにくだ〳〵しき事になん。院に侍はるゝが、いといたう世の中を思ひ亂れ、中空なるやうに漂ふを、女御を賴み聞え、又后の宮の御方にも、さりとも思し許されなんと、思

○宮達　女二の宮と皇子と。
○上　冷泉院。

○紛れ心煩はしき事。
○唯なだらかにもてなして　何事も御心に留め給ふまじきぞとなり。

○人の親にて　人の親として。
○大どいたる　大樣なる。
○宇治の姫君　宇治八宮の御女總角の君。
○尙侍　中の姫君。
○紛るゝ事　煩はしき事。
○大上　玉鬘。

ひ給へ過すに、何方にも無禮けに許さぬ物に思されたゞめれば、いと傍痛くて、宮達はさて侍ひ給ふ。このいと交らひにくげなる、自らはかくて心安くだに眺め過い給へとて、まかゞでさせたるを、それに付けても、聞きにくゝなん、上にも宜しからず思しの給はするる。序あらば、仄めかし奏し給へ。とざまかうざまに、賴もしく思ひ給へて、出し立て侍りし程は、何方をも心安く、打解け賴み聞えしかど、今はかゝる事謬に、幼うおほけなかりける、自の心をもどかしくなん。」と、打ち歎い給ふ氣色なり。(蓼)「更に斯うまで思すまじき事になん。かゝる御交らひの安からぬ事は、昔より然る事となり侍りにけるを、位を去りて、靜におはしまし、何事もけざやかならぬ御有樣となりにたるに、誰も打解け給へるやうなれど、各內々には、如何が挑ましくも思す事も無からん。人は何の咎と見ぬ事も、我御身に取りては、怨めしくなん。間無き事に心を動し給ふこと、女御后の常の御癖なるべし。さばかりの紛れもあらじ物とてやは、思し立ちけん。唯なだらかにもてなして、御覽じ過すべきことに侍るなり。男の方にて、奏すべきことにも侍らぬ事になん。」と、いとすく〳〵しう申し給へば、(玉)「對面の序に愁へ聞えんと、待ち付け奉りたる甲斐も無く、淡の御ことわりや。」と、打ち笑ひておはする。人の親にてはかぐしがり給へる程よりは、いと若やかに大どいたる心地す。御息所もかやうにぞおはすべかゝめる。宇治の姫君の心留りて覺ゆるも、斯う樣なるけはひのをかしきぞかし、と思ひ居給へり。尙侍も此頃まかゞで給へり。此方彼方住み給へるけはひをかしく、大方のどやかに紛るゝ事なき御有樣どもの、簾の中心恥かしう覺ゆれば、心づかひせられて、いとゞ持て鎭め目安きを、大上

○近う見ましかば　婿にもとなり。
○大臣殿　紅梅右大臣。
○兵部卿宮　匂宮。
○還立　還立の饗。又還饗と云ふ。
○源中納言　薫君。
○此殿　玉鬘の殿。
○故宮　螢兵部卿宮。
○此大臣の通ひ給ひし事　紅梅大臣の撫柱上に通ひし事。
○歌まへ給ふ　人歌に入れて官位を陞せ給ふ。
○見苦し　好色なろが見るに苦しきなり。
○過しいますからふや　過しいます事よ。いますからふはいますかりの本の語。
○右兵衛督右大辨にて　玉鬘の二人の子息は。
○付々しく　尚絅息所を思ひ放たずとなり。

は近うも見ましかばと打ちおぼしけり。

大臣殿は、唯この殿の東なりけり。大饗の垣下の君達など、數多つどひ給ふ。兵部卿宮、左の大殿の賭弓の還立、相撲の饗などには、おはしましゝを思ひて、今日の光と請じ奉りし給ひけれど、おはしまさず。心にくゝもてかしづき給ふ姫君達を、さるは志殊に、如何でかと思ひ聞え給ふべかゝめれど、宮ぞ如何なるにかあらん、御心も留め給はざりける。源中納言の、いとゞあらまほしうねび調ひ、何事も後れたる方なく物し給ふを、大臣も北の方も目留め給ひけり。

隣の斯くのゝしりて、行きちがふ車の音、前追ふ聲々も、昔の事思ひ出でられて、此殿には物哀に眺め給ふ。(玉)「故宮亡せ給ひて程も無く、此大臣の通ひ給ひし事、いと淡つけいやうに、世人はもどくなりしかど、思ひも消えず、かくて物し給ふも、さすが然る方に目安かりけり。定め無の世や。何れにか寄るべき。」などの給ふ。

左の大殿の宰相中將、大饗の翌の日、夕つけて此處に參り給へり。御息所里におはすると思ふに、いとゞ心假粧添ひて、(中將)「公の數まへ給ふ悅などは、何とも覺え侍らず、私の思ふ事叶はぬ歎のみ、年月に添へて、思う給へ晴けん方無き事。」と、涙押し拭ふも、殊更めいたり。廿七八の程の、いと盛に匂ひ、華やかなる貌し給へり。(玉)「見苦しの君達の、世の中を心の儘に驕りて、官位をば何とも思はず、過しいますからふや。故殿おはせましかば、此處なる人々も、斯かるすさび事にぞ心は亂らまし。」と打ち歎きたまふ。右兵衛督右大辨にて、皆非參議なるを憂はしと思へり。侍從と聞ゆめりしぞ、此頃頭中將と聞ゆる。

年齡の程は片端ならねど、人に後ると歎き給へり。宰相はとかく付々しく。

○古宮　年長けたる親王。源氏の異母弟にて八の宮と申す。
○筋殊なるべき覺　東宮にも立ち給ふべかりしなり。
○御後見　御外戚以下心寄する人。

○二つ無き　類無き。

○女君のいと美しげなる總角の君なり。

○同じさまにて云々　同じく姫君なりしなり。中の君と申すこれなり。

○哀なる人　最愛の北の方を云ふ。

橋姫

此巻は薫君二十歳より二十二歳の冬までの事を記せり。巻の名は「橋姫の心を汲みて高瀬さす棹の雫に袖ぞぬれける」といふ歌に取れり。此巻以下を世に宇治十帖と稱す。

其頃、世に數まへられ給はぬ古宮おはしけり。母方なども、やんごとなく物し給ひて、筋殊なるべき覺などおはしけるを、時移りて世の中にはしたなめられ給ひける紛れに、なかなかいと名殘なく、御後見なども物怨めしき思々にて、方々に付けて、世を背き去りつゝ、公私に依り所なく、差し放たれ給へるやうなり。北の方も、昔の大臣の御女なりける。哀に心細く、親達の思しおきてたりし樣など、思ひ出で給ふに、たとしへ無き事多かれど、深き御契の二つ無きばかりを、憂き世の慰めにて、互に又無く頼みかはし給へり。年頃經るに、御子も物し給はで、心もとなかりければ、さうぐしく徒然なる慰めに、如何でをかしからんちごもがなと、宮ぞ時々思しの給ひけるに、珍しく女君のいと美しげなる、生れ給へり。之を限無く哀と思ひかしづき聞え給ふに、又差し續き氣色ばみ給ひて、このたびは男にてもなど思したるに、同し樣にて、無事にはし給ひながら、いといたく煩ひて亡せ給ひぬ。宮あさましく思し惑ふ。在り經るに付けて、いとはしたなく、堪へ難き事多かる世なれど、見捨て難く哀なる人の、御有樣心ざまに、かけ留めらるゝ絆にてこそ、過し來つれ、一人とまりていとゞすさまじくもあるべきかな。いわけなき人々をも一人はぐくみ立てん程、限ある身にて、いと嗚呼がましう、人わるかるべき事と思し立ちて、本意

○本意も遂げまほしう　出家せまほしとなり。

○いでや折節　心憂く此姫君の爲に母上の亡せしをいふ。

○姫君は心ばせ云々　姉姫總丹の性質をいふ。

○由ある方　趣ある方。

○協はぬ事多く　貧窮なるをいふ。

○見捨て奉り　姫君を捨て暇を乞ひしなり。

○宗々しき人　寡ら事を扱ふ人。

も遂げまほしうし給ひけれど、見護る人も無くて殘し留めんを、いみじく思したゆたひつゝ、年月も經れば、各およすけ增さり給ふ。さまかたちの美しうあらまほしきを、明暮の御慰めにて、自らぞ過し給ふ。後に生れ給ひし君をば、侍ふ人々も、「いでや折節心憂く」など、打ちつぶやきて、心に入れても扱ひ聞えざりけれど、限の樣にて、何事も思し分かざりし程ながら、之をいと心苦しと思ひて、(北の方)「唯この君をば形見に見給ひて、哀と思せ。」とばかり、唯一言なん宮に聞え置き給ひければ、前の世の契もつらき折節なれど、さるべきにこそはありけめと、今はと見えしまで、いと哀と思ひて、うしろめたげにの給ひしをと、思し出でつゝ、此君をしもいと悲しうし奉り給ふ。貌なん誠にいと美しう、ゆゝしきまで物し給ひける。姫君は心ばせ靜に由ある方にて、見る目もてなしも氣高く心にくき樣ぞし給へる。いたはしくやんごとなき筋は勝りて、何れをも樣々に思ひかしづき聞え給へど、協はぬ事多く、年月に添へて、宮の內物淋しくのみ成りまさる。侍ひし人も、たつき無き心地するに、得忍び敢へず、次々に隨ひて、まかゝで散りつゝ、若君の御乳母も然る騷に、はか〳〵しき人をしも、選り敢へ給はざりければ、程に付けたる心淺さにて、幼き程を見捨て奉りにければ、唯宮ぞはぐくみ給ふ。

さすがに廣く面白き宮の、池山などの氣色ばかり、昔に變らでいといたう荒れまさるを、徒然と眺め給ふ。家司なども、宗々しき人も無かりければ、取り繕ふ人も無き儘に、草青やかに茂り、軒の忍ぞ處得顏に青み渡れる。折々に付けたる花紅葉の色をも香をも、同じ心に見はやし給ひしにこそ、慰む事も多かりけれ。いとゞしく淋しく、寄り付かん方無き儘に、持佛の御飾ばかりを、態とせさせ給ひて、明暮行ひ給ふ。かゝる絆どもにかゝづらふだに、思の外に口惜しう、我心ながらも、協はざりける契と覺ゆるを、況いて何にか世の人めいて、今更にとのみ、年月添へて、世の中を思し離れつゝ、心ばかりは聖になり果て給ひて、故君の亡せ給ひしこなたは、例の人の樣なる心ばへなど、戲にても思し出で給はざりけり。何どかさしも別るゝ程の悲は、又世に類無きやうにのみこそは覺ゆべかゝめれど、在り經ればさのみやは。猶世の人になずらふ御心づかひをし給ひて、見苦しく便無き宮の內も、自らもてなさるゝわざもやと、人はもどき聞えて、何くれとつき〴〵しく聞えごつ事も、類に觸れて多かれど、聞し召し入れざりけり。

御念誦のひま〳〵には、この君達をもてあそび、やう〳〵およすけ給へば、琴習はし、碁打ち偏突など、はかなき遊技に付けても、心ばへどもを見奉り給ふに、姫君は勞々しく、深く重りかに見え給ふ。若君は大どかにらうたげなる樣して、物愼したるけはひ、いと美しう、樣々におはす。春のうらゝかなる日影に、池の水鳥どもの羽打ちかはしつゝ、おのがじゝ囀る聲などを、常ははかなき事と見給ひしかども、つがひ離れぬを羨しく眺め給ひて、君達に御琴ども教へ聞え給ふ。いとをかしげに小き御程に、取り〴〵搔き鳴し給ふ。物の音ども、哀にをかしく聞ゆれば、涙を浮け給ひて、

(八宮)「打捨てゝ、つがひ去りにし、水鳥の、かりのこの世に立ち後れけん。心盡しなりや。」と、目押し拭ひ給ふ。いと淸げにおはします宮なり。年頃の御行に瘠せ細り給ひにたれど、さてしもあてになまめきて、君達をかしづき給ふ御心ばへに、直衣の

○持佛の御飾ばかり　これより優婆塞の宮の下地を書き出せり。

○故君　北の方。

○世の人はなずらふ云々　後の北の方を人々の申し入るゝなり。

○偏突　漢字の偏を隱し旁をのみ示して其偏を言ひ當つる遊。

○羨しくながめ給ひて　八宮の亡き北の方を慕ふ體なり。

○打捨てゝ云々　水鳥のは、かりに言ひ寄せたり。かりのこは鴨の子にて、假の此世に掛けたり。

○書きまぜ給ふ　硯の面に字を書き又其上に字を書くなり。
○如何で云々　我身を水鳥に寄せて詠めり。
○よからねど　歌の評にて地の詞なり。
○續け給はぬ　文字の切れざれなるをいふ。
○久しく　やゝ久しくひま取りて。
○君　父宮。
○巣守　卵の孵らずして巣の中に殘る者。
○唱歌をし給ふ　姫君に琴を教へんとて琴の歌を歌ふなり。
○方　學問。
○其方　昔繼の事。

萎えばめるを着給ひて、しどけなき御樣いと恥かしげなり。姫君御硯をやをら引き寄せて、手習のやうに書きまぜ給ふを、(八宮)「これに書き給へ。硯には書きつけざゝなり。」とて、紙奉り給へば、羞らひて書き給ふ。

(大君)「如何で斯く、巣立ちけるぞと、思ふにも、憂き水鳥の、契をぞ知る。」

佳からねど、其折は哀なりけり。手は生先見えて、まだ能くも續け給はぬ程なり。(八宮)「若君も書き給へ。」とあれば、今少し幼けに、久しく書き出で給へり。

(中君)「泣く〳〵も、羽打ち着する、君無くば、我ぞ巣守に、なるべかりける。」

御衣どもなど萎えばみて、御前に又人も無く、いと淋しく徒然げなるに、樣々いとらうたげにて物し給ふを、哀に心苦しう、如何がおぼさざらん。經を片手に持給ひて、且讀みつゝ唱歌をし給ふ。姫君に琵琶、若君に箏の御琴を、まだ幼けれど、常に合せつゝ習ひ給へば、聞きにくゝもあらで、いとをかしく聞ゆ。

父帝にも母女御にも、疾く後れ給ひて、はかゞ〳〵しき御後見の、取り立てたるおはせざりければ、才など深くも得習ひ給はず。況いて世の中に住み着く御心掟は、いかでかは知り給はん。貴き人と聞ゆる中にも、あさましうあてに、大どかなる女のやうにおはすれば、古き世の御寶物、祖父大臣の御所分、何やかやと盡きすまじかりけれど、行方も無くはかなく失せ果てゝ、御調度などばかりなん、態と麗しくて多かりけり。參り侍ひ聞え、心寄せ奉る人も無し。徒然なる儘に、雅樂寮の物の師どもなどのやうの勝れたるを召し寄せつゝ、はかなき御遊に心を入れ、生ひ出で給へれば、其方はいとをかしく勝れ給へり。源氏

○朱雀院の大后　弘徽殿大后。
○世の中に立繼ぎ給ふべく　冷泉院を廢して此八宮を立てんとせしなり。
○花紅葉水の流　宇治の景色をいふ。
○昔の人　北の方。
○見し人　北の方。
○峯の朝霧晴るゝ折なくて　古今集に「雁のくる峰の朝霧はれずのみ思盡きせぬ世の中の憂き。」

の大臣の御弟八宮とぞ聞えしを、冷泉院の春宮におはしましゝ時、朱雀院の大后の、横樣に思し構へて、此宮を世の中に立ち繼ぎ給ふべく、我御時もてかしづき奉り給ひける騷に、間無く彼方ざまの御仲からひには、差し放たれ給ひにければ、愈かの御次々になり果てぬる世にて、え交らひ給はず。又この年頃かゝる聖になり果てゝ、今は限と萬を思し捨てたり。

かゝる程に住み給ふ宮燒けにけり。いとゞしき世に、あさましう敢無くて、移ろひ住み給ふべき所の、宜しきも無かりければ、宇治と云ふ所に、由ある山里持給へりけるに渡り給ふ。思ひ捨て給へる世なれども、今はと住み離れなんを哀におぼさる。網代のけはひ近く、耳かしがましき川の邊にて、靜なる思に協はぬ方もあれど、如何がはせん。花紅葉水の流にも、心を遣る便に寄せて、いとゞしく眺め給ふより外の事無し。かく絶え籠りぬる野山の末にも、昔の人物し給はましかばと、思ひ出で聞え給はぬ折無かりけり。

(八宮)「見し人も、宿も煙に、なりにしを、何どて我身の、消え殘りけん。」

生ける甲斐無くぞ思しこがるゝや。

いとゞ山重れる御住處に、尋ね參る人も無し。怪しき下種など、田舍びたる山賤どものみ、稀に馴れ參り仕う奉る。峯の朝霧晴るゝ折無くて、明し暮し給ふに、この宇治山に聖だちたる阿闍梨住みけり。才いと賢くて、世の覺も輕からねど、をさ〳〵公事にも出で仕へず、籠り居たるに、この宮のかく近き程に住み給ひて、淋しき御樣に尊き業をせさせ給ひつゝ、法文などを讀み習ひ給へば、尊び聞えて常に參る。年頃學び知り給へる事どもの、深き心

○心ばかりは云々　心ばかりは佛の道に入り往生もすべきを。

○内敎　佛敎。

○宰相の中將　薫君。

○河波に競ひて　宇治川の波の音に競ひて。
○古代に　古めかしく。
○帝　院の帝。
○持て煩ひ給へらん　姫達を。
○後れん　出家の志が。
○讓りやはし給はぬ　姫君を我に。
○十の御子　桐壺帝の第十の皇子。
○入道の宮　女三宮。

を解き聞かせ奉り、愈此世の假初に、味氣無き事を申し知らすれば、(八宮)「心ばかりは蓮の上に思ひのぼり、濁なき池にも住みぬべきを、いと斯く幼き人々を、見捨てんうしろめたさばかりになん、え直路に貌をも變へぬ。」など、隔無く物語し給ふ。

この阿闍梨は、冷泉院にも親しく侍ひて、御經など敎へ聞ゆる人なりけり。京に出でたる序に參りて、例の然るべき文など御覽じて、問はせ給ふこともある序に、(阿闍梨)「八宮のいと賢く、内敎の御才悟深く物し給ひけるかな。さるべきにて生れ給へる人にや物し給ふらん。心深く思ひ澄し給へる程、誠の聖の掟になん見え給ふ。」と聞ゆ。(冷泉)「いまだ貌はかへ給はずや。俗聖とかこの若き人々の付けたゝなる、哀なる事なり。」などの給はす。宰相の中將も、御前に侍ひ給ひて、我こそ世の中をいとすさまじく思ひ知りながら、行など人に目留めらるゝばかりは勤めず、口惜しくて過しけれ、など、人知れず思ひつゝ、俗ながら聖になり給ふ心の掟や、如何にと耳留めて聞き給ふ。(阿闍梨)「出家の志は素より物し給へるを、はかなき事に思ひ滯り、今となりては、心苦しき女子どもの御上を、え思ひ捨てぬとなん、歎き侍り給ふ。」と奏す。さすがに物の音愛づる阿闍梨にて、(阿闍梨)「實にはた此姫君達の琴彈き合はせて遊び給へる、河波に競ひて聞え侍るは、いと面白く、極樂思ひやられ侍るや。」と、古代に愛づれば、帝ほゝゑみ給ひて、「さる聖のあたりに生ひ出でて、この世の方樣は、辿々しからんと推し量らるゝを、をかしの事や。うしろめたく思ひ捨て難く持て煩ひ給へらんを、若し暫しも後れん程は、讓りやはし給はぬ。」などその給はする。この院の帝は、十の御子にぞおはしける。朱雀院の故六條院に預け聞え給ひし入道の宮の御例を思し出でて、かの君達をがな、徒然なる遊敵になど、打ち思しけり。中將の君は、なか〳〵御子の思ひ澄し給へらん御心ばへを、對面して見奉らばやと、思ふ心ぞ深くなりぬる。さて阿闍梨の歸り入るにも、(薫)「必ず參りて物習ひ聞ゆべく、まづ内々にも、氣色給はり給へ。」など語らひ給ふ。帝は御ことづてにて、哀なる御住居を、人傳に聞く事など聞え給うて、

○氣色給はり給へ　傳言し給へ。
○綱使を先に立てゝ　阿闍梨へ綱傳言の外に綱使も添ふるなり。
○持てはやし給ふ　使者を。
○世をうぢ山に　世を憂しと思ひて此宇治にの意。憂しを宇治山に言ひ掛けたり
○紛らはしく　思ひ惑ひて。
○いと有り難き御有樣を　八宮の。

(冷泉)「世を厭ふ、心は山に、通へども、八重立つ雲を、君や隔つる。」

阿闍梨、この御使を先に立てゝ、かの宮に參りぬ。斜なる際の、さるべき人の使だに稀なる山影に、いと珍しく待ち喜び給ひて、處に付けたる肴などして、然る方に持てはやし給ふ。御返し、

(八宮)「跡絶えて、心澄むとは、なけれども、世をうぢ山に、宿をこそ借れ。」

聖の方をば卑下して、聞え做し給へれば、猶世に怨殘りけりと、いとほしく御覽ず。阿闍梨、中將の君の、道心深げに物し給ふなど語り聞えて、(阿闍梨)「法文などの心得まほしき志なん、いはけなかりし齡より深く思ひながら、得去らず世に在り經る程、公私に暇無く、明け暮らし、態と閉ぢ籠りて習ひ讀み、大方はかゞ〳〵しくもあらぬ身にしも、世の中を背き顔ならんも、憚るべきにあらねど、自ら打ちたゆみ紛らはしくてなん過し來るを、いと有り難き御有樣を承はり傳へしより、かく心に懸けてなん賴み聞えさする、など、懇切に申し給ひし。」など語り聞ゆ。宮(八宮)「世の中を假初の事と思ひ取り、厭はしき心の付き初むる事も、我身に憂ある時、なべての世も恨めしう思ひ知る初ありてなん、道心も起るわざ

○此許には　吾は。
○殊更に佛などの云々　北の方の逝去、京の幾亡を云ふ。

○互に　薫と八宮と互に。
○自　薫自身。

○人の御心ばへをも　姫君達の心はへをかなり。

○優婆塞ながら行ふ山の　古歌に「うばそくが行ふ山の椎が本あなそば〳〵し床にしあらねば。」

なンめるを、年若く世の中思ふに協ひ、何事も飽かぬ事はあらじと覺ゆる身の程に、さはた後の世をさへ、迚り知り給ふらんが有り難き。此許にはさンべきにや。唯厭ひ離れよと、殊更に佛などの勸めおもむけ給ふやうなる有樣にて、自らこそ、靜なる思に協ひ行けど、殘少き心地するに、はか〴〵しくもあらで過ぎぬべかンめるを、來し方行く末、更に得迚る所なく思ひ知らるゝを、却りては心耻かしげなる法の友にこそは物し給ふなれ。」などの給ひて、互に御消息通ひ、自も詣で給ふ。

實に聞きしよりも哀に住ひ給へる樣より始めて、いと假なる草の庵に思ひなし、事そぎたり。同じき山里と云へど、然る方にて心とまりぬべく、のどやかなるも有るを、いと荒ましき水の音波の響に、物忘れ打ちし、夜など心解けて夢をだに見るべき程も無けに、すごく吹き拂ひたり。聖だちたる御爲には、かゝるしもこそ、心留まらぬ催しならめ、女君達、何心地して過し給ふらん、世の常の女しくなよびたる方は遠くやと、推し量らるゝ御有樣なり。佛の御方には、障子ばかりを隔てゝぞおはすべかンめる。すぎ心あらん人は、氣色ばみ寄りて、人の御心ばへをも見まほしう、さすがに如何がと、ゆかしうもある御けはひなり。然れど然る方を思ひ離るゝ願に、山深く尋ね聞えたる本意なく、すき〴〵しき等閑言を打ち出であざればまんも事に違ひてや、など思ひ返して、宮の御有樣のいと哀なるを懇に訪ひ聞え給ひ、度々參り給ひつゝ、思ひしやうに、優婆塞ながら行ふ山の深き心、法文など、態と賢しげにはあらで、いと能くの給ひ知らす。聖だつ人、才ある法師などは、世に多かれど、餘りこは〳〵しう氣遠げなる宿德の僧都、僧正の際は、世に暇無く

○その人ならぬ　僧正僧都ならぬ。

○よき人　貴人。
○見馴れ奉り　親しみ奉り。

○此君　薫君。

○三年ばかりになりぬ　薫二十歳より二十二歳までの三年の間なり。

○有明の月　九月下旬の月。

生直にて、物の心を問ひあらはさんも、事々しく覺え給ふ。又その人ならぬ佛の御弟子の、戒を保つばかりの尊さはあれど、けはひ卑しく言だみて、骨無けに物馴れたる、いと物しくて、晝は公事に暇無くなどしつゝ、しめやかなる宵の程、氣近き御枕上などに召し入れ、語らひ給ふにも、いとさすがに物むづかしくなどのみあるを、いとあてに心苦しき樣して、の給ひ出づる言の葉も、同じ佛の御敎をも、耳近き喩に引きまぜ、いとこよなく深き御悟にはあらねど、よき人は物の心を得給ふ方の、いと殊に物し給うければ、やう〳〵見馴れ奉り給ふ度毎に、常に見奉らまほしうて、暇無くなどして、程經る時は戀しう覺え給ふ。

此君のかく尊がり聞え給へれば、冷泉院よりも、常に御消息などありて、年頃音にもをさ〳〵聞え給はず、いみじく淋しげなりし御住處に、やう〳〵人目見る時々あり。折節に訪ひ聞え給ふこと嚴めしう、此君も先づ然るべき事に付けつゝ、をかしきやうにも、まめやかなる樣にも、心寄せ仕う奉り給ふこと、三年ばかりになりぬ。

秋の末つ方、四季にあてつゝし給ふ御念佛を、この河面は網代の浪も此頃はいとゞ耳かしがましく靜ならぬをとて、かの阿闍梨の住む寺の堂に移ろひ給ひて、七日の程行ひ給ふ。

姫君達は、いと心細く徒然まさりて、眺め給ひける頃、中將の君、久しく參らぬかなと、思ひ出で聞え給うける儘に、有明の月の、まだ夜深く差し出づる程に出で立ちて、いと忍びて、御供に人なども無く、やつれておはしけり。河のこなたなれば、船なども煩はで、御馬にて成りけり。入りもて行くまゝに、霧塞がりて道も見えぬ繁木の中を分け給ふに、

○荒ましき風のきほひに荒々しき風競ひ吹きて。
○人やりならず　人のせさするにてはなく、己が心からにて。
○文無く　味氣無くの意。
○隨身の音もせさせ給はず　中將なる故に隨身の前を驅ふべきをも止め給へりとなり。
○主知らぬ香　古今集に「主知らぬ香こそ匂へ秋の野に誰が脱ぎ掛けし藤袴ぞも」
○皇子の御琴の音云々　八宮琴に名高かりし故にその音と思ふなり。
○限ある御行　七日の念佛なり。
○物の隈　物蔭。
○つき無く云々　心無く差し出でたらば。

いと荒ましき風のきほひに、ほろ〳〵と落ち亂るゝ木の葉の露の散りかゝるも、いと冷やかに人やりならず甚く濡れ給ひぬ。かゝるありきなども、をさ〳〵習ひ給はぬ心地に、心細くをかしく思されけり。

（藁）「山風に、堪へぬ木の葉の、露よりも、文無く脆き、我涙かな。」

山賤の驚くもうるさしとて、隨身の音もせさせ給はず、柴の籬を分けつゝ、そこはかと無き水の流どもを蹈みしだく駒の足音も、猶忍びてと用意し給へるに、隱れ無き御匂ぞ、風に隨ひて、主知らぬ香と驚く寢覺の家々ぞありける。

近くなる程に、その事とも聞き別れぬ物の音ども、いとすごげに聞ゆ。常にかく遊び給ふと聞くを、序なくて、皇子の御琴の音の名高きも得聞かぬぞかし。好き折なるべしと思ひつゝ入り給へば、琵琶の聲の響なりけり。黄鐘調に調べて、世の常の搔合せなれど、所がらにや耳馴れぬ心地して、搔き返す撥の音も、物清げに面白し。箏の琴哀になまめいたる聲して、絶え〴〵聞ゆ。しばし聞かまほしきに、忍び給へど、御けはひ著く聞き付けて、宿直人めく男、生頑しき出で來たり。「しか〴〵なん籠りおはします。御消息をこそ聞えさせめ。」と申す。（藁）「何かは、然限ある御行の程を紛はし聞えさせんにあい無し。斯く濡れ〳〵參りて、徒に歸らん憂を、姫君の御方に聞えて、哀との給はせばなん、慰むべき。」との給へば、醜き顔打ち笑みて、「申させ侍らん。」とて立つを、「しばしや。」と召し寄せて、

（藁）「年頃人傳にのみ聞きて、ゆかしく思ふ御琴の音どもを、嬉しき折かな、しばし少し立ち隱れて、聞くべき物の隈ありや。つき無く差し過ぎて、參り寄らん程、皆琴止め給ひ

○さる直々しき心地にも　宿直人の世の常の心にも。
○猶しるべせよ云々　藁君此宿直人を語らひてかいまみせんとするなり。
○心無きやうに云々　我が注意の足らざりしやうに後に至りて人に言はれ侍らんかとなり。
○内なる人　大姫君なり。
○扇ならでこれしても云々　これとは撥をいふ。扇の形に似たる故なり。
○添ひ伏したる人　中君なり。
○入る日を回す云々　陵王の舞にある事なり。
○月に離るゝ物かは　琵琶の隱月に撥は納むる物なればとなり。

ては、いと本意なからん。」との給ふ。御けはひ顔貌の、さる直々しき心地にも、いとめでたく忝く覺ゆれば、（宿直人）「人聞かぬ時は、明暮斯くなん遊ばせど、下人にても、都の方より參り立ちまじる人侍る時は、音もせさせ給はず。大方かくて女君達おはします事をば、隱させ給ひ、なべての人に知らせ奉らじと、思しの給はする。」と申せば、打ち笑ひて、（藁）「味氣無き御物隱しなり。しか忍び給ふなれど、皆人有り難き世のためしに聞き出づべかめるを。」との給ひて、（藁）「猶しるべせよ。我はすき〴〵しき心など無き人ぞ。かくておはしますらん御有樣の、怪しく實になべてに覺え給はぬなり。」と、細やかにの給へば、（宿直人）「あなかしこ。心無きやうに後の聞えや侍らん。」とて、あなたの御前は、竹の透垣し籠めて、皆隔異なるを敎へ寄せ奉れり。御供の人は、西の廊に呼び居ゑて、此宿直人あへしらふ。あなたに通ふべかゝめる透垣の戸を、少し推し明けて見給へば、月をかしき程に、霧渡れるを眺めて、簾を少し短く卷き上げて、人々居たり。簀子に、いと寒げに身細く、萎えばめる童一人、同じ樣なる大人など居たり。内なる人一人は、柱に少し居隱れて、琵琶を前に置きて、撥を手弄にしつゝ居たるに、雲隱れたりつる月の俄にいと明く差し出でたれば、（大君）「扇ならでこれしても、月は招きつべかりけり。」とて、差しのぞきたる顔、いみじくらうたげに匂やかなるべし。添ひ伏したる人は、琴の上に傾きかゝりて、（中君）「入る日を回す撥こそ有りけれ。樣異にも思ひ及び給ふ御心かな。」とて、打ち笑ひたるけはひ、今少し重りかに由づきたり。（大君）「及ばずとも、これも月に離るゝ物かは。」など、はかなき事を打解けの給ひかはしたる御けはひども、更によそに思ひ遣りしには似ず、いと哀に懷

○物の隈　人に知られざる事。

○京に御車率て參るべく云云　夜明けて後に歸らん用意なり。

○驚かざりける　氣付かざりし。

○折柄にこそ萬の事もと思いて　萬の事も時機に應じて物すべきなりと思して。

○樣異にこそ　我を簾の内にも入れぬは異樣の事ぞ。

○輝かしげなる　恥かしげなる。

○奥深きを起して　奥の方の女房の慢ぬがるを起すなり。

○何事も思ひ知らぬ云々　さりとも御覽じ知らんとありし返事なり。

○世の性　世の習。

○一所　姫君を指す。

○然しも驚かさせ云々　薫に語らんとて姫君より驚かさせ給ふ程に親しまばとなり。

○慎ましく答へにくゝ　大君の心なり。

○聲の定過ぎたるも　聲の程の過ぎたるも。

○人めきて　人柄らしくて。

かしうをかし。昔物語などに語り傳へて、若き女房などの讀むをも聞くに、必ずかやうの事を言ひたる、然しもあらざりけんと憎く推し量らるゝを、實に哀なる物の隈あるべき世なりけりと、心移りぬべし。霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。又月差し出でなんと思す程に、奥の方より、人おはすと告げ聞ゆる人やあらん、簾おろして皆入りぬ。驚き顔にはあらず、なごやかにもてなして、やをら隱れぬるけはひども、衣の音もせず、いとなよゝかに心苦しうて、いみじうあてにみやびかなるを、哀と思ひ給ふ。

やをら立ち出でて、京に御車率て參るべく、人走らせ給ひつ。在りつる侍に、(薫)「折惡しく參り侍りにけれど、なか〳〵嬉しく、思ふこと少し慰めてなん、かく侍ふ由聞えよ。いたう濡れにたる託言も聞えさせんかし。」との給へば、參りて聞ゆ。かく見えやしぬらんとは思しも寄らで、打解けたりつる事どもを聞きやし給へらんと、いといみじく恥かし。

怪しくかうばしく匂ふ風の吹きつるを、思ひ懸けぬ程なれば、驚かざりける心鈍さよと、心も惑ひて恥ぢおはさうす。御消息など傳ふる人も、いと初々しき人なゝめるを、折柄にこそ、萬の事もと思いて、まだ霧の紛れなれば、ありつる御簾の前に歩み出でて、突い居給ふ。山里びたる若人どもは、さし答へん言の葉も覺えで、御裾差し出づる樣も迚々しげなり。(薫)「この御簾の前には、はしたなく侍りけり。うちつけに淺き心ばかりにては、かくも尋ね參るまじき山の懸路に思ひ給ふるを、樣異にこそ。かく露けき旅を重ねては、さりとも御覽じ知るらんとなん賴もしう侍る。」と、いとまめやかにの給ふ。若き人々の、なだらかに物聞ゆべきも無く、消え返り輝かしげなるも、傍痛ければ、女ばらの奥深きを起し出づる程久しくなりて態とめいたるも苦しうて、(姉君)「何事も思ひ知らぬ有樣にて、知り顔にも如何がは聞ゆべき。」と、いと由ありてあてなる聲して、引き入りながら仄にの給ふ。(薫)「且知りながら、憂きを知らず顔なるも、世の性と思ひ給へ知るを、一所しも、餘りおほめかせ給へらんこそ、口惜しかるべけれ。有り難う萬を思ひ澄したる御住居などに、たぐひ聞えさせ給ふ御心の中は、何事も涼しく推し量られ侍れば、猶かく忍び餘り侍る深さ淺さの程も、分かせ給はんこそ甲斐は侍らめ。世の常のすきぐしき筋には思し召し放つべくや。さやうの方は、態と勸むる人侍るとも、靡くべうもあらぬ心强さになん、自ら聞し召し合はするやうも侍りなん。徒然とのみ過し侍る世の物語も聞えさせ所に賴み聞えさせ、又かく世離れて眺めさせ給ふらん御心の紛らはしにも、然しも驚かさせ給ふばかり聞え馴れ侍らば、如何に思ふ樣に侍らん。」など、多くの給へば、慎ましく答へにくゝとて、起しつる老人の出で來たるにぞ讓り給ふ。たとしへ無く差し過して、(老人)「あな忝や。傍痛き御座の樣にも侍るかな。御簾の内にぞ。若き人々は物の程知らぬやうにこそ。」など、したゝかに言ふ聲の定過ぎたるも、傍痛く君達はおぼす。(老人)「いとも怪しく世の中に住ひ給ふ人の數にもあらぬ御有樣にて、然もありぬべき人々だに、訪ひ數まへ聞え給ふも、見え聞えずのみなり增さり侍るめるに、有り難き御志の程は、數にも侍らぬ心にも、あさましきまで思ひ給へ聞えさせ侍るを、若き御心地にも思し知りながら、聞えさせ給ひにくきにや侍らん。」と、いと慎み無く物馴れたるも、なま憎きものから、けはひいたう人めきて、由ある聲なれば、(薫)「いとたつぎも知らぬ心地しつるに、嬉しき御けはひにこそ。何事も

○見れば　人々が薫君を。

○三條の宮　女三の宮。
○小侍從　女三宮の乳母の女なる事若紫の卷にあり。
○遙なる世界　筑紫を云へる由奥にあり。
○藤大納言　紅梅大臣。
○かの御上とて　柏木とて。
○過ぎ給ひて　柏木亡せ給ひて。

實に思ひ知り給ひける頼こよなかりけり。」とて、寄り居給へるを、几帳の側より見れば、曙のやうく物の色分るゝに、實に窶し給へると見ゆる狩衣姿のいと濡れしめりたる程、うたて此世の外の匂にやと、怪しきまで薫り滿ちたり。

此老人は打ち泣きぬ。(老人)「差し過ぎたる罪もやと思ひ給へ忍ぶれど、哀なる昔の御物語の、如何ならん序に打ち出で聞えさせ、片端をも仄めかし知ろし召させんと、年頃念誦の序にも打ちまぜ思ひ給へ渡るしるしにや、嬉しき折に侍るを、まだきに溺れたる涙にくれて得こそ聞えさせ侍らね。」と打ちわなゝく氣色、誠にいみじく物悲しと思へり。大方定過ぎたる人は、涙脆なる物とは見聞き給へど、いと斯うしも思へるも、怪しうなり給ひて、(薫)「此處に斯く參ることは、度重なりぬるを、かく哀知り給へる人も無くてこそ、露けき道の程に一人のみそぼちつれ。嬉しき序なンめるを、事な殘い給ひそかし。」との給へば、(老人)「かゝる序しも侍らじかし。又侍るとも、夜の間の程知らぬ命の、頼むべきにも侍らぬを、さらば唯かゝる古物、世に侍りけりとばかり、知ろし召され侍らなん。三條の宮に侍ひし小侍從は、はかなくなり侍りにけると、仄に聞き侍りし。そのかみ睦しう思ひ給へし同じ程の人、多く亡せ侍りにける世の末に、遙なる世界より傳り詣で來て、この五年六年の程なん、これに斯く候ひ侍る。え知ろし召さじかし。此頃藤大納言と申すなる御兄の、衞門督にてかくれ侍りにしは、物の序などにや、かの御上とて聞し召し傳ふる事も侍らん。過ぎ給ひて、幾許も隔たらぬ心地のみし侍る。其折の悲しさも、まだ袖の乾く折侍らず思ひ給へらるゝを、手を折りて數へ侍れば、斯く大人しくならせ給ひにける御齡の程も夢のや

○辨　此老人の稱。

○の給ひおくこと　柏木の遺言なり。

○さすがに打ち出でずなりぬ　柏木と女三宮との事などをばさすがに憚りて言はざりしなり。
○さしくみに　うちつけに
○骨々し　無骨なり。

○峯の八重雲云々　後撰集に「思ひやる心ばかりはさはらじを何隔つらん峯の横雲」
○嶺の尾山　宇治の名所なり。
○立ち歸りやすらひ給へる　姫君の事を心に懸けたる態なり。

うになん。かの故權大納言の御乳母に侍りしは、辨が母になん侍りし。朝夕に仕う奉り馴れ侍りしに、人數にも侍らぬ身なれど、人に知られず御心よりはた、餘りける事を折々打ちかすめの給ひしを、今は限になり給ひにし御病の末つ方、召し寄せて、聊の給ひ置く事なん侍りしを、聞し召すべき故なん一言侍れど、かばかり聞え出で侍るに、殘をと思し召す御心侍らば、のどかになん聞し召し果て侍るべき。若き人々も傍痛く差し過ぎたりと突きじろひ侍るめるも、ことわりになん。」とて、さすがに打ち出でずなりぬ。怪しく夢語、巫子やうの者の問はず語するやうに、珍らかに思さるれど、哀に覺束なく思し渡る事の筋を聞ゆれば、いと奥ゆかしけれど、實に人目も繁く、さしくみに古物語にかゝづらひて、夜を明し果てんも骨々しかるべければ、(薫)「そこはかと思ひ分く事は無きものから、古の事と聞き侍るも物哀になん。さらば必ず此殘聞かせ給へ。霧晴れ行かば、はしたなかるべき窶れを面無く御覽じ咎められぬべき樣なれば、思ひ給ふる心の程よりは、口惜しうなん。」とて立ち給ふに、かのおはします寺の鐘の聲、微に聞えて、霧いと深く立ち渡れり。峯の八重雲思ひ遣る隔て多く哀なるに、猶この姫君達の御心の中ども心苦しう、何事を思し殘すらん、斯くいと奥まり給へるもことわりぞかし、などおぼす。

(薫)「朝ぼらけ、家路も見えず、尋ね來し、槇の尾山は、霧籠めてけり。

心細くも侍るかな。」と立ち歸りやすらひ給へる樣を、都の人の目馴れたるだに、猶いと殊に思ひ聞え侍るを、況いて如何がは珍しう見ざらん。御返り聞え傳へにくげに思ひたれば、例のいと愼ましげにて、

○直面なる　打ちつけなる
○眺め給ふ　氷魚捕るを。
○靜けき身と思ふべき世かは　世の常無ければなり。
○あなた　姫君達を指す。
○橋姫の云々　姫君を橋姫に擬へ、涙を棹の雫に寄せて詠めり。高瀬は　高瀬舟なり。
○身さへ浮きて　古歌に「さす棹の雫に濡るゝ物故に身さへ浮きても思ほゆるかも」
○歸り渡らせ給はん　八宮が。

（大君）「雲の居る、峯の懸路を、秋霧の、いとゞ隔つる、頃にもあるかな。」

少し打ち歎き給へる氣色、淺からず哀なり。何ばかりをかしき節は見えぬ邊なれど、實に心苦しき事多かるにも、明うなり行けば、さすがに直面なる心地して、（薫）「なか〳〵なる程に、承りさしつる事も多かる殘は今少し面馴れてこそは、怨み聞えさすべかゝめれ。さるは斯く世の人めいてもてなし給へば、思はずに物思し分かざりけりと怨めしうなん。」とて、宿直人がしつらひたる西面におはして眺め給ふ。

「網代は人騒がしげなり。されど氷魚も寄らぬにやあらん。すさまじげなる氣色なり。」と、御供の人々見知りて云ふ。怪しき船どもに柴刈り積み、各何となき世の營どもに、行きかふ樣どもの、はかなき水の上に浮びたる、誰も思へば同じ事なる世の常無さなり。我は浮ばず、玉の臺に靜けき身と思ふべき世かは、と思ひ續けらる。

（薫）「橋姫の、心を汲みて、高瀬さす、棹の雫に、袖ぞ濡れぬる。

眺め給へらんかし。」とて、宿直人に持たせ給へり。寒げにいらゝぎたる顏して持て參る。御返り、紙の香など、おほろけならんは恥かしげなるを疾きをこそは斯かる折はとて、

（大君）「棹し歸る、宇治の川長、朝夕の、雫や袖を、朽し果つらん。

身さへ浮きて。」と、いとをかしげに書き給へり。まほに目安く物し給へけりと、心留まりぬれど、「御車率て參りぬ。」と人々騒がし聞ゆれば、宿直人ばかりを召し寄せて、（薫）「歸り渡らせ給はん程に、必ず參るべし。」などの給ふ。濡れたる御衣どもは、皆此人に脱ぎ被け

○晴け侍らん　思の程を打明け語り申さん。
○行人　七日の念佛に參加したる僧侶。
一具　一揃。
○狩の御衣　狩衣。
○處狹かりける　窮屈の思するなり。
○得も滌ぎ捨てぬ　濕ひても匂の去らぬなり。
○君　薫君。

給ひて、取りに遣はしつる御直衣に奉り更つ。

老人の物語、心に懸りて思し出でらる。思ひしよりはこよ無く優りて、大どかにをかしかりつる御けはひども、面影に添ひて、猶思ひ離れ難き世なりけりと、心弱く思ひ知らる。御文奉り給ふ。懸想だちてもあらず、白き色紙の厚肥えたるに、筆は引き繕ひ選りて、墨づき見所ありて書き給ふ。（薫消息）「うちつけなる樣にやと、あい無く止め侍りて、殘多かるも苦しきわざになん。片端聞え置きつるやうに、今よりは御簾の前も、心安く思し許すべくなん。御山籠果て侍らん日數も、承はり置きて、いぶせかりし霧の迷も、晴け侍らん。」などぞ、いとすくよかに書き給へる。左近の將監なる人御使にて、「かの老人尋ねて、文も取らせよ。」との給ふ。宿直人が寒げにてさまよひしなど、哀におぼし遣りて、大なる檜破子樣の物、數多せさせ給ふ。翌の日かの御寺にも奉り給ふ。山籠の僧ども、此頃の嵐には、いと心細く苦しからんを、さておはします程の布施賜ふべからんと思し遣りて、絹綿など多かりけり。御行果てゝ、出で給ふ晨になりければ、行人どもに、綿、絹、袈裟衣など、總て一具の程づゝ、ある限の大德たちに賜ふ。宿直人かの御脱捨の艶にいみじき狩の御衣ども、得ならぬ白き綾の御衣のなよ〳〵と言ひ知らず匂へるを、移し着て、身をはた、得換へぬ物なれば、似つかはしからぬ袖の香を、人毎に咎められ愛でらるゝなん、なか〳〵處狹かりける。心に任せて身を安くも振舞はれず、いとむくつけきまで人の驚く匂を、失ひてばやと思へど、處狹き人の御移香にて、得も滌ぎ捨てぬぞ餘りなるや。

君は姫君の御返事、いと目安く見めかしきを、をかしく見給ふ。宮にも斯く御消息ありき

○悶消息ありき　姫君に。
○懸想だちて　薫君が。
○亡からん後も云々　宮の亡き後姫達の事を頼む由一言薫君に仰ありしなるべし
○詣でんと思して　薫君が宇治へ。
○三の宮　匂兵部卿宮。
○聞え勵まして　薫君が嗾り勵まして。

○まろならましがば　我ならば必ず見すべきなり。
○かの邊　宇治の姫君を云ふ。

○か易き程こそ云々　匂宮はかやすからぬ身分の人なればなり。
○打ち隱ろへつゝ云々　人知れぬ面白き事多き樣なり

など、人々聞えさせ御覽ぜさすれば、(八宮)何かは懸想だちてもてない給はんも、なか〳〵うたてあらん。例の若き人に似ぬ御心ばへなゝめるを、亡からん後もなど、一言打ち仄めかしてしかば、さやうにて心ぞ留めたらん。」などの給ひけり。御自も樣々の御とぶらひの、山の岩屋に餘りし事などの給へるに、詣でんと思して、三の宮の「かやうに奥まりたらんあたりの見優せんこそをかしかるべけれ。」と、あらましごとにだにの給ふものを、聞え勵まして、御心騷がし奉らんと思して、のどやかなる夕暮に參り給へり。例の樣々なる御物語、聞えかはし給ふ序に、宇治の宮のこと語り出でゝ、見し曉の有樣など、委しく聞え給ふに、宮いと切にをかしと思いたり。さればよと御氣色を見て、いとゞ御心動きぬべく言ひ續け給ふ。(匂)「さてそのありけん返事は、などか見せ給はざりし。麿ならましかば。」と怨み給ふ。(薫)「然かし。いと樣々御覽ずべかゝめる端をだに見せ給はぬ。かの邊は、かくいとも埋れたる身に引き籠めて、止むべきけはひにも侍らねば、必ず御覽ぜさせばやと思ひ給ふれど、いかでか尋ね寄らせ給ふべき。か易き程こそ好かまほしくば、いとよく好きぬべき世に侍りけれ。打ち隱ろへつゝ多かゝめるかな。さる方に見所ありぬべき女の、物思はしき打ち忍びたる住處も、山里めいたる隈などに、自ら侍るべかゝめり。この聞えさするわたりは、いと世付かぬ聖樣にて、骨々しうぞあらんと、年頃は思ひ侮り侍りて、耳をだにこそ留め侍らざりけれ。仄なりし月影の見劣りせずば、まほならんばや。けはひ有樣はた然ばかりならんをぞ、あらまほしき程と覺え侍るべき。」など聞え給ふ。果々は、まめだちていと妬く、おほろけの人に心移るまじき人の、かく深く思へるを、疎ならじと、ゆかしう思すこと限無くなり給ひぬ。(匂)「猶又々よく氣色見給へ。」と、人を勸め給ひて、限ある御身の程の彌猛さを厭はしきまで心もとなしと思したれば、をかしくて、(薫)「いでや由なくぞ侍る。暫し世の中に心留めじと思ひ給ふる樣ある身にて、等閑事も愼ましう侍るを、心ながら叶はぬ心つき初めなば、大きに思に違ふべき事なん侍るべき。」と聞え給へば、(匂)「いであな事々し。例のおどろ〳〵しき聖言、見果てゝしがな。」とて笑ひ給ふ。心の中には、かの古人の仄めかしゝ筋などの、いとゞ打ち驚かされて、物哀なるに、をかしと見る事も、目安しと聞くあたりも、何ばかり心にも留らざりけり。

○人を勸め給ひて　薫を勸むるなり。

○心の中には　薫君の心中なり。

○蜉蝣に爭ふ心にて　蜉蝣に等しき身にて。氷魚を蜉蝣に言ひ掛けたり。
○宮　八宮。
○文どもの深き　經文の深意。
○請し下して　山より請じ下してなり。
○義　義理。

○色をも香をも　世の風流も。

十月になりて、五六日の程に、宇治へ詣で給ふ。網代をこそ、此頃は御覽ぜめと、聞ゆる人々あれど、何かは、その蜉蝣に爭ふ心にて、網代にも寄らんと、殺ぎ捨て給ひて、輕らかに網代車にて、縑の直衣指貫縫はせて、殊更び着給へり。宮待ち喜び給ひて、處に付けたる御饗など、をかしうしなし給ふ。暮れぬれば、大殿油近くて、前々見さし給へる文どもの深きなど、阿闍梨も請じ下して、義など言はせ給ふ。打ちもまどろまず、河風のいと荒ましきに、木の葉の散りかふ音と、水の響など、哀も過ぎて、物恐ろしく心細き所の樣なり。明け方近くなりぬらんと思ふ程に、ありししのゝめ思ひ出でられて、琴の音の哀なる事の序作り出でて、(薫)「さきの度霧に惑はされ侍りし曙に、いと珍しき物の音、一聲承はりし殘なん、なか〳〵にいと訝しう飽かず思ひ給へらるゝ。」など聞え給ふ。(八宮)「色をも香をも思ひ捨てゝし後、昔聞きし事も、皆忘れてなん。」との給へど　人召して琴取り寄せて、(八宮)「いと付無くなりにたりや。しるべする物の音に付けてなん思ひ出でらるべかりけ

○峯の松風　拾遺集に「琴の音に峯の松風通ふらし何れのをより調べ初めけん」
○箏の琴の音　中君の彈くを云ふ。
○彼方に　姫君達に。
○思ひ寄らざりし獨言　かの晩の事を姫君達の思へるなり。
○いと片端ならんと　薫君の耳には片端ならん物をと恥ろふなり。
○恥かしう思ひたり　八宮が。
○行末遠き人　姫君達をいふ。
○落ちあぶれて　落ちぶれて。

る。」とて、琵琶召して、客人にそゝのかし給ふ。取りて調べ給ふ。(薫)「更に仄に聞き侍りし同じ物とも、思ひ給へられざりけり。御琴の響がらにやとこそ思ひ給へしか。」とて、心解けても搔き立て給はず。(八宮)「いであなさがなや。しか御耳留るばかりの手などは、何處よりか此處までは傳り來ん。あるまじき御事なり。」とて、琴搔き鳴らし給へる、いと哀に心すごし。片方は峰の松風の、もてはやすなるべし。いと迚々しげにおぼめき給ひて、心ばへある手一つばかりにて止め給ひつ。(八宮)「このわたりに覺無くて、折々仄めく箏の琴の音こそ、心得たるにやと聞く折侍れど、心留めてなどもあらで、久しうなりにけりや。心に任せて、各搔き鳴らすべかゝめるは、河波ばかりや打ち合すらん。論無う物の用にす許の拍子なども留らじとなん覺え侍る。」とて、搔き鳴らし給へと、彼方に聞え給へど、思ひ寄らざりし獨語を聞き給ひけんだにある物を、いと片端ならんと、引き入りつゝ、皆聞き給はず。度々そゝのかし聞え給へど、とかく聞えすまひて止み給ひぬめれば、いと口惜しう覺ゆ。その序にも、かく怪しう世づかぬ思遣にて、過す有樣どもの思の外なる事など、恥かしう思いたり。(八宮)「人にだに如何で知らせじと育み過せど、今日明日とも知らぬ身の、殘少なさに、さすがに行末遠き人は、落ちあぶれて流離へんこと、是のみこそ、實に世を離れん際の絆なりけれ。」と、打ち語らひ給へば、心苦しう見奉り給ふ。(薫)「態との御後見だち、はかゞしき筋に侍らずとも、疎々しからず、思し召されんとなん思ひ給ふる。暫しもながらへ侍らん命の程は、一言も斯く打ち出で聞えさせてん樣を違へ侍るまじくなん。」など申し給へば、いと嬉しきことゝ思しの給ふ。

○かの老人　辨の君。
○故權大納言の君　柏木。
○覺えぬ序に　思ひ掛けぬ序に。
○その世の心知りたる人　當時の事情を知りたる人。
○小侍從と辨と放ちて云々　小侍從と吾とを除きては他に知る人なしとなり。
○まねび侍らず　漏し語らず。
○二人　辨と小侍從。
○斯かる身には措き所無く　辨の胸には餘るとなり。
○落ち散るやうもこそ　散りて人目にも付かんかと。
○仄めかせ給ふ　薫君が。

さて曉方、宮の御行し給ふ程に、かの老人召し出でて逢ひ給へり。姫君の御後見にて侍はせ給ふ。辨の君とぞ云ひける。年は六十に少し足らぬ程なれど、みやびかに故あるけはひして、物など聞ゆ。故權大納言の君の、世と共に物を思ひつゝ、病づき、はかなくなり給ひにし有樣を聞え出でて、泣くこと限無し。實に餘所の人の上と聞かんだに、哀なるべき古事どもを、況して年頃覺束なくゆかしう、如何なりけん事の初にかと、佛にも此事を、定かに知らせ給へと念じつる驗にや、斯く夢のやうに哀なる昔語を覺えぬ序に聞き付けつらんと思すに、涙止め難かりけり。(薫)「さても斯くその世の心知りたる人も殘り給へりけるを、珍らかにも恥かしうも覺ゆる事の筋に、猶斯く言ひ傳ふる類や又もあらん。年頃掛けても聞き及ばざりけるを。」との給へば、(辨)「小侍從と辨と放ちて、又知る人侍らじ。一言にても、又他人にまねび侍らず。斯く物はかなく數ならぬ身の程に侍れど、晝夜かの御影に付き奉りて侍りしかば、自ら物の氣色をも見奉り初めしに、御心より餘りて思しける時々、唯二人の中になん、たまさかの御消息の通も侍りし。傍痛ければ、委しく聞えさせず。今はのとぢめになり給ひて、聊の給ひ置く事の侍りしを、斯かる身には措き所無く、いぶせく思ひ給へ渡りつゝ、如何にしてかは聞し召し傳ふべきと、はかゞしからぬ念誦の序にも、思ひ給へつるを、佛は世におはしましけりとなん、思ふ給へ知りぬる。御覽ぜさすべき物も侍り。今は何かは燒きも捨て侍りなん。かく朝夕の消を知らぬ身の、打ち捨て侍りなば、落ち散るやうもこそと、いとうしろめたく思ひ給ふれど、此宮わたりにも、時々仄めかせ給ふを、待ち出で奉りしかば、少し賴もしく、かゝる折もやと念じ侍

○此世の事にも侍らじ　前世の宿緣と疊ゆとなり。
○母に侍りし人　辨の母柏木の乳母なり。
○藤衣も裁ち重ね　同時に柏木と母との喪に服するなり。
○年頃よからぬ人の云々　辨を語らひて妻とせし人のありしを云ふ。
○あらぬ世　別の世。
○此宮は父方に付けて云々　辨の父なる左中辨は八宮の北の方の弟なればなり。
○冷泉院の女御殿　弘徽殿女御、柏木の御妹なり。
○深山隱れの朽木　「形こそ深山隱れの朽木なれ心は花になさはなりなん」と云ふ古歌の詞を取れるなり。
○めぐらひ　生きめぐるにて世にながらふるをいふ。
○罪重き身にて　實の父を知らで罪深からんとなり。
○我猶生くべくも云々　存命なり難しと柏木のいひしなり。
○やがて別れ侍りにし　西國へ行きしなり。
○つれなくて　中を見もせりつる力出でまうで來てなん。更に是は此世の事にも侍らじ。」と、泣く〳〵細に、生れ給ひける程の事も能く覺えつゝ聞ゆ。(辨)「空しうなり給ひし騷に、母に侍りし人は、やがて病づきて、程も經ず隱れ侍りにしかば、いとゞ思ひ給へ沈み、藤衣も裁ち重ね、悲しき事を思ひ給へし程に、年頃よからぬ人の心を附けたりけるが、人をはかりごちて、西の海のはてまで取り持て罷りにしかば、京の事さへ跡絕えて、其人も彼處にて亡せ侍りにし後、十年餘にてなん、あらぬ世の心地して、罷り上りたりしを、此宮は父方に附けて、童より參り通ふ故侍りしかば、今は斯う世に交らふべき樣にも侍らぬを、冷泉院の女御殿の御方などこそは、昔聞き馴れ奉りしわたりにて、參り寄るべく侍りしかど、はしたなく覺え侍りて、え差し出で侍らで、深山隱れの朽木になりて侍るなり。小侍從は何時か亡せ侍りにけん。そのかみの若盛と見侍りし人は、數少くなり侍りにける末の世に、多くの人に後る命を、悲しく思ひ給へてこそ、さすがにめぐらひ侍れ。」など聞ゆる程に、例の明け果てぬ。(薫)「よし然らば、此昔物語は盡きすべうなんあらぬ。又人聞かぬ心安き所にて聞えん。侍從と云ひし人は、仄に覺ゆるは、五六ばかりなりし程にや、俄に胸を病みて亡せにきとなん聞く。かゝる對面無くば、罪重き身にて、過ぎぬべかりけること。」などの給ふ。さゝやかに押し卷き合はせたる反故どもの、薫臭きを袋に縫ひ入れたる、取出でて奉る。(辨)「御前にて失はせ給へ。我猶生くべくもあらずなりにたりとの給はせて、此御文を取り集めて給はせたりしかば、小侍從に又逢ひ見侍らん序に、定かに傳へ參らせんと思ひ給へしを、やがて別れ侍りにしも、私事には飽かず悲しうなん思ひ給ふる。」と聞ゆ。つれなくて、

ねばなり。
○院の女一宮　冷泉院の女一宮、母は致仕大臣の女なり。
○組　組紐。
○かの御名　柏木の名。
○かの御手　柏木の手跡。
○御容も變りて　女三宮の出家せしをいふ。
○つぶ〳〵と　つぶさに。
○二葉の程　幼き薫君を云ふ。
○命あらば云々　薫君を松に寄せて詠めり。

これは隱い給ひつ。かやうの古人は、問はず語りにや、怪しき事のためしに言ひ出づらんと、苦しくおぼせど、返す〴〵も散らさぬ由を誓ひつる、然もやと又思ひ亂れ給ふ。御粥强飯など參り給ふ。(薫)「昨日は暇の日なりしを、今日は內裏の御物忌も明きぬらん。院の女一宮惱み給ふ御とぶらひに、必ず參るべければ、かた〴〵暇なく侍るを、又此頃過して、山の紅葉散らぬさきに參るべき。」由聞え給ふ。(八宮)「かく屢々立ち寄らせ給ふ光に、山の蔭も少し物明らむる心地してなん。」など、喜び聞え給ふ。

歸り給ひて、先づ此袋を見給へば、唐の浮線綾を縫ひて、上といふ文字を上に書きたり。細き組して口の方を結ひたるに、かの御名の封つきたり。開くるも恐ろしう覺え給ふ。色々の紙にて、たまさかに通ひける御文の返事、五六ぞある。さてはかの御手にて、病は重く限になりたるに、又仄にも聞えんこと難くなりぬるを、ゆかしう思ふ事は添ひにたり。御容も變りておはしますらんか。樣々悲しき事を、檀紙五六枚に、つぶ〳〵と怪しき鳥の跡のやうに書きて、

(柏木)「目の前に、此世を背く、君よりも、餘所に別るゝ、魂ぞ悲しき。」

又端に、「めづらしく聞き侍る二葉の程も、うしろめたう思ひ給ふる方はなけれど、命あらば、それとも見まし、人知れず、岩根に留めし、松の生末。」

書きさしたるやうに、いと亂りがはしくて、侍從の君にと上には書き附けたり。蠹と云ふ蟲の住處になりて、古めきたる黴臭くながら、跡は消えず。唯今書きたらんにも違はぬ言の葉どもの、細々と定かなるを見給ふに、實に落ち散りたらましかばと、うしろめたう、

いとほしき事どもなり。斯かる事、世に又有らんやと、心一つにいとゞ物思はしさ添ひて、内へ參らんと思しつるも、出で立たれず。宮の御前に參り給へれば、いと心も無く、若やかなる樣し給ひて、經讀み給ふを、恥らひて持て隱し給へり。何かは知りにけりとも知られ奉らんなど、心に籠めて、萬に思ひ居給へり。

○宮の御前　女三宮の御前

○初瀬　大和國にあり。
○宇治の邊の御中宿り云々　宇治の八宮へ立ち寄るべき下心なり。
○怨めしと云ふ人もありける里の名　「世を宇治山」「身を宇治橋」など歌に詠めるあるを云ふ。
○生荒まじ　何となく物淋し。
○宰相の中將　薫君。
○御子の君達　夕霧の子息達。
○帝　今上。
○后　母后。
○私の君　主上を別として最上の君の意。

椎本

此卷は薫君二十三歳の二月より二十四歳の夏までの事を記せり。卷名は「立ち寄らん蔭と頼みし椎が本空しき床になりにけるかな」といへる歌に取れり。

二月の二十日の程に、兵部卿の宮初瀬に詣で給ふ。舊き御願なりけれど、おぼしも立たで年頃になりけるを、宇治の邊の御中宿りのゆかしさに、多くは催され給へるなるべし。怨めしと云ふ人もありける里の名の、なべて睦しうおぼさるゝ故もはかなしや。上達部いと數多仕う奉り給ふ。殿上人など更にも言はず、世に殘る人少く仕うまつれり。六條院より傳はりて、右の大殿領り給ふ處は、河より遠方に、いと廣く面白くてあるに、御設せさせ給へり。大臣も還さの御迎に參り給ふべく思したるを、俄なる御物忌の重く慎み給ふべく申したれば、え參らぬ由のかしこまり申し給へり。宮生荒まじと思したるに、宰相の中將今日の御迎に參り合ひ給へるに、なか〳〵心安くて、かのわたりの氣色も傳へ寄らんと御心行きぬ。大臣をば打解けて見えにくゝ、事々しき物に思ひ聞え給へり。御子の君達、右大辨、侍從の宰相、權中將、頭少將、藏人の兵衞佐など、皆侍ひ給ふ。帝后も心殊に思ひ聞え給へる宮なれば、大方の御覺もいと限無く、況いて六條院の御方ざまは、次々の人も、皆私の君に心寄せ仕うまつり給ふ。處に附けたる御しつらひなど、をかしう爲做して碁、雙六、彈碁の盤どもなど取り出でて、心々にすさび暮らし給ひつ。宮は習ひ給はぬ御ありきに、惱ましくおぼされて、此處にやすらはんの御心も深ければ、打ち休み給ひて、

○聖の宮　八宮。
○唯棹し渡る程なれば　すぐ川向なれば。
○六條院　源氏の君。
○致仕の大臣の御族　柏木の父大臣の一族。
○山櫻　山藤。
○同じうは近きゆかりにて云々　八宮の心は薫を婿にして見たしとなり。
○かの宮　八宮。
○かれより　八宮より。

夕つ方ぞ御琴など召して遊び給ふ。例の斯う世離れたる所は、水の音も、もてはやして、物の音澄みまさる心地して、かの聖の宮にも、唯棹し渡る程なれば、追風に吹き來る響を聞き給ふに、昔の事思し出でられて

（八宮）「笛をいとをかしくも吹き通したるかな。誰ならん。昔の六條院の御笛の音聞きしはいとをかしけに愛敬づきたる音にこそ吹き給ひしか。これは澄みのぼりて、事々しき氣の添ひたるは、致仕の大臣の御族の笛にこそ似たゝなれ。」など、獨言ちおはす。（八宮）「哀に久しくなりにけるや。かやうの遊などもせで、あるにもあらで過し來にける年月の、さすがに多く數へらるゝこそ、甲斐なけれ。」などの給ふ序にも、姫君たちの御有樣あたらしく、かゝる山懷に引き籠めては止まずもがなと思し續けらる。宰相の君の、同じうは近きゆかりにて見まほしけなるを、然しも思ひ寄るまじかゝめり。況いて今やうの心淺からん人をば、如何でかは、など思し亂れて、徒然と眺め給ふ。處は春の夜もいと明し難きを、心遣り給へる旅寢の宿りは、醉の紛れにいと疾う明けぬる心地して、飽かず歸らんことを宮はおぼす。

はるゞゝとかすみ渡れる空に、散る櫻あれば、今開け初むるなど、色々見渡さるゝに、河沿柳の起き伏し靡く水影など、疎ならずをかしきを、見習ひ給はぬ人は、いと珍しく見捨て難しとおぼさる。宰相は斯かる便を過さず、かの宮に詣でばやと思せど、數多の人目を避きて、一人漕ぎ出で給はん船渡りの程も輕らかにや、と思ひやすらひ給ふ程に、かれより御文あり。

○山風に云々　薫君を白波に寄せて詠めり。
○宮思すあたりと見たまへば　匂宮は思寄する八宮方よりの文と見給ひしかば。
○遠近の云々　八宮の心を宇治の河風に寄せて詠めり君の心には隔て給ふなとなり。
○酣醉樂　右樂の名。
○此處は又樣異に云々　八宮の御所の體なり。
○壹越調の心に云々　櫻人は呂の歌にて雙調なるを壹越調にて彈き給ふなり。
○なほ孫王　末々の諸王。
○かの宮は云々　匂宮は手輕に八宮を訪ふ事も叶はぬ重き御身の程をとなり。

（八宮）「山風に、霞吹き解く、聲はあれど、隔てゝ見ゆる、遠方の白波。」

草にいとをかしう書き給へり。宮思すあたりと見給へば、いとをかしくおぼいて、この御返りは我せんとて、

（匂）「遠近の、汀の波は、隔つとも、尙吹き通へ、宇治の河風。」

中將は詣で給ふ。遊に心入れたる君達さそひて、棹し遣り給ふ程、酣醉樂遊びて、水にのぞきたる廊に、造りおろしたる橋の心ばへなど、さる方にいとをかしう故ある宮なれば、人々心して船よりおり給ふ。此處は又樣異に、山里びたる網代屏風などの、殊更に事殺ぎて、見所ある御しつらひを、さる心地して搔き拂ひ、いといたうしなし給へり。古の音などいと二無き彈物どもを、態と設けたるやうにはあらで、次々彈き出で給ひて、壹越調の心に、櫻人遊び給ふ。主の宮の御琴を、かゝる序にと人々思ひ給へれど、箏の琴をぞ心にも入れず、折々搔き合はせ給ふ。耳馴れぬ故にやあらん、いと物深く面白しと、若き人々思ひ沁みたり。處に附けたる饗、いとをかしうし給ひて、餘所に思ひ遣りし程よりは、なま孫王めく賤しからぬ人數多、王の四位の古めきたるなど、かく人目見るべき折と、豫ていとほしがり聞えけるにや、然るべき限參り合ひて、瓶子取る人もきたなげならず、さる方に古めきて、由々しうもてなし給へり。客人たちは、御女たちの住ひ給ふらん御有樣思ひ遣りつゝ、心盡す人もあるべし。かの宮は、況いてか易き程ならぬ御身をさへ、處せく思さるゝを、かゝる折にだにと忍びかね給ひて、面白き花の枝を折らせ給ひて、御供に侍ふ上童のをかしきして奉り給ふ。

○山櫻云々　姫君のあたり懷しく思ひて此挿頭花を折りたりとなり。
○野を睦しみとやありけん　匂宮が宇治に一夜を明し給ひしかば草紙地に斯く書けるなり。
○挿頭折る云々　此方には御志あらで唯花故に此邊を過ぎ給ふばかりぞとなり。
○藤大納言仰言にて云々　紅梅大納言勅を蒙りて正式に御迎に來り給へるなり。
○宮は　匂宮は。
○うるさくて尋ねも聞かぬなり　例の作者の詞なり。
○しるべなくても　宮のしるべによらでも。
○宮も　八宮。
○姫君はかやうのこと云々　大姫君はかゝる筋の事は堅くつゝしみ給ふなり。

(匂)「山櫻、匂ふあたりに、尋ね來て、同じかざしを、折りてけるかな。」

野を睦しみとやありけん。御返りは、如何でかはなど聞えにくゝ思し煩ふ。かゝる折の事態とがましくもてなし、程の經るも、なか〳〵憎き事になんし侍りしなど、古人ども聞ゆれば、中の君にぞ書かせ奉り給ふ。

(中君)「挿頭折る、花の便に、山賤の、垣根を過ぎぬ、春の旅人。」

野を分きてしも。」と、いとをかしけに勞々しく書き給へり。實に河風も心分かぬ樣に、吹き通ふ物の音ども、面白く遊び給ふ。御迎に藤大納言、仰言にて參り給へり。人々數多參り集ひ、物騒がしくて競ひ歸り給ふ。若き人々、飽かず顧みのみせられける。宮は又さるべき序してとおぼす。花盛にて、四方の霞も眺めやる程の見所あるに、唐のも大和のも歌ども多かれど、うるさくて尋ねも聞かぬなり。

物騒がしくて、思ふ儘にも言ひ遣らずなりにしを、飽かず宮はおぼして、しるべ無くても御文は常にありける。宮も「猶聞え給へ。態と懸想だちても持て做さじ。なか〳〵心時めきにもなりぬべし。いとすき給へる御子なれば、かゝる人なんと聞き給ふが、猶もあらぬすさびなンめり。」と、そゝのかし給ふ時々、中の君ぞ聞え給ふ。姫君はかやうの事、戯にも、もて離れ給へる御心深さなり。

何時となく心細き御有樣に、春の徒然は、いとゞ暮し難く眺め給ふ。ねびまさり給ふ御態貌ども、愈優り、あらまほしくをかしきも、なか〳〵心苦しう、かたほにもおはせましかば、あたらしく惜しき方の思は薄くやあらまし、など明暮思し亂る。姉君廿五、中の君廿二にぞなり給ひける。

○出で立ちいそぎ　後世の準備。
○涼しき道　極樂淨土。
○御心強さ　道心堅固。
○思す樣にはあらずとも　十分に思ふやうにならずとも。
○三宮　匂宮なり。中君に執心深き由なり。
○かの老人　辨尼。
○音羽の山　都近き處なり　後撰集に「松蟲の初聲さそふ秋風は音羽山より吹きはじめけり」
○槇の山　宇治の近くに在り。

宮は重く慎み給ふべき年なりけり。物心細く思して、御行常よりも弛み無くし給ふ。世に心留め給はねば、出で立ちいそぎをのみ思せば、涼しき道にも趣き給ひぬべきを、唯この御事どものいといとほしく、限無き御心強さなれど、必ず今はと見捨て給はん御心は亂れなんと、見奉る人も推し量り聞ゆるを、思す樣にはあらずとも、なのめにさても人聞口惜しかるまじう、見許されぬべき際の人の、眞心に後見聞えんなど、思ひ寄り聞ゆるあらば知らず顏にて許してん。一所世に住みつき給ふよすがあらば、それを見讓る方に慰め置くべきを、さまで深き心に尋ね聞ゆる人も無し。稀々ははかなき便に、すきごと聞えなどする人、又若々しき人の心のすさびに、物詣の中宿り、往來の程の等閑事に、氣色ばみかけて、さすがに斯く眺め給ふ有樣など、推し量り、侮らはしげにもてなすは、めざましうて、無けのいらへをだにせさせ給はず。三宮ぞ尙見では止まじと思す御心深かりける。さるべきにやおはしけん。

宰相の中將、その秋中納言になり給ひぬ。いとゞ匂優り給ふ世の營に添へても、思すこと多かり。如何なる事と、いぶせく思ひ渡りし年頃よりも、心苦しうて、過ぎ給ひにけん古ざまの思ひ遣らるゝに、罪輕くなり給ふばかり行もせまほしくなん。かの老人をば哀なるものに思ひ置きて、いちじるき樣ならず、とかく紛らはしつゝ、心寄せとぶらひ給ふ。宇治に詣でゝ久しうなりにけるを思ひ出でゝ參り給へり。七月ばかりになりにけり。都にはまだ入り立たぬ秋の氣色を、音羽の山近く、風の音もいと冷やかに、槇の山邊も僅に色づき

○省き侍る身　何事も省き捨てたる身。
○さる方にても云々　我身出家しても生きたらん限は見捨てじとなり。
○物の上手　管絃の巧なる人。
○子の道の闇を云々　親として子を思ふにも。
○男はいとしも云々　男の子はさして親の心を亂さずとなり。
○女は云々　女の子は不運の者と思ひ諦むべきものにても尚氣に懸りて心苦しかろべしとなり。
○迦葉も云々　乾闥婆王奏樂直須彌震動大海瞬波迦葉起舞と云ふ故事。

て猶尋ね來たるに、をかしう珍しう覺ゆるを、宮は況いて、例よりも待ち喜び聞え給ひて此度は心細げなる物語、いと多く申し給ふ。(八宮)「亡からん後、此君達を、然るべき物の便にもとぶらひ、思ひ捨てぬ者に數まへ給へ。」などおもむけつゝ聞え給へば、(薫)「一言にても承り置きてしかば、更に思う給へ忘るまじくなん。世の中に心を留めじと省き侍る身にて、何事も頼もしげ無き生先の少さになん侍れど、さる方にても廻らひ侍らん限は、變らぬ志を御覽じ知らせんとなん思う給ふる。」など聞え給へば、いと嬉しと覺えたり。夜深き月の明に差し出でて、山の端近き心地するに、念誦いと哀にし給ひて、昔物語し給ふ。(八宮)「此頃の世は如何がなりにたらん。宮中などにて斯やうなる秋の月に、御前の御遊の折に侍ひ合ひたる中に、物の上手とおぼしき限、取々に打ち合はせたる拍子など、事々しきよりも、由ありと覺ある女御更衣の御局々の、己がじゝは挑ましく思ふうはべの情をかはすべかゝめるを、夜深き程の人の氣しめりぬるに、心疚しく搔い調べ、仄に綻び出でたる物の音など、聞き所あるが多かりしかな。何事にも女は玩の端にしつべく、物はかなき物から、人の心を動すくさはひになんあるべき。されば罪の深きにやあらん。子の道の闇を思ひ遣るにも、男はいとしも親の心を亂さずやあらん。女は限ありて、言ふ甲斐無き方に思ひ捨つべきにも、猶いと心苦しかるべき。」など、大方の事に附けての給へる、如何が然おぼさゞらんと、心苦しく思ひ遣らるゝ御心の中なり。(薫)「總て誠に然思ひ給へ捨てたる故にや侍らん。自の事にては、如何にも〳〵深う思ひ知る方の侍らぬを、實にはかなき事なれど、聲に愛づる心こそ、背き難き事に侍りけれ。賢しう聖だつ迦葉も、されば

○世籠れるどち　生先遠き姫君達。
○此一言　薫君の一言の契
○如何ならん云々　一言の契を草の庵に寄せて詠めり
○相撲　七月に行はるゝ節會。
○古人　辨尼。
○透影　御簾を透せる薫君の影。
○三宮　匂宮。
○御心もて許い給ふ　八宮が姫君を薫君に。
○さしも急がれぬよ　薫君が。
○宿世異にて云々　宿緣同じからで他人の妻とめたらばとなり。

や、立ちて舞ひ侍りけん。」など聞えて、飽かず一聲聞きし御琴の音を、切にゆかしがり給へば、疎々しからぬ始にもとや思すらん、御自らあなたに入り給ひて、切にそゝのかし聞え給ふ。箏の琴をぞいと仄に、搔き鳴して止み給ひぬる。いとゞ人のけはひも絶えて、哀なる空の氣色、所の樣に態となき御遊の心に入りて、をかしう覺ゆれど、打解けても如何でかは引き合はせ給はん。(八宮)「自ら斯ばかり馴らし初めつる殘は、世籠れるどちに讓り聞えてん。」とて、宮は佛の御前に入り給ひぬ。

(八宮)「我亡くて、草の庵は、荒れぬとも、此一言は、枯れじとぞ思ふ。かゝる對面も、この度や限ならんと物心細きに、忍びかねて、頑しき僻事多くもなりぬるかな。」とて、打ち泣き給ふ。客人、

(薫)「如何ならん、世にか枯れせん、長き世の、契結べる、草の庵は。」

相撲など、公事ども紛れ侍る頃過ぎて侍はん。」など聞え給ふ。こなたにて、かの問はず語の古人召し出でゝ、殘多かる物語などせさせ給ふ。入る方の月は隈なく差し入りて、透影なまめかしきに、君達も奥まりておはす。世の常の懸想びてはあらず、心深う物語のどやかに聞えつゝ物し給へば、さるべき御答など聞え給ふ。

三宮はいとゆかしうおぼいたる物をと、心の中には思ひ出でつゝ、我心ながら、猶人には異なりかし。さばかり御心もて許い給ふ事の、さしも急がれぬよ。持て離れて、はた、あるまじき事とはさすがに覺えず。かやうにて物をも聞えかはし、折節の花紅葉に附けて、哀をも情をも通はすに、憎からず物し給ふあたりなれば、宿世異にて、外ざまにもなり給

○領じたる云々　自分の物の如く思ひたり。

○例の靜なる所　前にも謹り給ひし阿闍梨の寺なり。

○思ひ慰む方ありてこそ　父母の中何れか一人あらば

○見讓る人　我に代りて後見すべき人。

○過ぎ給ひにし　亡せ給ひにし母上。

○餘所のもどき　他人の批評。

○ともかくも云々　姫君達の心中なり。

はんは、さすがに口惜しかるべく、領じたる心地しけり。まだ夜深き程に歸り給ひぬ。心細く殘無げにおぼいたりし御氣色を、思ひ出で聞え給ひつゝ、騷がしき程過して詣でんとおぼす。兵部卿の宮も此秋の程に、紅葉見におはしまさんとさるべき序を思し運らす。御文は絶えず奉り給ふ。女はまめやかに思すらんとも思ひ給はねば、煩しくもあらで、はかなき樣にもてなしつゝ、折々に聞えかはし給ふ。

秋深くなり行くまゝに、宮はいみじう物心細く覺え給ひければ、例の靜なる所にて、念佛をも紛れ無くせんと思して、君達にも然るべき事聞え給ふ。（八宮）「世の事として、終の別を遁れぬわざなゝめれど、思ひ慰む方ありてこそ、悲しさをもさます物なゝめれ。又見讓る人も無く、心細けなる御有樣どもを、打ち捨てゝんがいみじき事。然れども然ばかりの事に妨げられて、長き世の闇にさへ惑はんが益無きを、且見奉る程だに思ひ捨つる世を去りなん後の事知るべき事にはあらねど、我身一つにあらず、過ぎ給ひにし御面伏に、輕々しき心ども遣ひ給ふな。おぼろげの便ならで、人の言に打ち靡き、此山里をあくがれ給ふな。唯斯う人に違ひたる契異なる身とおぼし做して、此處に世を盡してんと思ひ取り給へ。ひたぶるに思ひし做せば、異にもあらず過ぎぬる年日なりけり。況して女は然る方に堪へ籠りて、いちじるくいとほしげなる餘所のもどきを、負はざらんなん宜かるべき。」などの給ふ。ともかくも身のならん樣までは思しも流されず、唯如何にしてか後れ奉りては世に片時もながらふべきと思すに、かく心細き樣の御あらましごとに、言ふ方なき御心惑どもになん。心の中にこそ思ひ捨て給ひつゝめど、明暮御傍に習はい給ひて、俄に別れ給

○口惜しらさすらへん契忝く　王孫ともあらん人の前世の契とは云ひながら流浪せんは口惜しく恐れがましとなり。

○二所　大君と中の君と。

○一人々々云々　古今集に「思ふどちひとりびとりが纏ひ死なば誰におほせて藤衣きん」

○三昧　念佛三昧。

はんは辛き心ならねど、實に怨めしかるべき御有樣になんありける。明日入り給はんとての日は、例ならず此方彼方たゝずみありき給ひて見給ふ。いと物はかなく、假初の宿りにて、過い給ひける御住居の有樣を、亡からん後如何にしてかは、若き人の堪へ籠りては過い給はんと、涙ぐみつゝ、念誦し給ふ樣いと清けなり。大人びたる人々召し出でて、（八宮）「後安く仕うまつれ。何事も本よりか易く、世に聞えあるまじき際の人は、末の衰も常の事にて紛れぬべかゝめり。かゝる際になりぬれば人は何とも思はざらめど、口惜しうてさすらへん契忝く、いとほしき事なん多かるべき。物淋しく心細き世を經るは、例の事なり。生れたる家の程、掟のまゝにもてなしたらんなん、聞耳にも、我心地にも、過無くは覺ゆべき。賑はゝしく、人數めかんと思ふとも、その心にも叶ふまじき世とならば、ゆめ〳〵輕々しく、善からぬ方にもてなし聞ゆな。」などの給ふ。まだ曉に出で給ふとても、こなたに渡り給ひて、（八宮）「無からん程心細くな思しわびそ。心ばかりは遣りて遊などはし給へ。何事も思にえ叶ふまじき世をな思し入れそ。」など、顧み勝にて出で給ひぬ。二所いとど心細く物思ひ續けられて、起き伏し打ち語らひつゝ、一人々々無からましかば、如何でか明し暮らさまし。今行く末も定無き世にて、若し別るゝやうもあらばなど、泣きみ笑ひみ、戯事も實事も、同じ心に慰めかはして過し給ふ。

かの行ひ給ふ三昧、今日果てぬらんと、何時しかと待ち聞え給ふ夕暮に、人參りて、（八宮使者）「今朝より惱ましうてなんえ參らぬ。風かとてとかく繕ふと物する程になん。さるは例よりも對面心許無きを。」と聞え給へり。胸潰れて如何なるにかと思し歎き、御衣ども綿厚く

○そこはかと無く　何處ともなく。
○ことばにて　綱文は無きなり。
○限の旅　今を限の旅路。
○君達　姫君達。
○今更になでう給ひそ　この寺にて終を遂げ給へとなり。正念の往生を勸むるなり。
○そなたの蔀　阿闍梨の寺に向ひたる方の蔀。
○人來て　山寺より使の來しなり。
○如何でかは後れじと　姫君達の共に死なんと歎き給ふなり。
○今更になでう云々　今更に亡き御骸など見給ふはあるまじきことなり。

て、いそぎせさせ給ひて、奉れなどし給ふ。二三日は下り給はず、如何に〳〵と人奉り給へど、(八宮)「殊におどろ〳〵しくはあらず。そこはかと無く苦しうならば、今念じて。」など、言葉にて聞え給ふ。阿闍梨つと侍ひて仕う奉りけり。(阿闍梨)「はかなき御惱と見ゆれど、限の旅にもおはしますらん。君達の御事、何かおぼし嘆くべき。人は皆御宿世と云ふもの異々なれば、御心に懸るべきにもおはしまさず。」と、愈思し離るべき事を聞え知らせつゝ、(阿闍梨)「今更にな出で給ひそ。」と、諫め申すなりけり。

八月二十日の程なりけり。大方の空の氣色もいとゞしき頃、君達は朝夕霧の晴るゝ間も無く思し嘆きつゝ眺め給ふ。有明の月のいと華やかに差し出でて、水の面もさやかに澄みたるを、そなたの蔀上げさせて、見出し給へるに、鐘の聲幽に響きて、明けぬなりと聞ゆる程に、人來て、「この夜中ばかりになん、亡せ給ひぬる。」と泣く〳〵申す。心に懸けて、如何にとは絶えず思ひ聞え給へれど、打ち聞き給ふには、あさましく物覺えぬ心地して、いとゞ斯かる事に、涙も何ちか往にけん、唯うつぶし臥し給へり。いみじき事も見る目の前にて、覺束無からぬこそ常の事なれ。覺束無さ添ひて、思し嘆くこと道理なり。しばしにても後れ奉りて、世にあるべき物と思し習はぬ御心地どもにて、如何でか後れじと泣き沈み給へど、限ある道なりければ、何の甲斐なし。阿闍梨年頃契り置き給ひける儘に、後の御事も萬に仕う奉る。亡き人になり給へらん御樣貌をだに、今一度見奉らんと思しの給へど、(阿闍梨)「今更に何でう然る事かは侍るべき。日頃も又逢ひ見給ふまじき事を聞え知らせつれば、今は況して、互に御心留め給ふまじき御心づかひを、習ひ給ふべきなり。」とのみ

○見讓る人なき　姫君達の後見なきをいふ。
○中納言殿　薬君。
○大方世の有樣　有爲轉變の世の樣。
○後の御業など　法事萬端なり。
○暫し廻らひ　暫時ながらふるなり。

聞ゆ。おはしましける御有樣を聞き給ふにも、阿闍梨の餘りさかしき聖心を、憎くつらしとなん思しける。入道の御本意は、昔より深くおはせしかど、斯う見讓る人無き御事どもの見捨て難きを、生ける限は明暮え去らず見奉るを、世に心細き世の慰めにも、思し離れ難くて過い給へるを、限ある道には先だち給ふも、慕ひ給ふ御心も、叶はぬわざなりけり。

中納言殿には聞き給ひて、いと敢無く口惜しく、今一度心のどかにて聞ゆべかりける事、多う殘りたる心地して、大方世の有樣を思ひ續けられて、いみじう泣い給ふ。「復相見んこと難くや。」などの給ひしを、猶常の御心にも、朝夕の隔て知らぬ世のはかなさを、人より殊に思う給へりしかば、耳馴れて、昨日今日と思はざりけるを、返すゞ〳〵飽かず悲しくおぼさる。阿闍梨の許にも、君達の御とぶらひも細やかに聞え給ふ。かゝる御とぶらひなど、また音づれ聞ゆる人だに無き御有樣なれば、物覺えぬ御心地どもにも、年頃の御心ばへの哀なゝめりしなどをも、思ひ知り給ふ。世の常の程の別れだに差し當りては、又類無きやうにのみ、皆人の思ひ惑ふ物なゝめるを、慰む方無げなる御身どもにて、如何樣なる心地どもし給ふらんと思し遣りつゝ、後の御業などあるべき事ども推し量りて、阿闍梨にもとぶらひ給ふ。此處にも老人どもに事寄せて、御誦經などの事も思ひ遣り聞え給ふ。

明けぬ夜の心地ながら、九月にもなりぬ。野山の氣色況して、袖の時雨を催し勝に、ともすれば、爭ひ落つる木の葉の音も、水の響も、涙の瀧も一つ物のやうに昏れ惑ひて、斯うては如何でか、限あらん御命も暫し廻らひ給はんと、侍ふ人々は心細く、いみじく慰め聞

○此處　宇治の宮。

○斯うはあらざンなるを　薫君にはかくつれなくはあらじを。

○便なき　八宮薨去し給ひし故に。

○牡鹿鳴く云々　姫君達の涙を小萩が露に寄せて詠めり。

○掻き曇り物見えぬ心地　涙に掻昏れたるなり。

○如何でか歸り參らん云々　いかで歸らるべき。今夜は一泊せよとなり。

えつゝ思ひ惑ふ。此處にも念佛の僧侍ひて、おはしましゝ方は、佛を形見に見奉りつゝ、時々參り仕うまつりし人々の、御忌に籠りたる限は、哀に行ひて過す。

兵部卿宮よりも、度々とぶらひ聞え給ふ。さやうの御返りなど聞えん心地もし給はず。覺束無ければ、中納言には斯うはあらざンなるを、我をば猶思ひ放ち給へるなゝめりと、怨めしくおぼす。紅葉の盛に、文など作らせ給はんとて、出で立ち給ひしを、斯く此わたりの御逍遙便なき頃なれば、おぼし止まりて口惜しくなん。御忌も果てぬ。限あれば涙も隙もやと思し遣りて、いと多く書き續け給へり。時雨勝なる夕つ方、

（匂）「牡鹿鳴く、秋の山里、如何ならん、小萩が露の、かゝる夕暮。」

只今の空の氣色を、思し知らぬ顔ならんも、餘り心づき無くこそあるべけれ。枯れ行く野邊も別けて眺めらるゝ頃になん。」などあり。（大君）「實にいと餘り思ひ知らぬやうにて、度々になりぬるを、猶聞え給へ。」など、中の君を例のそゝのかして書かせ奉り給ふ。今日までながらへて、硯など近く引き寄せて見るべき物とやは思ひし。心憂くも過ぎにける日數かな、とおぼすに、又掻き曇り、物見えぬ心地し給へば、推し遣りて、（中君）「猶えこそ書き侍るまじけれ。やう〳〵斯う起き居られなどし侍るが、實に限ありけるにこそと覺ゆるも、怨めしう、心憂くて。」とらうたげなる樣に、泣き萎れておはするもいと心苦し。夕暮の程より來ける御使、宵少し過ぎてぞ來たる。「如何でか歸り參らん。今夜は旅寢して。」と言はせ給へど、（使）「立ち還りこそ參りなめ。」と急げば、いとほしうて、我賢しう思ひ沈め給ふにはあらねど、見煩ひ給ひて、

○涙のみ云々　我等の境涯は唯泣くより外の事は無しとなり。

○黒き紙　鈍色の紙にて忌中の料紙なり。

○篠の隈を云々　古今集に「篠の隈ひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見ん」とある歌に取れり。

○孰れか孰れならん　大君か中君か、孰れならん。

○待つとて　使の還るを待つとて。

○朝霧に云々　父宮に別れし姫君達を友に離れし鹿に寄せて詠めり。

○諸聲は云々　思は此方も劣るまじとなり。

○一所　八宮を指す。

○思はずなる事の紛れ　不慮の餘事。

（大君）「涙のみ、霧塞がれる、山里は、籬に鹿ぞ、諸聲に鳴く。」

黒き紙に、夜の墨つぎも辿々しければ、引き繕ふ所も無く筆に任せて押し包みて出し給ひつ。御使は、木幡山の程も、雨催にいと恐ろしげなれど、さやうの物おぢすまじきを選り出で給ひけん。むつかしげなる篠の隈を、駒引き留むる程も無く、打ち早めて、片時に參りつきぬ。御前に召しても、いたく濡れて參りたれば、祿給ふ。前々御覽ぜしにはあらぬ手の今少し大人びまさりて、由づきたる書きざまなどを、孰れか孰れならんと、打も置かず御覽じつゝ、頓にも大殿籠らねば、待つとて起きおはしまし、又御覽ずる程の久しきは如何ばかり御心に泌む事ならんと、御前なる人々さゝめき聞えて、憎み聞ゆ。ねぶたければなゝめり。まだ朝霧深き晨に、急ぎ起きて奉り給ふ。

（匂）「朝霧に、友惑はせる、鹿の音を、大方にやは、あはれとも聞く。」

諸聲は劣るまじくこそ。」とあれど、餘り情だたんもうるさし。一所の御蔭に隱ろへたるを賴所にてこそ、何事も心安くて過しつれ。心より外にながらへて、思はずなる事の紛れ露にてもあらば、うしろめたけにのみ思し置くめりし、亡き御魂にさへ瑕やつけ奉らんと、なべていとつゝましう恐ろしうて、聞え給はず、此宮などをば、輕らかにおしなべての樣にも思ひ聞え給はず、無けの走り書い給へる御筆づかひ、言の葉もをかしき樣になまめき給へる御けはひを、數多は見知り給はねど、これこそはめでたきなゝめれと見給ひながら、その故々しく情ある方に言をまぜ聞えんも、つき無き身の有樣どもなれば、何か唯かゝる山伏だちて過してん、とおぼす。

○山伏だちて云々　風流氣なき行者めきて世を過さんとなり。

○自ら詣で給へト　薫君が宇治へなり。
○窶れておはする　姫君達服喪の樣なり。
○心に惑ひ給へる　姫君達の心の樣を言ふ。
○昔の御心向け　八宮の御仕向け。

○心より外に云々　服者は月日の光も見ぬが本意なり若し心の外に見んも慎ましくてとなり。
○事と言へば　餘りの事よとの意。
○行く方も無く　心の行く方も無く。

○御心地にも　姫君の御心にもなり。下の「思ひ知り給ふべし」に係る。
○思すらん樣　姫君達の愁傷の程。
○の給ひ契りし事　薫が八宮と言ひ契りし事。

中納言殿の御返りばかりは、彼よりもまめやかなる樣に聞え給へば、これよりもいと氣疎げにはあらず聞え通ひ給ふ。御忌果てゝも、自ら詣で給へり。東の廂の下りたる方に、窶れておはするに、近う立寄り給ひて、古人召し出でたる。闇に惑ひ給へる御あたりに、いとまばゆく匂ひ満ちて、入りおはしたれば、傍痛うて、御答などをだに得し給はねば、

（薫）「かやうにはもてない給はで、昔の御心向けに從ひ聞え給はん樣ならんこそ、聞え承はる甲斐あるべけれ。なよび氣色ばみたる擧動を習ひ侍らねば、人傳に聞え侍るは、言の葉も續き侍らず。」とあれば、（大君）「あさましう今までながらへ侍るやうなれど、思ひ覺さん方無き夢に惑はれ侍りてなん。心より外に空の光見侍らんも慎ましうて、端近うも得みじろき侍らぬ。」と聞え給へれば、（薫）「事と言へば限無き御心の深さになん。月日の影は御心もて、晴れ〳〵しく持て出でさせ給はゞこそ、罪も侍らめ。行く方も無くいぶせう覺え侍り、又思さるらん端々をも諦め聞えまほしくなん。」と申し給へば、（人々）「げにこそいと類無げなゝめる御有樣を、慰め聞え給ふ御心ばへの淺からぬ程。」など人々聞え知らす。御心地にも、然こそ云へ、やう〳〵心鎭まりて、萬思ひ知られ給へば、昔樣にても、斯うまで遙けき野邊を分け入り給へる志なども、思ひ知り給ふべし。少しゐざり寄り給へり。思すらん樣、又の給ひ契りし事など、いと細やかになつかしう言ひて、うたて雄々しきけはひなどは見え給はぬ人なれば、氣疎くすゞろはしくなどはあらねど、知らぬ人に斯く聲を聞かせ奉り、すゞろに頼み顔なる事なども、ありつる日頃を思ひ續くるも、さすがに苦しうて慎ましけれど、仄に一言などいらへ聞え給ふ樣の、實に萬思ひ惚れ給へるけはひなれば、いと哀と聞き奉り給ふ。黑き几帳の透影の、いと心苦しげなるに、況しておはすらん樣、仄見し明けぐれなど思ひ出でられて、

○黑き几帳　喪中なれば黑きを用ゐるなり。

○外るゝ絲は　古今集に「藤衣はづるゝ絲はわび人の涙の玉の緒とぞなりぬる」

（薫）「色變る、淺茅を見ても、墨染に、窶るゝ袖を、思ひこそ遣れ。」

と獨言のやうにの給へば、

（大君）「色變る、袖をば露の、宿りにて、我身ぞ更に、措き所無き。外るゝ絲は。」と末は言ひ消ちて、いといみじく忍ひ難きけはひにて入り給ひぬなり。引き留めなどすべき程にもあらねば、飽かず哀に覺ゆ。老人ぞこよなき御代に出て來て、昔今を搔き集め、悲しき御物語ども聞ゆる。有り難くあさましき事どもを見たる人なりければ、かう怪しう衰へたる人とも思し捨てられず、いと懷かしう語らひ給ふ。（薫）「いはけなかりし程に、故院に後れ奉りて、いみじう悲しき物は世なりけり、と思ひ知りにしかば、人と成り行く齡に添へて、官位、世の中の匂も何とも覺えずなん。唯斯う靜やかなる御住居などの、心に協ひ給へりしを、斯くはかなく見做し奉りつるに、愈いみじく、假初の世思ひ知らるゝ心も催されにたれど、心苦しうて留り給へる御事どもの絆など聞えんは、かけ〳〵しき樣なれど、ながらへても、かの御事過たず、聞え承らまほしきになん。さるは覺無き御舊物語聞きしより、いとゞ世の中に跡とめんとも覺えずなりにたりや。」と、打ち泣きつゝの給へば、此人は況していみじく泣きて、えも聞えやらず。御けはひなどの唯それかと覺え給ふに、年頃打ち忘れたりつる古の御事をさへ取り重ねて、聞えやらん方も無く溺ほれ居たり。此人は、かの大納言の御乳母子にて、父は此姫君達の母北の方の

○故院　源氏の君。

○かけ〳〵しき　好色がましき。
○かの御事　八宮の御遺託
○此人　辨尼。
○古の御事　柏木在世の事
○溺ほれ居たり　涙に溺れ居たり。
○かの大納言　柏木大納言

○昔の御事　柏木の昔の事
○君達　姫君達。

○聞き置き給へらんかし　辨が姫君達へ昔の事問はず語りをもしたらんかと薫の心中に思ふなり。

○大德たち出で入り　供養の爲僧侶達出入して。
○例　佛像。
○かの寺　かの河闍梨の寺

○秋霧の云々　雁を假に掛けたり。
○今はさりとも云々　匂宮の心中に今は姫君に言ひ寄るも安からんとなり。

母方の叔父、左中辨にて亡せにけるが子なりけり。年頃遠き國にあくがれ、母君も亡せ給ひて後、かの殿には疎くなり、此宮には尋ね取りてあらせ給ふなりけり。人もいとやんごとなからず、宮仕馴れにたれど、心地無からぬ者に宮もおほして、姫君達の御後見だつ人になし給へるなりけり。昔の御事は、年頃斯く朝夕に見奉り馴れ、心隔つる隈無く思ひ聞ゆる君達にも、一言打ち出で聞ゆる序無く、忍び籠めたりけれど、中納言の君は、古人の問はず語、皆例の事なれば、おしなべて淡々しうなどは言ひ廣けずとも、いと恥かしげなゝめる御心どもには、聞き置き給へらんかしと、推し量らるゝに、妬くもいとほしくも覺ゆるにぞ、又もて離れては止まじと思ひ寄らるゝ端にもなりぬべき。今は旅寢もすゞろなる心地して、歸り給ふにも、是や限の、などの給ひしを、何どか、然しもやは、と打ち頼みて、又見奉らずなりにけん。秋やは變れる。數多の日數も隔てぬ程に、おはしにけん方も知らず、敢無きわざなりや。殊に例の人めいたる御しらひ無く、いと事殺ぎ給ふめりしかど、いと物清げに搔き拂ひ、あたりをかしくもてない給へりし御住居も、大德たち出で入り、こなたかなた引き隔てつゝ、御念誦の具どもなどぞ變らぬ樣なれど、佛は皆かの寺に移し奉りてんとすと聞ゆるを、聞き給ふにも、かゝる樣の人影などさへ絶え果てん程、留りて思ひ給はん心地どもを、斟み聞え給ふも、いと胸痛う思し續けらる。いたく暮れ侍りぬと申せば、眺めさして立ち給ふに、雁鳴きて渡る。

（薫）「秋霧の、晴れぬ雲井に、いとゞしく、此世を假と、言ひ知らすらん。」

兵部卿の宮に對面し給ふ時は、まづ此君達の御事を扱種にし給ふ。今はさりとも心安きを思して、宮は懇に聞え給ひけり。はかなき御返りも聞えにくゝ、つゝましき方に、女方はおぼいたり。世にいといたう好き給へる御名のひろごりて、好ましく艶に思さるべかゝめるも、斯ういと埋もれたる葎の下より差し出でたらん手付も、如何に初々しく古めきたらんなど、思ひ屈し給へり。

○さてもあさましう　姫君達の心中に月日の過き行くを思ふなり。

○例見ぬ人影　これまで見馴れざりし人の姿。
○二所　大君と中君と。

○心を消たず　絶望せずに
○向の山　阿闍梨の山寺。

○阿闍梨の室　阿闍梨の住處。

さてもあさましうて、明け暮さるゝは月日なりけり。かく頼み難かりける御世を、昨日今日とは思はで、唯大方定なきはかなさばかりを、明暮の事に聞き見しかば、我も人も後れ先だつ程しもやは經んなど、打ち思ひけるよ。來し方を思ひ續くるも、何の頼もしげなる世にもあらざりけれど、唯何時となく長閑に眺め過し、物恐ろしくつゝましき事も無くて經つる物を、風の音も荒らかに、例見ぬ人影も打ち連れ、聲作れば、まづ胸潰れて、物恐しく佗しう覺ゆる事さへ添ひにたるが、いみじう堪へ難き事と、二所打ち語らひつゝ、乾す世も無くて過し給ふに、年も暮れにけり。雪霰降りしく頃は、何處も斯くこそはある風の音なれど、今始めて思ひ入りたらん山住の心地し給ふ。女ばらなど、あはれ年はかはりなんとす。心細く悲しき事を、改るべき春待ち出でてしがなと、心を消たず言ふも有り。難き事かなと聞き給ふ。向の山にも、時々の御念佛に籠り給ひし故こそ、人も參り通ひしか。阿闍梨も如何がと、大方に稀に音づれ聞ゆれど、今は何しにかは仄めき參らん。いとゞ人目の絶え果つるも、然るべき事と思ひながら、いと悲しくなん。何とも見ざりし山賤も、おはしまさで後、たまさかに差しのぞき參るは、珍しく覺え給ふ。此頃の事とて、薪木實拾ひて參る山人どもあり、阿闍梨の室より。炭などのやうの物奉るとて、（阿闍梨）「年

○語らひ給ふ　大君と中君となり。
○松の雪をも何とかは見るかの山の雪をも今年は哀とこそ見侍れ、君は如何見給ふぞ。

○宜しき人　大方の際の人を云ふ。
○見入れて　念を入れて。
○墨染ならぬ　黒塗ならぬなり、服者の料ならぬを取り出でて進めしなり。
○人の　薫君が。
○猶移りぬべき世なりけり　出家を志しながら尚好色の方に心うつるべしとなり。
○宮　匂宮。

頃に習ひ侍りにける宮仕の、今はとて絶え侍らんが、心細きになん。」と聞えたり。必ず冬籠る山風防ぎつべき綿衣など遣しゝを、思し出でて遣り給ふ。法師ばら童などの、上り行くも、見えみ見えずみ、いと雪深きを、泣く〳〵立ち出で見送り給ふ。御髪など落し給ひても、さる方にておはしまさましかば、かやうに通ひ參る人も、自ら繁からまし。如何に哀に心細くとも、あひ見奉ること絶えて止まゝしや、など語らひ給ふ。

（大君）「君なくて、岩の陰道、絶えしより、松の雪をも、何とかは見る。」

中の君、

「奥山の、松葉に積る、雪とだに、消えにし人を、思はましかば。」

羨ましくぞ又も降り添ふや。

中納言の君は、新しき年は、ふとしも得訪ひ聞えざらんとおぼして、おはしたり。雪もいとゞ所せきに、宜しき人だに見えずなりにたるを、斜ならぬけはひして、輕らかに物し給へる心ばへの、淺うはあらず思ひ知られ給へれば、例よりは見入れて、御座など引き繕はせ給ふ。墨染ならぬ御火桶、物の奥なる取り出でて、塵掻き拂ひなどするに付けても、宮の待ち喜び給ひし御氣色などを、人々も聞え出づ。對面し給ふ事をば、つゝましくのみ覺えたれど、思隈無きやうに人の思ひ給はば、如何がはせん、とて聞え給ふ。打解くとは無けれど、前々よりは少し言の葉續けて、物などの給へる樣、いと目安く心恥かしげなり。かやうにてのみは、え過し果つまじと思ひなり給ふも、いと打ちつけなる心かな。猶移りぬべき世なりけり、と思ひ居給へり。（薫）「宮のいと怪しく恨み給ふ事の侍るかな。哀なりし

○いと隈無き云々　匂宮が
○持て損ひ聞ゆるぞと　薫の妨げ聞ゆる故ぞと。
○好い給へるやうに　匂宮は好色の樣に。
○頽れ初めては　良からぬ人に心解けては。古歌に「神並のみ室の岸や頽るらん龍田の川の水の濁れる」
○人の見奉り云々　我は誰よりも匂宮の心を能く知りたりとなり。
○御中道の程云々　御媒に付けて彼方此方行き通ひて足も疲れなんとなり。戯れて言へるなり。
○我御自の事とは思しも云云　大君はなり。

御一言を承り置きし樣など、事の序にもや漏し聞えたりけん。又いと隈なき御心の性にて、推し量り給ふにや侍らん。此處になんともかくも聞えさせなすべきと賴むを、つれなき御氣色なるは、持て損ひ聞ゆるぞと、度々怨じ給へば、心より外なる事と思ひ給ふれど、里のしるべいとこよなうも得あらがひ聞えぬを、何かはいと然しも待遇し聞え給ふらん。好い給へるやうに人は聞えなすべかゝめれど、心の底怪しう深うおはする宮なり。等閑事などの給ふわたりの、心輕うて靡き易なるなどを、珍しからぬ物に思ひ貶し給ふにやとなん聞く事も侍る。何事にもあるに從ひて、心を立つる方も無く、大どけたる人こそ、唯世のもてなしに從ひて、とあるもかゝるも、なのめに見做し、少し心に違ふ節あるにも、如何がはせん、然るべきぞ、なども思ひ做すべかゝめれば、なか〳〵心長きためしになる樣もあり。頽れ初めては、龍田の川の濁る名をも汚し、言ふ甲斐なき名殘無きやうなる事なども、皆打ち離るめれ。心の深く沁み給ふべかゝめる御心ざまに協ひ、殊に背く事多くなど物し給はざらんをば、更に輕々しく・始終違ふやうなる事など見せ給ふまじき氣色になん。人の見奉り知らぬ事を、いと能う見聞えたるを、若し似つかはしく、然もやと思し寄らば、そのもてなしなどは、心の限盡して仕う奉りてんかし。御中道の程、亂足こそ痛からめ。」といとまめやかにて言ひ續け給へば、我御自の事とは思しもかけず、人の親めきていらへんかし、と思し運らし給へど、猶言ふべき言の葉も無き心地して、（大君）「如何にとかは、かけ〳〵しげにの給ひ續くるに、なか〳〵聞えんことも覺え侍らで。」と、打笑ひ給へるも、おいらかなる物から、けはひをかしう聞ゆ。（薫）「必ず御自ら聞し召し負ふべき

○かの御心寄せ　匂宮の御心寄せ。

○善うぞ戯にも云々　戯にても中君に返事を書かせしぞ善かりし。もし大君より匂宮へ返事せしならば薫のかく問ひ給ふにも如何に恥かしからんとなり。

○雪深き云々　我は薫君にならでは文の返事はせじとなり。蹈みに文を寄せたり。

○御物あらがひこそ　匂宮へは文通せずと言譯し給ふこそ。

○導しがてら　匂宮の手引しがてら。

○先づや渡らん　我先づ大君と契らんとの意。

○影さへ見ゆる　萬葉集に「淺香山影さへ見ゆる山の井の淺き心は我が思はなくに」

○しるし　本居翁はしるべならんと云へり。

○唯山里のやうに云々　薫の京の住居の閑靜なるをいふ。

○然も思し掛けば　同意して移り給はゞ。

事とも思ひ給へず。それは、雪を踏み分けて參り來たる志ばかりを御覽じ分かん御このかみ心にても過させ給ひてよかし。かの御心寄せは、又別にぞ侍かゝめる。仄にの給ふ樣も侍ゝめりしを、いさやそれも人の分き聞え難き事なり。御返りなどは、何方かは聞え給ふ。」と問ひ申し給ふに、善うぞ戯にも聞えざりける。何と無けれど、斯うの給ふにも、如何に恥かしう胸潰れまし、と思ふに、え答へやり給はず。

（大君）「雪深き、山の懸橋、君ならで、又蹈み通ふ、跡を見ぬかな。」

と書きて差し出し給へれば、（薫）「御物あらがひこそ、なか〳〵心置かれ侍りぬべけれ。」とて、

（薫）「氷閉ぢ、駒蹈み折く、山川を、導しがてら、先づや渡らん。

然らばしも、影さへ見ゆるしるしも、淺うは侍らじ。」と聞え給へば、思はずに物しうなりて殊にいらへ給はず。けざやかに、いと物遠く澄みたる樣には見え給はねど、今樣の若人達の樣に、艶氣にも持て做さで、いと目安く長閑なる心ばへならんとぞ、推し量られ給ふ人の御けはひなる。斯うこそはあらまほしけれと、思ふに違はぬ心地し給ふ。事に觸れて氣色ばみ寄るも、知らず顔なる樣にのみ持て做し給へば、心恥かしうて、昔物語などをぞ物まめやかに聞え給ふ。暮れ果てなば、雪いとゞ空も閉ぢぬべう侍りと、御供の人々聲作れば、歸り給ひなんとて、（薫）「心苦しう眺め暮らさるゝ御住居の樣なりや。唯山里のやうにいと靜なる處の、人も行きまじらぬ處に侍るを、然も思し掛けば、如何に嬉しく侍らん。」などの給ふも、いとめでたかるべき事かなと、片耳に聞きて打笑む女ばらの有るを、中の君は

○霜鬚　霜をかけたる如く生ひたる鬚。

○打擲みつゝ　宿直人が眉を擲めてなり。

○一所　八宮一所。

○人わろげなり　見苦しげなり。

○花の飾　瓔珞花鬘等。

○本意　出家の本意。

○椎が本　八宮の居所を云ふ。

○御庄　薫の庄園なり。

○御秣取りに遣りける　今夜こなたに一宿の用意なり

○老人に云々　辨に遂はんとて來りしぞと言ひ紛はし給へり。

○齋の御臺　精進の御膳。

いと見苦しう、如何にさやうにあるべきぞと見聞き居給へり。御菓子由ある樣にて參り、御供の人々にも肴など目安き程にて、土器差し出させ給ひけり。かの御移香もて騒がれし宿直人ぞ、鬘鬚とか云ふ面付、心づき無くてある。はかなの御賴もし人やと見給ひて、召し出でたり。（薫）「如何にぞ。おはしまさで後、心細からん。」など問ひ給ふ。打擲みつゝ、心弱けに泣く。（宿直人）「世の中に賴む寄るべも侍らぬ身にて、一所の御蔭に隱れて、三十餘年を過し侍りにければ、今は況して野山にまじり侍らんも、如何なる木の本をかは賴むべく侍らん。」と申して、いとゞ人わろげなり。おはしましゝ方明けさせ給へれば、塵いたう積りて、佛のみぞ、花の飾り衰へず。行ひ給ひけりと見ゆる御床など取り遣りて搔き拂ひたり。本意をも遂げばと契り聞えしこと思ひ出でて、

「立ち寄らん、蔭と賴みし、椎が本、空しき床に、なりにけるかな。」

とて柱に寄り居給へるをも、若き人々はのぞきて賞で奉る。日暮れぬれば、近き所々に、御庄など仕うまつる人々に、御秣取りに遣りける。君も知り給はぬに、田舍びたる人々、おどろ〳〵しく引き連れ參りたるを、怪しうはしたなきわざかなと御覽ずれと、老人に紛らはし給ひつ。大方かやうに仕うまつるべく、仰せ置き出で給ひぬ。

年かはりぬれば、空の氣色うらゝかなるに、汀の氷解け渡るに付けても、斯うまでながらへけるも、有り難くもと眺め給ふ。聖の坊より、雲消えに摘みて侍るなりとて、澤の芹峰の蕨など奉りたり。齋の御臺に參れる。所に付けては、かゝる草木の氣色に從ひて、行きかふ月日のしるしも見ゆることをかしけれ、など人々の言ふを、何のをかしきならんと聞

○君が　父君が。

○うるさく何となき事云々　例の省筆なり。
○挿頭を思し出でて　去年の春宇治に中宿せし時の事をなり。
○いと故ありし御子　八宮を云ふ。
○つてに見し云々　中君を櫻に寄せて詠めり。折りてかざさんは我物として見んとの意。
○何處か云々　我今忌服中なるを如何で相見んとなり

○如何でか云々　斯くては中君如何で厭き給はんや。
○大殿の六の君　夕霧の第六女。
○すまひ給ふ　辭し給ふ。

き給ふ。

（大君）「君が折る、峰の蕨と、見ましかば、知られやせまし、春のしるしも。」

（中君）「雪深き、汀の小芹、誰が爲に、摘みか榮さん、親無しにして。」

など、はかなき事を打語らひつゝ明し暮し給ふ。中納言殿よりも、宮よりも折過さず訪ひ聞え給ふ。うるさく何となき事多かるやうなれば、例の書き漏したるなゝめり。

花盛の頃、宮挿頭を思し出でて、其折見聞き給ひし君達なども、いと故ありし御子の御住居を復も見ずなりにし事など、大方のあはれを口々聞ゆるに、いとゆかしう思されたり。

（包）「つてに見し、宿の櫻を、この春は、霞隔てず、折りてかざゝん。」

と心を遣りての給へりけり。あるまじき事かなと見給ひながら、いと徒然なる程に、見所ある御文の表面ばかりを持て消たじとて、

（中君）「何處とか、尋ねて折らん、墨染に、霞籠めたる、宿の櫻を。」

猶かく差し放ちて、つれなき御氣色の見ゆれば、誠に心憂しと思し渡る。御心に餘り給ひては、唯中納言を、とざまかうざまに責め恨み聞え給へば、をかしと思ひながら、いと受張りたる後見顔に打答へ聞えて、あだめいたる御心ざまをも見顯す時々は、（藁）「如何でか斯からんには。」など申し給へば、宮も御心づかひし給ふべし。（包）「心に協ふあたりを、まだ見付けぬ程ぞや。」との給ふ。大殿の六の君を、思し入れぬこと、なま怨めしげに大臣も思したりけり。されどゆかしげ無き仲らひなる中にも、大臣の事々しく煩はしくて、何事の紛れをも見咎められんが、むつかしきと、下にはの給ひて、すまひ給ふ。

○入道宮　女三宮。
○まめやかなる人　藁を指していふ。

○その年　宮かくれ給ひての翌年の夏のことなり。
○河面　宇治の汀面。

○氣近からじとて　客座に氣近からぬ所に居んとて。
○我御方に　姫達自身の部屋へ。
○猶あらじに　猶このまゝにはあらじ覗かんとなり。

○あらはにもこそあれ　外よりあらはに見えもやせんとなり。

○二間　次の間。

○一人　中君なり。

○萱草　紅の黃ばみたる色にて、忌服に用ゐる。

その年三條の宮燒けて、入道宮も六條院に移ろひ給ひ、何くれと物騷がしきに紛れて、宇治の邊を久しう音づれ聞え給はず。まめやかなる人の御心は、又いと異なりければ、いとのどかに、己が物とは打頼みながら、女の心弛び給はざらん限は、あざればみ情無き樣に見えじと思ひつゝ、昔の御心忘れぬ方を深く見知り給へとおほす。其年常よりも暑さを人々わぶるに、河面涼しからんはやと思ひ出でゝ、俄に詣で給へり。朝すゞみの程に出で給ひければ、あや憎に映し來る日影も眩くて、宮のおはせし西の廂に、宿直人召し出でゝおはす。そなたの母屋の佛の御前に、君達物し給ひけるを、氣近からじとて、我御方に渡り給ふ。御けはひ忍びたれど、自ら打身動き給ふ程近く聞えければ、猶あらじに、こなたに通ふ障子の端の方に、掛金したる所に、孔の少し開きたるを見置き給へりければ、外に立てたる屏風を引き遣りて見給ふ。茲許に几帳を添へ立てたる、あな口惜しと思ひて、引き歸る折しも、風の簾をいたう吹き上ぐべかゝめれば、（女房）「あらはにもこそあれ。その御几帳推し出でゝこそ。」と云ふ人あゝなり。をこがましき物の、嬉しうて見給へば、高きも短きも、几帳を二間の簾に押し寄せて、此障子に向ひて、明きたる障子より、あなたに通らんとなりけり。まづ一人立ち出でゝ、几帳より差しのぞきて、此御供の人々の、とかう行きちがひ、涼み合へるを見給ふなりけり。濃き鈍色の單に、萱草の袴のもてはやしたる、なかく樣かはりて、華やかなりと見ゆるは、着なし給へる人がらなゝめり。帶はかなげにしなして、珠數引き隱して持給へり。いと聳やかに、樣體をかしげなる人の、髮往に少し足らぬ程ならんと見えて、末まで塵の迷無く、艶々とこちたう美しげなり。傍目な

○女一宮　今上の第一皇女。明石中宮の御腹なり。
○ゐざり出でて云々　大姫君の用意深き體なり。
○あなたに屏風も云々　客座の方には屏風も立てゝあり、又薫君は急きてのぞきなどし給はじ。
○いみじうもあるべき云々　若し薫君がのぞき給はゞなり。
○同じやうなる色合　中君と同樣の色合の袴。
○さばらかばら〳〵としたるさま。
○翡翠かはせみ。羽色極て美しき鳥なり。
○彼よりも　中君よりも。

どあならうたけと見えて、匂やかに柔に大どきたるけはひ、女一宮も斯うざまにぞおはすべきと、仄見奉りしも思ひ比べられて、打歎かる。又ゐざり出でゝ、かの障子はあらはにもこそあれ、と見おこせ給へる用意、打解けたらぬ樣して、由あらんと覺ゆ。頭つき簪の程、今少しあてに艶めかしき樣なり。（侍女）「あなたに屏風も添へて立てゝ侍りつ。急ぎてしものぞき給はじ。」と、若き人々何心無く言ふあり。（大君）「いみじうもあるべきわざかな。」とて、うしろめたけにゐざり入り給ふ程、氣高う心憎きけはひ添ひて見ゆ。黑き袷一襲、同じやうなる色合を着給へれど、これは懷かしう艶めきて、哀げに心苦しう覺ゆ。髮さばらかなる程に落ちたるなるべし。末少し細りて、色なりとか云ふめる。翡翠だちて、いとをかしげに絲を縒り掛けたるやうなり。紫の紙に書きたる經を、片手に持ち給へる手つき、彼よりも細さ優りて、痩せ〳〵なるべし。立ちたりつる君も、障子口に居て、何事にかあらん、此方を見おこせて、笑ひたるいと愛敬づきたり。

○御果の事云々　宇治の姫君達が父宮の一周忌の仕度し給ふなり。
○經の飾　經机の覆など。
○自ら詣で給ひて　薫君が宇治へ。
○名香の絲　種々の香を紙に包みて五色の絲を掛けて結び佛に奉るなり。
○斯くても經ぬる　古今集に「身を憂しと思ふに消えぬ物なれば斯くても經ぬる物にぞありける」
○絡垰　絲を卷付けて繰る具。
○我涙をば云々　七條后亡せ給ひし時伊勢が「縒り合はせて泣くなる聲を絲にして我涙をば玉に貫かなん」と詠みしを云ふ。
○物とは無しに　貫之の歌「絲に縒る物とは無しに別れ路の心細くも思ほゆるかな」
○客人　薫をいふ。
○總角に云々　總角の結び

あげまき

此卷は薫君廿四歳の秋より冬までの事を記せり。卷名は「あげまきに長き契を結び籠め同じ所に寄りも合はなん」といへる歌に取れり。

數多年、耳馴れ給ひにし河風も、この秋は、いとはしたなく物悲しくて、御果の事急がせ給ふ。大方のあるべかしき事どもは、中納言殿阿闍梨などぞ仕う奉り給ひける。こゝには法服の事、經の飾、こまかなる御扱を、人の聞ゆるに從ひて營み給ふも、いと物はかなくあはれに、かゝるよその御後見無からましかばと見えたり。自ら詣で給ひて、いまはと脫ぎ捨て給ふ程の御訪問淺からず聞え給ふ。阿闍梨も此處に參れり。名香の絲引き亂りて斯くても經ぬるなど、打語らひ給ふ程なりけり。結び上げたる絡垰の、簾のつまより、几帳の綻に透きて見えければ、其事と心得て、「我涙をば玉に貫かなん」と打ち誦し給へる。伊勢の御も、斯うこそはありけめと、をかしう聞ゆるも、內の人は聞き知り顏に、さしいらへ給はんもつゝましくて、物とは無しにとか、貫之が此世ながらの別をだに、心細き筋に引き掛けゝんをなど、實に故事ぞ、人の心を敍ぶる便なりけるを思ひ出で給ふ。御願文作り、經佛供養せらるべき心ばへなど、書き出で給へる硯のついでに、客人、

（薫）「總角に、長き契を、結び籠め、同じ所に、寄りも逢はなん。」

と書きて見せ奉り給へば、例のとうるさけれども、

（大君）「貫きも敢へず、脆き涙の、玉のをに、長き契を、如何が結ばん。」

て同じ所に寄り合ふ如く御身と契り逢はなん。
○貫きも敢へず云々　我は悲に堪へずして命も久しかるまじされば長き契を如何で結ぶべき。
○逢はずば何を　古歌「片糸をこなたかなたによりかけてあはずば何を玉の緒にせん」
○官　匂宮。
○遥へ聞えじの心にてこそ　薫君には何も遥へじの心にてあればこそとなり。
○此の給ふめる筋　匂宮へ聘けとの事又薫の大君へほのめかし給ふ事どもなり。
○の給ひ置く　父宮のなり。
○少し世籠りたる程にて　我より少し若くて。
○心苦しう見え給ふ　中君を云ふ。

とあれば、「逢はずば何を」と、怨めしげに眺め給ふ。

自の御上は、斯くそこはかと無く持て消ちて、恥かしげなるに、清々とも得の給ひ寄らで、宮の御事をぞまめやかに聞え給ふ。(薫)「さしも御心に入るまじき事を、かやうの方に、少し進み給へる御本性にて聞え初め給ひけん、負けじ魂にやと、とざまかうざまにいと能くなん御氣色見奉る。誠に後目痛うはあるまじけなるを、何ど斯うあながちにしも、もて離れ給ふらん。世の有樣など思し分くまじくは見奉らぬを、うたて遠々しくのみもてなさせ給へば、かばかり裏無く頼み聞ゆる心に違ひて怨めしくなん。ともかくも思し分くらん樣などを、さわやかに承はりにしがな。」と、いとまめだちて聞え給へば、(大君)「遥へ聞えじの心にてこそは、かうまで怪しき世の例なる有樣にて、隔て無くもてなし侍れ。それを思し分かざりけるこそは、淺き事もまじりたる心地すれ。實にかゝる住居などに、心あらん人は、思ひ殘すことあるまじきを、何事にも後れそめにけるうちに、此の給ふめる筋は古も更にかけて、とあらば、かゝらばなど、行末のあらましごとに取り雜ぜて、の給ひ置く事も無かりしかば、猶かゝる樣にて、世づきたる方を思ひ絶ゆべく、思しおきてけるとなん思ひ合せ侍れば、ともかくも聞えん方無くて、さるは少し世籠りたる程にて深山隱れには、心苦しう見え給ふ人の御上を、いと斯く朽木には爲し果てずもがなと、人知れず扱はしう覺え侍れど、如何なるべき世にかあらん。」と、打歎きて物思ひ亂れ給ひけるけはひ、いと哀げなり。

けざやかにおとなびても、如何でかはさかしがり給はんと、ことわりにて、例の古人召し出でゝぞ語らひ給ふ。(薫)「年頃は只後の世ざまの心ばへにて、進み參り初めしを、物心細けに思しなるめりし御末の頃ほひ、此事どもを、心に任せてもてなし聞ゆべくなん、の給ひ契りてしを、思しおきて奉り給ひし御有樣どもには違ひて、御心ばへどもの、いとゞあやにくに物強げなるは、如何に思し置きつる方の事なるにやと、疑はしき事さへ添ひてなん。自ら聞き給ふやうもあらん。いと怪しき本性にて、世の中に心を占むる方無かりつるを、さるべきにてや、斯うまでも聞え馴れにけん。世の人もやう〳〵言ひ做すやうあるべかゝめるに、同じうは昔の御事も違へ聞えず、我も人も世の常に心解けて、聞え通はばやと思ひ寄るは、つき無かるべき事にても、さやうなる例無くやはある。」などの給ひ續けて、(薫)「宮の御事をも斯う聞ゆるに、うしろめたうはあらじと、打解け給ふ樣ならぬは内々に然りとも思ほし向けたる事の樣あらん。猶如何に〳〵。」と打眺めつゝの給へば、例のわろびたる女房などは、かゝる事には、憎きさかしらも言ひ雜ぜて、言好がりなどもすめるを、いとさはあらず、心の中には、あらまほしかるべき御事どもをと思へど、(辨)「素より斯く人に違ひ給へる御癖どもに侍ればにや、如何にも〳〵世の常に、何やかやなど思ひ寄り給へる御氣色になん侍らぬ。斯くて侍ふこれかれも、年頃だに、何の頼もしげある木の本の隱ろへも侍らざりき。身を捨て難く思ふ限は、程々に付けて罷ゞで散り、昔の古き筋なる人も、多く見奉り捨てたるあたりに、況して今は暫時も立ちとまり難げに佗び侍りつゝ、おはしましゝ世にこそ限ありて、かたほならん御有樣は、いとほしくもなど、古代なる御うるはしさに思し滯りつれ。今はかう又頼無き御身どもにて、如何にも〳〵世に靡き給へ

○心に任せてもてなし聞ゆべくなん云々　心に任せて後見せよと宮の仰せ置かれしになり。
○さるべきにてや云々　宿緣あればにや大君に聞え馴れけんとなり。
○昔の御事　八宮の御遺言
○内々に云々　内々に他に思し寄る事もあるかとなり
○言好がり　意を迎へて體よく言ひ做すこと。
○木の本の隱ろへも侍らざりき　古歌に「わび人のわきて立ち寄るこのもとは頼む蔭なく紅葉ちりけり。」
○かたほならん御有樣　不自由勝なる御有樣。
○古代なる御うるはしさ　故宮の御心掟を謂ふ。

○松の葉をすきて　松葉を食ひてなり。

○かの御方を云々　中君を薫君に進らせばやと思し召すめりとなり。

○心の引く方云々　大君に心引かれて猶世に留る事なればとなり。

○兄弟などのさやうに云々　薫には女兄弟のさやうに睦しきが無くて淋しとなり

○后の宮　明石中宮。

らんを、あながちに譏り聞えん人は、却りて物の心をも知らず、言ふ甲斐なき事にてこそはあらめ。如何なる人か、いと斯うて世をば過し果て給ふべき。松の葉をすきて勤むる山伏だに、生ける身の捨て難さに因りてこそは、佛の御教をも、道々別れては行ひなすなれ、などやうの善からぬ事を聞え知らせ、若き御心ども亂れ給ひぬべき事多く侍るめれど、撓むべくも物し給はず。中の君をなん、如何で人めかしうも扱ひ做し奉らんと、思ひ聞え給ふべかゝめる。かく山深う尋ね聞えさせ給ふめる御志の、年經て見奉り馴れ給へるけはひも、疎からず思ひ聞えさせ給ひ、今はとざまかうざまに、こまかなる筋に聞え通ひ給ふめるに、かの御方を、さやうに趣けて聞え給はゞとなん思すべかゝめる。宮の御文など侍るめるは、更にまめ〳〵しき御事ならじと侍るめる。」と聞ゆれば、(薫)「哀なる御一言を聞き置き奉りにしかば、露の世にかゝづらはん限は、聞え通はんの心あれば、何方にも見え奉らん。同じ事なるべきを、さまではた、思し寄るなるいと嬉しき事なれど、心の引く方なん斯ばかり思ひ捨つる世に猶留りぬべきものなりければ、改めて然はえ思ひ直すまじくなん。世の常になよびかなる筋にもあらずや。只かやうに物隔て事殘いたる樣ならず、差向ひて、とにかくに定め無き世の物語を隔て無く聞えて、つゝみ給ふ御心の隈殘らず、もてなし給はんなん。兄弟などのさやうに睦しき程なるも無くて、いと淋々しくなん。世の中の思ふ事の、哀にもをかしうも憂はしうも、時に付けたる有樣を、心に籠めてのみ過ぐる身なれば、さすがにたづき無く覺ゆるに、疎かるまじう賴み聞ゆる。后の宮はた、馴れ馴れしう、さやうにそこはかと無き思の儘なるくだ〳〵しさを、聞え觸るべきにもあらず。

○三條の宮　女三宮。

○限あれば云々　親の禮儀あれば兄弟のやうには馴れ難しとなり。

○任せてやは見給はぬ　我を信用して打任されては如何。

○何方も恥かしげなる云々　薫も大君も心深き樣なる故に思のまゝには言ひも得ざりしとなり。

○あらはに　あらはに見えんも心苦しとなり。

○此御前　大君の御前。

○斜ならず心に入りて　大方ならず薫君の心を動かして。

三條の宮は、親と思ひ聞ゆべきにもあらぬ御若々しさなれど、限あれば容易く馴れ聞えさせずかし。その外の女は、凡ていと疎くつゝましう恐ろしう覺えて、心から寄るべなく心細きなり。等閑のすさびにても、懸想だちたる事は、いと眩く有付かず、はしたなき骨々しさに、況いて心に染めたる方の事は、打出づる事も難くて、怨めしうもいぶせくも、思ひ聞ゆる氣色をだに見え奉らぬこそ、我ながら限無く頑しきわざなれ。宮の御事をも、さりとも惡しざまには聞えじと、任せてやは見給はぬ。」など言ひ居給へり。老人はた、かばかり心細きに、あらまほしけなる御有樣を、いと切にさもあらせ奉らばやと思へど、何方も恥かしげなる御有樣どもなれば、思の儘には聞えず。

今宵は泊り給ひて、物語などのどやかに聞えまほしうて、やすらひ暮し給ひつ。鮮ならず、物恨み勝なる御氣色やう〳〵わりなく成り行けば、煩はしうして、打解けて聞え給はん事も、愈々苦しけれど、大方にては有り難う哀なる人の御心なれば、こよなうも持て做し難うて、對面し給ふ。佛のおはする中の戸を開けて、燈明の火けざやかに挑げさせて、簾に屏風を添へてぞおはする。外にも大殿油參らすれど、(大君)「惱ましうて無禮なるを、あらはに、」など諫めて、側臥し給へり。御菓子など、態とはなく爲做して參らせ給へり。御供の人々にも、故々しき肴などして出させ給へり。廊めいたる方に集りて、此御前は人け遠くもてなして、しめ〳〵と物語聞え給ふ。打解くべうもあらぬ物から、懷かしけに愛敬づきて、物の給へる樣の、斜ならず心に入りて、思ひ入らるゝもはかなし。かく程も無き物の隔てばかりを障り所にて、覺束無く思ひつゝ過す心おそさの、餘り嗚呼がましうもある

○内には人々近うなど云々　大君の方には女房遠に近う侍れと仰せ置きたれどとなり。
○驚かず　起きて來ず。
○ためらひて　一休して。
○淡め給へる　憎み疎んじ給へる。
○御心破らじと　無理なる事はせじとなり。
○憂しと思ひて泣き給ふ　ナ君のなり。

かなと思ひ續けられるれど、つれなくて、大方の世の中の事ども、哀にもをかしうも、樣々聞く所多く語らひ聞え給ふ。内には人々近うなどの給へ置きつれど、然しも持て離れ給はざらなんと思ふべかゝめれば、いとしも護り聞えず、差退きつゝ、皆寄り臥して、佛の御燈火も挑ぐる人も無し。物むつかしうて、忍びて人召せど驚かず。（大君）「心地の搔き亂り惱ましう侍るを、ためらひて、曉方にも又聞えん。」とて、入り給ひなんとする氣色なり。（薫）「山路分け侍りつる人は、況していと苦しけれど、かう聞え承はるに慰めてこそ侍れ。打捨てゝ入らせ給ひなば、いと心細からん。」とて、屏風をやをら押し開けて入り給ひぬ。いとむくつけうて、半らばかり入り給へるに、引き留められて、いみじう妬う心憂ければ、（大君）「隔て無きとはかゝるをや謂ふらん。珍らかなるわざかな。」と、淡め給へる樣のいよ〳〵をかしければ、（薫）「隔てぬ心を更に思し分かねば、聞え知らせんとぞかし。珍らかなりとも、如何なる方に思し寄るにかはあらん。佛の御前にて誓言も立て侍らん。うたて、なおぢさせ給ひそ。御心破らじと思ひ染めて侍れば、人はかくしも推し量り思ふまじかゝめれど、世に違へる癡者にて過し侍るぞや。」とて、心憎き程なる火影に、御髮のこぼれ掛りたるを搔き遣りつゝ見給へば、人の御けはひ思ふやうにかをりをかしげなり。かく心細うあさましき御住處に、好いたらん人は障り所あるまじげなるを、我ならで尋ね來る人もあらましかば、さてや止みなまし。如何に口惜しきわざならましと、來し方の心のやすらひさへ危く覺え給へど、言ふ甲斐なく憂しと思ひて、泣き給ふ御氣色の、いとほしければ、斯くはあらで、自ら心ゆるびし給ふ折もありなんと思ひ渡る。わりなきやうなるも心苦し

○かゝる御心の　薫君の。
○ゆゝしき袖の色など云々　喪服を着たる我身なるに其袖を捉へ給ふ。
○袖の色を云々　喪服を口實にし給ふは道理なれど。
○かゝる忌なからん程に云々　一周忌過ぎなば大君の心も和らがんとなり。
○寢穢かりつる人々　假殿して居たる女房達。
○水の音に流れ添ふ　水の音に涙も流れ添ふ。

くて、樣よくこしらへ聞え給ふ。（大君）「かゝる御心の程を思ひ寄らで、怪しきまで聞え馴れにたるを、ゆゝしき袖の色など、見顯し給ふ心淺さに、自の言ふ甲斐なさも思ひ知らるゝに、樣々慰む方無く。」と恨みて、何心も無くやつれ給へる墨染の火影を、いとはしたなく佗しと思ひ惑ひ給へり。いと斯うしも思さるゝやうこそはと、恥かしきに、聞えさせん方なし。（薫）「袖の色を引き掛けさせ給ふはしも、道理なれど、こゝら御覽じ馴れぬる志のしるしには、さばかりの忌置くべく、今始めたる事めきてやは思さるべき。なか〳〵なる御わきまへ心になん。」とて、かの物の音聞きし有明の月影より始めて、折々の思ふ心の忍び難く成り行く樣を、いと多く聞え給ふに、恥かしうもありけるかなと、疎ましう、かゝる心ばへながら、つれなくまめだち給ひけるかなと、聞き給ふ事多かり。御傍なる短き几帳を、佛の御方に差し隔てゝ、假初に添ひ臥し給へり。名香のいとかうばしく匂ひて、樒のいと華やかに薫れるけはひも、人よりは殊に佛をも思ひ聞え給へる御心にて、煩はしく、墨染の今更に折節心いられしたるやうに、淡々しう思ひ初めしに違ふべければ、かゝる忌無からん程に、この御心にも、さりとも少し撓み給ひなんなど、せめてのどかに思ひ做し給ふ。秋の夜のけはひは、かゝらぬ所だに、自ら哀多かるを、況して峯の嵐も籬の蟲も心細げにのみ聞き渡さる。常無き世の御物語に時々さしいらへ給へる樣、いと見所多く目安し。寢穢かりつる人々は、斯うなりけりと氣色取りて、皆入りぬ。宮のの給ひし樣など思し出づるに、實にながらへば、心の外に斯くあるまじき事も見るべきわざにこそはと、物のみ悲しうて、水の音に流れ添ふ心地し給ふ。

○話共に　薫と大君となり。
○何とはなくて　何の物思も無くて。
○事あり顔に云々　實事なければ常の後朝のやうには得出で歸らじ。
○世に違ひたる事にて　實事なければ世間の夫婦とは違ふなり。
○今朝は云々　歸り給へとなり。
○晩のわかれや云々　古歌に「まだ知らぬ晩おきの別には道さへまよふものにぞありける」
○山里の云々　卽景の歌なり。雛を取りに言掛けたり。

はかなく明け方になりにけり。御供の人々起きて、聲作り、馬どもの嘶ゆるをも、旅の宿のある樣など人の語るを思し遣られて、をかしうおぼさる。光見えつる方の障子を押し開け給ひて、空の哀なるを諸共に見給ふ。女も少しゐざり出で給へるに、程も無き軒の近きなれば、忍の露もやう〳〵光り見えもて行く。互にいと艶なる樣貌どもを、（薫）「何とはなくて、唯かやうに月をも花をも同じ心に玩び、はかなき世の有樣を聞え合せてなん過さまほしき。」と、いと懷かしき樣して語らひ聞え給へば、やう〳〵恐ろしさも慰みて、（大君）「斯ういとはしたなからで、物隔てゝなど聞えば、誠に心の隔ては更にあるまじくなん。」と答へ給ふ。明く成り行き、村鳥の立ちさまよふ羽風近う聞ゆ。夜深き朝の鐘の音かすかに響く。今だにいと見苦しきをと、いとわりなう無う恥かしげに思したり。（薫）「事あり顔に朝露も分け侍るまじ。又人は如何が推し量り聞ゆべき。例のやうになだらかに待遇させ給ひて、唯世に違ひたる事にて、今より後も唯かやうにしなさせ給ひてよ。世にうしろめたき心はあらじとおぼせ。かばかりあながちなる心の程も、哀と思し知らぬこそ甲斐無けれ。」とて、出で給はんの氣色も無し。あさましう片端ならんとて、（大君）「今より後は、さればこそ持て做し給はん儘にあらん。今朝はまた聞ゆるに隨ひ給へかし。」とて、いと術無しと思したれば、（薫）「あな苦しや。曉の別れや。まだ知らぬ事にて、實に惑ひぬべきを。」と歎き勝なり。雞も何方にかあらん、仄に音なふに、哀思ひ出でらる。

（薫）「山里の、あはれ知らるゝ、聲々に、取り集めたる、朝朗かな。」

女君、

○在る人どもゝ云々　女房達が他の懸想人の事か何かと緣に隨ひて取次ぎて言ひ出で。
○此人　薫君。
○自らの上のもてなしは云々　自分が薫君の妻となりては誰にうしろ見られんとなり。
○我世はかくて過しはてゝん　我身は薫に從はでこのまゝにて過しはてんとなり
○此君　中君。
○實なるべし　女房どものさゝやきたりし事は實事なるべし。
○すく〳〵しう　仇めかぬ體に。

「鳥の音も、聞えぬ山と、思ひしを、世の憂き事は、尋ね來にけり。」

障子口まで送り奉り給うて、よべ入りし戸口より出でゝ、臥し給へれどまどろまれず。名殘戀しうて、いとかく思はましかば、月頃も今まで心のどかならましやなど、歸らんことも物憂く覺え給ふ。

姫君は人の思ふらん事のつゝましきに、頓にも打臥され給はで、賴もしき人無くて、世を過す身の心憂きを、在る人どもゝ、良からぬ事、何やかやと、次々に隨ひつゝ言ひ出づめるに、心より外の事ありぬべき世なゝめりと、思し運らすには、此人の御けはひ有樣の、疎ましくはあるまじく、故宮もさやうなる心ばへあらばと、折々の給ひ思すめりしかど、自は猶斯くて過してん。我よりは樣貌も盛に、あたらしげなる中の君を、人なみ〳〵に見なしたらんこそ嬉しからめ。人の上になしては、心の至らん限り思ひ後見てん。自の上のもてなしは、又誰かは見扱はん。此御樣の、なのめに打紛れたる程ならば、かく見馴れぬる年頃のしるしに、打弛ぶ心もありぬべきを、恥かしげに、見えにくき氣色も、なかなかいみじうつゝましきに、我世は斯くて過し果てゝん、と思ひ續けて、音泣き勝にて明し給へるに、名殘いと惱ましければ、中の君の臥し給へる奥の方に添ひ臥し給ふ。例ならず人のさゞめきし氣色も、怪しと此君は思しつゝ寢給へるに、斯くておはしたれば、嬉しくて、御衣引き着せ奉り給ふに、所せき御移香の紛るべくもあらず、燻り掛る心地すれば、宿直人がもて扱ひけん思ひ合せられて、實なるべしといとほしうて、寢ぬるやうにて物もの給はず。客人は辨の御許呼び出で給うて、こまかに語らひ置き、御消息すく〳〵しう聞

○總角を戯に云々　前に出でたる總角の歌を詠みかはし給ひしを云ふ。
○尋ばかりの隔ても云々　催馬樂に「總角や十尋ばかりや遠く離りて寢たれども云々」とあるを取れるなり。
○組　名香の絲。
○月頃黑く習はし給へる御姿　數月の間喪服の黑きを著馴れ給ひしをいふ。
○見奉り給ふ　中君を大君の見奉るなり。
○近劣　近密りての見劣。
○かの人　薫君。
○藤の衣　喪服。
○心寢して　氣分勝れで。
○脫ぎ捨て侍りし程の云々　服を改めて今更に父宮を繼ふる歎の深くてえ聞えずと也。
○例の人　辨尼。

え置きて出で給ひぬ。總角を戯に取り做しつゝも、心もて尋ばかりの隔ても對面しつるとや此君も思すらんと、いみじう恥かしければ、心地惡しとて惱み暮し給ひつ。人々「日は殘無く侍りぬ。はかばかしうはかなき事をだに、又仕うまつる人も無きに、折惡しき御惱かな。」と、聞ゆ。中の君組など爲果て給ひて、（中君）「心葉などは、えこそ思ひ寄り侍らね。」と、せめて聞え給へば、暗うなりぬる紛れに、起き給ひて、諸共に結びなどし給ふ。中納言殿より御文あれど、今朝よりいと惱ましうなんとて、人傳にぞ聞え給ふ。さも見苦しう、若々しうおはすと、人々つぶやき聞ゆ。御服など果てゝ、脫ぎ捨て給へるに付けても、片時と後れ奉らん物と思はざりしを、はかなく過ぎにける月日の程を思すに、いみじう思の外なる身の憂さと、泣き沈み給へる御樣ども、いと心苦しげなり。月頃黑う習はし給へる御姿、薄鈍にて、いとなまめかしうて、中の君は實にいと盛にて、美しげなる匂まさり給へり。御髮など濯し繕はせて、見奉り給ふに、世の物思忘るゝ心地して、めでたければ、人知れず思ふ樣に適ひて、人に見え給はんに、さりとも近劣して思はずやあらんと、賴もしう嬉しうて、今に見讓る人も無く、親心にかしづき立てゝ、見聞え給ふ。
かの人はつゝみ聞え給ひし藤の衣も、改め給ひつらん長月も、靜心無くて又おはしたり。「例のやうに聞えん。」と、又御消息あるに、「心謬して、煩はしう覺ゆれば。」と、とかう聞えすまして對面し給はず、（薫）「思の外に心憂き御心かな。人も如何に思ひ侍らん。」と、御文にて聞え給へり。（大君消息）「今はとて脫ぎ捨て侍りし程の心惑に、なか〳〵沈み侍りてなん聞えぬ。」とあり。恨み佗びて、例の人召して萬にの給ふ。世に知らぬ心細さの慰めには

○此君　薫君。
○入れ奉らん　薫君を大君の殿所へ。
○懷け給ふ　薫君が。
○恨　薫君の。
○此君を　中君を代りに。
○況して云々　況して中君は我よりも憂りたれば。
○本意になんあらぬと　薫は大君を慕ふにて中君は本意にあらずとて。
○片方は　一つは。
○知らせ給はずば　中君に。
○此人々　女房ども。
○怪しう心强き者に憎む　我を。
○一所をのみやは云々　大君ばかりかくましませと故宮の申し置き給ひしにはあらずとなり。

此君をのみ賴み聞えたる人々なれば、思に協ひ給ひて、世の常の住處に移ろひなどし給はんを、いとめでたかるべき事に言ひ合はせて、唯入れ奉らんと皆語らひ合せけり。姫君その氣色をば、深う見知り給はねど、斯う取り別きて人めかし懷け給ふめるに、打解けてうしろめたき心もやあらん。昔物語にも、心もてやは、とある事も斯かる事もあゝめる。打解くまじき人の心にこそあゝめれと、思ひ寄り給ひて、せめて恨深くば、此君を推し出でん。劣り樣ならんにてだに、さても見初めては、淺はかにはもてなすまじき心なゝめるを、況して仄にも見初めては、慰みん。言に出でゝは如何でかは、ふと然る事を待ち取る人のあらん。本意になんあらぬと承引く氣色の無かゝなるは、片方は人の思はん事を、間無う、淺き方にやなど愼み給ふならんと、思し構ふるを、氣色だに知らせ給はずば、罪もや得んと身を抓みていとほしければ、萬に打ち語らひて、（大君）「昔の御趣けも、「世の中を斯く心細うて過し果つとも、なかなか人笑に、輕々しき心つかふな。」などの給ひ置きしを、おはせし世の御絆にて、行の御心を亂りし罪だにいみじかりけんを、今はとて、然ばかりの給ひし一言をだに違へじと思ひ侍れば、心細くなども殊に思はぬを、此人々の怪しう心强き者に憎むめるこそ、いとわりなけれ。實に然のみ樣の者と過し給はんも、明け暮るゝ月日に添へても、御事をのみこそあたらしう、心苦しう悲しき者に思ひ聞ゆるを、君だに世の常にもてなし給ひて、かゝる身の有樣も面立たしく、慰むばかり見奉りなさばや。」と聞え給へば、如何に思すにかと心憂くて、（中君）「一所をのみやは、さて世に果て給へとは聞え給ひけん。はかゞしくもあらぬ身のうしろめたさは、數添ひたるやうにこそ思され

○如何なる方にか　如何なる方にか仕うまつるべき。

○つぶ〳〵と　つぶさに。

○一所おはせましかば　故宮御存生ならんにはとなり

○引き動しつばかり云々　人々寄りて手を取りて引き立つる程に言へるなり。

○奥ざまに向きてをはす　大君の爲ん方なき體なり。

○山梨の花　六帖に「世の中を憂しといひても何處にか身をば隱さん山梨の花」

たゞめりしか。心細き御慰めには、斯う朝夕に見奉るより、如何なる方にか。」と、なま怨めしく思ひ給へれば、實にいとほしうて、(大君)「猶これかれうたて僻々しきものに、言ひ思ふべかゞめるに付けて、思ひ亂れ侍るぞや。」といひさし給ひつ。

暮れ行くに、客人は歸り給はず。姫君いとむつかしと思す。辨參りて、御消息ども聞え傳へて恨み給ふを、道理なるよしを、つぶ〳〵と聞ゆれば、答もし給はず打ち歎きて、如何に持て做すべき身にかは。一所おはせましかば、ともかくも然るべき人に扱はれ奉りて、宿世と云ふなる方に付けて、身を心ともせぬ世なれば、皆例の事にてこそは、人笑になる咎をも隱すなれ。在る限の人は年積り賢しげに、己がじしは思ひつゝ、心を遣りて、似つかはしげなる事を聞え知らすれど、こはかゞ〳〵しき事かは。人めかしからぬ心どもにて、唯一方に言ふにこそは、と見給へば、引き動かしつばかり聞え合へるも、いと心憂く疎ましうて、動ぜられ給はず。同じ心に何事も語らひ聞え給ふ中の君は、かゝる筋には今少し心も得ず、大どかにて、何とも聞き入れ給はねば、怪しうもありける身かなと、唯奥ざまに向きておはす。例の色の御衣ども奉り更へよ、などそゝのかし聞えつゝ、皆さる心すべかゞめる氣色を、あさましく、實に何の障り所かはあらん。程も無くて、かゝる御住居の甲斐なき、山梨の花ぞ遁れん方無かりける。客人は、斯く顯證に、これかれにも口入れさせず忍びやかに、何時あり初めけん事ともなく、もてなしてこそ、と思ひ染めける事なれば、御心許し給はずは、何時も〳〵斯くて過さんと思しの給ふを、此老人の、己がじじ語らひて、顯證にさゝめきなどす。さはいへど、深からぬ故にや、老い辭めるにや、いとほしくぞ見ゆる。姫君おほし煩ひて、辨が參れるにの給ふ。(大君)「年頃も人に似ぬ御心寄せとのみの給ひ渡りしを聞き置き、今となりては、萬に殘無く賴み聞えて、怪しきまで打解けたるを、思ひしに違ふ樣なる御心ばへの雜りて、恨み給ふめるこそわりなけれ。世に人めきてあらまほしき身ならば、かゝる御事をも、何かはもて離れても思はまし。されど昔より思ひ離れ染めたる心にて、いと苦しきを、此君の盛過ぎ給はんも口惜しげに、かゝる住居も、唯この御ゆかりに所せくのみ覺ゆるを、誠に昔を思ひ聞え給ふ志ならば、同じ事に思ひ做し給へかし。身を分けたる心の中は、皆讓りて見奉らん心地なんすべき。猶かやうに宜しげに聞え做されよ。」と、恥らひたる物から、あるべき樣をの給ひ續くれば、いと哀と見奉る。(辨)「さのみこそは先々も氣色を見給ふれば、いと善く聞えさすれど、さはえ思ひ改むまじき。兵部卿宮の御恨深さ增さるめれば、又其方樣に、いと善く後見聞えんとなん聞え給ふ。それも思ふやうなる御事ども。二所ながらおはしまして、殊更にいみじき御心盡して、かしづき聞えさせ給はんには、得しも斯く世に有り難き御事ども、差しつどひ給はざらまし。かしこけれど、斯くいとたつき無げなる御有樣を見奉るに、如何になり果てさせ給はんと、うしろめたう悲しうのみ見奉るを、後の御心は知り難けれど、美しくめでたき御宿世どもにこそおはしましけれ、となん、かつ〴〵思ひ聞ゆる。故宮の御遺言違へじと思し召す方は、道理なれど、それはさるべき人のおはせず、品程ならぬ事やおはしまさんと思して、誡め聞えさせ給ふめりしにこそ。此殿のさやうなる心ばへ物し給はましかば一所後安く見置き奉りて、如何に嬉しからまし、と、折々の給はせし物を、程

○思ひ離れ染めたる心にて　大君は元來夫婦の道を思ひ絶ちたる身なりとなり。

○此君　中君。

○同じ事に思ひなし給へかし　中君を我と同じ事に思し召されたし。

○あるべき樣　中君を薫君に逢はすべき手管。

○二所　兩親。

○斯く世に有難き御事ども　薫君と匂宮との事をいふ

○此殿　薫君。

○折々の給はせし　故宮が

○きりとて雲霞をやは　御出家ありとも雲霞を隔つる山住も成り難からん。

○まだけはひ暑き　八月の殘暑をいふ。

○少しまろびのきて臥し給へり　少し離れて臥すなり。

○聖だち給へりしあたりにて　八宮の膝下に在りて。

○いとど我心に通ひて　薫も道心深ければ大君の道心あるが我心に通ひたりとなり。

○御けはひたも　大君のなり。

○打もまどろみ給はねば　大君はなり。

程に付けて、思ふ人に後れ給ひぬる人は、高きも下れるも、心の外にあるまじき樣に、さすらふ類だにこそ多く侍るめれ。それ皆例の事なゝめれば、もどき言ふ人も侍らず。況して斯くばかり殊更にも、作り出でまほしげなる人の御有樣に、志深う有り難げに聞え給ふを、あながちに持て離れさせ給うて、思し置きつるやうに、行の本意を遂げ給ふとも、さりとて雲霞をやは。」など、すべて言多く申し續くれば、憎く心づき無く思して、平伏し給へり。中の君も間無く、いとほしき御氣色かなと見奉り給ひて、諸共に例のやうに大殿籠りぬ。後めたう如何にもてなさんと聞え給へど、殊更めきて差籠り隱ろへ給ふべき物の隈だに無き御住居なれば、なよゝかにをかしき御衣、上に引き着せ奉り給ひて、まだけはひ暑き程なれば、少し轉び退きて臥し給へり。

辨はの給ひつる樣を、客人に聞ゆ。(薫)「如何なれば、いと斯うしも世を思ひ離れ給ふらん。聖だち給へりしあたりにて、常無き物に思ひ知り給へるにやと思すに、いとゞ我心に通ひて覺ゆれば、賢しだち憎くも覺えず。さらば物越などにも、今はあるまじき事に思し成るにこそはあゝなれ。今夜ばかり大殿籠るらんあたりに、忍びてたばかれ。」との給へば、心して人疾く鎭めなど、心知れるどちは思ひ構ふ。宵少し過ぐる程に、風の音荒らかに打ち吹くに、はかなき樣なる部などは、ひし〳〵と紛るゝ音に、人の忍び給へる擧動は、え聞き付け給はじと思ひて、やをら導きつる。同じ所に大殿籠れるを、うしろめたしと思へど、常の事なれば、外々にとも如何が聞えん。御けはひをも辿々しからず見奉り知り給へらんと思ひけるに、打もまどろみ給はねば、ふと聞き給ひて、やをら起き出で給ひぬ。いと疾く這

○何心もなく寢入り給へる中君の寢ぬるなり。

○往姿　薫君なり。

○つらしと思ひ給へる　中君。

○況いて如何に云々　況して今斯くなりては如何に我を思ひ疎まんとなり。

○あらざりけり　大君にはあらざりけり中君なりと知るなり。

○心も　世心も。

○何かは他人のやうにやは　何かは他人の樣に思ふべき。

ひ隱れ給ひぬるに、何心も無く寢入り給へるを、いといとほしく、如何にするわざぞと胸つぶれて、諸共に隱れなばやと思へど、然もえ立ち歸られで、わなゝく〳〵見給へば、火の仄なるに、往姿にて、いと馴れ顏に、几帳の帷子を引き上げて入りぬるを、いみじういとほしく、如何に覺え給はんと思ひながら、怪しき壁の面に、屛風を立てたる後のむつかしげなるに居給ひぬ。あらましごとにてだに、つらしと思ひ給へるを、況いて如何に珍らかに思し疎まんと、いと心苦しきにも、凡てはかゞ〳〵しき後見なくて、落ち留まる身どもの悲しきを思ひ續け給ふに、今はとて山に登り給ひし夕の御樣など、只今の心地して、いみじく戀しく悲しく覺え給ふ。

中納言は一人臥し給へるを、心しけるにやと嬉しくて、心ときめきし給ふに、やう〳〵あらざりけりと見るに、同じ事ながら美しくらうたげなる氣色は、優りてやと覺ゆ。あさましげにあきれ惑ひ給へるを、げに心も知らざりけりと見ゆれば、いといとほしくもあり、又押返して、隱れ給へらんつらさの、まめやかに心憂く妬ければ、これをも餘所の物とはえ思ひ放つまじけれど、猶本意の違はん口惜しくて、うちつけに淺かりけりとも覺え奉らじ。此一節は猶過して、遂に宿世逃れずば、此方樣にならんも、何かは他人のやうにやはと思ひ醒して、例のをかしく懷かしき樣に語らひて明し給ひつ。

老人どもは爲損じつと思ひて、中の君は何處にかおはしますらん、怪しきわざかな、と辿り合へり。「さりともある樣あらん。」など云ふ。「大方例の見奉るに、皺のぶる心地してめでたく衰に見まほしき御容貌有樣を、などていと持て離れては聞え給ふらん。何かこれは

○恐ろしき神　人の仲を妨げ離すと云ふ荒御藤などを謂ふ。
○かゝる事　好色風流の事。
○逢ふ人からに云々　志したる大君にはあらねど中君にも心留りて明けぬる夜の短き心地してとなり。
○心憂くつらき人　大君をさしていふ。
○後瀬　後の逢ふ瀬。
○姫君をつらしと云々　中君の心に大君をうらむなり
○壁の中の蟋蟀　大君を蟋蟀に喩へて言ふ。
○心ゆるびすべくもあらぬ　油斷なり難しとなり。
○あなたに參りて　薫君の所になり。
○捨つ難く云々　故宮の世を捨てし心にも姫達をば捨て難く思し置き給ひし心苦しさを思ひては我とても姫達を見捨てゝは身をえ捨つまじ。
○誰が御爲もいとほしく　薫のかく怨むを雙方の爲にいとほしと辨などの思ふなり。
○人々の賢しらを　辨などの賢しら立ちしゝわざを。
○同じ枝を云々　我繼を中君に移すが志深きか移さで君をのみ繼ふるが志深きかとなり。
○事無しびに　事無げに。
○讓り給ふ　姉姫が妹君に讓り給ふなり。

世の人い言ふめる恐ろしき神ぞ憑き奉りつらん。」と、齒は打透きて、愛敬無げに言ひ做す女あり。又「あな禍々し。なぞの物か憑かせ給はん。唯人に遠く生ひ出でさせ給ふめれば、かゝる事にもつきぐしげにもてなし聞え給ふ人も無くおはしますに、はしたなく思さるゝにこそ。今自ら見奉り馴れ給ひなば、思ひ聞え給ひてん。」など語らひて、疾く打解けて思ふやうにておはしまさなんと、言ふ〳〵寢入りて、鼾など傍痛くするもあり。

逢ふ人からにしもあらぬ秋の夜なれど、程も無く明けぬる心地して、何れと分くべくもあらず、なまめかしき御けはひを、人やりならず飽かぬ心地して、(薫)「相思せよ。いと心憂くつらき人の御樣、見習ひ給ふなよ。」など、後瀬を契りて出で給ふ。我ながら怪しく夢のやうに覺ゆれど、猶つれなき御氣色、今一度見果てんの心に思ひのどめつゝ、例の出でゝ臥し給へり。辨參りて、(辨)「いと怪しく、中の君は何處にかおはしますらん。」と云ふを、いと恥かしく思ひ掛けぬ御心地に、如何なりけん事にかと思ひ臥し給へり。昨日の給ひし事を思ひ出でて、姫君をつらしと思ひ聞え給ふ。明けにける光に付きてぞ、壁の中の蟋蟀這ひ出で給へる。思すらん事のいといとほしければ、互に物も言はれ給はず、ゆかしげ無う心憂くもあるかな。今より後も、心ゆるびすべくもあらぬ世にこそと、思ひ亂れ給へり。

辨はあなたに參りて、あさましかりける御心強さを聞き顯して、いと餘り深く、人憎かりける事と、いとほしく思ひ惚れ居たり。(薫)「來し方のつらさは、猶殘りある心地して、萬に思ひ慰めつるを、今夜なん誠に恥かしく、身も投げつべき心地する。捨て難く思し置き奉り給へりけん心苦しさを、思ひ聞ゆる方こそ、又ひたぶるに、身をもえ思ひ捨つまじけれ。かけ〳〵しき筋は、何方にも聞えじ。憂きもつらきも方々に忘れ給ふまじくなん。宮などの恥かしげ無く聞え給ふめるを、同じくは心高くと思ふ方ぞ、殊に物し給ふらんと心得果てつれば、いとゞことわりに恥かしくて、又參りて人々に見え奉らん事も妬くなん。斯く嗚呼がましき身の上、又人にだに洩し給ふな。」と怨じ置きて、例よりも急ぎ出で給ふ。誰が御爲もいとほしくと、さゝめき合へり。姫君も如何にしつる事ぞ。若し疎なる心も物し給はゞと、胸つぶれて心苦しければ、凡て打合はぬ人々の賢しらを憎しとおぼす。樣々思ひ給ふに、御文あり。例よりは嬉しと覺え給ふも、且は怪し。秋の氣色も知らず顏に靑き枝の片枝はいと濃く紅葉したるを、

(薫)「同じ枝を、分きて染めける、山姫に、何れか深き、色と問はゞや。」

さばかり恨みつる氣色も無く、言少に事殺ぎて、押し包み給へるを、そこはかと無くもてなして、止みなゝめりと見給ふも、心騷ぎて、耳かしがましう御返りと言へば、聞え給へと、讓らんもうたて覺えて、さすがに書きにくゝ思ひ亂れ給ふ。

(大君)「山姫の、そむるこゝろは、わかねども、うつろふ方や、ふかきなるらん。」

事無しびに書き給へるが、をかしく見えければ、猶え怨じ果つまじく覺ゆ。

身を分けてなど、讓り給ふ氣色は度々見えしかど、承引かぬにわびて、構へ給へるなゝめり。その甲斐無く斯くつれなからんも、いとほしく情なき物に思ひ置かれて、愈初の思叶ひ難くやあらん。とかく言ひ傳へなどすめる老人の思はん所も輕々しく、とにかくに心を染めけんだに悔しく、かばかりの世の中を思ひ捨てんの心に、自も協はざりけりと、人わろく知ら

○同じ邊に云々　姉妹を此や彼やと思ひ渡りて言ひ寄る樣ならんは人笑なるべしとなり。
○棚なし小船　古今集に「堀江漕ぐ棚なし小船漕ぎかへり同じ人にや戀ひ渡るらん」とあり。同じ人を同じ邊の意に引きたるなり。
○紛るゝこと無く　騷がしからずなり。
○かのわたりの事　宇治の事。
○萬に恨み給ふ　薫の媒の疎なるをなり。
○さもおはせなんと　中君を匂宮に定めてんとなり。
○山里　宇治。
○女郎花云々　宇治の姫達を女郎花に寄せて詠めり。
○霧深き云々　志深き人なちでは見給ふまじとなり。
○通ふやうならんも　匂宮へ中君を媒せば大君の心に通ふやうならんとなり。
○親方になりて　親めきて
○忍びて率て奉る　匂宮を宇治へなり。
○后の宮　匂宮の御母、明石中宮。
○み莊の人の家　薫君の御莊園を預る人の家。
○經營し合へり　人々樣々設け營みて待遇するなり。
○心憂かりし後は　姉君にはかられて薫にあひし後は。

る〻を、況しておしなべたる好物の眞似に同じ邊に返すぐ〻漕き廻らん。いと人笑なる棚無し小船めきたるべしなど、終夜思ひ明し給ひて、まだ有明の空もをかしき程に、兵部卿宮の御方に參り給ふ。三條の宮燒けにし後は、六條院にぞ移ろひ給へれば、近くては常に參り給ふを、宮を思すやうなる御心地し給ひけり。紛るゝこと無く、あらまほしき御住居に、御前の前栽外のには似ず、同じき花の姿も、木草の靡き樣も、異に見做されて、遣水に澄める月の影さへ、繪に書きたるやうなるに、思ひつるも著く、起きおはしましけり。風に付きて吹き來る香のいと著く打ち薫るに、ふとそれと驚かれて、御直衣奉り、亂れぬ樣に引き繕ひて出で給ふ。階を昇りも果てず突い居給へれば、猶上になどもの給はで、勾欄に寄り居給ひて、世の中の御物語聞えかはし給ふ。かのわたりの事をも、物の序に思し出でゝ、萬に恨み給ふもわりなしや。自の心にだに叶ひ難きをと思ふ〻、さもおはせなんと思ひ成る樣のあれば、例よりはまめやかにあるべき樣など申し給ふ。明けぐれの程、生憎く霧渡りて、空のけはひ冷やかなるに、月は霧に隔てられて、木の下も暗くなまめきたり。山里の哀なる有樣思ひ出で給ふ。宮「此頃の程に、必ず後らかし給ふな。」と語らひ給ふを、猶煩はしがれば、

（匂）「女郎花、咲ける大野を、防ぎつゝ、心狹くや、標を結ふらん。」

と戲れ給ふ。

（薫）「霧深き、朝の原の　女郎花、心を寄せて、見る人ぞ見る。

なべてやは。」など、妬まし聞ゆれば、「あなかしかまし。」と、果々は腹立ち給ひぬ。年頃かくの給へど、人の御有樣を如何ならんと、後めたく思ひしに、容貌なども見貶し給ふまじく、推し量らるゝ心ばせの近劣する樣もやなどぞ、危く思ひ渡りしを、何事も口惜しくは物し給ふまじかゝめりと思へば、かのいとほしく、內々に思ひたばかり給ふ有樣も違ふやうならんも、情無きやうなるを、さりとて然將え思ひ改むまじく覺ゆれば、先づ讓り聞えて、何方の恨をも負はじなど、下に思ひ構ふる心をも知り給はで、心狹く取做し給ふもをかしけれど、例の輕らかなる御心ざまに、物思はせんこそ心苦しかるべけれ、など、親方になりて聞え給ふ。（匂）「よし見給へ。かばかり心に留ることなんまだ無かりつる。」など、いとまめやかにの給へば、（薫）「かの心どもには然もやと打靡きぬべき氣色は見えずなん侍る。仕う奉りにくき宮仕にこそ侍れや。」とておはしますべき樣など、細かに聞え知らせ給ふ。

廿六日彼岸の果にて、吉き日なりければ、人知れず心づかひして、いみじく忍びて率て奉る。后の宮など聞し召し出でゝは、かゝる御歩行いみじく制し聞え給へば、いと煩はしきを、切に思したる事なれば、然りげ無くと持て扱ふも理無くなん。船渡なども所狹ければ、事々しき御宿なども借り給はず。其わたりいと近き御莊の人の家に、いと忍びて、宮をば下し奉り給ひておはしぬ。見咎め奉るべき人も無けれど、宿直人は、僅に出でありくにも、氣色知らせじとなるべし。例の中納言殿おはしますとて、經營し合へり。君達生煩はしく聞き給へど、移ろふ方殊に匂はし置きてしかばと、姫君は思す。中君は思ふ方異なゝめりしかば、さりともと思ひながら、心憂かりし後は、ありしやうに姉君をも思ひ聞え給はず、

心置かれて物し給ふ。何やかやと御消息のみ聞え通ひて、如何なるべき事にかと、人々も心苦しがる。宮をば御馬にて、暗き紛れにおはしまさせ給ひて、辨召し出でゝ、(薫)「此許に唯一言聞えさすべき事なん侍るを、思し放つ樣見奉りてしに、いと恥かしけれど、直隱にてえ已むまじきを、今暫しふかしてを、ありし樣には導き給ひてんや。」など裏も無く語らひ給へば、何方にも同じ事にこそはと思ひて參りぬ。然なんと聞ゆれば、さればよ思ひ移りにけりと嬉しくて、心落居て、かの入り給ふべき道にはあらぬ廂の障子をいとよく閉して、對面し給へり。(薫)「一言聞えさすべきが、又人聞くばかりのゝしらんは、文無きを、聊明けさせ給へ。いといぶせし。」と聞え給へど、(大君)「かくてもいと能く聞えぬべし。」とて、明け給はず。今はと移ろひなんを、ただならじとて言ふべきにや。何かは例ならぬ對面にもあらず、人憎く答へで、夜も更かさじ、など思ひて、斯ばかりも出で給へるに、障子の中より御袖を捉へて、引き寄せていみじう怨むれば、いとうたてもあるわざかな、何に聞き入れつらんと、悔しうむつかしけれど、こしらへて出してんと思して、異人と思ひわき給ふまじきさまに、かすめつゝ語らひ給へる心ばへなど、いと哀なり。

宮は教へ聞えつる儘に、一夜の戸口に寄りて、扇を鳴し給へば、辨も參りて導き聞ゆ。前々も馴れにける道のしるべ、をかしと思ひつゝ入り給ひぬるをも、姫君は知り給はで、こしらへ入れてんと思したり。をかしうもいとほしくも覺えて、内々に心も知らざりける恨置かれんも、罪去り所無き心地すべければ、(薫)「宮の慕ひ給ひつれば得聞え否びて、此處におはしつる。音もせでこそ紛れ給ひぬれ。この賢しだつめる人や、語らはれ奉りぬらん。

○此許　大君。
○直隱にて　唯此儘にて。
○何方にも云々　大君へ參り給ふも中君へ參り給ふも同じ事なりと思ひてなり。
○參りぬ　此事を語らんとて大君の所へなり。
○異人と云々　中君も大君も同じ事と思ひ給ふべき樣になり。
○姫君は知り給はで云々　大君の心に匂宮の來り給ふとは知らで中君の方へ入れんと思ふなり。

中空に人笑にもなり侍りぬべきかな。」との給ふに、今少し思ひ寄らぬ事の、目もあやに心づき無うなりて、斯う萬に珍らかなりける御心の程を知らで、言ふ甲斐なき心幼さも見え奉りにける懈に、思し悔るにこそはと、言はん方無く思う給へり。(薫)「今は言ふ甲斐なし。道理は返すゞ聞えさせても、餘あらば、抓みも捻らせ給へ。やんごとなき方に思し寄るめるを、いとほしく思ひ給ふるに、協はぬ身こそ惜き所無く心憂く侍りけれ。猶如何がはせんに思し弱りね。この御障子の固めばかりいと強きも、誠に物淸く推し量り聞ゆる人も侍らじ。しるべと誘ひ給へる人の御心にも、まさに斯く胸塞がりて明すらんとは思しなんや。」とて障子をも引き破りつべき氣色なれば、言はん方無く心づき無けれど、こしらへんと思ひ鎭めて、(大君)「このの給ふ宿世と云ふらん方は、目にも見えぬ事にて、如何にもゝ思ひ辿られず。知らぬ涙のみ霧塞がる心地してなん、こは如何にもてなし給ふぞと、夢のやうにあさましきに、後の世の例に言ひ出づる人も有らば、昔物語などに、殊更に嗚呼めきて、作り出でたる物の喩にこそなりぬべかゝめれ。斯く思し構ふる心の程をも、如何なりける外にながらへば、少し思ひのどまりて聞えん。心地も更に掻きくらす樣にて、いと惱ましきを、此處に打休まん。許し給へ。」といみじく詫び給へば、さすがにことわりをばいと能くの給ふが、心恥かしくらうたく覺えて、(薫)「あが君、御心に從ふことの類無ければこそ、斯くまで頑しくなり侍れ。言ひ知らず、憎く疎しきものに思し做すめれば、聞えん方無し。

○中空に人笑にも云々　薫の身の中空に何れへもつかぬをいふ。中君へは匂宮入り給ひ、大君はつれなければなり。
○やんごとなき方に　御身はやんごとなき匂宮に。
○如何はせんに　宿世は詮方なければ。
○思し弱りね　强き心を思しよわりて厭き給へとなり。
○知らぬ涙　後撰集に「行くさきを知らぬ涙の悲しきは唯目の前に落つるなりけり」
○をこめきて　をかしく。
○斯く思し構ふる云々　薫君が斯く構へ謀り給ふを匂宮は如何に推し量り給はん快くは思すまじとなり。

○縋し拳り給へれば　捉へたる袖をはなしたるなり。

○山鳥の心地して　拾遺集に「足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を獨りかも寢む」

○方々に暮らす心を　我爲と中君の爲とに思ひ惱みて暮らす我心を。

○出で給ふなり　匂宮が。

○匂　中君の風情。

○ねび人ども　辨などの老人ども。

○いと怪しく云々　思も掛けぬ匂宮を見ければなり。

○夜をや隔てん　萬葉集に「若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てんにくからなくに」

いとゞ世に跡留むべくなん覺えぬ。」とて、（薫）「さらば隔てながらも聞えさせん。ひたぶるになん打捨てさせ給ひそ。」とて、縱し奉り給へれば、這ひ入りて、さすがに入りも果て給はぬを、いと哀と思ひて、（薫）「かばかりの御けはひを慰めにて、明し侍らん。ゆめ〳〵。」と聞えて、打もまどろまず。いとどしき水の音に目も覺めて、夜半の嵐に、山鳥の心地して明しかね給ふ。

例の明け行くけはひに、鐘の聲など聞ゆ。いぎたなくて出で給ふべき氣色も無きよと、心疾ましく聲作り給ふも、實に怪しきわざなり。

（薫）「しるべせし、我や却りて、惑ふべき、心も行かぬ、明けぐれの道。かゝる例世に有りけんや。」との給へば、

（大君）「方々に、暮らす心を、思ひ遣れ、人やりならぬ、道に惑はゞ。」と仄にの給ふを、いと飽かぬ心地すれば、（薫）「如何にこよなう隔たりて侍るめれば、いとわりなうこそ。」など、萬づに恨みつゝ、ほの〴〵と明け行く程に、よべの方より出で給ふなり。いと柔に振舞做し給へる匂など、艶なる御心化粧には、言ひ知らず染め給へり。ねび人どもは、いと怪しく心得難く思ひ惑はれけれど、さりとも惡しざまなる御心あらんやとは慰めたり。

暗き程にと急ぎ歸り給ふ。道の程も歸るさはいと遙けく思されて、心安くもえ行き通はざらん事の、かねていと苦しきを、夜をや隔てんと思ひ惱み給ふなゝめり。まだ人騷がしからぬ朝の程におはし着きぬ。廊に御車寄せて下り給ふ。異樣なる女車の樣して隱ろひ入り

○皆　薫君も匂宮も。

○樣々に思し構へけるを　大君が。

○姉君をば思ひ聞え給ひて　中君が。

○知らざりし樣をも云々　大君が。

○顧もし人　姉君をいふ。

○紫苑色　表は蘇芳裏は朽黄なり。

○苦しげに思ひ　忍び使なればなり。

○老人のしわざなりけり　被け物賜ひしはなり。

○物しくなん云々　不興に思したりとなり。

○如何がはせん云々　大君の心なり。

給ふに皆笑ひ給ひて、（薫）「疎ならぬ宮仕の御志となん思ひ給ふる。」と申し給ふ。しるべの嗚呼がましさをば、いと妬くて愁へ聞え給はず。

宮は何時しかと御文奉り給ふ。山里には誰もく〳〵現の心地し給はず、思ひ亂れ給へり。樣々に思し構へけるを、色にも出し給はざりけるよと、疎ましうつらく、姉君をば思ひ聞え給ひて、目も見合はせ奉り給はず。知らざりし樣をも、爽々とはえ明らめ給はで、道理に心苦しく思ひ聞え給ふ。人々も如何に侍りし事にかなど、御氣色見奉れど、思し惚れたる樣にて賴もし人のおはすれば、怪しきわざかなと思ひ合へり。御文も引き解きて見せ奉り給へど、更に起き上り給はねば、いと久しくなりぬと、御使わびけり。

（匂）「世の常に、思ひやすらん、露深き、道の笹原、分けて來つるも。」

書き剔れ給へる墨つきなどの、殊更に艶なるも、大方に付けて見給ひしは、をかしう覺えしを、後めたう物思はしうて、我さかし人にて聞えんも、いとつゝましければ、まめやかにあるべきやうを、いみじく責めて書かせ奉り給ふ。紫苑色の細長一襲に、三重襲の袴具して賜ふ。御使苦しげに思ひたれば、包ませて、供なる人になん送らせ給ふ。事々しき御使にもあらず、例奉れ給ふ上童なり。殊更に人に氣色漏さじと思しければ、よべの賢しがりし老人のしわざなりけりと、物しくなん聞し召しける。

其夜もかのしるべ誘ひ給へど、（薫）「冷泉院に必ず侍ふべき事侍れば。」とて、止り給ひぬ。例の事に觸れて、荒まじけに世をもてなすと、憎くおぼす。如何がはせん。本意ならざりし事とて疎にやは、と思ひ弱り給ひて、御しつらひなど打合はぬ住處の樣なれど、然る方

○正身　中君なり。
○繕はれ　姉君に中君のつくろはるゝなり。
○賢し人　大君。

○斯うでのみやは見奉らんと云々　中君を薫へと思ひしをいふ。
○恥かしき事ども　匂宮に逢ひし事をいふ。

○あきれ給へりしけはひ　中君の昨夜のけはひなり。
○御志　匂宮の。

○物の恥しさもなのめにやあらん　物はぢも大かたにして深くはあるまじとなり。

にをかしくし做して、待ち聞え給ひけり。遙なる御中道を急ぎおはしましたりけるも、嬉しきわざなるが且は怪しき。正身は我にもあらぬ樣にて、繕はれ奉り給ふ儘に、濃き御衣のいたく濡るれば、賢し人も打泣きつゝ、（大君）「世の中に久しくもと覺え侍らねば、明暮の眺にも、唯御事をのみなん心苦しう思ひ聞ゆるに、この人々も宜かるべき樣の事と、聞きにくきまで言ひ知らすめれば、年經たる心どもには、さりとも世の道理をも知りたらん。はか〴〵しくもあらぬ心一つを立てゝ、斯うでのみやは見奉らんと、思ひ成る樣もありしかど、只今斯く思ひも敢へず、恥かしき事どもに亂れ思ふべくは、更に思ひ掛け侍らざりしに、これや實に人の言ふめる、遁れ難き御契なりけん。いとこそ苦しけれ。少し思し慰みなんに、知らざりし樣をも聞えん。憎しとな思し入りそ。罪もぞ得給ふ。」と、御髪を撫で繕ひつゝ聞え給へば、答もし給はねど、さすがに斯く思しの給ふが、實にうしろめたく惡しかれとも思しおきてじを、人笑に見苦しき事添ひて、見扱はれ奉らんがいみじきを、萬に思ひ居給へり。

さる心も無く、あきれ給へりしけはひだに、なべてならずをかしかりしを、況いて少し世の常になよび給へるは、御志も增さるに、容易く通ひ給はざらん山道の遙けさも、胸痛きまで思して、心深げに語らひ賴め給へど、哀とも如何にとも思ひ分き給はず。言ひ知らずかしづく者の姫君も、少し世の常の人け近く親兄など云ひつゝ、人のたゝずまひをも見馴れ給へるは、物の恥かしさも、なのめにやならん。家に崇め聞ゆる人こそ無けれ、かく山深き御あたりなれば、人に遠く物深くて、習ひ給へる心地に思ひ懸けぬ有樣の、つゝましく

○怪しう田舍びたらんかしと　中君が思ひてなり。
○餅なん參る　婚姻の三日目は餅を以て祝ふ習なり。
○御前　大君の御前。
○たど〳〵しう　大君のかやうの事には不案内なるなり。

○宮仕の勞も云々　音づれし甲斐も無かりしを怨みて云ふ。
○追ひ繼ぎ書き給ひて　走り書き給ひて。
○設の物ども　三日の夜の料の衣どもなど。
○宮　女三宮。
○古代の事なれど　單衣の袖に書く事は古代めくなり。

○御使片方は逃げ隱れにけり　御使の人祿などの心づかひ無からんが爲に隱れしなり。
○隔なき云々　心は隔無くとも馴れし袖とは言はれじとなり。

恥かしく、何事も世の人に似ず、怪しう田舍びたらんかしと、はかなき御答にても、言ひ出でん方無くつゝみ給へり。さるは此君しもぞ、勞々しく才ある方の匂は優り給へる。三日に當る夜は、餅なん參ると人々の聞ゆれば、殊更に然るべき祝の事にこそはと思して、御前にてせさせ給ふも迚々しう、且は大人になりて掟て給ふも、人の見るらんこと憚られて、面うち赤めておはする樣、いとをかしげなり。兄心にや、のどかに氣高き物から、人の爲哀に情々しうぞおはしける。中納言殿より、（薫消息）「よべ參らんと思ひ給へしかど、宮仕の勞もしるし無げなゝめる世に、思う給へ恨みてなん。今夜は雜役もやと思ひ給ふれど、宿直所のはしたなけに侍りし亂り心地いとゞ安からで、やすらはれ侍る。」と、檀紙に追ひ繼ぎ書き給ひて、設の物ども、こまやかに縫ひなどもせざりける、いろ〳〵押し卷きなどしつゝ御衣櫃數多懸子に納れて、老人の許に、人々の料にとて給へり。宮の御方に侍ひけるに隨ひて、いと多くもえ取り集め給はざりけるにやあらん。たゞなる絹綾など、下には入れ隱しつゝ、御料とおぼしき二領、いと清らにしたるを、單衣の御衣の袖に、古代の事なれど、

（薫）「さよ衣、着て馴れきとは、言はずとも、託言ばかりは、掛けずしもあらじ。」と威し聞え給へり。此方彼方ゆかしげ無き御事を、恥かしいとど見給ひて、御返りも如何聞えんと、思し煩ふ程、御使片方は逃げ隱れにけり。怪しき下人を控へてぞ御返し給ふ。

（大君）「隔無き、心ばかりは、通ふとも、馴れし袖とは、掛けじとぞ思ふ。」

心あわたゞしく思ひ亂れ給へる名殘に、いとゞ直々しきを思しける儘と、待ち見給ふ人は、

○御文書きて云々　宇治の中君へ不審の由を聞え給ふなり。
○そなた　宇治。
○能く御氣色を見奉らん　匂宮の心を引き見んとなり
○壓紙所　女房の侍ふ所。
○愛無き勸當　中宮の御諫た薫の傳へ聞きて斯く云へるなり。
○同じ御騷がれに云々　宇治へおはせば中宮に尋ね騷がれ、おはせずば宇治にて歎き騷がれ給はん。
○木幡の山云々　御馬にておはせば如何となり。古歌に「山城の木幡の山に馬はあれどかちよりぞ行く君を思ひかね。」とあり。
○此君　薫君。
○宮は　匂宮は。

唯哀にぞ思ひ做され給ふ。

宮は其夜内に參り給ひて、えまか〻で給ふまじけなるを、人知れず御心も空にて、思し歎きたるに、中宮、(明石)「猶かく獨おはしまして世の中に好い給へる御名のやう〳〵聞ゆる、猶いと惡しき事なり。何事も物好ましく、立てたる心な遣ひ給ひそ。上も後めたけに思しの給ふ。」と、里住勝におはしますを諫め聞え給へば、いと苦しとおぼして、御宿直所に出で給ひて、御文書きて奉れ給へる名殘もいたく打眺めておはしますに、中納言の君參り給へり。そなたの心寄せと思せば、例よりも嬉しうて、如何がすべき。いとかく暗くなりぬめるを、心も亂れてなん、と歎かしげにおぼしたり。能く御氣色を見奉らんと思して、(薫)「日頃經てかく參り給へるを、今夜侍はせ給はで、急ぎまか〻で給ひなん、いと〻宜しからぬ事にや、思し聞えさせ給はん。臺盤所の方にて承はりつれば、人知れず煩はしき宮仕のしるしに、愛無き勸當や侍らんと、顏の色違ひ侍りつる。」と申し給へば、(匂)「いと聞きにくゝぞ思しの給ふや。多くは人の取り做す事なるべし。世に咎あるばかりの心は、何事にか使ふらん。すべて所狹き身の程こそ、なか〳〵なるわざなりけれ。」とて、誠に厭はしくさへ思したり。いとほしう見奉り給ひて、(薫)「同じ御騷がれにこそはおはすなれ。今夜の罪には代り聞えさせて、身をも徒になし侍りなんかし。木幡の山に馬は如何が侍るべき。いと〻物の聞えや障り所無からん。」と聞え給へば、唯暮れに暮れて、更けにける夜なれば、思しわびて、御馬にて出で給ひぬ。(薫)「御供にはなか〳〵仕うまつらじ、御後見を。」とて、此君は内に侍ひ給ふ。中宮の御方に參り給へれば、(中宮)「宮は出で給ひぬなり。

○大宮　中宮。
○我心のやうにひが〳〵しき　薫の好色ならぬを自稱するなり。
○侍ふ限の女房　中宮の女房一同をいふ。
○見えしらがふ　見えよがしに立振舞ふ。
○心々なる世の中　古歌に「世の人の心々にありければ思ふもつらしうきはたのまず」
○かしこ　宇治。
○正身　中君。

あさましくいとほしき御樣かな。如何に人見奉るらん。上聞し召してば、諫め聞えぬが言ふ甲斐なき、と思しの給ふこそわりなけれ。」との給はす。數多宮達のおとなび調ひ給へど、大宮は愈若くをかしきけはひなん增さり給ひける。女一宮もかくぞおはしますべかゝめる。如何ならん折にか、かばかりにても、物近く御聲をだに聞え奉らん、と哀に覺ゆ。好いたる人の、思ふまじき心使ふらんも、斯うやうなる御仲らひの、さすがに氣遠からず入り立ちて、心に協はぬ折の事ならんかし。我心のやうに、僻々しき心の類やは又世にあゝべかめる。それだに猶動き初めぬるあたりは、えこそ思ひ絶えね、と思ひ居給へり。侍ふ限の女房の容貌・心ざま、何れと無くわろびたる無く、目安く取々にをかしき中にも、あてに勝れて目に留るあれど、更に〳〵亂れ初めじの心にて、いと生直にもてなし給へり。殊更に見えしらがふ人もあり。大方恥かしげに持て鎭め給へるあたりなれば、うはべこそ心ばかり持て鎭めたれ。心々なる世の中なりければ、色めかしげに進みたる下の心漏りて見ゆるもあるを、樣々にをかしくも哀にもあるかなと、立ちても居ても、唯常なき有樣を、思ひありき給ふ。

かしこには、中納言納殿の、事々しげに言ひ做し給へりつるを、夜更くるまでおはしまさで、御文のあるを、さればよと胸つぶれておはするに、夜中近うなりて、荒ましき風の競に、いともなまめかしく清らにて、匂ひおはしたるも如何が疎に覺え給はん。正身も聊打靡きて、思ひ知り給ふ事あるべし。いみじくをかしげに盛と見えて、引き繕ひ給へる樣は、況て類あらじはやと覺ゆ。さばかり佳き人を多く見給ふ御目にだに、怪しうはあらずと、

○斜なる際の人　凡樣の人
○歴過ぎたる云々　姫遠に仕ふる女房達の。
○彩りたる　化粧したる。
○彼が程には　かの女房などには。
○心の做し　心の思做し。
○大宮の聞え給ひし樣　明石中宮の御異見をいふ。
○音に聞きし　仇々しき名をかねて聞きたるをいふ。

容貌より始めて、多く近優したりと思さるれば、山里の老人どもは、況して口つき憎氣に打笑みつゝ、斯くあたらしき御有樣を、斜なる際の人の見奉り給はましかば、如何に口惜しからまし。思ふやうなる御宿世と聞えつゝ、姫君の御心を怪しく僻々しく持て做し給ふを、もどき口嚬め聞ゆ。盛過ぎたる樣どもに、鮮なる花の色々似つかはしからぬを刺し繕ひ着つゝ、あり付かず取り繕ひたる姿どもの、罪許されたるも無きを見渡し給ひて、姫君我もやう〳〵盛過ぎぬる身ぞかし。鏡を見れば痩せ〳〵に成り以て行くを、己がじゝは此人どもゝ、我惡しとやは思へる。後手は知らず顔に、額髪を引き懸けつゝ、彩りたる顔作りを好くして、打振舞ふめり。我身にては、まだいと彼が程にはあらず。目も鼻も直しと覺ゆるは、心の做しにやあらんと、うしろめたく見出して臥し給へり。恥かしげならん人に見えんことは、愈傍痛く、今一年二年あらば衰へ增さりなん。はかなげなる身の有樣をと、御手つきの細やかにかよわく哀なるを差出でゝも、世の中を思ひ續け給ふ。

宮は有り難かりつる御暇の程を思し運らすに、猶心安かるまじき事にこそはと、いと胸ふたがりて覺え給ひける。大宮の聞え給ひし樣など語り聞え給うて、(匂)「思ひながら跡絶あらんを、如何なるにかと思すな。夢にても疎ならんに、かくまでも參り來まじきを、心の程や如何がと疑ひて、思ひ亂れ給はんが心苦しさに、身を捨てゝなん、常に斯くはえ惑ひありかじ。さるべき樣にて近く渡し奉らん。」いと深く聞え給へど、絶間あるべく思さるらんは、音に聞きし御心の程著きにやと心置かれて、我御有樣から、樣々物歎かしくてなんありける。明け行く程の空に、妻戸押し明け給ひて、諸共に誘ひ出でゝ見給へば、霧渡れる

○行きかふ跡の白浪　拾遺集に「世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白浪」
○此世のみならず　來世までも掛けて。
○中納言の恥かしさよりは　薫君よりは心安しとなり
○澄みたる氣色　俗を脱したるさまなり。
○餘所に思ひ聞えし　匂宮は御身分至て高くてとなり
○聲づくり催し　聲を出して何となく御歸を催促するなり。
○中絶えん云々　中君を橋姫に寄せて詠めり。
○絶えせじの云々　絶えじとの給ふを頼にて長き跡絶えじと待ち渡るべきかとなり

樣、所からの哀多く添ひて、例の柴積む船の幽に行きかふ跡の白浪目馴れずもある住居の樣かなと、色なる御心にはをかしく思ひ做さる。山の端の光やう〳〵見ゆるに、女君の御容貌の正面に美しげにて、限無く齋き居るたらん姫君も、かばかりこそはおはすべかゝめれ。思ひ做しの我方ざまのいと美しきぞかし。濃なる匂など、打解けて見まほしう、なかなかなる心地す。水の音なひ懷かしからず、宇治橋のいと物ふりて見え渡さるゝなど、霧晴れ行けば、いとゞ荒ましき岸のわたりを、かゝる處に如何で年を經給ふらんなど、打涙ぐまれ給へるを、いと恥かしと聞え給ふ。男の御樣の限無く、なまめかしく清らにて、此世のみならず契り頼め聞え給へば、思ひ寄らざりし事とは思ひながら、なか〳〵かの目馴れたりし中納言の恥かしさよりはと覺え給ふ。彼は思ふ方異にて、いといたく澄みたる氣色の見えにくゝ、恥かしげなりしに、餘所に思ひ聞えしは、況てこよなく遙に、一くだり書き出で給ふ御返しだに、つゝましく覺えしを、久しう跡絶え給はんは、心細からん、と思ひならるゝも、我ながらうたてと思ひ知り給ふ。人々いたく聲作り催し聞ゆれば、京におはしまさん程はしたなからぬ程にと、いと心あわだゝしげにて、心より外ならん夜離を返すゞ〳〵の給ふ。

(匂)「中絶えん、物ならなくに、橋姫の、片敷く袖や、夜半に濡らさん。」

(中君)「絶えせじの、我が頼みにや、宇治橋の、遙けき中を、待ち渡るべき。」

言には出でねど、物歎かしき御けはひ限無く思されけり。若き人の御心に沁みぬべく、類

○思做しの云々　匂宮の御樣は思做しにて一層立優り給ふにや殊に勝れ給ふとなり。

○得容易くも紛れ給はず　容易く忍び通ひ給ふことを得ざりきとなり。

○姫君　大君。

○思ひ加へじと　薫君に逢ひて我もかゝる憂き物思を加へじとなり。

○我過にいとほしく　我が導にて匂宮に逢ひ初めしなればとなり。

○參り給へり　薫君が匂宮の許に。

○布留の山里如何　新千載集に「初時雨ふるの山里いかならん住む人さへや袖の濡るらん」

少げなる朝明の姿を見送りて、名殘留れる御移香なども、人知れず物哀なるは、ざれたる御心かな。今朝ぞ物の文目も見ゆる程にて、人々のぞきて見奉る。（人々）「中納言殿は、懷かしく恥かしげなる樣ぞ添ひ給へりける。思ひ做しの今一際にや、此御樣はいと殊に。」など賞で聞ゆ。

道すがら、心苦しかりつる御氣色を、思し出でつゝ立ちも返りなまほしく、樣惡しきまで思せど、世の聞えを忍びて歸らせ給ふ程に、得容易くも紛れ給はず。御文は明くる日毎に數多返り奉らせ給ふ。疎にはあらぬにやと思ひながら、覺束なき日數の積るをいと心盡しに見じと思ひしものを、身に增さりて、心苦しくあるかなと、姫君は思し歎かるれど、いとど此君の思ひ沈み給はんにより、つれなく持て做して、自らだに猶かゝる事思ひ加へじと、愈深くおぼす。

中納言の君も、待遠にぞ思すらんかしと思ひやりて、我過にいとほしくて、宮を聞え驚かしつゝ、絶えず御氣色を見給ふに、いといたく思ほし入れたる樣なれば、さりともと後安かりけり。九月十日の程なれば、野山の氣色も思ひ遣らるゝに、時雨めきて搔昏し、空の叢雲恐ろしげなる夕暮、宮いとゞ靜心無く眺め給ひて、如何にせんと、御心一つを出で立ちかね給ふ折、推し量りて參り給へり。（薫）「布留の山里如何ならん。」と、驚かし聞え給ふ。いと嬉しと思して、諸共に誘ひ給へば、例の一つ御車にておはす。分け入り給ふ儘にぞ、況いて眺め給ふらん心の中、いとゞ推し量られ給ふ。道の程も、唯此事の心苦しきを語ら ひ聞え給ふ。たそがれの時のいみじく心細げなるに雨は冷やかに打濺ぎて、秋果つる氣色

○珍らかなる客人　匂宮と薫とやんごとなき人のうちつれたるをいふ。

○姫君　大君。

○さかしら人　薫をいふ。

○人は　匂宮は。

○客人居　客座敷。

○人の　中君の。

○あはれと思ふ人　薫君。

○問ひ聞え給へば　薫君が

のすごきにうちしめり濡れ給へる匂どもは、世の物に似ず艶にて、打連れ給へるを、山賤どもは、如何が心惑もせざらん。女ばら日頃うちつぶやきつる名殘なく、笑み榮えつゝ御座引き繕ひなどす。京にさるべき所々に行き散りたる女ども、姪だつ人二三人尋ね寄せて參らせたり。年頃侮り聞えける心淺き人々、珍らかなる客人と思ひ驚きたり。姫君も折嬉しく思ひ聞え給ふに、賢しら人の添ひ給へるぞ、恥かしくもありぬべく、なま煩はしう思へど、心ばへの長閑に物深く物し給ふを、實に人は斯くはおはせざりけりと、見合はせ給ふに、有難しと思ひ知らる。

宮を所に付けては、いと殊にかしづき入り奉りて、此君は主方に心安くもてなし給ふものから、まだ客人居の、假初なる方に出し放ち給へれば、いと辛しと思ひ給へり。恨み給ふもさすがにいとほしくて、物ごしに對面し給ふ。（薫）「戯れにくゝもあるかな。かくてのみや。」と、いみじく恨み聞え給ふ。やう〳〵道理知り給ひにたれど、人の御上にても、物をいみじく思ひ沈み給ひて、いとゞ斯かる方を、憂き物に思ひ果てゝ、猶ひたぶるに、如何でか打解けん。哀と思ふ人の御心も必ずつらしと思ひぬべきわざにこそあゝめれ。我も人も見貶さず、心違はで止みにしがな、と思ふ心づかひ深くし給へり。宮の有樣なども問ひ聞え給へば、かすめつゝ、さればよとおぼしくの給へば、いとほしくて、思したる樣、氣色を見ありく樣など語り聞え給ふ。例よりは心美しう語らひて、（大君）「猶かく物思加ふる程過し、少し心地も鎭まりて聞えん。」との給ふ。人憎く氣遠くは持て離れぬ物から、障子の固めもいと強し。強ひて破らんをば、つらくいみじからんと思したれば、思さるゝ樣こそ

○我面影に恥づる頃なれば　古今集に「夢にだに見ゆとは見えじ朝な〳〵我面影に恥づる身なれば」

○遠山鳥　獨寢を云ふ。古歌に「逢ふことは遠山鳥の目も合はず逢はずて今宵明しつるかな」

○まだ旅寢なる　薫君が。

○左の大殿　左大臣夕霧。

○さばかり如何でかと云々　夕霧が如何にしてか其女六の君を匂宮に奪らせんと思したるに宮の御心引無かりしを不快に思すめりとなり。

○覺無くて云々　世の譽無き中君を北の方に居ゑん事は憚多しとなり。

○帝后のおぼし置きつる儘　今の春宮即位の後は匂宮を春宮に立てんと帝后の思ひ給ふ事を云ふ。

あらめ。輕々しく他方に靡き給ふ事は、はた世にあらじと、心のどかなる人は然はいへど、能く思ひ鎭め給ふ。唯（薫）「いと覺束なく物隔てたるなん。胸飽かぬ心地するを、ありしやうにて聞えん。」と責め給へど、（大君）「常よりも我面影に恥づる頃なれば、疎ましと見給ひてんも、さすがに心苦しきは、如何なるにか。」と仄に打ち笑ひ給へるけはひなど、怪しう懷かしう覺ゆ。かゝる御心にたゆめられ奉りて、終に如何なるべき身にかと、歎き勝にて、例の遠山鳥にて明けぬ。宮は、まだ旅寢なるらんとも思さで、中納言の主方に、（匂）「長閑なる氣色こそうらやましけれ。」との給へば、女君怪しと聞き給ふ。

わりなくておはしましては、程無く歸り給ふが飽かず苦しきに、宮も物をいみじく思したる御心の中を知り給はねば、女方には如何ならん人笑にやと思ひ歎き給へば、實に心盡しに苦しげなるわざかなと見ゆ。京にも隱ろへて渡り給ふべき所もさすがに無し。六條院には、左の大殿。片つ方に住み給ひて、さばかり如何でかと思したる六の君の御事を、思し寄らぬに生怨めしと、思ひ聞え給ふべかゝめり。すき〴〵しき御樣と、許無く譏り聞え給ひて、内わたりにも愁へ聞え給ふべかゝめれば、愈覺無くて出し居ゑ給はんも、憚る事いと多かり。なべてに思す人の際は、宮仕の筋にて、なか〳〵心安げなり。さやうのなみ〳〵には思されず。若し世の中移りて、帝后のおぼし置きつる儘にもおはしまさば、人より高き樣にこそなさめなど、只今はいと華やかに、御心に懸り給へる儘に、もてなさん方無く苦しかりけり。中納言は三條の宮造り果てゝ、さるべき樣にて渡し奉らんとおぼす。實にたゞ人は心安かりけり。かくいと心苦しき御氣色ながら、安からず忍び給ふからに、互に思ひ惱み給ふべかゝめるも、心苦しくて、忍びて斯く通ひ給ふ由を中宮などにも漏し聞し召させて、しばしの騷がれはいとほしくとも、女方の御爲は咎もあらじ。いと斯く夜をだに明し給はぬ苦しげさよ。いみじく待遇してあらせ奉らばや、など思ひて、あながちにも隱ろへず。更衣などはかく〳〵しく誰かは扱ふらんなど思して、御帳の帷子壁代など、三條の宮造り果てゝ、渡り給はん心設に、し置かせ給へるを、先づさるべき樣なんなど、いと忍びて聞え給ひて奉れ給ふ。樣々なる女房の裝束、御乳母などにもの給ひつゝ、態ともせさせ給ひけり。

十月一日頃、網代もをかしき程ならんと、そゝのかし聞え給ひて、紅葉御覽ずべう申し給ふ。親しき宮人ども殿上人の睦しく思す限り、いと忍びてとおぼせど、所せき御勢なれば、自ら事廣ごりて、左の大殿の宰相の中將も參り給ふ。さては此中納言殿ばかりぞ、上達部は仕うまつり給ふ。たゞ人は多かり。（薫）「彼處には論無う中宿りし給はんを、さるべき樣に思せ。前の春も花見に尋ね參り來しこれかれ、かゝる便に事寄せて、時雨の紛れに見奉り顯すやうもぞ侍る。」など、こまやかに聞え給へり。御簾掛け替へ、こゝかしこ搔き拂ひ、岩隱れに積れる紅葉の朽葉少し晴け、遣水の水草拂はせなどぞし給ふ。由ある菓物肴など、さるべき人なども奉れ給へり。且はゆかしげ無けれど、如何がはせん、これも然るべきにこそはと思ひ許して、心設し給へり。

船にて上り下り、漕ぎ廻り面白く遊び給ふも聞ゆ。ほの〴〵有樣見ゆるを、そなたに立ち出でゝ、若き人々見奉る。正身の御有樣は、それと見分かねども、紅葉を葺きたる船の

○渡し奉らんとおぼす　大君をなり。

○いみじくもてなして　中君をなり。

○聞え給ひて　女三宮になり。

○奉れ給ふ　宇治へ贈り給ふなり。

○わざとも　三條宮の設の外にもなり。

○紅葉　宇治山の紅葉。

○宰相の中將　夕霧の六男なり。

○聞え給へり　宇治へなり

○船にてのぼりくだり　匂宮の宇治川をなり。

○正身　匂宮。

○七夕ばかりにても云々　年に一度の逢瀬にても待たるとなり。
○御船差し寄せて　宇治院へなり。
○近江の海の心地して　中君を相見ぬを言ふ。後撰集に「如何なれば近江の海ぞかゝるてふ人を見るめの絶えて生ひねば」
○人の迷　人々の騒ぎ。
○衞門督　夕霧の嫡男なり
○御心の中をば知らず　人人はなり。

飾の錦と見ゆるに、聲々吹き出づる物の音ども、風に付きておどろ〳〵しきまで覺ゆ。世の人の靡きかしづき奉る樣、かく忍び給へる道にも、いと殊にいつくしきを見給ふにも、實に七夕ばかりにても、かゝる彦星の光をこそ待ち出でめ、など覺えたり。文作らせ給ふべき心設に、博士なども侍ひけり。たそがれ時に、御船差し寄せて遊びつゝ、文作り給ふ。紅葉を薄く濃く翳して、海仙樂と云ふ物を吹きて、各心行きたる氣色なるに、宮は近江の海の心地して、をち方人の怨如何にとのみ御心空なり。時に付けたる題出して、嘯き誦し合へり。人の迷少し鎭めておはせんと、中納言も思して、さるべきやうに聞え給ふ程に、内より中宮の仰言にて、宰相の兄の衞門督、事々しき隨身引連れて、麗しき樣して參り給へり。かうやうの御ありきは、忍び給ふとすれど自ら事廣ごりて後の例にもなるわざなるを、重々しき人數數多も無くて、俄におはしましにけるを、聞し召し驚きて、殿上人數多具して參りたるに、はしたなくなりぬ。宮も中納言も苦しと思して、物の興も無くなりぬ。御心の中をば知らず、醉ひ亂れて遊び明かしつ。

今日はかくてと思すに、又宮の太夫さらぬ殿上人など數多奉れ給へり。心あわたゞしくて、口惜しく還り給はん空無し。かしこには御文をぞ奉れ給ふ。をかしやかなる事も無く、いとまめだちて思しける事どもを、こまぐ〳〵と書き續け給へれど、人目繁う騷がしからんにとて、御返り無し。數ならぬ有樣にては、めでたき御あたりに交らはん、甲斐無きわざかなと、いとゞ思し知り給ふ。よそにて隔たる月日は、覺束なさもことわりに、さりともなど慰め給ふを、近き程にのゝしりおはして、つれなく過ぎ給ひなん、つらくも口惜しくも思ひ亂れ給ふ。宮は況ていぶせくわりなしと思すこと限無し。網代の氷魚も心寄せ奉りて、色々の木の葉に搔きまぜ玩ぶを、下人などはいとをかしき事に思へば、人に從ひつゝ、心行く御ありきに、自の御心地は、胸のみつとふたがりて、空をのみ眺め給ふに、この古宮の梢は、いと殊に面白く、常盤木に這ひまじれる蔦の色なども、物深けに見えて、遠目さへすごげなるを、中納言の君もなか〳〵賴め聞えけるを、憂はしきわざかなと覺ゆ。去年の春御供なりし君達は、花の色を思ひ出でゝ、後れて此處に眺め給ふらん心細さをいふかう忍び〳〵に通ひ給ふと仄聞きたるもあるべし。心知らぬも雜りて、大方にとやかくやと、人の御上はかゝる山隱れなれど、自ら聞ゆる物なれば、いとをかしけにこそ物し給ふなれ、箏の琴上手にて、故宮の明暮遊び習はし給ひければなど、口々に言ふ。宰相中將、主人方と思ひて言へば、中納言、

「櫻こそ、思ひ知らすれ、咲き匂ふ、花も紅葉も、常ならぬ世を。」

衞門督、

「何處より、秋は行きけん、山里の、紅葉の影は過ぎ憂き物を。」

宮の大夫、

「見し人も、無き山里の、岩垣に、心長くも、這へる葛かな。」

中に老いしらひて打泣き給ふ。御子の若くおはしける世の事など思ひ出づるなゝめり。宮、

「秋果てゝ、淋しさ增さる、木の下を、吹きな過しそ、峯の松風。」

○網代の氷魚も心寄せ奉りて　拾遺集に「如何で網代の氷魚に言問はん何によりてか我を訪はぬと」とある歌の意を寄せしなり。
○この古宮　八宮の御所。
○後れて　姫君が八宮に後れて。
○故宮　故八宮。
○何時ぞやも　八宮のかくれ給ひし跡を木の本と詠み、子を寄せて姫君の淋しくおはするを思ひ遣りて詠めるなり。
○主人方と思ひて　薫君に對して詠み掛けしなり。
○櫻こそ云々　去年の春は八宮世におはして櫻を眺め給ひし追懷を籠めて詠みたり。
○秋果てゝ云々　我身吹き過ぐる風に似て此處にえとまらぬが悲しとの意を籠めたり。

○彼處　宇治宮。
○さきの聲々　先を追ふ聲
○月草の色　古今集に「いで人は言のみぞよき月草の移し心は色ことにして」とあり。大君の心に宮は移ろひ易き心と思しゝなり。
○斯うやうに氣近き程までは　嫁にとまでは。
○此處　此宇治宮。
○正身　中君。
○覺束なきも　匂宮の物出なくてなり。

とていたう涙ぐみ給へるを、仄に知る人は、實に深くおぼすなりけり。今日の便を過し給ふ御心苦しさ、と見奉る人あれど、事々しく引き續きて、えおはしまし寄らず。作りける文どもの、面白き所々打誦し、倭歌も事に付けて多かれど、かやうの醉泣の紛れにまして、はかゞしき事あらんやは。片端書き留めてだに見苦しくなん。

彼處には過ぎ給ひぬるけはひを、遠うなるまで聞ゆるさきの聲々たゞならず覺え給ふ。心設しつる人々も、いと口惜しと思へり。姫君は、まして、猶音に聞く月草の色なる御心なりけり。仄に人の言ふを聞けば、男と云ふ者は、虚言をこそいと能くすなれ。思はぬ人を思ひ顔に取り做す言の葉多かる物と、この人數ならぬ女ばらの、昔物語に言ふを、さる直々しき中にこそは、怪しからぬ心あるも雜るらめ。何事も筋異なる際になりぬれば、人の聞き思ふこと、愼ましう所狹かるべきものと思ひしは、さしもあるまじき事なりけり。仇めき給へるやうに故宮も聞き傳へ給ひて、斯うやうに氣近き程までは、思し寄らざりし物を怪しきまで心深けにの給ひ渡り、思の外に見奉るに付けてさへ、身の憂さを思ひ添ふるが、味氣無くもあるかな。かく見劣りする御心を、且はかの中納言も、如何に思ひ給ふらん。此處にも殊に耻かしげなる人は打交らねど、各思ふらんが、人笑に嗚呼がましき事と思ひ亂れ給ふに、心地も違ひて、いと惱ましう覺え給ふ。正身はたまさかに對面し給ふ時、限無く深き言を賴め契り給へれば、さりともこよなうは思し變らじと、覺束無きもわりなき障りこそは物し給ふらめと、心の中に思ひ慰め給ふ方あり。程經にけるが思ひ入られ給はぬにしもあらぬに、なか〳〵にて打ち過ぎ給ひぬるを、つらうも口惜しうも思ほゆるに、

○忍び難き御氣色　中君のなり。
○人の心を見んとなりけり　これも眞實にはあらじとなり。
○ある人　内に居る女房共。
○の給ひ置きし　父宮が。
○さるべき人々　父母をさす。
○樣の物と　一樣の事と。
○此君を　中君を。
○限無き人に物し給ふとも　限無くめでたき匂宮に緣を結び給ふとも。

いとゞ物あはれなり。忍び難き御氣色なるを、人なみ〳〵にもてなして、例の人めきたる住居ならば、かうやうにもなし給ふまじきをなど、姉君はいとゞしく哀と見奉り給ふ。我も世になからへば、かうやうなる事見つべきにこそはあゝめれ。中納言の、とざまかうざまに言ひありき給ふも、人の心を見んとなりけり。心一つに持て離れて思ふとも、こしらへ遣る限こそあれ。ある人の懲りずまに斯かる筋の事をのみ、如何でと思ひたゞめれば、心より外に遂に持て做されぬべかゝめり。これこそは返すゞも然る心地して世を過せ、との給ひ置きしは、かゝる事もやあらんの諫なりけれ。然もこそは憂き身どもにて、さるべき人々にも後れ奉らめ。樣の物と人笑なる事を添ふる有樣にて、亡き御影をさへ惱まし給ふらんがいみじさ。猶我だに然る物思に沈まず、罪などいと深からぬさきに、如何で亡くなりなんと思し沈むに、心地も誠に苦しければ、物も露ばかり參らず。たゞ亡からん後のあらまし事を、明暮思ひ續け給ふに、物心細くて、此君を見奉り給ふもいと心苦しう、我にさへ後れ給ひて、如何にいみじう慰むる方無からん。あたらしくをかしき樣を、明暮の見物にて、如何で人々しうも見做し奉らんと、思ひ扱ふをこそ、人知れぬ行先の賴みにも思ひつれ。限無き人に物し給ふとも、かばかり人笑なる目を見てん人の、世の中に立ちまじり、例の人ざまにて經給はんは、類少く心憂からん、など思し續くるに、言ふ甲斐もなく、此世には聊思ひ慰む方無くて、過ぎぬべき身どもなゞめりと、心細くおぼす。

宮は立ち返り、例のやうに忍びてと出で立ち給ひけるを、（衞門督）「宇治に斯かる御忍事により、山里の御ありきもゆくりかに思し立つなりけり。輕々しき御有樣と世人も下に譏り

○上　今上。
○嚴しき事ども出で來て云云　嚴重なる御手當ありて禁中にのみおはするなり。
○何れも我物にて見奉らん　大君も中君も我思ひ人にして見んとなり。
○御心につきて　氣に入りて。
○筋異に思ひ聞え給ふるに　匂宮を春宮にも立てんと思ひ居るに。
○女一宮　今上の第一皇女、匂宮の御姉君。
○限もなくあてに云々　女一宮のさまなり。
○冷泉院の姫君　冷泉院の第一皇女。
○かの山里人　宇治の中君

申すなり。」と衛門督の漏し申し給ひければ、中宮も聞し召し歎き、上もいとゞ許さぬ御氣色にて、大方心に任せ給へる御里住の惡しきなりけりと、嚴しき事ども出で來て內につと侍はせ奉り給ふ。左の大殿の六の君を承引かず思したる事なれど、押し立ちて參らせ給ふべく皆定めらる。中納言殿聞き給ひて、愛無く物を思ひあゞき給ふ。我が餘り異樣なるぞや。さるべき契やありけん。親王の後めたしと思したりし樣も、哀に忘れ難く、この君達の御有樣けはひも異なる事無くて世に衰へ給はんことの惜しくも覺ゆる餘に、人々しう持て做さばやと、怪しきまで持て扱はるゝに、宮も生憎に取持ちて責め給ひしかば、我が思ふ方は異なるに、讓らるゝ有樣も愛無くて、斯く持て做してしを思へば、悔しくもありけるかな。何れも我物にて見奉らんに、咎むべき人も無しかし。取り返す物ならねど、嗚呼がましう心一つに思ひ亂れ給ふ。宮はまして御心に懸らぬ折無く、戀しううしろめたしとおぼす。（大宮）「御心に着きて思ず人あらば、此處に參らせて、例ざまにのどやかに持て做し給へ。筋異に思ひ聞え給ふるに、輕びたるやうに人の聞ゆべかゝめるも、いとなん口惜しき。」と大宮は明暮聞え給ふ。

時雨いたくしてのどやかなる日、女一宮の御方に參り給へれば、御前に人多くも侍はず、しめやかに、御繪など御覽ずる程なり。御几帳ばかり隔てゝ、御物語聞え給ふ。限も無くあてに氣高きものから、なよびかにをかしき御けはひを、年頃二つ無き物に思ひ聞え給ひて、又この有樣になずらふ人、世にありなんや。冷泉院の姫君ばかりこそ、御覺の程內々の御けはひも、心憎く聞ゆれど、打ち出でん方も無く思し渡るに、かの山里人は、らうたけに、あてなる方の劣り聞ゆまじきぞかし、など、まづ思ひ出づるに、いとゞ戀しさ增さる慰めに、御繪どもの數多散りたるを見給へば、をかしげなる女繪どもの、戀する男の住居など書きまぜ、山里のをかしき家居など、心々に世の有樣書きたるを、よそへらるゝ事多くて、御目とまり給へば、少し聞え給ひて、彼處へ奉らんとおぼす。在五が物語を書きて、妹に琴教へたる所の、「人の結ばん」と言ひたるを見て、如何がおぼすらん。少し近く參り寄り給ひて、（匂）「古の人もさるべき程は、隔無くこそ習はして侍りけれ。いと疎々しうのみもてなさせ給ふこそ。」と忍びて聞え給へば、如何なる繪にかと思すに、押卷き寄せて、御前に差入れ給へるを、うつぶして御覽ずる御髮の打ち靡きて、こぼれ出でたる片側ばかり、仄に見奉り給ふが、飽かずめでたく、少しも物隔てたる人と思ひ聞えましかば、と思すに、忍び難くて、

（匂）「若草の、寢見んものとは、思はねど、結ぼゝれたる、心地こそすれ。」

御前なりつる人々は、この宮をば殊に羞ぢ聞えて、物の後に隱れたり。事しもこそあれ、うたて怪しと思せば、物もの給はず。道理にて、「裏無く物を」と云ひたる姫君も、ざれて憎くおぼさる。紫の上の取り別きて、此二所をば習はし聞え給ひしかば、數多の御中に、隔無く思ひかはし聞え給へり。世に無くかしづき聞え給ひて、侍ふ人々も、かたほに少し飽かぬ所あるは、はしたなけなり。やんごとなき人の御女などもいと多かり。御心の移ろひ易きは、珍しき人々に、はかなく語らひつきなどし給ひつゝ、かのわたりを思し忘るゝ折無きものから、音づれ給はで日頃經ぬ。

○よそへらるゝ事　我御身と宇治との事によそへらるることなり。
○少し聞え給ひて　少し此繪を申受けて。
○在五が物語　伊勢物語繪卷物なるべし。
○人の結ばん　伊勢物語に「昔男妹のいとをかしげなるを見居りて（うら若みねよげに見ゆる若草を人の結ばん事をしぞ思ふ）云々」
○少しも物隔てたる云々　同胞ならで他人ならばとなり。
○裏無く物を　伊勢物語に右に擧げたる「うら若み」の歌の返歌に「初草のなどめづらしき言の葉ぞ裏無く物を思ひけるかな。」
○御心の移ろひ易きは　匂宮は御心の移り易き御本性にて。
○かのわたり　宇治。

○惱ましげにし給ふ　大君が。
○驚きながら云々　大君の病氣に驚きて參りしとなり。
○宮の御心も行かで云々　前の紅葉見の時の事なり。
○亡き人の御諫　父宮の御誡。
○人の御上をさへ云々　匂宮の上を取繕ふも我ながら心怪しく思はる。
○疎き人　薫君を指す。
○いと見苦しう云々　大君は、いと見苦しくて殊更にも厭はしき我身なれば今御修法など何かはせんと聞き給へどとなり。
○昨日ばかりにてだに　昨日の如くにてだに。

待ち聞え給ふ所は、絶間遠き心地して、猶斯うなゞめりと、心細う眺め給ふに、中納言おはしたり。惱ましげにし給ふと聞きて、御とぶらひなりけり。いと心地惑ふばかりの御惱にもあらねど、ことつけて、對面し給はず。(薫)「驚きながら遙けき程を參り來つかの惱み給ふらん御あたり近く。」と切に覺束無がり聞え給へば。打ち解けて住ひ給へる方の御簾の前に入れ奉る。いと傍痛きわざと苦しがり給へど、けにくゝはあらで、御ぐしもたけ御答など聞え給ふ。宮の御心も行かで、おはし過ぎにし有樣など語り聞え給ひて、(薫)「のどかにおほせ。心いられしして、な恨み聞え給ひそ。」など敎へ聞え給へば、(大君)「こゝにはともかくも聞え給はざゝめり。亡き人の御諫は斯かる事にこそ、と見侍るばかりなん、いとほしかりける。」とて、泣き給ふ氣色なり。いと心苦しう、我さへ恥かしき心地して、(薫)「世の中はとてもかくても、一つざまにて過す事難くなん侍るを、如何なる事をも御覽じ知らぬ御心どもには、偏に怨めしなど思す事もあらんを、强ひて思しのどめよ。後めたう世にあらじとなん思ひ侍る。」など、人の御上をさへ扱ふも、且は怪しく覺ゆ。夜々はましていと苦しげにし給ひければ、疎き人の御けはひの近きも、中の君の苦しげに思したれば、「猶例のあなたに。」と人々聞ゆれど、(薫)「況て斯く煩ひ給ふ程の覺束無さを、思の儘に參り來て、出し放ち給へれば、いとわりなくなん。かゝる折の御扱も、誰かはかぐしく仕うまつる。」など、辨の御許に語らひ給ひて、御修法ども始むべき事などの給ふ。いと見苦しう、殊更にも厭はしき身をと聞き給へど、思隈無くの給はんもうたてあれば、さすがにながらへよと思ひ給へる心ばへも哀れなり。又の晨に、(薫)「少しも宜しく思さるや。昨日

○ためらはん　休息せん。
○處避り給ふに云々　靈氣を避けて居處を變へ給ふに事寄せて。
○此君　薫君。
○かの宮　匂宮。
○我殿　薫君。
○聞き給ふにも　大君が。

ばかりにてだに聞えさせん。」とあれば、(大君)「日頃經ればにや、今日はいと苦しうなん。さらばこなたに、」と言ひ出し給へり。いと哀に如何に物し給ふべきにかあらん。ありしよりも懷かしき御氣色なるも、胸つぶれて覺ゆれば、近うまかゞで萬の事を聞え給ふ。(大君)「苦しうて歎き居給へり。さすがに徒然と斯くておはし難ければ、いとうしろめたけれど歸り給ふ。かゝる御住居は猶苦しかりけり。處避り給ふに事寄せて、然るべき處に移ろはし奉らんなど聞え置きて、阿闍梨にも、御禱心に入るべくの給ひ知らせて出で給ひぬ。

此君の御供なる人の、何時しかと此處なる若き人を語らひ寄りたるありけり。己がじゝの物語に、(供人)「かの宮の御忍びありき制せられ給うて、內にのみ籠りおはします事、左の大臣殿の姫君をなん婚せ奉り給ふべかゝなるを、女方は年頃の御本意なれば、思し滯ること無くて、年の內にありぬべかゝなり。宮は澁々に思して、內裏邊にも徒に好がましき事に御心を入れて、帝后の御誡に鎭まり給ふべくもあらざゝめり。我殿こそ猶怪しう人に似給はず、餘りまめにおはしまして、人には持て惱まれ給へ。此處に斯く渡り給ふのみなん、目もあやにおほろけならぬ事と、人申す。」など語りけるを、さこそ言ひつれなど、人々の中にて語るを聞き給ふにも、いとゞ胸ふたがりて、今は限にこそあゝなれ。やんごとなき方に定り給はぬ程の、なほざりの御すさびに斯くまで思しけんを、さすがに中納言などの思はん所を思して、言の葉の限深きなりけりと思ひ做し給ふに、ともかくも人の御つらさは思ひ知られず、いとゞ身の措き所無き心地して、萎れ臥し給へり。弱き御心地はいとゞ世

○姫君　中君。
○物思ふ時のわざ　拾遺集に「たらちねの親の諫めしうたゝねは物思ふ時のしわざなりけり」
○罪深くなる底には　父宮は奈落の底には。
○添ひ臥し給ふ樣　大君のなり。
○晝寢の君　中君。
○悲しさ添ひて　大君の心に。
○二所　大君と中君。
○人の國にありけん香の烟　反魂香をいふ。
○御方　中君。

に立ち留るべうも覺えず。恥かしげなる人々にはあらねど、思ふらん所苦しければ、聞かぬ樣にて寢給へるを、姫君物思ふ時のわざと聞きしうたゝねの御樣の、いとらうたげにて、肘を枕にて寢給へるに、御髪のたまりたる程など、有り難う美しげなるを見やりつゝ、親の諫めし言の葉も、返すゞ思ひ出でられ給ひて、悲しければ、罪深くなる底にはよも沈み給はじ。いづくにも〳〵、おはすらん方に迎へ給ひてよ。かういみじく物思ふ身どもを打捨て給ひて、夢にだに見え給はぬよ、と思ひ續け給ふ。夕暮の空の氣色いと凄くしぐれて、木の下吹き拂ふ風の音など喩へん方なく、來し方行く先思ひ續けられて、添ひ臥し給へる樣、あてに限なく見え給ふ。白き御衣に、髪は梳ることもし給はで、程經ぬれど、迷ふ筋無く打遣られて、日頃に少し青み給へるしも、なまめかしさ增さりて、眺め出し給へる目見額附の程も、見知らん人に見せまほし。晝寢の君、風のいと荒きに驚かされて、起き上り給へり。山吹薄色など華やかなる色合に、御顏は殊更に染め匂はしたらんやうに、いとをかしう華々として、聊物思ふべき樣もし給へらず。（中君）「故宮の夢に見え給へる、いと物思したる氣色にて、このわたりにこそ仄めき給へれ。」と語り給へれば、いとゞしく悲しさ添ひて、（大君）「亡せ給ひて後、如何で夢にも見奉らんと思ふを、更にこそ見奉らね。」とて、二所ながらいみじう泣き給ふ。（大君）「此頃明暮思ひ出で奉れば、ほのめきもやおはすらん。如何でおはすらん處に尋ね參らん。罪深けなる身どもにて。」と、後の世をさへ思ひ遣り給ふ。人の國にありけん香の煙ぞ、いと得まほしく思さるゝ。

いと暗うなる程に、宮より御使あり。折は少し物思ひ慰みぬべし。御方は頓にも見給はず。

○これより名殘なき方に云云　匂宮よりも尙仇なる人の言ひ寄らんが心配なればとなり。
○顏を引き入れ給ふ　衾の中へなり。
○明日知らぬ夜の　古今集に「明日知らぬ我身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ」
○誰が爲に惜しき命にかは　唯中君のあればなりとの意。古歌に「岩くゞる山井の水をむすびあげて誰が爲惜しき命とか知る」
○かく袖ひづる　古歌に「神無月いつも時雨は降りしかど斯く袖ひづる折は無かりき」
○若き人　中君を指す。
○御返り云々　御返事賜はりて今夜の中に宮に持て參りなん。
○障り多み　拾遺集に「湊入りの蘆わけ小舟さはり多み我思ふ人に逢はぬ頃かな」

（大君）「猶心美しくおいらかなる樣に聞え給へ。斯うではかなうもなり侍りなば、これより名殘なき方にもてなし聞ゆる人もや出で來んとうしろめたきを、稀にも此人の思ひ出で聞え給はんに、さやうなるあるまじき心使ふ人はえあらじと思へば、つらきながらなん賴まれ侍る。」と聞え給へば、（中君）「後らさんと思しけるこそいみじう侍れ。」と愈顏を引き入れ給ふ。（大君）「限あれば片時も留らじと思ひしかど、ながらふるわざなりけりと思ひ侍るぞや。明日知らぬ世のさすがに歎かしきも、誰が爲に惜しき命にかは。」とて大殿油參らせて見給ふ。例のこまやかに書き給ひて、

（匂）「眺むるは、同じ雲井を、如何なれば覺束無さを、添ふる時雨ぞ。かく袖ひづる。」など云ふ言もやありけん。耳馴れにたるを、猶あらじ事と見るに附けても怨めしさ增さり給ふ。さばかり世に有り難き御有樣貌を、いとゞ如何で人にめでられんと、好ましく艶にもてなし給へれば、若き人の心寄せ奉り給はんも道理なり。程經るに附けても戀しう、さばかり所狹きまで契り置き給ひしを、さりともいと斯くては止まじと、思ひ直す心ぞ常に添ひける。（使）「御返り今夜參りなん。」と聞ゆれば、これかれそゝのかし聞ゆれば、唯一言なん。

（中君）「霰降る、深山の里は、朝夕に、眺むる空も、搔昏しつゝ。」

斯く言ふは神無月の晦なりけり。月も隔りぬるよと、宮は靜心なく思されて、今夜々々とおぼしつゝ、障り多みなる程に、五節など疾く出で來たる年にて、內わたり今めかしく紛れ勝にて、わざともなけれど、過い給ふ程に、あさましう待遠なる。はかなう人を見給ふ

○大宮　明石中宮。

○暫しさぶらひ給ふるやう　暫く思ふ仔細侍り。

○知り給はねば　宇治にてとなり。

○輕びたる御心かな　匂宮はなり。

○此月　十一月。

○物騒がしき頃にて　五節の前後なれば忙しきなり。

○此宮の御事　匂宮の跡絶の事。

○顧むべくも見え給はずながらへ給はん樣も無しとなり。

○院にも内にも　仙洞にも内裏にも。

○ありし方　前に入りたりし病室の方。

に附けても、さるは御心に離るゝ折なし。左の大臣殿のわたりの事、大宮も、(中宮)「猶さるのどやかなる御後見を設け給ひて、その外の尋ねまほしう思さるゝ人あらば、參らせて、重々しうもてなし給へ。」と聞え給へど、(匂)「暫しさ思う給ふるやう。」など聞え否び給ひて、誠に辛き目は如何でか見せん、など思す御心を知り給はねば、月日に添へて物をのみ思す。

中納言も、見し程よりは輕びたる御心かな、さりともと思ひ聞えけるもいとほしく心から覺えつゝ、をさ〳〵參り給はず。山里には如何に〳〵と訪ひ聞え給ふ。此月となりては、少し宜しうおはすと聞き給ひけるに、公私物騒がしき頃にて、五六日人も奉り給はぬに、如何ならんとて打ち驚かれて、わりなき事の繁さを打ち捨てゝ詣で給ふ。修法は怠り果て給ふまでとの給ひ置きけるを、宜しくなりにけるとて、阿闍梨をも返し給ひければ、いと人少にて、例の老人出で來て、御有樣聞ゆ。(薫)「そこはかと痛き處も無く、おどろおどろしからぬ御惱に、物をなん更に聞し召さぬ。もとより人に似給はず、あえかにおはします中に、此宮の御事出で來にし後、いとゞ物思したる樣にて、はかなき御菓子だに御覽じ入れざりし積りにや、あさましう弱くなり給ひて、更に賴むべくも見え給はず。世に心憂く侍りける身の命の長さにて、かゝる事を見奉れば先づ如何で先だち聞えなんと、思ひ給へ入りて侍り。」と、言ひもやらず泣く樣ことわりなり。(薫)「など斯くとも告げ給はざりける。院にも内にもあさましう事繁き頃にて、日頃もえ聞えざりつる覺束無さ。」とて、あり方に入り給ふ。御枕上近くて物聞え給へど、御聲も無きやうにて得答へ給はず。かく

○宿直人　薫君の家臣ども

○例のあなたに　例の客室へなり。

○この御仲　大君と薫君との御仲らひ。

○覺束なくて過ぎ侍りぬべきにやと云々　薫君に逢はで亡せんかと口惜しかりきとなり。

○日頃云々　此頃大君の御看病にて御心も安からざりしならん。今夜だに心安く休息し給へ。我宿直すべし、と中君に言ひ給へばとなり。

重くなり給ふまで、誰も〳〵告げ給はざりけるが辛う思ふに、甲斐なき事と恨みて、例の阿闍梨、大方世に驗ありと聞ゆる人の限、數多請じ給ふ。御修法、讀經、明くる日より始めさせ給はんとて、宿直人數多參り集ひ、上下の人立ち騒ぎたれば、心細さの名殘なく賴もしげなり。

暮れぬれば、「例のあなたに。」と聞えて、御湯漬など參らせんとすれど、(薫)「近くてだに見奉らん。」とて、南の廂は僧の座なれば、東面の今少し氣近き方に屏風など立てさせて、入り居給ふ。中の君苦しと思したれど、この御中を、猶持て離れ給はぬなりけりと皆思ひて、疎くもてなし隔て奉らず。初夜より始めて、法華經を不斷讀ませ給ふ。聲尊き限十二人して、いと尊し。火はこなたの南の間に燈して、内は暗きに几帳を引き明けて、少しすべり入りて見奉り給へば、老人ども二三人ぞ侍ふ。中の君はふと隱れ給ひぬれば、いと人少に心細くて臥し給へるを、(薫)「などか御聲をだに聞かせ給はぬ。」とて、御手を捉へて驚かし聞え給へば、(大君)「心地には覺えながら、物言ふがいと苦しくてなん。日頃音づれ給はざりつれば、覺束無くて過ぎ侍りぬべきにやと、口惜しうこそ侍りつれ。」と息の下にのの給ふ。(薫)「かく待たれ奉りつる程まで、參り來ざりける事。」とて、さくりもよゝと泣き給ふ。御髮など少し熱くぞおはしける。(薫)「何の罪なる御心地にか。人の歎負ふこそ斯くはあゝなれ。」と御耳に差當てゝ物を多く聞え給へば、うるさうも恥かしうも覺えて、顏をふたぎ給へり。いとゞなよ〳〵とあえかにて臥し給へるを、空しう見なして如何なる心地せんと、胸も挫けて覺ゆ。(薫)「日頃見奉り給へらん御心地も、安からず思されつらん。今夜

○いと苦しく恥かしけれど　大君の心なり。
○片つ方の人　匂宮。
○露ばかり參る氣色もなし　御湯などだに參りかねたる危篤の體なり。
○掛け留むべき　命をなり。
○涼しき方　極樂をいふ
○進むる業　我を極樂に進むる業。
○常不輕をなんつかせ侍る　常不輕菩薩の行に倣ひて我深敬汝等云々の二十四字の偈を唱へて四衆を禮拜せしめたりとなり。つかせは額づかせなり。
○君も　薫君も。
○定り給はりざらん　中有にましたす時をいふ。

だに心安く打休ませ給へ。宿直人侍ふべし。」と聞え給へば、うしろめたけれど、然る樣こそは、と思して、少し退き給へり。直面にはあらねど、這ひ寄りつゝ見奉り給へば、いと苦しく恥かしけれど、かゝるべき契こそありけめと思して、こよなうのどやかに後安き御心を、かの片つ方の人に見比べ奉り給へば、あはれとも思ひ知られにたり。空しくなりなん後の思出にも、心強く思隈なからじとつゝみ給ひて、はしたなくも得押し放ち給はず。夜もすがら人をそゝのかして、御湯など參らせ奉り給へど、露ばかり參る氣色も無し。いみじの事や。如何にしてかは掛け留むべきと、言はん方なく思ひ居給へり。不斷經の曉方の居代りたる聲のいと尊きに、阿闍梨も夜居に侍ひて睡りたる、打驚きて、陀羅尼讀む。老い枯れにたれど、いと巧づきて賴もしく聞ゆ。(阿闍梨)「如何が今夜はおはしましつらん。」など聞ゆる序に、故宮の御事など聞え出でゝ、鼻屢打かみて、(阿闍梨)『如何なる所におはしますらん。さりとも涼しき方にぞと思ひ遣り奉るを、先つ頃の夢になん見へおはしまし。俗の御形にて、「世の中を深う厭ひ離れしかば、心とまること無かりしを、聊打ち思ひし事に亂れてなん。唯誓し願の處を隔たれるを思ふなん、いと悔しき。進むる業せよ。」と、いと定かに仰せられしを、忽に仕うまつるべき事の覺え侍らねば、堪へたるに隨ひて、行し侍る法師ばら五六人して、なにがしの念佛なん仕うまつらせ侍る。さては思ひ給へ得たる事侍りて、常不輕をなんつかせ侍る。』など申すに、君もいみじう泣き給ふ。かの世にさへ妨げ聞ゆらん罪の程を苦しき心地にも、いとゞ消え入りぬばかり覺え給ふ。如何でかのまだ定り給はざらん先に詣でゝ、同じ所にもと聞き伏し給へり。阿闍梨言少にて立ちぬ。

○居なほり給ひて　中君へ　薫の會釋のさまなり。
○重々しき道　重々しき公樣の法事。
○霜冴ゆる云々　常不輕を千鳥に寄せて詠めり。
○つれなき人　匂宮を指す
○物思ふ人　中君自身を云ふ。
○似つかはしからぬ云々　辨が代りて傳へたればいふ。
○此君　薫君。
○殘なくなりぬる　ひたすら失婦の如くなりたりとなり。

この常不輕、そのわたりの里々、京までありきけるを、曉の嵐にわびて、阿闍梨の侍ふあたりを尋ねて、中門の下に居て、いと尊くつく。回向の末つ方の心ばへいとあはれなり。客人もこなたに進みたる御心にて、あはれ忍ばれ給はず。中の君切に覺束無くて、奥の方なる几帳の後に寄り給へるけはひを聞き給ひて、あざやかに居直り給ひて、(薫)「不輕の聲は如何が聞かせ給ひつらん。重々しき道には行はぬ事なれど、尊くこそ侍りけれ。」とて、(中君)「霜冴ゆる、汀の千鳥、うちわびて、鳴く音悲しき、朝朗かな。」と言のやうに聞え給ふ。つれなき人の御けはひにも通ひて、思ひよそへらるれど、いらへにくゝて、辨してぞ聞え給ふ。

(中君)「曉の、霜打拂ひ、鳴く千鳥、物思ふ人の、心をや知る。」

似つかはしからぬ御代りなれど、故無からず聞え做す。かやうのはかなしごとも、つゝましげなる物から、懷かしう甲斐ある樣に取り做し給ふ物を、今はとて別れなば、如何なる心地せん、と思ひ惑ひ給ふ。宮の夢に見え給ひけん樣思し合するに、かう心苦しき御有樣どもを、天かけりても如何に見給ふらんと、推し量られて、おはしましゝ御寺にも、御誦經せさせ給ふ。所々に御祈禱の使出し立てさせ給ふ。公にも私にも御暇の由申し給ひて、祭祓へ、萬に至らぬ事無くし給へど、物の罪めきたる御病にもあらざりければ、何の驗も見えず。自らも無事にあらんと、佛をも念じ給はゞこそあらめ。猶かゝる序に如何で亡せなん。此君の斯く添ひ居て、殘無くなりぬるを、今は持て離れん方無し。さりとて斯う疎ならず見ゆめる心ばへの見劣して、我も人も見えんが、心安からず憂かるべき事、若し命強

○この思ふこととしてんと出家せんと。
○いむこと　戒を受くること。
○頼もし人　薫君を云ふ。
○かく籠り居給へれば　薫君が宇治になり。
○豐明　十一月中辰日禁中にて行はるる節會。
○光も無くて　豐降ればなり。
○日景も見えぬ　豐明節會に日蔭のかづらを用ゐれば斯く詠めり。
○かくておはする　薫君のなり。
○輝き　顔赧めて。
○如何が思さるゝ　御心地如何となり。

ひて留らば、病にことつけて、貌をも變へてん。さてのみこそ長き心をも、かたみに見果つべきわざなれ、と思ひ沁み給ひてとあるにてもかゝるにても、如何でこの思ふ事してんとおぼすを、さまで賢しき事はえ打出で給はで、中の君に、(大君)「心地の愈頼もしげ無く覺ゆるを、戒なんいと驗ありて、命延ぶる事と聞きしを、さやうに阿闍梨にの給へ。」と聞え給へば、皆泣き騒ぎて、いとあるまじき御事なり。かくばかり思し惑ふめる中納言殿も、如何が敢無きやうに思ひ聞え給はん、と似げ無き事に思ひて、頼もし人にも申し次がねば、口惜しうおぼす。

かく籠り居給へれば、聞き次ぎつゝ、御とぶらひに振りはへ物し給ふ人もあり。疎に思されぬ事と見奉れば、殿人親しき家司などは、各萬の御祈禱をせさせ歎き聞ゆ。豐明は今日ぞかしと、京思ひ遣り給ふ。風いたう吹きて、雪の降る樣あわたゞしう荒れ惑ふ。京にはいと斯うしもあらじかしと、人やりならず心細うて、疎くて止みぬべきにやと、思ふ契はつらけれど、恨むべうもあらず、懐かしうらうたげなる御持做を、唯しばしにても、例の樣になして思ひつる事ども語らはゞやと、思ひ續けて眺め給ふ。光も無くて暮れはてぬ。

(薫)「搔き曇り、日景も見えぬ、奥山に、心を昏す、頃にもあるかな。」

唯かくておはするを頼みに皆思ひ聞えたり。例の近き方に居給へるに、御几帳などを、風のあらはに吹き做せば、中の君奥に入り給ふ。見苦しげなる人々も、輝き隱れぬる程に、いと近う寄りて、(薫)「如何が思さるゝ。心地に思ひ殘すこと無く念じ聞ゆる甲斐無く、御聲をだに聞かずなりにたれば、いとこそ佗しけれ。後らかし給はゞいみじうつらからん。」

○宜しき隙あらば　病間あらば。
○堰き留め難くて　涙がなり。
○打捨て給ひてば云々　我を打捨てゝ大君の亡せ給はば我も世に生きとまらじとなり。
○かの御事を掛け給へば　中君の事を言ひ掛け給へば。

と泣く〳〵聞え給ふ。物覺えずなりにたる樣なれど、顔はいと能く隱し給へり。(大君)「宜しき隙あらば、聞えまほしき事も侍れど、たゞ消え入るやうにのみ成り行くは、口惜しきわざにこそ。」と、いと哀と思ひ給へる氣色なるに、愈堰き留め難くて、ゆゝしう斯く心細げに思ふとは見えじと愼み給へど、聲も惜まれず。如何なる契にて、限無く思ひ聞えながら、つらき事多くて別れ奉るべきにか。少し憂き樣をだに見せ給はゞなん、思ひさます節にもせんとまもれど、愈あはれげにあたらしく、をかしき御有樣のみ見ゆ。肘などもいと細うなりて、影のやうに弱げなる物から、色合變らず白う美しげに、なよ〳〵として、白き御衣どものなよびかなるに、衾を押し遣りて、中に身も無き雛を臥せたらん心地して、御髪はいたうこちたうもあらぬ程に折遣られたる、枕より落ちたる際の、艶々とめでたうをかしげなるも、如何になり給ひなんとするぞと、あるべき物にもあらざゝめりと、見るが惜しき事類無し。こゝら久しく惱みて、引も繕はぬけはひの、心解けず恥かしげに、限無うもてなしさまよふ人にも多う優りて、細かに見る儘に、魂魄も鎭まらん方無し。(薫)「遂に打捨て給ひてば、世に暫しも留るべきにもあらず。命若し限有りて留るべうとも、深き山にさすらへなんとす。唯いと心苦しうて、留り給はん御事をなんと思ひ聞ゆる。」と、いらへせさせ奉らんとて、かの御事を掛け給へば、顔隱し給ふ御袖を少し引き直して、(大君)「かくはかなかりける者を、思隈無きやうに思されたりつるも甲斐無ければ、この留り給はん人を同じ事と思ひ聞え給へと、仄めかし聞えしに、違へ給はざらましかば、後安からましと、これのみなん怨めしき節にて留りぬべく覺え侍る。」との給へば、(薫)「かくい

○異樣に云々　大君にのみ心の引かれしかばとなり。
○いと苦しげに　大君が。
○我　薫君。
○勸め給ふ　厭離穢土を勸め給ふ。
○足摺もしつべく　悲の切なるさまなり。
○今はいとゆゝしき　今は亡き魂なる故に忌々しとなり。
○蟲の殼云々　古今集「空蟬は殼を見つゝも慰めつ深草の山煙だに立て」の意。
○何事にて此人を云々　此人を大方並々の人として我思ふ心を消さん由だに少しもあらばこそ。
○例の作法　送葬の事。

みじう物思ふべき身にやありけん。如何にも〳〵異樣に、此世を思ひかゝつらふ方の侍らざりつれば、御おもむけに隨ひ聞えずなりにし。今なん悔しう心苦しうも覺ゆる。されども後めたくな思ひ聞え給ひそ。」などこしらへて、いと苦しげにし給へば、修法の阿闍梨ども召し入れさせ、樣々に驗ある限して、加持參らせ給ふ。我も佛を念ぜさせ給ふこと限無し。世の中を殊更に厭ひ離れねど、勸め給ふ佛などの、いと斯くいみじき物は思はせ給ふにやあらん。見る儘に物の枯れ行くやうにて、消え果て給ひぬるはいみじきわざかな。引き留むべき方無く、足摺もしつべく、人の頑しと見んことも覺えず。限りと見奉り給ひて、中の君の後れじと思ひ惑ひ給へる樣も、ことわりなり。あるにもあらず見え給ふを、例のさかしき女ばら、今はいとゆゝしき事と、引き避け奉る。中納言の君は、さりともいと斯かる事あらじ、夢かとおぼして、大殿油を近う挑げて、見奉り給ふに、隱し給ふ顏も、唯寢給へるやうに、變り給へる所も無く、美しげにて打臥し給へるを、斯くながら、蟲の殼の樣にても、見るわざならましかばと、思ひ惑はる。今はの事どもするに、御髮を搔き遣るに、さと打匂ひたる、唯ありしながらの匂に、懷かしう香しきも有り難う、何事にて此人を、少しもなのめなりしと思ひさまさん。誠に世の中を思ひ捨て果つる導ならば、恐ろしげに、憂き事の悲しさも、醒めぬべき節をだに見附けさせ給へと、佛を念じ給へど、いとゞ思ひのどめん方無くのみあれば、言ふ甲斐無くて、ひたぶるに煙にだに成し果てゝんと思ほして、とかく例の作法どもするぞあさましかりける。空を歩むやうに漂ひつゝ、限の有樣さへはかなげにて、煙も多く結ほゝれ給はずなりぬるも敢無しと、あきれて歸り給ひぬ。

○亦亡き人に云々　中君も死にたる如くなるをいふ。
○宮　匂宮。
○つらしと思ひ聞え給へりし　中君が匂宮をなり。
○三條の宮　薫君の御母。
○この君の　中君。
○疎ならず孝じ給へど　厚く供養し給へど。
○紅に云々　紅の我衣に涙落つれども喪服の色は染めぬば甲斐ぞ無き。
○許色の云々　薄紅の御衣の涙に濡れたるが氷の解けたる樣に見ゆるを。
○言ふ甲斐なき御事　姫君のうせ給ひし事をいふ。
○この御方　由君を指して云ふ。
○昔の御形見に　大君の形見と見て。

御忌に籠れる人數多くて、心細さは少し紛れぬべけれど、中君は人の見思ふらん事も、恥かしき身の心憂さを思ひ沈み給ひて、亦亡き人に見え給ふ。宮よりも御とぶらひいと繁く奉れ給ふ。思はずにつらしと思ひ聞え給へりし氣色も、おぼし直らで、止みぬるを思すにいと憂き人の御ゆかりなり。中納言かく世のいと心憂く覺ゆる序に、本意遂げんとおぼされど、三條の宮の思さん事に憚り、この君の御事の心苦しさとに、思ひ亂れて、かのの給ひしやうにて、形見にも見るべかりけるものを、下の心は身を分け給へりとも、移ろふべくは覺えざりしを、かう物思はせ奉るよりは、唯打ち語らひて、盡きせぬ慰めにも、見奉り通はまし物を、などおぼす。假初に京にも出で給はず、搔絶え慰む方無くて籠りおはするを、世の人も疎ならず思ひ給へる事と見聞きて、內より始め奉りて、御とぶらひ多かり。はかなくて日頃は過ぎ行く。七日々々の事ども、いと尊くせさせ給ひつゝ、疎ならず孝じ給へど、限あれば、御衣の色の變らぬを、かの御方の心寄せ別きたりし人々の、いと黑う着更へたるを仄見給ふも、

（薫）「紅に、落つる涙も、甲斐無きは、形見の色を、染めぬなりけり。」

許色の氷解けぬると見ゆるを、いとゞ濡らし添へつゝ眺め給ふ樣、いとなまめかしう清げなり。人々のぞきつゝ見奉りて、（人々）「言ふ甲斐なき御事をば然る物にて、此殿の斯く見習ひ奉りて、今はと餘所に思ひ聞えんこそ、あたらしう口惜しけれ。思の外なる御宿世にもおはしけるかな。かく深き御心の程を、方々に背かせ給へるよ。」と泣き合へり。（薫）「この御方には、昔の御形見に、今は何事も聞え承らんとなん思ひ給ふる。疎々しく思ひ隔つ

な。」と聞え給へど、萬の事憂き身なりけりと、物のみつゝましくて、まだ對面して物など聞え給はず。此君はけざやかなる方に、今少し兒めき、氣高くおはする物から、懷かしう匂ある心ざまぞ、劣り給へりける、と事に觸れて覺ゆ。

雪の搔昏し降る日、終日に眺め暮らして、世の人のすさまじき事に言ふなる十二月の月夜の曇り無く差出でたるを、簾卷き上げて見給へば、向の寺の鐘の聲、枕を欹てゝ、今日も暮れぬとかすかなるを聞きて、

（薫）「後れじと、空行く月を、慕ふかな、終に住むべき、此世ならねば。」

風のいと烈しければ蔀おろさせ給ふに、四方の山の鏡と見ゆる汀の氷、月景にいと面白し。京の家の限無くと磨くも、え斯うはあらぬはやと覺ゆ。僅に生き出でゝ物し給はましかば、諸共に聞えましと思ひ續くるぞ、胸より餘る心地する。

（薫）「戀ひわびて、死ぬる藥の、ゆかしきに、雪の山にや、跡を消なまし。」

半なる偈敎へん鬼もがな。ことづけて、身も投げんとおほすぞ、心穢き聖心なりける。人々近う呼び出で給ひて、御物語などせさせ給ふ。けはひなどのいとあらまほしう、のどやかに心深きを、見奉る人々、若きは心に染めて愛でたしと思ひ奉る。老いたるは口惜しういみじき事をいとゞ思ふ。御心地の重くならせ給ひし事も、唯この宮の御事を思はずに見奉り給ひて、人笑へにいみじとおほすめりしを、さすがにかの御方には、かく思ふと知られ奉らじと、唯御心一つに世を恨み給ふめりし程に、はかなき御菓子をも聞し召し入れず、唯弱りになん弱らせ給ふめりし。うはべには何ばかり事々しく、物深けにもてなさ

○簾卷きあげて云々　白樂天の詩「遺愛寺鐘欹枕聽、香鑪峯雪撥簾看」の意なり。
○今日も暮れぬと　拾遺集に「山寺の入相のかねの聲ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき」
○後れじと云々　大君を月に寄せて詠めり。
○戀ひわびて云々　雪山は藥のある處にて死ぬる藥もあるべければなり。
○半なる偈敎へん鬼もがな　釋尊の雪山童子といひし時帝釋天の鬼に化して諸行無常の四句の偈の末の二句を敎へしかば童子約に從ひて身を谷底に投せりと云ふ故事。
○御心地云々　老人どもの大君の病中のことを語るなり。
○かの御方　中君。

せ給はで、下の御心の限なく何事も思すめりしに、故宮の御誡にさへ違ひぬる事と間無う人の御上を思し惱み初めしなり。」と聞えて、折々にの給ひし事など語り出でつゝ、誰も〳〵泣き惑ふこと盡せず。我心から、味氣無き事を思はせ奉りけん事と、取り返さまほしく、なべての世もつらきに、念誦をいと哀にし給ひて、まどろむ程無く明し給ふに、まだ夜深き程の雪のけはひいと寒げなるに、人々聲數多して、馬の音聞ゆ。何人かは、かゝる夜中に雪を分くべきと、大德達も驚き思へるに、宮狩の御衣にいたう窶れて、濡れ〳〵入り給ふなりけり。打叩き給ふ樣、さなゝなりと聞き給ひて、中納言は隱ろへたる方に入り給ひて、忍びておはす。御忌は日數殘りたりけれど、心許無く思しわびて、夜一夜雪に惑はされてぞおはしましける。日頃のつらさも紛れぬべき程なれど、對面し給ふべき心地もせず、思し歎きたる樣の恥かしかりしを、やがて見直され給はずなりにしも、今より後の御心改らんは甲斐無かるべく、思ひ沁みて物し給へれば、誰も〳〵いみじうことわりを聞え知らせつゝ、物越にてぞ日頃の怠盡せずの給ふを、つく〴〵と聞き居給へる。これもいと有るか無きかにて、後れ給ふまじきにやと聞ゆる御けはひの心苦しさを、後めたういみじと宮も思したり。今日は御身を捨てゝとまり給ひぬ。「物越ならで。」といたくわび給へど、（中君）「今少し物覺ゆる程にて侍らば。」とのみ聞え給ひて、つれなきを、中納言も氣色聞き給ひて、さるべき人召し出でゝ、（薫）「御有樣に違ひて、心淺きやうなる御もてなしの、昔も今も心憂かりける月頃の罪は、さも思ひ聞え給ひぬべき事なれど、憎からぬ樣にこそ、勘へ奉り給はめ。かやうなる事まだ見知らぬ御心にて、苦しう思すらん。」など、忍びて賢

○人の御上　中君の身の上。
○我心から云々　薫はなり。
○宮　匂宮。
○隱ろへたる方　奥の方。
○御忌は日數殘りたりけれど　四十九日以内なるをいふ。
○誰も〳〵いみじう云々　女房等うちよりて中君をすゝめてなり。
○これも　中君も。
○さるべき人云々　然るべき女房召して中君に傳言するなり。
○かやうなる事　人に戀みちもゝ事。

○人やりならず　匂宮の心からなり。
○千々の社云々　古歌に「言つる事の數多になりぬれば千々の社も耳馴れぬらん」
○なか〳〵いぶせう　匂宮の心中なり。
○況て如何に思ひつらんと　況て中君は如何につらく思ひけんと。
○いといたう瘠せ青み　薫君の此頃の心勞の體なり。

しがり給へば、愈此君の御心も恥かしうて、得聞え給はず。(匂)「あさましう心憂くおはしけり。聞えし樣をもむげに忘れ給ひける事。」と疎ならず歎き昏し給へり。夜の氣色いとゞ烈しき風の音に、人やりならず歎き臥し給へるもさすがにて、例の物隔てゝ聞え給ふ。千々の社を引掛けて、行く先長き事を契り聞え給ふも、如何で斯く口馴れ給ひけんと心憂けれど、餘所にてつれなき程の疎ましさよりは、哀に人の心もたをやぎぬべき御樣を、一方にも得疎み果つまじかりけりと、唯つく〴〵と聞き給うて、

(中君)「來し方を、思ひ出づるも、はかなきを、行末掛けて、何頼むらん。」

(匂)「行末を、短かき物と、思ひなば、目の前にだに、背かざらなん。何事もいと斯う見る程無き世を、罪深くなおほし做いそ。」と萬にこしらへ給へど、「心地も惱ましくなん。」とて入り給ひにけり。人の見るらんもいと人わろくて、歎き明し給ふ。恨みんも道理なる程なれど、餘りに人憎くもとつらき涙の落つれば、況して如何に思ひつらんと、樣々哀に思し知らる。中納言の主方に住み馴れて、人々安らかに呼び使ひ、人も數多して物參らせなどし給ふを、哀にもをかしうも御覽ず。いといたう瘠せ青み、惚れ〴〵しきまで物を思ひたれば、心苦しと見給ひて、まめやかに弔ひ給ふ。ありし樣など甲斐無き事なれど、此宮にこそは聞えめと思へど、打ち出でんに付けてもいと心弱く頑しく見え奉らんに憚りて、言少なり。音をのみ泣きて日數經にければ、顏變りのしたるも、見苦しくはあらで、愈物淸げになまめいたるを、女ならば必ず心移りなんと、己が怪しからぬ御心

○なまうしろめたかりければ　中君の心を後目痛く思すなり。
○人の譏をも云々　世の譏をも夕霧の譏をも免るゝやうにして。
○つれなきは苦しき物と云々　古歌に「如何で我つれなき人に身をかへて苦しき物を思ひ知らせん」
○御わざ　御法事。
○こゝかしこ　女三宮玲泉院等。
○かくおはしならひて　薫君がなり。
○いみじかりし折　大君の亡せ給ひし折。
○濡ほれ合へり　人々涙に濡れ合へり。
○かの宮より　匂宮より中君へなり。
○后の宮　明石中宮。
○女一宮の御方に云々　女一宮に宮仕する體にして中君を渡さんと中宮の思し成るにや。

習に、思し寄るもなまうしろめたかりければ、如何で人の譏をも怨をも省きて、京に移ろはしてんと思す。かくつれなき物から、內裏邊にも聞し召して、いと惡しかるべきに思しわびて、今日は歸らせ給ひぬ。疎ならず言の葉を盡し給へど、つれなきは苦しき物と、一節を思し知らせまほしくて、心解けずなりぬ。

年の暮方には斯からぬ所だに、空の氣色例には似ぬを、荒れぬ日無く降り積む雪に、打眺めつゝ明し暮し給ふ心地、盡きせず夢のやうなり。御わざも嚴めしうせさせ給ふ。宮よりも御誦經など、こちたきまでとぶらひ聞え給ふ。斯くてのみやは新しき年さへ歎き過さん。此處彼處にも覺束無くて、閉ぢ籠り給へる事を聞え給へば、今はとて歸り給はん心地も喩へん方無し。かくおはし習ひて人繁かりつる名殘無くならん事、思ひわぶる人々、いみじかりし折の差當りて悲しかりし事よりも、打靜まりていみじく覺ゆ。時々折節をかしやかなる程に聞えかはし給ひし年頃よりも、斯くのどやかに過し給へる日頃の御有樣けはひの懷かしく、なさけ深う、はかなき事にもまめなる方にも、思遣多かる御心ばへを、今は限に見奉りさしつる事と溺ほれ合へり。かの宮よりは、「猶斯う參り來る事も、いと難きを思ひわびて、近う渡い奉るべき事をなん、たばかり出でたる。」と聞え給へり。后の宮聞し召し付けて、中納言も斯く疎ならず思ひ惚れて居たゝなるは、實におしなべて思ひ難うこそは誰も思さるらめ、と心苦しがり給ひて、二條院の西の對に渡い給ひて、時々通ひ給ふべく、忍びて聞え給ひければ、女一宮の御方に事寄せて思し成るにや、とおほしながら、覺束無かるまじきは嬉しくての給ふなりけり。さなゝなりと中納言も聞え給ひて、三

○渡い奉らん　大君を。
○かの御代に　大君の御代に。
○見るべかりける　中君を。
○宮の思し寄るめりし筋は　匂宮の薫君を疑ひ給ふ事は。

條の宮造り果てゝ、渡い奉らん事を思ひし物を、かの御代りになずらへても見るべかりけるをなど引返し心細し。宮の思し寄るめりし筋は、いと似げ無き事に思ひ離れて、大方の御後見は、我ならでは又誰かはとおぼすとや。

○藪し別かねば　藪とは賜しき所を云ふ。宇治を指す。古今集に「日の光藪し別かねば石の上ふりにし里も花は咲きけり。」
○同じ心に　大君となり。
○本末を取りて云々　歌の上句下句を互ひに詠みかはすなり。
○宮　父八宮。
○一所　中君を指す。
○手　筆跡。
○君にとて云々　年頃八宮に奉りし嘉例を思ひて今此初蕨を奉るとなり。積みに摘みを掛けたり。

早蕨

此卷は薫君二十五歳の春の事を記せり。卷の名は歌に「この春は誰にか見せん亡き人のかたみに摘める峰の早蕨」とあるに取れり。

藪し別かねば、春の光を見給ふに付けても、如何でかくながらへにけん月日ならんと、夢のやうにのみ覺え給ふ。行きかふ時々に隨ひ、花鳥の色をも音をも同じ心に起き臥し見つゝ、はかなき事をも、本末を取りて言ひかはし、心細き世の憂さもつらさも、打語らひ合せ聞えしにこそ、慰む方もありしか。をかしき事哀なる節をも、聞き知る人も無き儘に、萬搔き昏し、心一つを碎きて、宮のおはしまさずなりにし悲しさよりも、稍打優りて戀しく佗しきに、如何にせんと明け暮るゝも知らず惑はれ給へど、世に留るべき程は、限ある事なりければ、死なれぬもあさまし。阿闍梨の許より、(酒息)「年改まりては、何事かおはしますらん。御祈禱は撓み無く仕うまつり侍り。今は一所の御事をなん、安からず念じ聞えさする。」など聞えて、蕨土筆をかしき籠に入れて、これは童部の供養じて侍る初穂なりとて奉れり。手はいと惡しうて、歌はわざとがましく、引き放ちてぞ書きたる。

(阿闍梨)「君にとて、數多の春を、積みしかば、常に忘れぬ、初蕨なり。

御前に詠み申さしめ給へ。」とあり。大事と思ひまはして詠み出しつらん、とおぼせば、歌の心ばへもいとあはれにて、なほざりに然しも思されぬなゝめり、と見ゆる言の葉を、めでたく、好ましげに書き盡し給へる人の御文よりは、こよなく目留りて、涙もこぼるれば、

○この春は云々　贈り給へる早蕨を此春は誰にか見せん、亡き人の形見として我身に見せ給ふのみとなり。形見を籠(カタミ)は言掛けたり。
○昔人　大君。
○中納言殿　薫君。
○かの御あたりの人の云々　薫君の御供の人の宇治の女房に語らひつけしが通ひ來る便なり。
○否目　憂はしき目つき。
○宮　匂宮。
○兵部卿宮　匂宮。
○折る人の云々　薫君は律義振り給へど宇治に通ひ給ふは中君に心あるならんと疑ひて歎めるなり。

返事書かせ給ふ。

(中君)「この春は、誰にか見せん、亡き人の、形見に摘める、峰の早蕨。」

使に祿取らせさせ給ふ。

いと盛に匂多くおはする人の、樣々の御物思に、少し打面瘠せ給へるしも、いとあてに、なまめかしき氣色まさりて、昔人にも覺え給へり。並び給へりし折は、取々にて、更に似給へりとも見えざりしを、打忘れては、ふとそれかと覺ゆるまで通ひ給ひへるを、中納言殿の、骸をだに留めて見奉る物ならましかばと、朝夕に戀ひ聞え給ふめるに、同じくは見え奉り給ふ御宿世ならざりんけんよと、見奉る人々は口惜しがる。かの御あたりの人の通ひ來る便に御有樣は絶えず聞きかはし給ひけり。盡せず思はれ給ひて、新しき年とも云はず、否目になんなり給へりと聞き給ひても、實に打付けの心淺さには物し給はざりけりと、いとゞ今ぞ哀も深く思ひ知らるゝ。宮はおはしますことの、いと所狹く有難ければ、京に渡し聞えんとおぼし立ちにたり。

内宴など物騷がしき頃過して、中納言の君、心に餘る事をも、又誰にかは語らはんと思し侘びて、兵部卿の宮の御方に參り給へり。しめやかなる夕暮なれば、宮打眺め給ひて、端近くぞおはしましける。箏の御琴搔き鳴らしつゝ、例の御心寄せなる梅の香を賞でおはする。下枝を押し折りて參り給へる匂の、いと艶にめでたきを、折をかしうおぼして、

(匂)「折る人の、心に通ふ、花なれや、色には出でず、下に匂へる。」

との給へば、

○見る人に云々　如何で匂宮の戀ふる人を奪はんやとの意。
○過きにし方の云々　大君のことをいふ。
○人の御上にてさへ　古今集に「我身から憂き世の中と歎きつゝ人の上さへ悲しかるらん」
○闇はあやなき　古今集に「春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えぬ香やは隱るゝ」
○世に例有り難かりける中　薫君と大君との仲。
○いとしかのみはあらざりけん　實事無くてのみはあらざりけん。
○敢無く自の過と云々　薫君の媒せし事なればなり。
○かの　大君が中君を。
○岩瀬の森の呼子鳥云々

(薫)「見る人に、託言寄せける、花の枝を、心してこそ、折るべかりけれ。煩はしく。」と戯れかはし給へり。いと善き御あはひなり。細やかなる御物語どもになりては、かの山里の御事をぞ、先づは如何にと宮は聞え給ふ。中納言も、過ぎにし方の飽かず悲しき事、當時より今日まで思の絶えぬ由、折々に付けて、哀にもをかしうも、泣きみ笑ひみとかいふらんやうに聞え出で給ふに、まして然ばかり色めかしう、涙脆なる御癖は、人の御上にてさへ袖も絞るばかりになりて、甲斐々々しくぞあひしらひ聞え給ふめる。空の氣色もはた、實にぞ哀知り顔に霞渡れる。夜になりて烈しう吹き出づる風の氣色、まだ冬めきて、いと寒げに、大殿油も消えつゝ、閨は文無き迚々しさなれど、互に聞きさし給ふべくもあらず、盡せぬ御物語を、え晴け遣り給はで、夜もいたう更けぬ。世に例有り難かりける中の睦びを、いで然りともいと然のみはあらざりけんと、殘りありげに問ひなし給ふぞ、わりなき御心習なゝめるかし。さりながらも、物に心得給ひて、悲しき心の中もあきらむばかり、且は慰め、又哀をも醒し、樣々に語らひ給ふ。御樣のをかしきに嫌されず奉りて、實に心に餘るまで思ひ結ぼゝるゝ事ども少しづゝ語り聞え給ふぞ、こよなく胸の隙開く心地し給ふ。宮もかの人近く渡し聞えてんとする程の事ども語らひ聞え給ふを、(薫)「いと嬉しき事にも侍るかな。敢無く自の過となん思ひ給へらるゝ。飽かぬ昔の名殘をまた尋ぬべき方も侍らねば、大方には何事に付けても、心寄せ聞ゆべき人となん思ひ給ふるを、若し便無くや思し召さるべき。」とて、かの「異人とな思ひ別きそ。」と、讓り給ひし心掟をも、少しは語り聞え給へど、岩瀬の森の呼子鳥めいたりし夜の事は、殘したりけり。

鏃に導かれて大君の疑所に入り給ひし夜の事をいふ。萬葉集に「神なびの岩瀬の森の呼子鳥痛くな鳴きそ我戀増さる」とあり。

○この伏見を荒し果てんも　此里に在り經んも、との意。古今集に「いざ此處に我世は經なん菅原や伏見の里の荒れまくも惜し」

○恨み聞え給ふ　匂宮がなり。

○殘ゆかしく　盛りの見まほしきなり。

○峯の霞の立つを云々　古今集に「春霞立つを見捨てゝ行く雁は花無き里に住みや習へる」とあるを取りて此處は宇治の山里なれば峯の霞と書きたるなり。

○常世　故郷。

○親一所は云々　中君誕生の時母北の方亡せ給ひしかば。

○御前　前驅。

○はかなしや云々　服衣を霞の衣に喩せ除服を花の繙くに喩せて歎めり。

○鮮ならぬ古人ども　心の清からぬ老人ども。

○かゝる方　物など參らせ給ふ事を指して云ふ。

○自　薫君。

○客人居　客室。

○我こそ人より先に云々　我こそ大君を先づ京へ移さんと思ひしか。

○我心もて　あまり大やうにせし故となり。

○いとかひなし　中君の見え給はねばなり。

○はしたなしと云々　特に差放つとは思はざれどもとなり。

○僻事もやと　僻事もや申さんと。

○いと心恥かしげに云々　薫君のさまなり。

○面影去らぬ人　亡き姉君。

心の中には、かく慰め難き形見にも、實にさてこそ斯やうに扱ひ聞ゆべかりけれと、悔しき事やう〳〵增さり行けど、今は甲斐無き物故、常に斯うのみ思はゞ、あるまじき心もこそ出で來れ。誰が爲にも味氣無く嗚呼がましからんと思ひ離る。さてもおはしまさんに付けても、まことに思ひ後見聞えん方は又誰かはと思せば、御渡りの事ども心設せさせ給ふ。

彼處にも善き若人童など求めて、人々は心行き顏に急ぎ思ひたれど、今はとてこの伏見を荒し果てんも、いみじう心細ければ、歎かれ給ふ事盡せぬを、さりとて又せめて心強く、堪へ籠りても猛かるまじく、淺からぬ中の契も絶え果てぬべき御住居を如何に思し得給ふぞ、とのみ恨み聞え給ふも、少しはことわりなれば、如何がすべからん、と思ひ亂れ給へり。二月のついたち頃とあれば、程近くなる儘に、花木どもの氣色ばむも、殘ゆかしく、峯の霞の立つを見捨てん事も、己が常世にてだにあらぬ旅寢にて、如何にはしたくなく人笑はれなる事もこそなど、萬につゝましく、心一つに思ひ明し暮し給ふ。御服も限ある事なれば、脫ぎ捨て給ふに、御禊も淺き心地ぞする。親一所は、見奉らざりしかば、戀しき事も思ほえず。その御代りにも、此度の衣を深く染めんと、心にはおほしの給へど、さすがにさるべき故も無き事なれば、飽かず悲しき事限無し。中納言殿より御車御前の人々博士など、奉れ給へり。

（薫）「はかなしや、霞の衣、立ちし間に、花の繙く、折も來にけり。」

實に色々いと淸らにて奉れ給へり。御渡りの程の被け物どもなど、事々しからぬ物から、品々こまやかに思し遣りつゝ、いと多かり。折に付けては忘れぬ樣なる御心寄せの有り難く、兄弟などもえいと斯うまではおはせぬ事かなと、人々は聞え知らす。鮮ならぬ古人どもの心には、かゝる心に染めて聞ゆ。若き人々は、時々も見奉り習ひて、今はと異樣になり給はんを淋々しく如何に戀しく覺えさせ給はんと聞え合へり。

自は渡り給はんこと明日とてのまだ早朝おはしたり。例の客人居の方におはするに付けても、今はやう〳〵物馴れて、我こそ人より先に斯う樣にも思ひ初めしか、などありし樣、の給ひし心ばへを思ひ出でつゝ、さすがに懸離れ、殊の外になどはしたなめ給はざりしを、我心以て怪しうも隔たりしかな、と胸痛く思ひ續けられ給ふ。垣間見せし障子の孔も思ひ出でらるれば、寄りて見給へど、この中をばおろし籠めたれば、いと甲斐なし。內にも人々思ひ出で聞えつゝ、打顰み合へり。中の君はまして催さるゝ御涙の川に、明日の渡りも覺え給はず、惚れ〴〵しげにて眺め臥し給へるに、（薫）「月頃の積りもそこはかと無けれど、いぶせく思ひ給へらるゝを、片端もあきらめ聞えさせて、慰め侍らばや。例のはしたなくな差し放たせ給ひそ。いとゞあらぬ世の心地し侍り。」と聞え給へれば、（中君）「はしたなしと思はれ奉らんとしも思はねど、いさや心地も例のやうにも覺えず、搔き亂りつゝ、いとゞはか〴〵しからぬ僻事もやと、つゝましうてなん。」と心苦しげにおぼいたれど、いとほしなどこれかれ聞えて、中の障子の口にて對面し給へり。いと心恥かしげになまめきて、又此度はねびまさり給ひにけりと、目も驚くまでも匂多く、人にも似ぬ用意など、あなめでたの人や、とのみ見え給へるを、姫君は面影去らぬ人の御事をさへ、思ひ出で

○渡らせ給ふべき所　二條院。
○夜中曉と云々　世俗には近所の者は夜中曉にも言ひ交すと云ふ事ある由となり。
○宿をば離れじ　此山里の住處をば去らじ。
○近くなどの給はするに付けて　匂宮の我身を近く渡してんなどの給はするに付けて。
○いと能う覺え給へる　大君に似給へる。
○その世の事　薫の中君に添ひ臥し給ひし時の事。
○巻や昔の　伊勢物語に「月やあらぬ巻や昔の巻ならぬ我身一つはもとの身にして」とあるを引けるなり。
○橘ならねど云々　古今集「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。」
○袖觸れし云々　中君を昔の形見と思ふに今都に移り給はゞ木を根ながら移すが如し。

聞え給ふに、いと哀と見奉り給ふ。(薫)「盡きせぬ御物語なども、今日は言忌すべくや。」など言ひさしつゝ、(薫)「渡らせ給ふべき所近く、此頃過して移ろひ侍るべけれども、夜中曉と次々しき人の言ひ侍るめる、何事の折にも疎からずおぼしの給はせば、世に侍らん限は、聞えさせ承はりて過さまほしうなん侍るを、如何がは思し召すらん。人の心樣々に侍る世なれば、愛無くやなど、一方にもえこそ思ひ侍らね。」と聞え給へば、(中君)「宿をば離れじと思ふ心深く侍るを、近くなどの給はするに付けても、萬に亂れ侍りて、聞えさせ遣るべき方も無くなん。」と所々言ひ消ちて、いみじく物哀と思ひ給へるけはひなど、いと能う覺え給へるを、心から餘所の物に見做しつると、いと悔しく思ひ給へれど、甲斐無ければ、その世の事掛けても言はず、忘れにけるにやと見ゆるまで、けざやかに持て做し給へり。御前近き紅梅の色、も香もなつかしきに、驚だに見過し難げに、打鳴きて渡るめれば、況して「春や昔の」と、心を惑はし給ふどちの御物語に、折哀なりかし。風のさと吹き入るゝに、花の香も客人の御匂も、橘ならねど昔し思ひ出でらるゝ端なり。徒然の紛らはしにも、世の憂き慰めにも、心留めて遊び給ひし物を、など心に餘り給へば、

(中君)「見る人も、嵐に迷ふ、山里に、昔覺ゆる、花の香ぞする。」

言ふともなく仄にて絶えぐ聞えたるを、懷かしげに打ち誦し做して、

(薫)「袖觸れし、梅はかはらぬ、匂にて、根ごめ移ろふ、宿や異なる。」

堪へぬ涙を樣善く拭ひ隱して、言多くもあらず。(薫)「又も猶かやうにてなん、何事も聞えさせ寄るべき。」など聞え置きて立ち給ひぬ。御渡りにあるべき事ども、人々にの給ひ置く。この

○この宿守　宇治宮の留守。
○その事ども　その食料などの事。
○召し出でゝ　薫君がなり
○かくて物し給はん　辨尼の留ることを云ふ。
○厭ふに映えて　後撰集に「怪しくも厭ふに映ゆる心かな如何にしてかは思ひやむべき」
○なべて世を云々　拾遺集に「大かたの我身一つの憂きからになべての世をも恨みつるかな」
○斯かる樣にも　大君をなり。
○先に立つ云々　物思に先立つ涙の川に身を投げなば大君に後れて斯く物思ふ事はあらじ。
○彼の岸に到ること云々

の宿守に、かの髭勝の宿直人などは侍ふべければ、このわたりの近き御庄どもなどに、その事どもの給ひ預けなど、まめやかなる事どもさへ定め置き給ふ。

辨ぞ、(辨)「かやうの御供にも思ひ懸けず、長き命いとつらく覺え侍るを、人も忌々しく思ふべければ、今は世にある者とも人に知られじ。」とて、容も變へてけるを、強ひて召し出でゝ、いとあはれと見給ふ。例の昔物語などせさせ給ひて、(薫)「此處には猶時々は參り來べきを、いとたつき無く心細かるべきを、かくて物し給はんは、いと哀に嬉しかるべき事になん。」など、得も言ひ遣らず泣き給ふ。(辨)「厭ふに映えて延び侍る命のつらく、又如何にせよとて、打捨てさせ給ひけんと怨めしく、なべての世を思ひ給へ沈むに、罪も如何に深く侍らん。」と、思ひける事どもを愁へかけ聞ゆるも、頑しければ、いと善く言ひ慰め給ふ。いたくねびにたれど、昔清げなりける名殘を削ぎ捨てたれば、額の程狀變れるに、少し若くなりて、さる方にみやびかなり。思ひわびては、何ど斯かる樣にもなし奉らざりけん。それに延ぶるやうもや有らまし。さても如何に心深く語らひ聞えてあらまし、など一方ならず覺え給ふに、この人さへ羨ましければ、隱ろへたる几帳を少し引き遣りて、こまやかにぞ語らひ給ひける。むけに思ひ惚けたる樣ながら、物打言ひたる氣色、用意口惜しからず、故ありける人の名殘と見えたり。

(辨)「先に立つ、涙の川に、身を投げば、人に後れぬ、命ならまし。」

と打顰み聞ゆ。(薫)「それもいと罪深かゝなる事にこそ。彼の岸に到ること、何どか然しもあるまじき事にて、深き底に沈み過さんも敢無し。凡て空しく思ひ取るべき世になん。」な

辨尼が身を投げて彼岸に到ることを願ふとも、などかさしもあるまじき入水などしてあいなく深き水底に沈み過さんとなり。梵語の波羅密た到彼岸と譯するによれり。

○人は皆云々　「哉つ」を「立つ」に言掛け、「袖」を「袖の浦」と地名に言做し潮垂るゝ尼を蘆洲を垂るゝ蜑に掛けて詠めり。

○異なれや　異ならんや。

○浮きたる浪　匂宮の恠心の末も頼み難きを寄せて云へり。

○人　辨尼。

○搔き拂ひ　掃除するなり。

どの給ふ。

（薫）「身を投げん、涙の川に、沈みても、戀しき瀬々に、忘れしもせじ。」

如何ならん世に、少しも思ひ慰むる事ありなんと、果も無き心地し給ふ。歸らん方も無く眺められて、日も暮れにけれど、すゞろに旅寢せんも、人の咎むることやと間無ければ、歸り給ひぬ。

思ほしの給へる樣を語りて、辨はいとゞ慰め難く暮れ惑ひたり。皆人は心行きたる氣色にて、物縫ひ營みつゝ、老い歪める容も知らず、繕ひさまよふに、愈窶して、

（辨）「人は皆、急ぎ立つめる、袖の浦に、獨漠潮を、垂るゝ蜑かな。」

と愛へ聞ゆれば、

（中君）「潮垂るゝ、蜑の衣に、異なれや、浮きたる浪に、濡るゝ我が袖。

世に住み着かん事も、いと有り難かるべき事と覺ゆれば、樣に隨ひて、此處をば荒れ棄てじとなん思ふを、さらば對面も有りぬべけれど、誓しの程も心細くて、立ち留り給ふを見置くにいとゞ心も行かずなん。かゝる容なる人も必ずひたぶるにしも堪へ籠らぬ事なゝめるを、猶世の常に思ひ做して、時々見え給へ。」など、いと懷かしう語らひ給ふ。昔の人の持て使ひし然るべき御調度どもなどは、皆此人に留め置き給ひて、（中君）「かく人より深く思ひ沈み給へるを見れば、前の世も取り別きたる契もや物し給ひけん、と思ふさへ、睦ましく哀になん。」との給ふに、愈童部の戀ひて泣くやうに、心治めん方無く溺ほれ居たり。皆搔き拂ひ、萬取り認めて、御車ども寄せて、御前の人々四位五位いと多かり。御自も、い

○此邊　薫君。

○大輔の君　中の君の女房

○言忌する　昔の事を言はで中君の祝儀をのみ言ふなり。

○眺むれば云々　山より出でし月も世に住み侘びて山にこそ入れ、我は住みわびて山より出づるよとなり。

○おはしつきたる　二條院になり。

○殿造の三つ葉四つ葉なる

みじうおはしまさまほしけれど、事々しくなりて、なか〳〵惡しかるべければ、唯忍びたる樣にもてなして、心もとなく思さる。中納言殿よりも御前の人々數多く奉れ給へり。大方の事をこそ、宮よりは思し置きつめれ。細やかなる內々の御扱は、唯この殿より、思ひ寄らぬ事無く訪ひ聞え給ふ。日暮れぬべしと、內にも外にも催し聞ゆるに、心あわたゞしう、何地ならんと思ふにも、いとはかなく悲しとのみ覺え給ふに、御車に乘る。大輔の君と云ふ人の聞ゆ。

「在り經れば、嬉しき瀬にも、逢ひけるを、身を宇治河に、投げてましかば。」

打笑みたるを、辨の尼の心ばへに、こよなうもあるかなと、心づき無う見給ふ。今一人、

「過ぎにしが、戀しき事も、忘れねど、今日はた先づも、行く心かな。」

何れも年經たる人々にて、皆かの御方をば、心寄せまほしく聞えたゝめりしを、今は斯く思ひ改めて、言忌するも心憂の世やと覺え給へば、物も言はれ給はず。

道の程遙けく嶮しき山路の有樣を見給ふにぞ、つらきにのみ思ひ做されし人の御中の通ひをことわりの絕間なりけりと、少し思し知られける。七日の月のさやかに差出でたる影、をかしく霞みたるを見給ひつゝ、いと遠きに習はず苦しければ、打眺められて、

（中君）「眺むれば、山より出でゝ、行く月も、世に住みわびて、山にこそ入れ。」

樣變りて遂に如何ならんとのみ危く、行末うしろめたきに、年頃何事をか思ひけんとぞ、取り返さまほしきや。

宵打過ぎてぞおはしつきたる。見も知らぬ樣に、目も輝く心地する殿造の、三つ葉四つ葉

催馬樂に「この殿はうべもとみけり幸草の三つ葉四つ葉に殿造せり」
○御車の下に云々　嫁婆の禮なり。
○中納言　薫君。
○物にもがなや　取り返す物にもがなや。
○級照るや云々　上の句は眞帆の序なり。
○左の大殿　夕霧。

なる中に引き入れて、宮は何時しかと待ちおはしましければ、御車の下に、自ら寄らせ給ひて、下し奉り給ふ。御しつらひなど、あるべき限して、女房の局々まで、御心留めさせ給ひける程著く見えて、いとあらまほしげなり。如何ばかりの事にかと見え給へる御有樣の、俄にかく定り給へば、おほろけならず思さるゝ事なゝめりと、世の人も心憎く思ひ驚きけり。

中納言は三條の宮に、この廿餘日の程に渡り給はんとて、此頃は日々におはしつゝ見給ふに、この院近き程なれば、けはひも聞かんとて、夜更くるまでおはしけるに、奉り給へる御前の人々歸り參りて、有樣など語り聞ゆ。いみじう御心に入りて、もてなし給ふなるを聞き給ふにも、且は嬉しき物から、さすがに我心ながら、をこがましく胸うち潰れて、「物にもがなや。」と返す〳〵獨言たれて、

（薫）「級照や、鴆の湖に、漕ぐ船の、眞帆ならねども、相見し物を。」

とぞ言ひ朽さまほしき。

左の大殿は、六の君を宮に奉り給はんこと、此月にと思し定めたりけるに、かく思の外の人を、この程より先にとおぼし顏にかしづき居ゑ給ひて、離れおはすれば、いと物しけに思したり、と聞き給ふも、いとほしければ、御文は時々奉り給ふ。御裳着の事、世に響きて急ぎ給へるを、延べ給はんも人笑なるべければ、廿餘日に着せ奉り給ふ。同じゆかりに珍しげ無くとも、此中納言をこそ、人に讓らんが口惜しきに、然もやなしてまし。年頃人知れぬ物に思ひけん人をも無くなして、物心細く眺め居給ふなるをなど、思し寄りて、さ

○さやうの有樣　結婚の事
○人さまの云々　薫のことなり。
○見遣り給ふ　薫君が。
○主無き宿云々　宇治の古宮を思ひ遣り給ふなり。
○心安くや　拾遺集に「淺茅原主無き森の櫻花心安くや風に散るらん」
○對の御方　中君の御方。
○世の中變りたる　疎々しくなり行けばなり。
○御前の梢も云々　中君の方より隔てがましく見ゆとなり。
○おはせましかば　大君が。

るべき人して氣色取らせ給ひけれど、世のはかなさを目に近く見しに、いと心憂く身もゆゝしく覺ゆれば、如何にも〳〵さやうの有樣は物憂くなんと、すさまじげなる由聞き給ひて、如何でか此君さへ、おほなおほなく言出づる事を、物憂くはもてなすべきぞ、と恨み給ひけれど、親しき御中らひながらも、人ざまのいと心恥かしげに物し給へば、得强ひても聞え動し給はざりけり。

花盛の程、二條院の櫻を見遣り給ふに、主無き宿の先づ思ひ遣られ給へば、「心安くや」など獨言ち餘りて、宮の御許に參り給へり。此處勝におはしまし着きて、いと善う住み馴れ給ひにたれば、目安の事やと見奉る物から、例の如何にぞや覺ゆる心の添ひたるぞ怪しきや。されど實の御心ばへはいと哀に後安くぞ思ひ聞え給ひける。何くれと御物語聞えかはし給ひて、夕つ方宮は內へ參り給はんとて、御車の裝束して、人々多く參り集りなどすれば、立ち出で給ひて、對の御方へ參り給へり。山里のけはひ引き變へて、御簾の內心憎く住み做して、をかしげなる童の透影仄見ゆるして、御消息聞え給へれば、御褥さし出でゝ、昔の心知れる人なるべし、出で來て御返り聞ゆ。（薫）「朝夕の隔てもあるまじう思ひ給へらるゝ程ながら、その事となくて聞えさせんも、なか〳〵馴れ〳〵しき咎めもやとつゝみ侍る程に、世の中變りにたる心地のみぞし侍るや。御前の梢も霞隔てゝ見え侍るに、哀なる事多くも侍るかな。」と聞えて、打眺めて物し給ふ氣色、心苦しげなるを、實におはせましかば、覺束なからず行き歸り、かたみに花の色、鳥の聲をも折につけつゝ、少し心行きて過しつべかりける世をなど、思し出づるにつけては、ひたぶるに堪へ籠り給へりし住居の